㈶長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　32

北陸新幹線

埋蔵文化財発掘調査報告書3

—更埴市内—

更埴条里遺跡
屋代遺跡群

1998

日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局
長野県教育委員会
㈶長野県埋蔵文化財センター

北陸新幹線
埋蔵文化財発掘調査報告書3

―更埴市内―

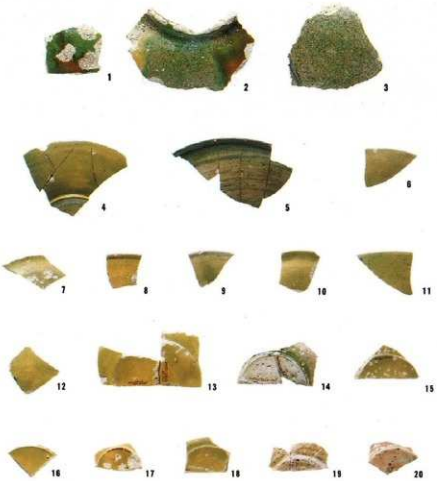
更埴条里遺跡
屋代遺跡群

1998

日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局
長野県教育委員会
㈶長野県埋蔵文化財センター

ＳＢ3008・10　緑釉線彩陶

更埴条里遺跡５区　南西から



奈良三彩
1：ＳＤ6029
2：ＳＢ6052・12
3：ＳＢ6052
緑釉
4：ＳＢ6053・3
5：ＳＤ6028・15
6：ＳＢ6033
7：ＳＢ6031
8：ＳＫ6009
9：ＳＫ6120
10：ＳＫ6137
11：ⅡＵ-18 第３検出面
12：ⅡＵ-17 第３検出面
13：ＳＢ6033・10
14：ＳＢ6031・11
15：ＳＤ6033・5
16：ＳＤ6028
17：ＳＫ6122・3
18：ⅣＦ-12 第３検出面
19：ＳＫ6077
20：ⅡＵ-22 第３検出面

屋代遺跡群６区出土　奈良三彩・緑釉陶器

屋代遺跡群２区　東から

屋代遺跡群 4 区　北東から

屋代遺跡群 6 区　北東から

序

北陸新幹線は首都圏と信州を短時間で結ぶ交通の大動脈として220万県民から期待され、昨年10月についに開通いたしました。新幹線の開通は、オリンピックの開催とともに、より首都圏に近づいた地方都市の文化や経済の発展に貢献することと思います。その建設工事に先だっては多くの埋蔵文化財が調査され、鋭意続けられた整理作業もようやく終了し、5冊の調査報告書を同時に刊行する運びとなりました。

今回報告する更埴市内の2遺跡は、新幹線が首都圏を背にして五里ケ峯トンネルから善光寺平に抜け出た付近から、長野自動車道を跨ぐ付近まで連続する遺跡群であります。いずれも千曲川右岸の後背湿地内と自然堤防上に広範に拡がっている遺跡群として知られ、上信越自動車道用地でも当センターにより大規模な発掘調査が行われています。この地域は東山道が通過し、古くから交通の要衝として栄えてきた地であります。

調査は、建設工事の工程との調整の上で、平成5年～8年に実施しました。2遺跡とも古墳時代から中世にわたる大規模な集落域と生産域としての遺跡の姿の一端が見つかりました。調査成果の概要については、出土遺物展示会、長野県埋蔵文化財センター年報によって公開してまいりましたが、ここに完成した報告書により遺跡の詳細を示し、当該地方及び長野県の歴史を理解する一助とすることができるものと自負しております。

当センターの記録保存業務の遂行には、調査開始前から本書刊行にいたるまで多くの方々の深いご理解とご協力をいただいてまいりました。日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局・長野県北陸新幹線局・更埴市・同教育委員会・地元対策委員会等、更にはご指導・ご助言をいただいた長野県教育委員会文化財保護課の方々、地域の方々、猛暑・極寒の調査現場とその後の記録整理作業に従事された多くの方々に対して、心から敬意と感謝を申し上げる次第であります。

平成10年3月10日

(財) 長野県埋蔵文化財センター

理事長　戸田　正明

例　　言

1　本書は、北陸新幹線建設工事にかかわる、長野県更埴市更埴条里遺跡、屋代遺跡群の発掘調査報告書である。

2　上記遺跡の概要については、すでに当センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』10・11・13で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

3　本書で使用した地図は、鉄道建設公団作成の北陸新幹線路線図（1：500)、更埴市都市計画基本図（1：2500、1：10000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（1：25000）を使用した。

4　航空写真は（株）こうそくに委託したものである。

5　遺物の写真撮影は上田調査事務所写真室において、田村　彬が行った。ＳＥ6001出土の木簡の写真撮影は宮島義和が行った。

6　科学的な分析は、次の方または機関に委託し、付章に掲載した。

　人骨・獣骨鑑定……京都大学霊長類研究所　茂原　信生氏

　材同定……パリノ・サーヴェイ株式会社

　プラント・オパール分析、花粉分析……株式会社　古環境研究所

7　執筆は次の通りである。

　第２章第１節１～３、第３章第１節１～３、同第３節１～２（1)、同第４節は寺内貴美子が素文を草し、澤谷昌英が加筆・編集した。

　上記以外を澤谷が行った。

8　遺構番号は、時代・検出面にかかわらず種別ごとに付したが、一部を除き発掘調査時の番号を変更しなかったため欠番が生じている。遺物番号は、土器・石器・金属器・木製品を通じて遺構ごとの通し番号とし、挿図・写真図版の番号とも符合する。

9　参考文献は各章あるいは節の末尾にまとめた。

10　本書の編集・校正は澤谷が行い、広瀬昭弘が全体を校閲・校正した。なお、付章は原則として原稿のままであるが、一部を両角英敏が編集した。

11　本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は長野県立歴史館が保管している。

12　発掘調査・整理作業にあたり、小野紀男・佐藤信之・佐藤　信・高橋　学・傳田伊史・平川　南・福島正樹・矢島宏雄の諸氏にご指導・ご助言をいただいた。記して（五十音順）謝意を表する次第である。

凡　　例

1　本書に掲載した実測図の縮尺は下記のとおりで、該当箇所のスケールの上に記してある。

1）主な遺構実測図

遺構分布図　1：1000、1：200　　竪穴住居跡　1：80　カマド　1：40

掘立柱建物跡　1：80　　溝跡　1：80、1：160　　土坑・井戸跡　1：40、1：80

2）主な遺物実測図

土器　1：4　　石器・金属器　1：3　　小型石器・玉類　1：1.5　　大型石器　1：6

井戸木枠　1：8

2　本書に掲載した主な遺物写真の縮尺は下記のとおりである。

土器・土製品　1：3　　土器文字資料　1：1　　石器・金属器　1：2

石鏃・銭貨　1：1　　井戸木枠　1：9

3　遺構実測図中の線種およびスクリーン・トーン等は下記のとおりに用いた。

1）全体図

切る：実線　　切られる：破線

2）平面図

貼り床・竪穴面：一点鎖線　　カマド火床：粗い網点(a)　　炉：実線内粗い網点(b)

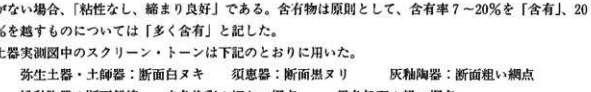
床面焼土：砂目(c)　　床面炭化物：二点鎖線内砂目(d)

床下検出遺構：部分（4方）切れの実線(e)　　推定プラン：破線

3）断面図

火床・焼土：粗い網点(a)　　焼土・炭化物多含層：砂目(c)

主遺構外・主遺構を切る遺構外：斜線



4　遺構実測図断面の土層注記は、基調土・含有物・性格の順に示した。土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』をもとに調査担当者が肉眼で選定した。基調土は特にことわりがない場合、「粘性なし、締まり良好」である。含有物は原則として、含有率7～20%を「含有」、20%を越すものについては「多く含有」と記した。

5　土器実測図中のスクリーン・トーンは下記のとおりに用いた。

弥生土器・土師器：断面白ヌキ　　須恵器：断面黒ヌリ　　灰釉陶器：断面粗い網点

緑釉陶器：断面斜線　　赤色塗彩：細かい網点　　黒色処理：粗い網点

6　古代土器の器種分類は、(財) 長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4　―松本市内その1―　総論編』(1990) に準拠した。ただし、一部の器種については以下のような変更を行っている。尚本書の時期区分で「9世紀中頃」は『松本平総論編』の古代7期に相当する。

須恵器坏Aのうち口径12cm以内のものを同坏Gとした。

須恵器坏Dは同坏Hに名称変更した。

須恵器皿Aは盤状のものではなく無高台のものを総称した。

7　鉄製品の実測は、それらが保存処理の中途段階にあるため、一部を除いてX線写真を用いて行った他、実測不能で掲載できないものもあった。平面のみ掲載し断面図のないものは、錆び取り処理を施していないため断面実測ができなかったものである。また、計測値は保存処理の中途段階のため、多くの場合掲載していない。

本 文 目 次

巻頭図版
序
例 言
凡 例
目 次
挿図目次

第 1 章 序 説 ……1
第 1 節 調査に至る経過 ……1
1 調査の経緯 ……1
2 契約業務の経過 ……2
3 調査・整理に参加した作業員 ……3
第 2 節 調査の方法 ……4
1 発掘調査の方法 ……4
2 整理作業の方法 ……6
第 3 節 遺跡群周辺の環境 ……7
1 遺跡群の立地と位置 ……7
2 遺跡群の歴史的概観 ……7

第 2 章 更埴条里遺跡……18
第 1 節 遺跡の概観と調査の概要……18
1 遺跡の概観……18
2 調査の概要……18
3 調査の経過……19
4 基本層序……19
第 2 節 遺構と遺物……28
1 弥生時代以前……28
2 古代……29
（1）竪穴住居跡と竪穴状遺構……29
（2）溝跡……82
（3）土坑……84
（4）畠跡……86
（5）その他の遺物……90
3 中世……90
（1）掘立柱建物跡……91
（2）井戸跡……95
（3）火葬施設と方形土坑群 ……101

第３節　まとめ ……104
1　はじめに ……104
2　古代集落景観の変遷 ……104
3　竪穴住居跡の規模・主軸方向と形態 ……108

第　3　章　　歴代遺跡群 ……111
第１節　遺跡の概観と調査の概要 ……111
1　遺跡の概観 ……111
2　調査の概要 ……111
3　調査の経過 ……112
4　基本層序 ……113
第２節　２区の遺構と遺物 ……138
1　弥生時代 ……138
（1）竪穴住居跡 ……138
2　古墳時代 ……142
（1）竪穴住居跡と竪穴状遺構 ……142
（2）その他の遺構 ……148
3　古代以降 ……153
（1）竪穴住居跡と竪穴状遺構 ……153
（2）その他の遺構 ……170
4　その他の遺物 ……174
第３節　６・７区の遺構と遺物 ……176
1　古墳時代 ……176
（1）竪穴住居跡と竪穴状遺構 ……176
（2）掘立柱建物跡 ……193
2　古代以降 ……193
（1）竪穴住居跡と竪穴状遺構 ……193
（2）掘立柱建物跡と柱穴列 ……233
（3）溝跡と土堤 ……238
（4）土坑 ……243
（5）井戸跡 ……249
3　その他の遺物 ……253
第４節　水田関係遺構 ……257
1　２区の様相 ……257
2　４区の様相 ……258
3　６ｂ区の様相 ……259
4　６ｅ区の様相 ……264
第５節　まとめ ……266
1　はじめに ……266
2　集落景観の変遷 ……266

3　竪穴住居跡の規模・主軸方向と形態 ……271
4　更埴条里遺跡・屋代遺跡群の土器―古代の食膳具を中心に― ……273
5　6区の墨書土器について ……277

付　　章　自然科学的分析 ……281
第1節　動物遺存体と人骨 ……281
第2節　井戸枠の樹種 ……289
第3節　プラント・オパール分析 ……292
第4節　花粉分析 ……302

写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

序 説

第１図　大々・大・中地区設定法 ……4
第２図　遺跡群位置・大々地区設定 ……8
第３図　地形分類図（遺跡周辺） ……9
第４図　周辺の遺跡……11

更埴条里遺跡

第５図　土層……20
第６図　全遺構分布……21
第７図　遺構分布（１）　２区北・３区南
　　古代……22
第８図　遺構分布（２）　３区北・４区
　　古代……23
第９図　遺構分布（３）　５区南　古代……24
第10図　遺構分布（４）　５区北　古代……25
第11図　遺構分布（５）　５区南　中世……26
第12図　遺構分布（６）　５区北　中世……27
第13図　ＳＫ4001……28
第14図　その他の遺物……28
第15図　ＳＢ3001……29
第16図　ＳＢ3003……30
第17図　ＳＢ3005……32
第18図　ＳＢ3006・3015……33
第19図　ＳＢ3007……34
第20図　ＳＢ3008……35
第21図　ＳＢ3009……36
第22図　ＳＢ3010……37
第23図　ＳＢ3012……38
第24図　ＳＢ3016……39
第25図　ＳＢ4001……40
第26図　ＳＢ4003……41
第27図　ＳＢ5002……42
第28図　ＳＢ5004……44
第29図　ＳＢ5005……45
第30図　ＳＢ5006……46
第31図　ＳＢ5007……47
第32図　ＳＢ5008……47
第33図　ＳＢ5009……48
第34図　ＳＢ5010……49
第35図　ＳＢ5012・5044……50
第36図　ＳＢ5013……51
第37図　ＳＢ5014……51
第38図　ＳＢ5015……52
第39図　ＳＢ5016……53
第40図　ＳＢ5017……54
第41図　ＳＢ5018……54
第42図　ＳＢ5019……55
第43図　ＳＢ5020……56
第44図　ＳＢ5022……57
第45図　ＳＢ5024……58
第46図　ＳＢ5025・5057（１）……59
第47図　ＳＢ5025・5057（２）……60
第48図　ＳＢ5026……61
第49図　ＳＢ5027……62
第50図　ＳＢ5028……63
第51図　ＳＢ5030……65
第52図　ＳＢ5031……65
第53図　ＳＢ5032……66
第54図　ＳＢ5033……66
第55図　ＳＢ5034……67
第56図　ＳＢ5035……68
第57図　ＳＢ5036……68
第58図　ＳＢ5037……69
第59図　ＳＢ5038……70
第60図　ＳＢ5039……71
第61図　ＳＢ5040……71
第62図　ＳＢ5041……72
第63図　ＳＢ5042……73
第64図　ＳＢ5043……73
第65図　ＳＢ5046……74
第66図　ＳＢ5047……75
第67図　ＳＢ5049……76
第68図　ＳＢ5051……77
第69図　ＳＢ5052……78

第70図　ＳＢ5054……79
第71図　ＳＢ5055……80
第72図　ＳＢ5056……81
第73図　ＳＢ5058……81
第74図　ＳＤ5002・5005・5008……83
第75図　ＳＫ3050……85
第76図　ＳＫ5382……85
第77図　ＳＫ5390……85
第78図　ＳＬ3001・3003・5001……88
第79図　その他の遺物……89
第80図　ＳＴ2001……92
第81図　ＳＴ5001……92
第82図　ＳＴ5002……92
第83図　ＳＴ5003……93
第84図　ＳＴ5004……93
第85図　ＳＴ5005……93
第86図　ＳＴ5006……95
第87図　ＳＥ4001・5001・5002・5005……97
第88図　ＳＥ5003……98
第89図　ＳＥ5004……100
第90図　火葬施設と方形土坑群……102
第91図　古代集落の変遷（1）（8世紀前半～9世紀前半）……106
第92図　古代集落の変遷（2）（9世紀中頃～12世紀）……107
第93図　竪穴住居跡の規模……108
第94図　竪穴住居跡の主軸方向……109

屋代遺跡群

第95図　土層……114
第96図　2区・4区　全遺構分布……115
第97図　6区・7区　全遺構分布……116
第98図　遺構分布（1）　2区　弥生時代後期……117
第99図　遺構分布（2）　2区南　古墳～奈良時代……118
第100図　遺構分布（3）　2区北　古墳～奈良時代……119
第101図　遺構分布（4）　2区南　平安時代……120
第102図　遺構分布（5）　2区中　平安時代……121
第103図　遺構分布（6）　2区北　平安時代……122
第104図　遺構分布（7）　4区　平安時代…123
第105図　遺構分布（8）　6ｂ区・6ｃ区南　古墳～奈良時代（第4検出面）……124
第106図　遺構分布（9）　6ｃ区北・6ｄ区南　古墳～奈良時代（第4検出面）……125
第107図　遺構分布（10）　6ｄ区北・6ｅ区南　古墳～奈良時代（第4検出面）……126
第108図　遺構分布（11）　6ｅ区中～北　古墳～奈良時代（第4検出面）……127
第109図　遺構分布（12）　7区　古墳時代（第4検出面）……128
第110図　遺構分布（13）　6ｂ区・6ｃ区南　平安時代（9世紀）（第3検出面）…129
第111図　遺構分布（14）　6ｃ区　平安時代（9世紀）（第3検出面）……130
第112図　遺構分布（15）　6ｃ区北・6ｄ区　平安時代（9世紀）（第3検出面）…131
第113図　遺構分布（16）　6ｅ区　平安時代（9世紀）（第3検出面）……132
第114図　遺構分布（17）　6ｂ区・6ｃ区南　平安時代（9世紀洪水直前）（第2検出面）……133
第115図　遺構分布（18）　6ｃ区　平安時代（9世紀洪水直前）（第2検出面）…134
第116図　遺構分布（19）　6ｄ区　平安時代（9世紀洪水直前）（第2検出面）…135
第117図　遺構分布（20）　6ｅ区　平安時代（9世紀洪水直前）（第2検出面）…136
第118図　遺構分布（21）　6ｂ区～6ｄ区　平安時代以降（9世紀洪水後）（第1検出面）……137
第119図　ＳＢ2019・2022（1）……139
第120図　ＳＢ2019・2022（2）……140
第121図　ＳＢ2031……141
第122図　ＳＢ2002……142
第123図　ＳＢ2003……143

第124図　ＳＢ2009……144
第125図　ＳＢ2010……145
第126図　ＳＢ2016……145
第127図　ＳＢ2013（１）……147
第128図　ＳＢ2013（２）……148
第129図　ＳＴ2002、ＳＡ2001・2002、
ＳＦ2001、ＳＫ2002・2005……151
第130図　ＳＤ2007……152
第131図　ＳＤ2021……152
第132図　ＳＫ2099……152
第133図　ＳＢ2001……154
第134図　ＳＢ2007……155
第135図　ＳＢ2011……156
第136図　ＳＢ2015……157
第137図　ＳＢ2017（１）……158
第138図　ＳＢ2017（２）……159
第139図　ＳＢ2018……160
第140図　ＳＢ2021……161
第141図　ＳＢ2023・2024……162
第142図　ＳＢ2026……163
第143図　ＳＢ2027……164
第144図　ＳＢ2029……165
第145図　ＳＢ2033……165
第146図　ＳＢ2034……166
第147図　ＳＢ2035・2036……168
第148図　ＳＴ2001……170
第149図　ＳＤ2005・2006・2011・2019……172
第150図　ＳＫ2036……173
第151図　ＳＡ2003……173
第152図　その他の遺物……175
第153図　ＳＢ6015……177
第154図　ＳＢ6038……178
第155図　ＳＢ6040……179
第156図　ＳＢ6046……179
第157図　ＳＢ6047……180
第158図　ＳＢ6060……181
第159図　ＳＢ6061……183
第160図　ＳＢ6062……184
第161図　ＳＢ6068（１）……185
第162図　ＳＢ6068（２）……186
第163図　ＳＢ6074……187
第164図　ＳＢ6076……188
第165図　ＳＢ6077……189
第166図　ＳＢ6078……189
第167図　ＳＢ7001……190
第168図　ＳＢ7002……191
第169図　ＳＢ7003……192
第170図　ＳＴ6006……193
第171図　ＳＢ6001……194
第172図　ＳＢ6003……195
第173図　ＳＢ6004……196
第174図　ＳＢ6005……197
第175図　ＳＢ6007……198
第176図　ＳＢ6011……199
第177図　ＳＢ6013……200
第178図　ＳＢ6014（１）……201
第179図　ＳＢ6014（２）……202
第180図　ＳＢ6016……203
第181図　ＳＢ6018……203
第182図　ＳＢ6019……204
第183図　ＳＢ6023……205
第184図　ＳＢ6025……206
第185図　ＳＢ6026……207
第186図　ＳＢ6027……207
第187図　ＳＢ6028……207
第188図　ＳＢ6030……209
第189図　ＳＢ6031……211
第190図　ＳＢ6032……212
第191図　ＳＢ6033（１）……213
第192図　ＳＢ6033（２）……214
第193図　ＳＢ6036……215
第194図　ＳＢ6039……215
第195図　ＳＢ6041……216
第196図　ＳＢ6042……217
第197図　ＳＢ6043……218
第198図　ＳＢ6044……219
第199図　ＳＢ6045……220
第200図　ＳＢ6050……221
第201図　ＳＢ6052……222
第202図　ＳＢ6053……223

第203図　ＳＢ6054……223
第204図　ＳＢ6055……224
第205図　ＳＢ6058……225
第206図　ＳＢ6064……226
第207図　ＳＢ6065……227
第208図　ＳＢ6067……228
第209図　ＳＢ6070・6071……229
第210図　ＳＢ6072……230
第211図　ＳＢ6073……231
第212図　ＳＢ6079……231
第213図　ＳＢ6080……232
第214図　ＳＢ6081……232
第215図　ＳＢ6082……233
第216図　ＳＴ6001……234
第217図　ＳＴ6002……234
第218図　ＳＴ6003……235
第219図　ＳＴ6004……235
第220図　ＳＴ6005……235
第221図　ＳＡ6001……237
第222図　ＳＡ6002……237
第223図　ＳＡ6003……237
第224図　ＳＫ6088・6124……237
第225図　ＳＣ6008、ＳＤ6016～6018……239
第226図　ＳＤ6028……241
第227図　ＳＤ6030……241
第228図　ＳＤ6033……242
第229図　ＳＤ6049……242
第230図　ＳＤ6050……242
第231図　ＳＫ6009……244
第232図　ＳＫ6137……244
第233図　ＳＫ6063……244
第234図　ＳＫ6122……244
第235図　ＳＫ6186……246
第236図　ＳＫ6188……246
第237図　ＳＫ6201……248
第238図　ＳＫ6222……248
第239図　ＳＫ6232……248
第240図　ＳＫ6267……248
第241図　ＳＥ6001……250
第242図　ＳＥ6002～6008……252
第243図　その他の遺物……254
第244図　遺構外の遺物……255
第245図　２区・４区水田跡……258
第246図　６区水田跡……260
第247図　６ｂ区水田跡……261
第248図　６ｂ区水田跡の遺物……262
第249図　６ｅ区水田跡・畠跡（部分）……265
第250図　２区　集落と水田の変遷……267
第251図　６区・７区　集落の変遷（９世紀はじめ以前）……268
第252図　６区　集落と水田の変遷（９世紀前半以降）……269
第253図　竪穴住居跡の規模……271
第254図　竪穴住居跡の主軸方向……272
第255図　食膳具における土器組成個体数比…274
第256図　糸切り底の須恵器坏Ａの内面底径…275
第257図　６区　墨書土器内訳……277
第258図　６区の墨書土器・施釉陶器分布（第３・４検出面）……279

写 真 図 版 目 次

巻頭図版１　ＳＢ3008・10　緑釉緑彩陶、　更埴条里遺跡５区
巻頭図版２　屋代遺跡群６区出土　奈良三彩・緑釉陶器、　屋代遺跡群２区
巻頭図版３　屋代遺跡群４区、　屋代遺跡群６区

更埴条里遺跡

ＰＬ１　１区試掘、同、２区試掘、２区北端全景、３・４区全景、５区全景
ＰＬ２　３区南端全景、３区畠跡、３区集落跡、４区集落跡、５区畠跡、５区南半集落跡、５区北半集落跡、６区試掘
ＰＬ３　遺構（１）（ＳＢ3001、同カマド、ＳＢ3003、同カマド、ＳＢ3005、ＳＢ3010、ＳＢ3008、同緑釉・耳皿）
ＰＬ４　遺構（２）（ＳＢ3012、ＳＢ4003、ＳＢ5003、ＳＢ5004、ＳＢ5005、ＳＢ5006、ＳＢ5010、ＳＢ5008、ＳＢ5009）
ＰＬ５　遺構（３）（ＳＢ5012、同、ＳＢ5013、ＳＢ5014、ＳＢ5015・5051、ＳＢ5017、ＳＢ5019、同カマド）
ＰＬ６　遺構（４）（ＳＢ5020、ＳＢ5021、ＳＢ5022、ＳＢ5023、ＳＢ5024、ＳＢ5029、ＳＢ5025、同カマド）
ＰＬ７　遺構（５）（ＳＢ5026・5027、ＳＢ5027カマド、ＳＢ5028、同カマド、ＳＢ5031、ＳＢ5032、ＳＢ5033、ＳＢ5034、ＳＢ5035）
ＰＬ８　遺構（６）（ＳＢ5036、ＳＢ5037、ＳＢ5038、ＳＢ5039、ＳＢ5042、ＳＢ5043、ＳＢ5046、ＳＢ5049）
ＰＬ９　遺構（７）（ＳＢ5050、ＳＢ5052、ＳＢ5054・5055、ＳＢ5054カマド、ＳＢ5056、同カマド、ＳＢ5057、ＳＢ5058）
ＰＬ10　遺構（８）（ＳＴ2001、ＳＴ5001、ＳＴ5002、ＳＴ5003、ＳＴ5005、ＳＴ5004、ＳＴ5006、同）
ＰＬ11　遺構（９）（ＳＤ5005、ＳＤ5006、ＳＤ5008、ＳＥ5003、ＳＥ5005、ＳＫ3050、ＳＫ5346、ＳＫ5382、ＳＫ5278）
ＰＬ12　土器（１）（ＳＢ3003、ＳＢ3005、ＳＢ3008、ＳＢ3009、ＳＢ3010、ＳＢ3012）
ＰＬ13　土器（２）（ＳＢ3012、ＳＢ4003、ＳＢ5005、ＳＢ5010、ＳＢ5016）
ＰＬ14　土器（３）（ＳＢ5019、ＳＢ5024、ＳＢ5025、ＳＢ5035、ＳＢ5037）
ＰＬ15　土器（４）（ＳＢ5037、ＳＢ5046、ＳＢ5052、ＳＢ5054、ＳＤ5005、ＳＤ5006、ＳＤ5008、ＳＥ5002、ＳＥ5003、ＳＥ5005、ＳＫ5390）
ＰＬ16　金属器・石器（１）（鉄鏃・刀子・釘・鑿子・鏨形・釣針・不明、石鏃・石包丁・打製石斧・剥片・砥石・石臼）
ＰＬ17　石器（２）（石鉢・凹石・石臼）

屋代遺跡群

ＰＬ18　遺跡遠景、１区試掘前全景、２区調査前全景、４区調査前全景、５区調査前全景、６区調査前全景、２区全景、同）
ＰＬ19　遺構（１）（ＳＢ2001、ＳＢ2002、ＳＢ2004、ＳＢ2009、ＳＢ2007、ＳＢ2011、ＳＢ2013、同カマド、ＳＢ2017、ＳＢ2018）
ＰＬ20　遺構（２）（ＳＢ2019、同ヤリガンナ出土、同単孔石器出土、ＳＴ2001、ＳＡ2001・2002・ＳＴ2002、ＳＴ2002Ｐ４、ＳＡ2001Ｐ２、ＳＦ2001、ＳＤ2005、ＳＤ2006、ＳＤ2011、ＳＤ2022・ＳＣ2002、ＳＡ2003）
ＰＬ21　遺構（３）（２区居住域―生産域界、ＳＫ2099、４区水田跡、ＳＣ4001断面、ＳＣ4002断面、６ｂ区新相水田跡、６ｂ区古相水田跡、６ｃ区第３面集落、６ｃ区第４面集落）
ＰＬ22　遺構（４）（６ｄ・６ｅ・７区遠景、６ｄ区

第4面集落、6e区水田跡、6e区集落・7区調査前、SB6004、SB6005、SB6007、同カマド）
PL23　遺構（5）（SB6013、SB6014、SB6015、同カマド、同土器出土、SB6016、SB6019、SB6028、SB6030、SB6031）
PL24　遺構（6）（SB6038、SB6033、SB6045、SB6044、SB6047、同カマド、SB6052、同帯金具出土、同奈良三彩出土、SB6054、SB6055）
PL25　遺構（7）（SB6058、SB6060・6061、SB6062、SB6064・6065、SB6067、SB6068、SB6070・6071、SB6072）
PL26　遺構（8）（SB6073、SB6074、SB6076、SB6078、SB7001、SB7002、SB7003、ST6002、ST6001）
PL27　遺構（9）（ST6004・6005・SA6002、ST6003・SE6002～6008、SD6028、SK6009、SD6050、SA6001、SK6122、SK6063、SK6232、SK6186、SK6188）
PL28　遺構（10）（SE6001、同木枠下部、SC6003・6004・SD6002・6003、SC6004断面、SH6001馬頭骨、同水口、同水口配礫、SC6005水口、SL6002耕作痕、SC6012断面）
PL29　土器（1）（SB2001、SB2009、SB2013）
PL30　土器（2）（SB2013、SB2015、SB2016、SB2017、SB2019）
PL31　土器（3）（SB2021、SB2034、SB2035、SB2036、SD2004、SD2006、SD2019、SD2021、SA2001、SF2001）
PL32　土器（4）（SB6003、SB6005、SB6007、SB6013、SB6014）
PL33　土器（5）（SB6014、SB6015、SB6028、SB6030、SB6031、SB6032、SB6033、SB6038、SB6044）
PL34　土器（6）（SB6044、SB6052、SB6053、SB6060、SB6061）
PL35　土器（7）（SB6061、SB6065、SB6067、SB6068）
PL36　土器（8）（SB6068、SB6074、SB6076、SB6078）
PL37　土器（9）（SB6079、SB6081、SB6082、SB7001、SB7003、SD6001、SD6028、SD6030、SD6033、SD6043、SD6049、SD6050、SD6054、SK6040、SK6063）
PL38　土器（10）（SK6186、SK6222、SK6232、SC6004、6区遺構外、SC6006、SC6008、SL6001）
PL39　土器（11）・井戸木枠（SL4003、SL6002、6区遺構外、SE6001）
PL40　文字関係資料（1）（墨書「夫」）
PL41　文字関係資料（2）（墨書「夫」以外、刻書、ヘラ記号）
PL42　石器（1）（砥石・有孔石器・石鉢・凹石）
PL43　金属製品（1）（鉄鏃・鉄鎌・刀子・釘・火打ち金具・鍔形・銭貨・銅鏃・帯金具）

第1章　序　　説

第1節　調査に至る経過

1　調査の経緯

本報告書収録の遺跡群の発掘調査は、日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局（以下、鉄建公団）による北陸新幹線建設に伴い、消滅してしまう埋蔵文化財包蔵地の記録保存を目的として事前に実施されたものである。(財) 長野県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の業務は、国および国の機関または県の実施する公共開発事業に際して、事前に調査の実施が必要な埋蔵文化財包蔵地の調査および研究を委託を受けて行うものである。埋文センターが実施する業務は、長野県教育委員会（以下、県教委）を介して事業主から受託する。

長野県において、大規模な公共開発事業にかかわる埋蔵文化財の保護は、行政上の措置が広域にわたることから県教委が対応して行ってきた。県教委は、高速自動車道の建設に対応すべく昭和57年に財団である埋文センターを発足させて、組織の拡充を計ってきた。公共開発事業の規模の拡大と収束に応じて、調査体制も規模を変えながら今日に至っている。平成6年度、7年度には公共開発事業がピークに達し、更埴条里遺跡と屋代遺跡群は、上信越自動車道と北陸新幹線との両方の用地にかかり、埋文センターの調査が並行して成された。また新幹線建設と一体化して行われる付随する開発では、市町村との協議の上で埋文センターが調査を実施する場合があり、側道部分では埋文センターの調査区と更埴市教育委員会の調査区が錯綜している。高速自動車道の用地内の同名の遺跡群では現在も整理作業がつづけられ、6分冊中1冊の報告書が刊行されている。

北陸新幹線用地内の今回収録の遺跡群では、発掘調査および整理作業は年度毎、鉄建公団→県教委→埋文センターという委託契約の流れの中で実施されてきたものであり、年度毎の調査遺跡とその対象面積は以下のようになっている。

（年　度）	（遺　跡）	（調査契約面積）	（調査延面積）
平成5年度	更埴条里遺跡	1,100㎡	1,650㎡
	屋代遺跡群	3,800㎡	5,700㎡
平成6年度	更埴条里遺跡	3,600㎡	3,600㎡
	屋代遺跡群	4,270㎡	10,870㎡
平成8年度	屋代遺跡群	130㎡	130㎡

2 契約業務の経過

以下に年度を追って調査体制と調査期間を掲げる。発掘調査の経過は第2章および第3章で詳述する。

平成5～7年度

調査・整理体制	事務局長	峯村忠司	
	同 参事	樋口昇一（5・6年度）	
	同 技術参与	佐藤今雄（5年度）	
	同 総務部長	神林幹生（5・6年度）	西尾紀雄（7年度）
	同 調査部長	小林秀夫	
	長野調査事務所長	岡田正彦（5・6年度）	小林秀夫（7年度）
	同 庶務課長	羽入田博行（5・6年度）	外谷 功（7年度）
	同 調査課長	原 明芳（5年度）	百瀬長秀（6・7年度）
更埴条里遺跡	調査担当者	田中正治郎 吉江英夫 宮下裕治 廣田和穂（5年度）	
		鳥羽英継（5・6年度）	
		寺内貴美子 渕井英知 澤谷昌英 百瀬長秀（6年度）	
	調査期間	平成5年4月2日～4月16日、9月20日～10月7日	
		平成6年11月1日～12月27日、平成7年1月17日～19日	
	整理担当者	寺内貴美子 田中正治郎 澤谷昌英 山崎まゆみ	
		和田 進 藤森俊彦 両角英敏（7年度）	
屋代遺跡群	調査担当者	太田和夫（5年度） 寺内貴美子 鳥羽英継（5・6年度）	
		渕井英知 澤谷昌英 百瀬長秀（6年度）	
	調査期間	平成5年4月14日～12月21日	
		平成6年4月11日～11月2日	

平成8・9年度

調査・整理体制	事務局長	青木 久	
	同 総務部長	西尾紀雄	
	同 調査部長	小林秀夫	
	上田調査事務所長	小林秀夫	
	同 庶務課長	山口栄一	
	同 調査課長	廣瀬昭弘	
屋代遺跡群	調査担当者	藤森俊彦 百瀬長秀（8年度）	
	調査期間	平成8年4月18日～26日	
更埴条里遺跡・屋代遺跡群			
	整理担当者	寺内貴美子 田中正治郎（8・9年度）	
		澤谷昌英 両角英敏（9年度）	

３　調査・整理に参加した作業員

平成５・６・８年の発掘調査、平成７～９年の整理作業には、多くの方々に従事いただいた。お名前のみ記して感謝の意にかえさせていただきたい。

赤羽　啓子　赤羽　利治　赤沼かず子　飯田　和子　池田喜美子　石井ゆみ子　石浦　光子　石坂　節司
石坂　宗吉　石坂　芳子　石坂　好子　今井せつ子　今井美枝子　井上　久子　井手　貴生　上野　久香
上原　利男　牛沢　蟬雄　梅田　康子　梅原　祝　浦野　和子　大蔵　辰雄　大西　啓子　大林久美子
大原はるえ　大矢ひろ子　岡田　皖子　岡田　栄子　親松　とめ　親松　静子　加賀野井幸平
尾嶋　平一　笠井　美実　神野　幸子　春日　幸子　加藤　周子　金子　幸雄　金田　良一　北沢きく子
北島久美子　北村久美子　北村　利彦　北村　幸枝　国光　一穂　工藤　和美　久保ます江　久保　操
久保田まき　雲井　博子　倉石みつ江　栗林まさ子　小井戸勝治　神戸あきえ　神戸小冨士　児玉　武秀
小林　保　小林奈津子　小林奈美江　小松みつ子　西東千佳子　酒井しず子　坂井　夏子　坂口　初枝
坂田　昭二　坂野　和子　佐々木勅美　佐藤　明子　佐藤　桂子　佐藤けさき　佐藤　進　白石　智順
鈴木　竹子　春原　幸子　春原　供史　春原喜よ子　摺田　伸子　関　正和　滝沢富士太郎
高橋　清子　高柳すえ子　高山　徳子　竹内　せつ　竹内　清志　竹内富美子　田子与一郎　田島　富子
田尻　勝　田中　克人　田中きよい　田中　研一　塚田　朗　塚原　和子　土屋由美子　友部　武良
出川　滉　伝田　名正　永井　勇　永井百合子　中沢すみ子　中沢　忠一　中沢由美子　中条ゆきい
中村小百合　西村　光男　西村　美幸　西松まり子　根石　俊明　野沢　新作　橋立　秀子　橋本　信子
原　甲　藤木　正枝　藤田　春子　藤本　百合　堀内ます子　堀内　良子　細田　貞子　増沢ふさえ
待井正一郎　松尾みさ子　松岡　定雄　松林　明子　松本　正人　丸山かねみ　丸山すみ子　丸山　公子
丸山美知子　丸山　裕子　三崎　信好　三沢まさる　三井美津子　三橋三枝子　三好とも子　宮入　由枝
宮尾　正夫　宮尾多喜男　宮尾　久子　宮川　訓江　宮坂　美樹　宮沢とく子　宮崎志げ子　宮崎とも子
宮崎　好子　宮島　珠子　宮島　初枝　宮島ふくい　宮野尾和子　宮原　広子　宮本　宰江　村田　佐
村田　雅子　村沢　吉刑　村松　亀福　柳沢　春枝　柳沢　文男　柳沢るり子　籔　一義　山崎まゆみ
山岸　貞義　山口みつ江　山本　和美　行入　武子　吉原　幸雄　米沢きよ江　若林ひろ子　涌井　恭江
鷲沢　啓子　和田　正子　渡辺けさ子

８Ｃ区第４検出面調査風景（平成６年度）

土器接合作業（平成８年度、上田調査事務所）

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

本調査に先駆けて当埋文センターでは先ず、新幹線路線内の試掘調査を実施し、それに基づいて調査の要否の判定や調査範囲の確定が行われた。新幹線用地ではより調査区が狭長化し、建設工事との工程上の調整からいくつにも分割して調査せざるを得なかった。

試掘調査の結果、集落遺跡と判断された更埴条里遺跡2区北端～5区と屋代遺跡群2・4・6b～6e・7区は面的な調査を実施し、これらを除く更埴条里遺跡1区および2区の大半と6区、屋代遺跡群では1・5・6a区は、遺構が検出されないか遺跡の性格が水田遺跡であることから面的な調査を要しないと判断し、トレンチ調査または工事時点での立ち会い確認にとどまった（第2図）。屋代遺跡群3区はもともとほとんど調査面積がないうえに、工事工程上の問題と保安上の問題から立ち会い調査すら行えなかった。

(1) 遺跡名称と記号

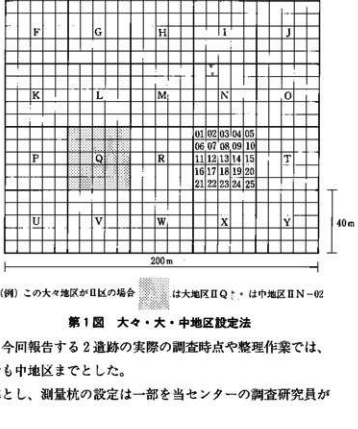
本書で報告する2遺跡には、記録の便宜を図るためアルファベットの大文字3文字の遺跡略号を用いた。更埴条里遺跡は『MKS』、屋代遺跡群は『MYS』である。一文字めの『M』は長野地区の新幹線用地内の遺跡に冠し、二文字めと三文字めはKOUSHOKU、YASHIROのアンダーラインの文字を拾っている。高速道関連の同遺跡は一文字めに「B」を冠し、BKS・BYSを用いて区別している。

(2) グリッドの設定と呼称（第1図）

グリッドの設定は国家座標を利用して大々地区・大地区・中地区に区分した。平面直角座標系の第Ⅷ系の原点（X＝0.0000、Y＝0.0000）の200の倍数値で、200m四方の区画を設定して「大々地区」とした。大々地区は北西から南東へ、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ‥‥というように振った。

次に大々地区を40m四方に25分割して「大地区」とし、呼称は北西から南東へA～Yとした。更に大地区を8m四方に25分割して「中地区」とし、呼称は北西から南東へ1～25を与えた。

これらを組み合わせ、大々地区「Ⅱ区」に属する大地区「P区」の中の「7区」は「ⅡP－07」のように表される。当センターで通常グリッドと呼ぶものはこの中地区（8×8m）を指し、これに基づいて調査が進められることになる。必要な場合には中地区を2m四方に16分割した「小地区」を設定することになっているが、今回報告する2遺跡の実際の調査時点や整理作業では、小地区を用いたことはほとんど無く、本報文中でも中地区までとした。



第1図 大々・大・中地区設定法

以上のことから調査用の基準杭は中地区を基準とし、測量杭の設定は一部を当センターの調査研究員が行ったが、多くの場合は業者委託を原則とした。

(3) 遺構記号と遺構番号

記録上の便宜を図るため、遺構の名称は記号を用いて表した。遺構記号を以下に示すが「ＳＥ」を除いて検出時点での平面形状によって登録されるので、個々の遺構の性格や機能を表すものではない。

［ＳＢ］　直径あるいは一辺または最大長が２ｍ以上の、円形・長円形・方形・長方形・不整形等の掘り込み。(竪穴住居跡、竪穴状遺構)

［ＳＫ］　単独もしくは他の掘り込みと関係が認められない、ＳＢより小さい掘り込み。(土坑)

［ＳＥ］　ＳＢ・ＳＫのうち、掘り込みが著しく深いもの。(井戸跡)

［ＳＡ］　ＳＢより小さな掘り込みや石が列として配置されるもの。(柵・築地・柱列等)

［ＳＴ］　ＳＢより小さな掘り込みや石が一定間隔で方形、円形に配列されるもの。(掘立柱建物跡)

［ＳＤ］　帯状の掘り込み。(溝跡)

［ＳＦ］　単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもので、掘り込みをもたないもの。(火床、屋外炉跡) →穴を掘って火を焚いたものはＳＫ。

［ＳＣ］　連続する堅い面や帯状の盛り土やＳＤに挟まれる帯状の面。(道路、畦、堤防)

［ＳＬ］　複数の帯状の掘り込みや盛り上がりが規則的に配列し、ひとつの面を形成しているもの。(畠跡、水田跡)

［ＳＨ］　石が面的に集中するもの。(集石)

［ＳＸ］　以上の遺構記号に該当しない不明遺構。

［ＮＲ］　帯状の落ち込みで、人為性の認められないもの。(自然流路)

なお、ＳＢ内の柱穴・貯蔵穴等やＳＴを構成する個々の掘り込みにはＰを付した。上記の記号は大方、当センターの共通認識を踏襲しているが、一部本書独自のものを含む。「ＳＥ」は、ＳＢかＳＫに含めるものとされ、最近では用いられなくなっているが敢えてこれを調査時点から用いた。「ＮＲ」は、ＳＤが河道や氾濫原溝をも含むものとされているが、人為性の視座から敢えてＳＤと分けて調査時点から用いた。

本報告書では発掘調査時点の遺構記号を原則として使用しているが、整理作業段階で性格や機能ではなく、形状が著しく相応しくないごく一部のものについては遺構記号の変更を行った。(例えば、一辺２ｍ以上の竪穴なのに調査時点ではＳＫを登録していたものをＳＢとする、など。)

遺構番号は時代や検出面にかかわらず種類ごとに検出順に付した。更埴条里遺跡では2000番台は２区、3000番台は３区、4000番台は４区、5000番台は５区で用いた。屋代遺跡群では２区で2000番台、４区で4000番台、６区で6000番台、７区で7000番台を用いた。例えば、３区で一番最初に検出されたＳＢは「ＳＢ3001」であり、６区で26番めに検出されたＳＤは「ＳＤ6026」となる。本書では混乱を避けるため、原則的に調査時点の遺構番号を使用したが、一部に欠番を生じている。また調査時点は別の遺構記号のもの、呼称が無いものも、整理時点で全く新しい番号を登録したものがごく一部あることを了承されたい。

(4) 遺構検出と遺構調査の手順

前述のように試掘調査の結果、面的な調査を要する地区については先ず、重機で表土を除去した後、前述のようにグリッドを設定して人力で遺構検出を行った。遺構検出の際、出土した遺物はグリッド名か帰属遺構名を付して取り上げた。遺構調査面が２面以上ある場合は、重機または人力の作業を繰り返した。検出された遺構の調査には、平面形で重複関係を把握してから掘り下げ作業にかかった。精査する順番は、基本的に小さいものから大きいものへ、重複関係の新しいものから古いものへ、という流れで行った。

精査の具体はＳＢを例に取ると、主軸方向や付属施設を考慮して、主軸方向とそれに直交する方向に先行トレンチを入れ、床・壁と覆土の堆積状況・埋没状況を確認する。そして土層観察のために覆土を十文

字の帯状に残して掘り下げる。この際出土した遺物は、完形か大きなものは出土位置を記録するために残し、他は層位ごとに一括して取り上げた。カマドも同様な手順で調査した。土層記録後は帯状部を除去して、残した遺物の位置や出土状態の記録をし、取り上げた。その後床面を精査して柱穴や炉も検出し、断面記録をとりながら掘り下げた。掘り形の調査はいくつかのＳＢで抽出的に行った。

ＳＢ以外の規模の小さいものについては、十文字方向ではなく、単一の方向で土層観察を行う程度の相違のほかは同様な手順で調査を進めた。細長いＳＤ・ＳＣは、進行方向と直交する方向、即ち最短距離で截ち割って土層観察を行い、同様の手順で調査を進めた。

(5) 測 量

遺構の測量は簡易遣り方測量（オフセット測量）により、中地区（８×８ｍ）単位に区切った割付図として、住居跡と掘立柱建物跡では個別遺構図として実測した。縮尺はほとんどの場合１：20で、必要に応じて１：10で実測した。この他、屋代遺跡群では水田関係遺構で縮尺１：100の航空測量を業者委託した。

(6) 写 真

遺跡の景観や遺構等の撮影にはニコンＦＭ２とペンタックス６×７を使用し、ともにモノクロプリントとカラーリバーサルで撮影した。個別遺構の撮影はＳＢ・ＳＴではすべてを、それ以外は必要に応じて撮影した。航空写真は業者に委託した。

2 整理作業の方法

(1) 調査時点および同年度の整理

発掘調査時点での整理は、遺物洗浄・図面整理・写真整理の一部を行った。写真の整理は撮影記録簿と照合しながら、アルバム、スライドファイルへ収納し、必要事項を注記した。図面類は、平面図と断面図を照合して補正した。また、遺構分布全体図を作成した。

発掘調査終了後の冬期整理作業では、現場で作成された図面類と写真の整理を最優先にした。主な遺構については、各遺構の調査担当者が調査所見を「遺構所見整理カード」へ記載し、遺構カードへ貼り込んだ。調査と同一年度の整理はここまでとした。

(2) 報告書作成にかかわる整理

報告書作成にかかわる整理作業は、平成７年度に長野調査事務所篠ノ井整理棟で、平成８年度以降には上田調査事務所にて行った。平成７年度は、土器・石器の注記、土器の接合作業、土器・石器の実測作業を中心に進め、骨のクリーニングを行った。平成８年度は、土器の接合・復原作業、土器・石器の実測、土器の写真撮影等を行った。平成９年度は、土器・金属器・井戸木枠の実測、遺物の写真撮影、遺構図・遺物実測図のトレース、遺構・遺物写真の選定・レイアウト、版組み、原稿執筆と編集、収納等を行った。

出土土器・石器への注記は、遺跡記号、遺構記号・遺構番号または地区名、取り上げ番号を付した。土器・石器は分類・選別後、接合、石膏または合成樹脂復原を経て実測は手測により行った。金属器は、保存処理の途上段階での実測、写真撮影を行い、本書作成後に永年保存資料として耐え得るように保存処理の続きを長野県立歴史館に委託した。井戸木枠の実測は業者に委託した。遺物の写真撮影は埋文センター上田調査事務所写真室が担当して焼き付けまで行った。遺構分布全体図・土器実測図のトレースは一部業者委託した。これらの作業を経た遺物は台帳登録して収納した。

第３節　遺跡群周辺の環境

１　遺跡群の立地と位置

更埴条里遺跡と屋代遺跡群は長野盆地（善光寺平）の南端にあたる。千曲川の蛇行のひとつの屈曲部に相当する更埴市屋代地区では、千曲川の営為により河岸には厚い土砂が堆積して広大な自然堤防を、その背後の南東側にはこれまた広範な後背湿地が形成されている。河東山地の支脈と支脈の間は千曲川の氾濫原である平野に没し、支脈はあたかもリアス式の海岸のごとくに半島状に突き出して、湾入低地と称される地形をいくつも作りだしている。更埴条里遺跡が立地するのは河東地方に形成された湾入低地の中でも最西南端の後背湿地に相当し、屋代遺跡群は主にこの自然堤防上に位置する遺跡群である。自然堤防は細粒堆積のⅠ群と、Ⅰ群より1.5m程低く、古代以降に形成されたと思われる粗粒堆積のⅡ群に分かれ（第３図）、これらのⅠ・Ⅱ群に後背湿地のⅠ・Ⅱ群も対応する。更埴条里遺跡・屋代遺跡群は後背湿地・自然堤防の各Ⅰ群に立地するが、第３図は航空写真と現地形の踏査により作成したため、更埴条里遺跡５区や屋代遺跡群２区北側など実際に検出された遺跡群の立地と符合しない地点もある。

後背湿地内には古くから水田が広がり、条里的区画の中は五十里川が自然流の形で流れて、さらなる低湿地を形成している。自然堤防上には、五十里・郷津・古道・大塚・馬口・北中原・荒井・松ケ崎・町浦・城ノ内・大境・窪河原・下条・灰塚・大宮・唐崎・生仁・島といった遺跡が連なり、縄文時代から中世にいたるまで人の営みの痕跡を自然堤防上に刻んでいる。現時点では、これらの遺跡の境界が未確定であるか、不可分である状況もあり、これらを屋代遺跡群として総称している。

これらの地域は、大雑把には後背湿地＝水田、自然堤防＝集落という構図でとらえられ、確かにこの傾向は現在にも至っているが、実際には様相は単純ではなく、後背湿地内にも微高地があって集落が営まれたり、自然堤防が旧河道によって中洲状に分断していたりする。現在のところ、更埴条里遺跡と屋代遺跡群は便宜的に五十里川の形成した微凹地以南と以北を分けており、場合によっては現在の五十里川そのものによって画されるが、実際には屋代遺跡群内にも条里水田は大きく広がっている。以上のことは本報告書においても、更埴「条里」遺跡と称しても集落のみである一方、屋代遺跡群は水田をも含んでいる。以上のように更埴条里遺跡と屋代遺跡群は間断なく連続する遺跡群である。

両遺跡を合わせた範囲は、北は千曲川の氾濫原との境界、南は有明山の麓、西は栗佐遺跡群と接する五十里川と一重山付近、東は沢山川の微凹地を境とする。北陸新幹線はこの地区の西端を南北に縦断する形で計画された。今回報告する屋代遺跡群の２～６ａ区付近は、千曲川の旧河道の蛇行が最も東側へ抉り込む部分の外縁帯に相当し、地形の変換点になっている。国家座標では、第Ⅷ系Ｘ＝58900ｍ～60400ｍ、Ｙ＝－32650ｍ～－32820ｍに位置する。

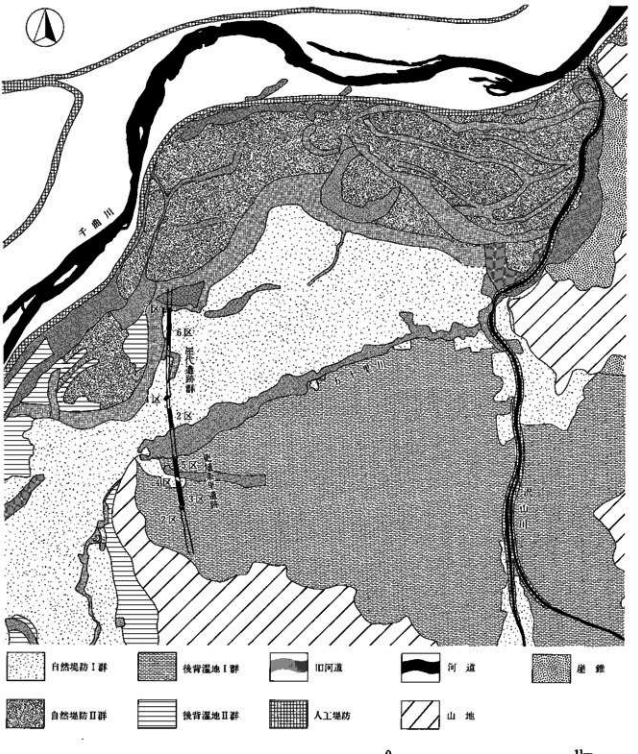
２　遺跡群の歴史的概観

上田市から坂城町・戸倉町を経て北西方向に流れ来る千曲川は、更埴市八幡の辺りで北東方向へ進路を変えて蛇行し始める。この蛇行は現地形においても、上田市中之条付近から更埴市栗佐付近までの直線距離17㎞を約68ｍ下るのに対して、更埴市栗佐付近から犀川との合流地点までの同じ17㎞間の標高差が19ｍということからも頷ける。さらに、西部山地から長野盆地に流れ込む犀川が大扇状地を形成し、これが千曲川の北進を妨げて東側～南側へ進路を圧迫したとされる。この所どころに淀みをもつ緩やかな流れによ

第2図 遺跡群位置・大々地区設定

って、両岸に自然堤防が形成され、歴代遺跡群周辺では水田可耕土である細砂やシルトが堆積する。

以上のような成因による自然堤防と後背湿地は、居住と生産の舞台として繁栄していたことは周知の通りであるが、こうした地形の利用はすでに縄文時代から始まっていたことが最近の調査で明らかになりつつある。歴代遺跡群の高速道地点では縄文中期の集落が地表下４ｍに埋没し、自然堤防形成の初源段階から居住が開始されていることを知らしめ、縄文時代の居住が丘陵や台地ばかりではないことを証明している。高速道地点では、縄文前期や後・晩期の遺物や遺構も見つかっている。道路や住宅建設のような通常



第３図　地形分類図（遺跡周辺）

の狭小な発掘調査範囲では、そのような深度には開発も及ばないことや保安上の問題からも、4mにも及ぶ掘削深で調査が実施されることは考えられず、高速道地点以外の自然堤防上にも物理的に調査不能な深度に遺跡が眠っていることを想像せしめる知見であった。現在、高速道地点の縄文時代については未報告であり、これ以上のことをここで述べる状況にはない。この他、城ノ内遺跡では縄文後期、大宮・生仁遺跡や有明山の麓の屋代清水遺跡では縄文晩期の資料が見つかっているが、点在した状況にあり、検出レベルも弥生時代とさほど変わるものではない。

弥生時代には千曲川の左岸において、篠ノ井塩崎や聖川堤防沿いなどの自然堤防上やそれらの北西側の後背湿地に、稲作の受容を背景に集落や水田が大規模に広がっていることがよく知られているが、右岸の屋代遺跡群内においても弥生時代の生業は確実に根を下ろし、自然堤防を中心とした一帯にも集落が発見されている。城ノ内遺跡では稲作農耕社会の萌芽を裏付ける遠賀川系の土器が見つかっている。弥生中期以降は荒井・松ケ崎・大宮・生仁・島遺跡、有明山崖錐面～麓では大穴・屋代清水遺跡などで遺構・遺物が見つかっているが、中期の遺跡や資料は数量的には多くはなく、生仁遺跡など拠点的な集落の多くは後期のものである。堤防上には点在する形で集落を営む一方、後背湿地の更埴条里遺跡内に水路を設けて水田を開発し始めたのはこの頃であると考えられる。しかし、水田はまだ大規模なものではなく、森将軍塚古墳直下の県道白石・更埴線の南側や、沢山川が五十里川と合流する付近の沢山川の西側など、最も低湿化した限られた地域であったと考えられる。当センターで調査した更埴条里遺跡の、有明山の麓の地点では弥生時代のものとみられる水田が見つかっている。

古墳時代に入ると、集落は増大して自然堤防上全体に広がりはじめる。前半期では郷津・灰塚・城ノ内・生仁遺跡と高速道地点、有明山崖錐下の屋代清水遺跡など、後半期では大宮・生仁遺跡や高速道地点が挙げられる。4世紀後半から5世紀には、現在県立歴史館のある屋代清水遺跡を直下に見下ろす位置に、全長100mの規模をもつ森将軍塚古墳、東方の尾根上には全長70m前後の土口将軍塚古墳と倉科将軍塚古墳、森将軍塚古墳の上方には有明山将軍塚古墳などの前方後円墳が築造されている。しかし、これらの突出した規模をもつ古墳の時期において、また円墳や群集墳へ移行した後半期においても、それらの古墳群に見合うだけの規模をもった集落や生産基盤は、更埴条里遺跡・屋代遺跡群内では領ける内容では十分に見出すには至っていない。

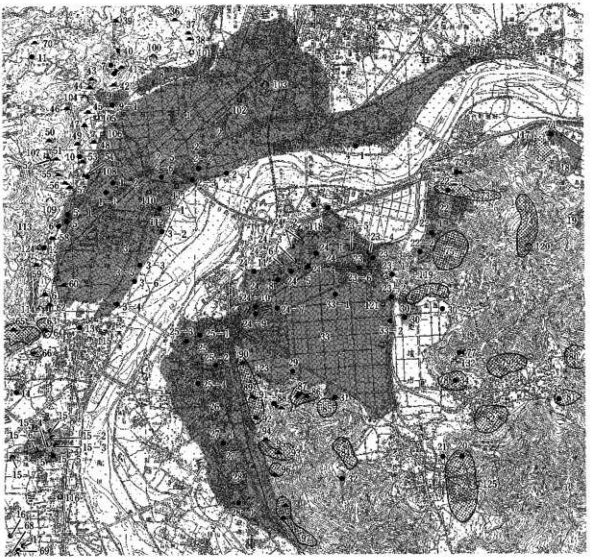
古代では8世紀後半から集落は飛躍的に増大し、自然堤防上の全域、後背湿地内の微高地上にも分布する。今回報告する更埴条里遺跡の集落跡も後背湿地内の微高地に相当する。9世紀代に入ると、後背湿地内には条理的地割りをもった水田が大規模に展開し、自然堤防上にはこれらと関連すると考えられる基幹水路が数条見つかっている。また、集落域周縁では条里区画にのらない水田も開発され、最近の調査では自然堤防の内側にも水田が造成されていることが分かってきている。しかし、後背湿地内の水田は勿論、自然堤防上の集落の一部までもが9世紀後半とされる大洪水によって埋没してしまう。この洪水は場所によっては2mにも及ぶ砂を堆積し、千曲川流域の諸遺跡から長野盆地南部には普遍的に確認されている広域の洪水堆積で、仁和4（888）年の文献記録に対比されるものと現在考えられている。この洪水はそれによる埋没深度もさることながら、千曲川の流路や微地形の大きな変化によって、灌漑用水の取水口を格段に上流まで押し上げるなどの必要性を生じて、基幹水路とともに水田の再開発を放棄された地域も多い。洪水以降の9世紀末～平安時代の後半期の遺跡は、洪水前とは比較にならないような僅少な割合でしか確認できなくなっている。集落立地の質的変化が考えられるとともに、後の土地利用が痕跡を残しにくくしているとも思われる。

当センターで調査した屋代遺跡群の高速道地点では千曲川の旧河道が見つかり、多数の木簡が出土した。その内容は従来の知見を大幅に書き換えるものであり、埴科郡衙との関連が注目される。しかし、木簡を

伴う遺構の時期は7世紀後半から8世紀前半で、現在までの調査例では屋代遺跡群内の集落が希薄となる時期に相当する。8世紀前半の一般的な集落としては、城ノ内・馬口・生仁遺跡の良好な資料とともに今回報告する更埴条里遺跡の5区の資料を標識的な資料として追加できるが、木簡の出土量と内容に見合った規模や内容の遺構が自然堤防上に見つかっていない。近接する雨の宮廃寺跡からも有力者層の存在は推測できるが、官衙関連施設の存在は明確ではない。

中世は文献資料によっては多くの事が知られる一方、考古学的な手法による調査事例は希薄かつ断片的である。自然堤防上においても条里水田の上部においても、井戸跡や大きな溝跡など洪水砂を貫くようなある程度の深さをもった遺構は検出されるが、建物跡などの検出例は稀である。この傾向は平安時代後半、すなわち大洪水の後の遺構において共通しており、近世から現代の耕作などの土地利用がこれらを攪拌してしまっていることによって、とらえられないものになっていると考えられる地点が少なくなく、中世相当の水田の保存状態も極めて良くない。

なお文献に見られ、自然堤防上にかかわる中世の城跡としては屋代城と生仁館がある。屋代城は屋代一帯を支配した屋代氏が、字名のあらわす通りの城ノ内地籍に居を構えたとされ、城ノ内周辺の発掘調査では堀跡がいくつか確認されている。その新城は一重山の山頂にある。生仁館跡は五十里川と生仁川の合流点付近にあり、現在は畑地になっている。



第4図　周辺の遺跡

周辺の遺跡

〈千曲川左岸遺跡〉

○遺物出土 ◎遺構検出

記号	遺跡名	旧石器	縄文 草・早	縄文 前・中	縄文 後・晩	縄文 不明	弥生 中期	弥生 後期	弥生 不明	古墳 前期	古墳 中期	古墳 後期	古墳 不明	奈良	平安 前期	平安 中	平安 後期	平安 不明	中近世	文献
1	石川条里遺跡			◎			◎	◎		◎	◎			◎	◎				◎	40～42、48、49、51、52、65～68、77、78、81
1-1	栃下地点									◎	◎			◎	◎				○	66
1-2	消防塩崎分署							◎		◎	◎				◎					64
2	篠ノ井遺跡群				○		◎	◎		◎		◎		◎	◎	◎			◎	41、42、45、48、49、51、53
2-1	大規模自転車道							◎		◎		◎		◎	◎				◎	63
2-2	聖川堤防				○		◎	◎		◎		◎		◎	◎				◎	79
2-3	聖徳橋地点					○			○				○	○				○		
2-4	市道山崎唐猫線						○	◎		◎				◎	◎					74
2-5	中部電力鉄塔							◎		◎										76
2-6	市営体育館				◎		◎	◎		◎				○	○					76
3	塩崎遺跡群				○		◎	◎		◎	◎	◎		◎	◎		◎		○	
3-1	市道角間線地点				○			◎						◎	◎				◎	70
3-2	塩崎小学校地点						◎	◎		◎	◎	◎		◎	◎				○	59～62、80
3-3	市道松節小田井神社地点						◎	◎		◎	◎	◎		◎	◎				○	69、89
3-4	市道篠ノ井南253号線地点						◎	◎		◎	◎			◎	◎				○	77
3-5	伊勢宮遺跡						◎	◎												1、59
3-6	中条遺跡								○				○	○					○	75
4	横田遺跡群						○	○		○		◎		○	○	◎				
4-1	富士宮遺跡											◎				◎				71
5	鵜前遺跡				◎		◎	◎		◎	◎			◎	◎	◎			◎	47
5-1	中電鉄塔地点														◎					72
6	鵜萩七尊岩藤遺跡						◎				◎	◎								46
7	湯の入上遺跡						◎	○	○											
8	石川方田遺跡群								○				○							
9	上石川遺跡群								○				○							
9-1	上石川廃寺跡														◎					
10	上見林遺跡					○										◎				82
11	小山田池遺跡						○													
12	長谷遺跡								○				○	○				○		
13	大牧遺跡																			35
14	治田池下遺跡		○	○																35
15	八幡遺跡群																			
15-1	志川遺跡											○								35
15-2	六反田遺跡											○								35
15-3	よこまくり遺跡											○								35
15-4	れんでぼ遺跡											○								35
15-5	よこみぞ遺跡											○								35
15-6	青木遺跡														○					5、15
15-7	北郷付遺跡														◎					19
16	社宮司遺跡														◎					21
17	宮川遺跡							◎												35

〈千曲川右岸更埴市域〉　　○遺物出土　◎遺構検出

記号	遺跡名	旧石器	縄文 草・早	縄文 前・中	縄文 後・晩	縄文 不明	弥生 中期	弥生 後期	弥生 不明	古墳 前期	古墳 中期	古墳 後期	古墳 不明	奈良	平安 前期	平安 中	平安 後期	平安 不明	中近世	文献
18	宮村遺跡																		○	
19	大村遺跡								○										○	
20	県山遺跡	○																		
21	中ノ宮遺跡						○													33、39
22	土口遺跡群																			
22-1	土口遺跡																		◎	
22-2	日ノ尾遺跡				○		○													
22-3	土口北山遺跡																			31
23	雨宮遺跡群																			
23-1	唐崎遺跡						○													35、39
23-2	生仁遺跡				○		◎	◎		◎	◎	◎		◎	◎		◎		◎	12、29、59
23-3	大宮遺跡				○							◎								
23-4	雨宮廃寺跡																			59
23-5	厩塚遺跡									◎		○								13
23-6	大日堂遺跡																			59
24	屋代遺跡群			◎	◎		◎	◎		◎	◎	◎		◎	◎	◎			◎	43～45、48～51
24-1	大境遺跡			○				◎		◎		○							◎	34、45
24-2	城ノ内遺跡				○		○	◎		◎	◎	◎		◎	◎	◎			◎	7、11、31、38、59
24-3	松ヶ崎遺跡						○												◎	31
24-4	町浦遺跡														◎					31
24-5	北中原遺跡				○					○	○				◎					31
24-6	荒井遺跡						◎												◎	2
24-7	大塚遺跡											○				◎				3
24-8	馬口遺跡													◎	◎	○				4、6、16、22、24、26、27、31、59
24-9	郷津遺跡						○	◎												31
24-10	古道遺跡							◎												31
24-11	地之目遺跡 一丁田遺跡											◎							◎	46
25	栗佐遺跡群																			
25-1	北村遺跡									◎										31
25-2	五輪堂遺跡						○	◎		◎	◎	◎		◎	◎					17、18、23、30 59、92
25-3	諏訪南沖遺跡																			31
25-4	東沖遺跡																			31
26	小島遺跡群											○								28
27	打沢遺跡群											○								
27-1	大臼遺跡							○												
28	寂蒔遺跡群			○	○		○	○												
28-1	西王子遺跡											○								
29	屋代清水遺跡				○		◎			◎	◎				◎				◎	32
30	牛壹遺跡群																			
30-1	烏遺跡						◎								◎					31、85、86
30-2	牛壹石原遺跡																			31
31	大穴遺跡		○	○	○		◎	◎				◎			◎					44、45
32	岡地清水遺跡											◎			◎					44
33	更埴条里遺跡				◎		○	◎							◎				◎	25、43～45、48、49、51、56、59
33-1	町田遺跡																◎			
33-2	本誓寺遺跡														○					20
34	北山遺跡																			
35	矢ノ口遺跡																			

〈古墳〉

△は墳形などにより時期を推測

番号	遺跡名	古墳 前期	中期	後期	不明	文献
36	柳沢1号古墳			△		58
37	山畑新田古墳			△		58
38	鼎塚古墳			△		58
39	湯ノ入古墳群			△		58
40	姫塚古墳	◎				58、59
41	川柳将軍塚古墳	◎				9、55、59、87、91
42	宮下1号古墳			△		58
43	飯綱社古墳		◎			10、58
44	大和田1号古墳			△		58
45	城古墳			◎		58
46	鎧塚古墳群			◎		58
47	虚空蔵平1号			△		58
48	丸山・岡内古墳			◎		37
49	池ノ上古墳			◎		58
50	薬師山古墳群			△		58
51	四之宮将軍山古墳		△			58
52	八ッ塚1号古墳			◎		58
53	中郷古墳		△			94
54	中郷古墳陪塚		△			58
55	大伯母古墳			◎		58
56	小日向古墳			◎		58
57	秋葉山古墳			◎		58
58	鵜森古墳			◎		58
59	平古墳			◎		58
60	八幡宮古墳		◎			58
61	城山古墳			◎		58
62	東谷古墳			◎		58
63	東谷古墳群			△		58
64	湯ノ崎1号墳			◎		8
65	塚穴古墳群			◎		35
66	湯ノ崎古墳群			△		35
67	一本松古墳			◎		35
68	鐵捨山古墳群			◎		35
69	丸山古墳			△		35
70	小山田藤塚古墳			△		35
71	清野古墳群			◎		58
72	土口将軍塚古墳		◎			59、83
73	土口北山古墳群			◎		
74	空平古墳群				○	
75	土口古墳群			◎		35、58
76	生萱北山古墳群			◎		35
77	倉科将軍塚古墳		◎			35、59
78	倉科北山古墳群			△		35、58
79	大映古墳群		◎	◎		35
80	竹尾古墳群			△		35
81	矢ノ口古墳群			△		35
82	田端古墳群			△		35
83	森古墳群		◎	◎		35
84	岡地古墳群			◎		35
85	大穴古墳群			◎		35、45、58
86	将軍塚古墳群		◎	◎		14、33
87	森将軍塚古墳	◎				14、33
88	有明山将軍塚古墳			△		35、59
89	小島古墳群			△		35、58
90	一宮御岳神社古墳	◎				35
91	東山神社古墳	◎				35
92	お助塚古墳				△	35
93	打沢古墳群			△		35
94	打沢古墳			△		35
95	聖塚古墳		◎			35
96	虚空蔵古墳群			△		35
97	寂蒔古墳群			△		35

〈山城〉

番号	遺跡名	文献
98	横田城	57、93
99	小森館	57
100	湯の入城	
101	二つ柳城	
102	塚田	
103	大塔城	57、93
104	石川城	
105	堀の内	
106	圃内	
107	薬山砦	54
108	四宮館	54
109	見山砦	46
110	善右エ門屋敷	54
111	下枡	
112	殿屋敷	
113	堀崎城	57、93
114	赤沢城	57
115	稲荷山城	57、93
116	八幡松田館	57
117	妻女山城	
118	居代古城	
119	唐崎山城	57、93
120	矢城城	57
121	生仁館	29、57、93
122	磐尾城	57、93
123	屏代城	36、57、93
124	長谷経塚	39、84、90
125	大峰経塚	83、90

第2章第2節遺跡分布　引用・参考文献（五十音順）

1　磯崎正彦　1959　『長野県篠ノ井市伊勢宮遺跡の古式弥生土器』「信濃」Ⅲ-11-6

2　岡田正彦　1969　『長野県更埴市荒井遺跡採集の一括資料』「信濃」Ⅲ-21-11

3　岡田正彦　1970　『長野県更埴市屋代大塚遺跡調査報告』「信濃」Ⅲ-22-4

4　岡田正彦　1971　『長野県更埴市屋代馬口遺跡調査報告』「信濃」Ⅲ-23-5

5　岡田正彦・竹内三千夫　1972　『更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告』「長野県考古学会誌」14

6　岡田正彦　1973　『長野県更埴市馬口遺跡出土の緑釉手付水瓶』「長野県考古学会誌」5

7　岡田正彦　1977　『城之内遺跡』「日本考古学年報24」

8　桐原　健　1966　『長野県更埴市稲荷山湯の崎一本松古墳覚書』「信濃」Ⅲ-18-9

9　桐原　健　1979　『川柳将軍塚古墳の再認識』「千曲」23

10　桐原健・松尾昌彦　1984　『長野県飯綱社古墳の出土遺物』「信濃」Ⅲ-36-4

11　更埴市教育委員会　1961　『城ノ内―信州千曲河岸の土師式集落の研究』

12　更埴市教育委員会　1969　『生仁』

13　更埴市教育委員会　1970　『下条・灰塚遺跡―長野県更埴市の古代集落遺跡発掘調査報告書』

14　更埴市教育委員会　1973　『長野県森将軍塚古墳』

15　更埴市教育委員会　1977　『長野県更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告書』

16　更埴市教育委員会　1978　『屋代馬口K―長野県更埴市屋代遺跡群馬口K遺跡緊急発掘調査報告書―』

17　更埴市教育委員会　1981　『更埴市聖佐遺跡群五輪堂遺跡―長野県屋代南高等学校地点試掘確認調査報告書―』

18　更埴市教育委員会　1982　『更埴市聖佐遺跡群五輪堂遺跡Ⅱ―長野県屋代南高等学校地点発掘調査報告書―』

19　更埴市教育委員会　1984　『長野県更埴市八幡遺跡群北稲付遺跡―西部沖ほ場整備に伴う発掘調査報告書―』

20　更埴市教育委員会　1985　『本誓寺遺跡調査の概要』

21　更埴市教育委員会　1986　『長野県更埴市社宮司遺跡―西部沖ほ場整備に伴う発掘調査報告書―』

22　更埴市教育委員会　1986　『屋代遺跡群馬口遺跡―長野県屋代高等学校改築に伴う発掘調査報告書―』

23　更埴市教育委員会　1987　『更埴市聖佐遺跡群五輪堂遺跡Ⅳ―長野県屋代南高等学校特別教室棟建設に伴う発掘調査報告書―』

24　更埴市教育委員会　1987　『屋代遺跡群馬口遺跡Ⅱ―長野県屋代高等学校体育館建設に伴う発掘調査―』

25　更埴市教育委員会　1988　『長野県更埴市屋代遺跡群・更埴条里水田址詳細分布調査報告書―』

26　更埴市教育委員会　1988　『屋代遺跡群馬口遺跡Ⅲ―長野県屋代高等学校プール等建設に伴う発掘調査報告書―』

27　更埴市教育委員会　1989　『長野県更埴市屋代遺跡群馬口遺跡Ⅳ―長野県屋代高等学校合宿所建設に伴う発掘調査報告書―』

28　更埴市教育委員会　1989　『長野県更埴市小島遺跡―都市計画遺跡駅前線工事に伴う発掘調査報告書―』

29　更埴市教育委員会　1989　『長野県更埴市　生仁遺跡Ⅲ―東宮雨宮地区排水防除事業に伴う発掘調査報告書―』

30　更埴市教育委員会　1990　『更埴市聖佐遺跡群五輪堂遺跡Ⅲ―屋代南高校改築に伴う発掘調査報告書―』

31　更埴市教育委員会　1990　『平成元年度　更埴市埋蔵文化財調査報告書』

32　更埴市教育委員会　1992　『屋代清水遺跡―県立歴史館建設に伴う発掘調査報告書』

33　更埴市教育委員会　1992　『史跡　森将軍塚古墳―保存整備事業発掘調査報告書―』

34　更埴市教育委員会　1994　『長野県更埴市屋代遺跡群　大境遺跡Ⅳ・Ⅴ　中部電力雨宮変電所・鉄塔建設に伴う発掘調査報告書』

35　更埴市史編纂委員会　1994　『更埴市史　第1巻　古代・中世編』

36　更埴市教育委員会　1995　『長野県更埴市　屋代城跡範囲確認調査報告書』

37	笹沢浩	1971	『長野市篠ノ井圃内古墳出土の壁画』「長野」38
38	笹沢弘・岡田正彦	1978	「更埴市城之内遺跡」「信濃考古」27
39	更級域科地方誌刊行会	1978	『更級域科地方誌 第2巻 原始古代中世編』
40	財）長野県埋蔵文化財センター	1989	『長野県埋蔵文化財センター 年報 5』
41	財）長野県埋蔵文化財センター	1990	『長野県埋蔵文化財センター 年報 6』
42	財）長野県埋蔵文化財センター	1991	『長野県埋蔵文化財センター 年報 7』
43	財）長野県埋蔵文化財センター	1992	『長野県埋蔵文化財センター 年報 8』
44	財）長野県埋蔵文化財センター	1993	『長野県埋蔵文化財センター 年報 9』
45	財）長野県埋蔵文化財センター	1994	『長野県埋蔵文化財センター 年報10』
46	財）長野県埋蔵文化財センター	1994	『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13 更埴市内・長野市内その1 鳥林遺跡 小坂西遺跡 鶴萩七尋岩藤遺跡 赤沢城跡 塩崎城見山砦遺跡 地之目遺跡 一丁田遺跡』
47	財）長野県埋蔵文化財センター	1994	『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14 長野市内その2 鶴前遺跡』
48	財）長野県埋蔵文化財センター	1995	『長野県埋蔵文化財センター 年報11』
49	財）長野県埋蔵文化財センター	1996	『長野県埋蔵文化財センター 年報12』
50	財）長野県埋蔵文化財センター	1996	『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書23 更埴市内その二 長野県屋代遺跡群出土木簡』
51	財）長野県埋蔵文化財センター	1997	『長野県埋蔵文化財センター 年報13』
52	財）長野県埋蔵文化財センター	1997	『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 長野市内その3 石川条里遺跡』
53	財）長野県埋蔵文化財センター	1997	『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16 長野市内その4 篠ノ井遺跡群』
54	塩崎村史刊行会	1971	『塩崎村史』
55	下平秀夫	1968	『川柳将軍塚古墳発見の埴輪円筒棺をめぐって』「信濃」III-20-4
56	長野県教育委員会	1968	『地下に発見された更埴条里遺構の研究』
57	長野県教育委員会	1983	『長野県の中世城郭跡 分布調査報告書』
58	長野県史刊行会	1981	『長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表』
59	長野県史刊行会	1982	『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡（北・東信編）』
60	長野市教育委員会	1978	『塩崎遺跡群―塩崎小学校地点遺跡 第1次調査報告―』
61	長野市教育委員会	1979	『塩崎遺跡群―塩崎小学校地点遺跡 第2次調査報告―』
62	長野市教育委員会	1980	『四ッ屋遺跡（1～3次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群（第3次）』
63	長野市教育委員会	1980	『篠ノ井遺跡群―大規模自転車道地点遺跡の調査報告』
64	長野市教育委員会	1981	『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
65	長野市教育委員会	1983	『浅川扇状地遺跡群向廻田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』
66	長野市教育委員会	1984	『石川条里的遺構・上駒沢遺跡』
67	長野市教育委員会	1985	「石川条里的遺構(3) （付・上駒沢遺跡）」
68	長野市教育委員会	1985	『長野市二ツ柳埋没水田址の調査』（「信濃」III-37-9）
69	長野市教育委員会	1986	『塩崎遺跡 IV―市道松節―小田井神社地点遺跡―』
70	長野市教育委員会	1987	『塩崎遺跡 V 殿屋敷遺跡―角間地区市道改良事業地点』
71	長野市教育委員会	1987	『横田遺跡群 富士宮遺跡 鉄塔建設に伴う緊急発掘報告』
72	長野市教育委員会	1989	『長野市塩崎鶴前遺跡・塩崎城跡―中部電力(株)送電用鉄塔建設に伴う発掘調査報告書―』

73　長野市教育委員会　1989　『石川条里遺跡(4)』

74　長野市教育委員会　1989　『篠ノ井遺跡群Ⅱ―市道山崎唐猫線地点―』

75　長野市教育委員会　1989　『中条遺跡―長野県松代高等学校体育館建設事業地点―』

76　長野市教育委員会　1990　『篠ノ井遺跡群Ⅲ―中部電力北信坂城線鉄塔地点・長野市営塩崎体育館地点―』

77　長野市教育委員会　1991　『塩崎遺跡群(6)・塩崎遺跡群市道篠ノ井南 253 号線地点・石川条里遺跡(5)―石川条里遺跡消防塩崎分署地点―』

78　長野市教育委員会　1991　『石川条里遺跡(6)―篠ノ井西部地区県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』

79　長野市教育委員会　1992　『篠ノ井遺跡群(4)―犀川堤防地点―』

80　長野市教育委員会　1992　『塩崎遺跡群(7)　塩崎小学校・水泳プール改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

81　長野市教育委員会　1993　『石川条里遺跡(7)　長野市北野十地区画整備事業　県営住宅みこと川団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

82　長野市教育委員会　1993　『上見林遺跡　主要地方道長野信州新線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

83　長野市・更埴市教育委員会　1987　『土口将軍塚古墳―重要遺跡確認緊急調査―』

84　林　和男　1985　『矢作山経塚出土の経筒』「長野」123

85　丸山敏一朗　1974　『善光寺平南縁の自然堤防上の遺跡について』「信濃」Ⅲ-26-5

86　丸山敏一朗　1976　『更埴市島・道前の十塚墓』『長野県考古学会誌』26

87　宮下健司　1979　『長野県川柳将軍塚古墳をめぐる古文献』「信濃」Ⅲ-31-9

88　宮本邦恭　1934　『長谷寺発掘金堂の経塚に就て』「信濃」Ⅰ-3-6

89　森嶋稔　1976　『銅鐸及び石製模造鉄』「篠ノ井指定文化財調査報告書」

90　森嶋稔　1981　『信濃経塚資料にみる二・三の課題』「信濃」Ⅲ-33-12

91　森本六爾　1929　『川柳将軍塚の研究』

92　矢島宏雄　1978　『馬背を出土した更埴市五輪堂遺跡』『長野県考古学会誌』31

93　湯本軍一責任編集　1980　『日本城郭体系　第８巻　長野・山梨』新人物往来社

94　米山一政　1966　『中郷神社指方後円墳』「篠ノ井指定文化財調査報告書」

第２章　更埴条里遺跡

第１節　遺跡の概観と調査の概要

１　遺跡の概観

本遺跡は更埴市大字屋代に所在し、遺跡の中心がしなの鉄道（旧ＪＲ信越線）屋代駅の北東約620ｍの地点に位置する。南は一重山の麓から県道白石・更埴線を跨ぎ、北は五十里川を境に屋代遺跡群へと続く。北陸新幹線としては、五里ケ峯トンネルの入り口から北方へ総延長約600ｍ、幅８～12ｍの範囲になり、現地表で標高357～360ｍの間にある。

遺跡はその名のとおり条里遺構として古くから知られ、屋代・森・雨宮・倉科にまたがる条里遺構は、県下各地域にあとをとどめている条里遺構の中でも範囲が大規模かつ明確であることで著名であるが、今回の新幹線用地内では重複の激しい集落遺跡であった点が新知見である。現況の南半は水田、微高地である北半の大半は宅地として利用されている。

２　調査の概要

調査対象となった面積は２ケ年で4700㎡である。最初に遺構・遺物・包含層の有無、土層の堆積状況、本調査必要範囲の確認のための試掘調査を行った。便宜上遺跡を南から１～６の区に分け（第５図）、用地の関係で数回に分けて重機による試掘を行った。

平成５年度には１・２区の調査を行った。１区は現水田面である平坦部分と山際の一段高まった部分に、２区は試掘時点で未収去の住宅部分を除いた現水田面に試掘トレンチを入れた。１区平坦部と２区では水田面が最低３面確認でき、出土遺物から中世以降のものと判断した。しかし、明確な畦畔等の遺構は検出されず、面的な調査の必要はないとした。山際部分はテラス状の地形とそれに伴う溝１条と土坑４基を検出した。テラス状の地形と溝は現地形とほぼ同じ方向・規模でつくられており、現地形がこれを踏襲して構築されたと考えられた。土坑は掘り込みが現耕作土直下から掘り込まれており、新しい時代のものと判断し、試掘のみの調査となった。

平成６年度、３・４・５区については遺物・遺構の掘り込みが確認できたので面的に拡張して本調査を行い、奈良時代から平安時代の竪穴住居跡および竪穴状遺構76軒、中世の掘立柱建物跡７棟、平安時代以前の溝25条、中世の溝２条、中世以降と考えられる井戸跡６基、弥生時代後期～中世の土坑多数を検出した。３区には調査開始時に未収去の住宅があったため、その部分については収去ししだい調査ということになり、実際には２区の未収去部分と共に年明けに行った。

3　調査の経過

平成5年度

4月14日　1区試掘
9月27日　2区試掘
10月1日　1区試掘
3月3日　2区立ち会い調査

平成6年度

4月8日　6区試掘
6月30日　5区試掘
7月6日　3・4区試掘
8月9日　2・3区試掘
10月20日　5区表土剥ぎ開始
11月7日　3区(ⅫG・L区)表土剥ぎ
11月10日　4区表土剥ぎ開始
11月15日　5区遺構が試掘で確認した範囲より南に拡がることが判明　ⅩⅤ区以南へ調査範囲拡大
11月24日　3区(ⅫG・L区)・5区　畠跡の空中写真撮影
12月7日　3区(ⅫG・L区)・4区　集落の空中写真撮影
12月16日　5区集落空中写真撮影
12月19日　3区(ⅫL・Q区)表土剥ぎ開始
12月22日　3区調査終了
12月27日　5区調査終了
1月10日　2区(ⅫQ・Ⅴ区)・3区(ⅫQ区)表土剥ぎ開始
1月19日　2区(ⅫQ・Ⅴ区)・3区(ⅫQ区)調査終了

4　基本層序

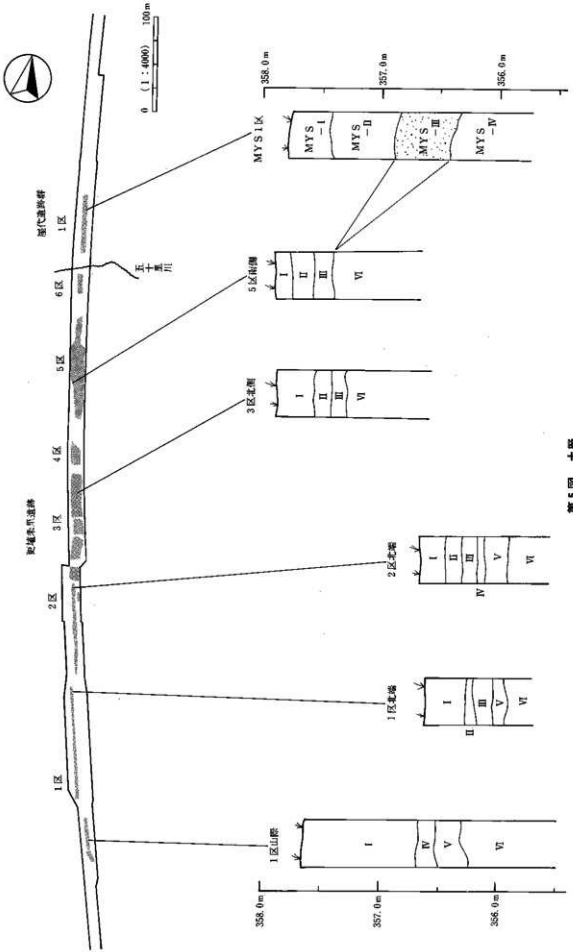
本遺跡の基本層序を、1区山際・1区北端・2区北端・3区北側・5区南側と、連続する屋代遺跡群と対比できるように屋代遺跡群1区五十里川南地点の柱状概念図で表した（第5図）。分層は以下のとおりである。

Ⅰ層：褐灰～にぶい黄褐色土。現耕作土。
Ⅱ層：褐灰～黄褐色土。弱粘性で溶脱層と集積層のセットが観られる。旧耕作土。
Ⅲ層：灰黄褐～黄褐色土。粘性があり、溶脱層と集積層のセットが観られる。旧耕作土。
Ⅳ層：褐灰色土。粘性あり。高速道更埴条里遺跡のⅣ－1層に対応する。2・3区に観られる。
Ⅴ層：黒褐色土。粘性あり。Ⅵ層の土壌化したもの。高速道更埴条里遺跡のⅥ層に対応。1・2区に観られる。
Ⅵ層：にぶい黄橙色～にぶい黄褐色土。高速道更埴条里遺跡のⅦ～Ⅸ層に対応すると考えられる。

1区山際では、傾斜地を畑地化して利用するための整地が段状に成され、地形を平坦化するために角礫が盛られている。1区山際のⅠ層は、耕作土ではない角礫部分も近代の所産ということから、このⅠ層に含めてあるため厚くなっている。Ⅰ層のうち褐灰色を示すのは1・2区の水田土壌で、3～5区では褐色がかる。この相違は、現代でも1・2区では水田、3～5区では畑地・宅地というように、後背湿地と微高地の相違が土地利用に反映した結果である。

旧耕作土Ⅱ・Ⅲ層では、両層界付近から白磁碗片・須恵質擂鉢・かわらけ、Ⅱ層上面から内耳鍋片・北宗銭「元祐通宝」、それより上のⅠ層では近代陶磁器片が出土している。Ⅲ層は中世の水田面、Ⅱ層は中世から近代の水田面と考えられる。

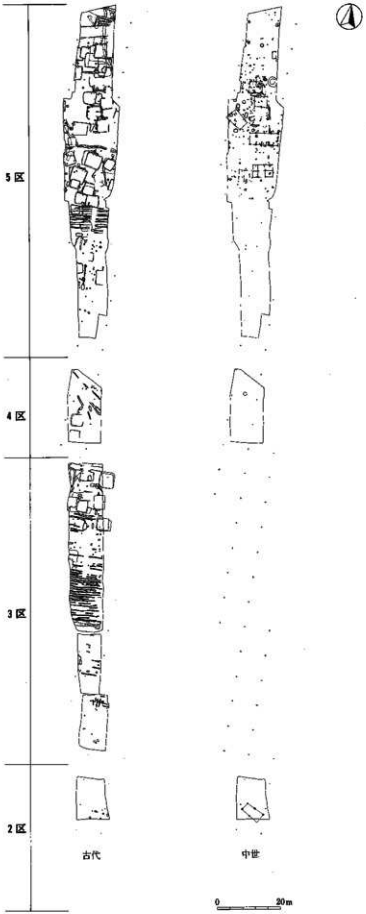
土師器坏・甕片が包蔵されるⅣ層は平安時代相当層と考えられる。2区では水田土壌と考えられるが、Ⅰ～Ⅲ層のような明確な溶脱層と集積層のセットはみられず、3区では畑地として利用されていたようで、いずれにしてもいわゆる条里的な地割りと符合した様相にはない。1区と5区では後の開発や耕作により、Ⅲ層以上に置換している。


0 (1:4000) 100m
更埴条里遺跡
1区
2区
3区
4区
5区
6区
五十里川
屋代遺跡群
1区
1区山際
2区北端
3区北端
5区南端
MYS11K
MYS_I
MYS_II
MYS_III
MYS_IV
358.0m
357.0m
356.0m

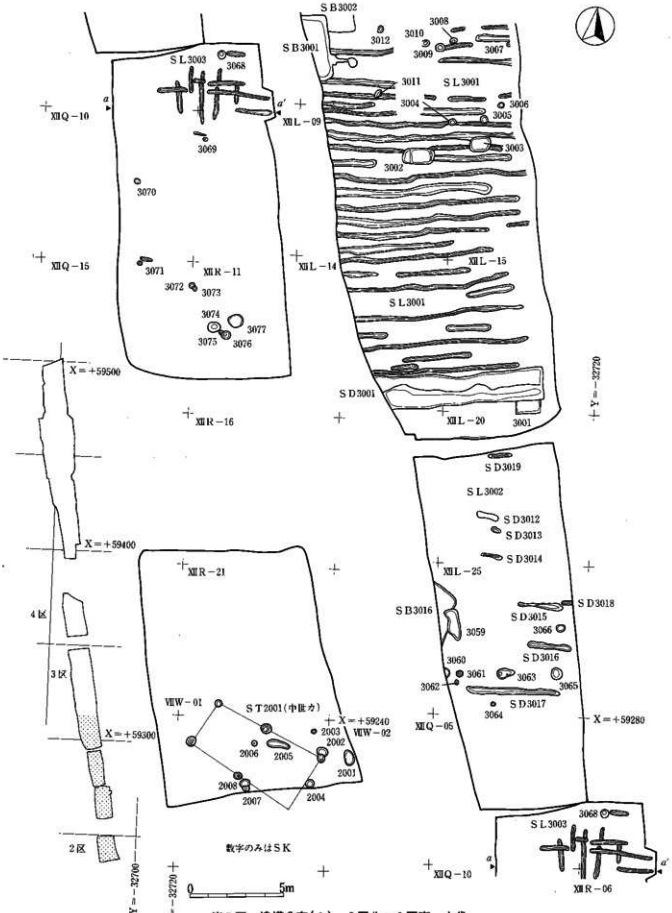
第５図　土層

同様に、１・２区だけに存在する、Ⅵ層上面が腐植したⅤ層は、微高地相当の３～５区には低地のような厚い堆積がなかったため、Ⅳ層以上に置換されてしまったと考えられる。

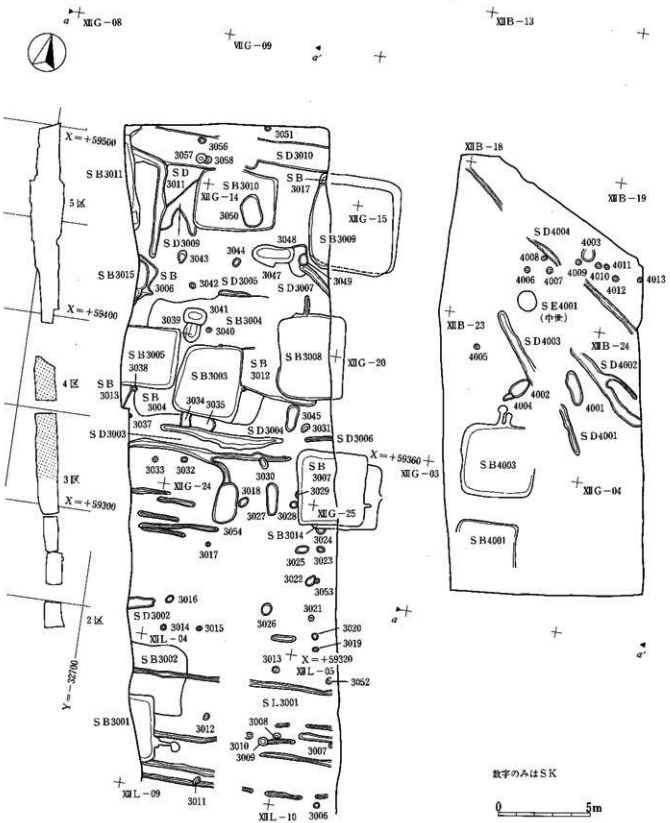
今回報告する更埴条里遺跡では現耕作土であるⅠ層を除いて、いずれの地区にも普遍的に分布する標準的な層がない。周辺の遺跡でキー層とされる９世紀末の洪水砂は条里水田を覆っていることで知られるが、１区から５区まで堆積はみられない。３～５区は、８～10世紀に集落遺地として選地されているように後背湿地内の微高地であり、洪水が及んでいない。５区と70ｍ程度しか離れていない屋代遺跡群の１区では、60cm前後の洪水砂が堆積している。現地表の比高は20cmもなく平坦な印象をもつが、洪水が及ぶ直前の段階では少なくとも１ｍの比高があったと考えられる。一方、１区山際を除き後背湿地内に相当する１・２区でも洪水砂の堆積がなく、後の開発によって洪水砂を上方へ撹拌した様相も見当たらない。高速道更埴条里遺跡では、県道白石・更埴線の南側では洪水砂の堆積は薄く、また、現在県立歴史館が建つ屋代清水遺跡でも、局部的で薄い洪水砂の堆積がみられるのみである。このことから、一重山から森将軍塚古墳にかけての山麓線の入り組んだ一帯は同様な状況にあり、１・２区は洪水直前の地表が３～５区のそれよりも、やはり１ｍ以上低いと考えられるが、千曲川からみて当該地区が、一重山の先端の張り出しや微高地である３～５区の裏手にあたるため、洪水の段階では難を逃れたようだ。



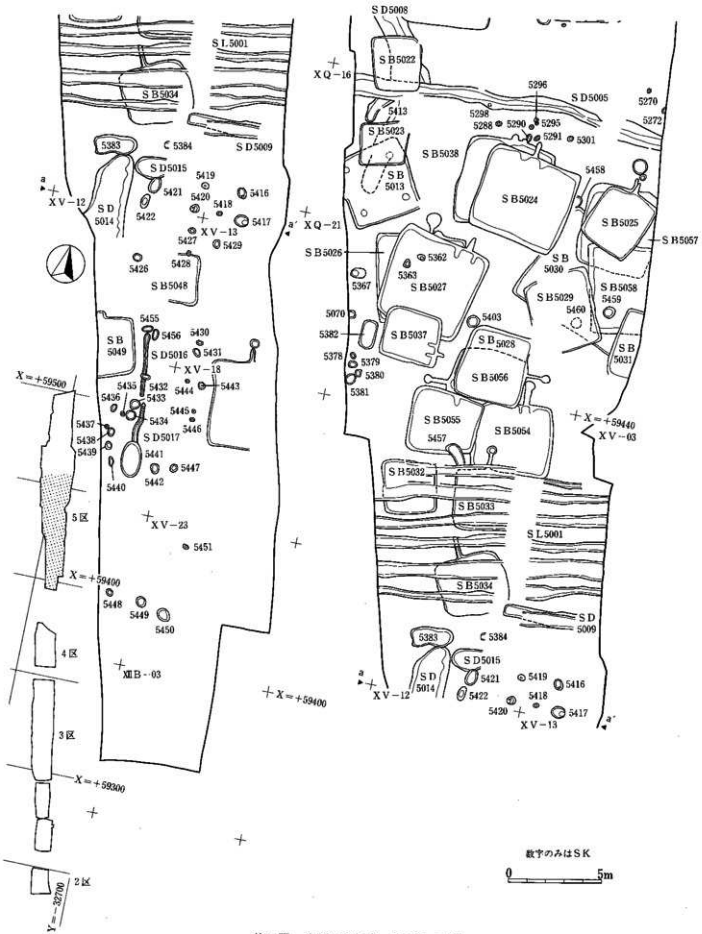
第６図　全遺構分布



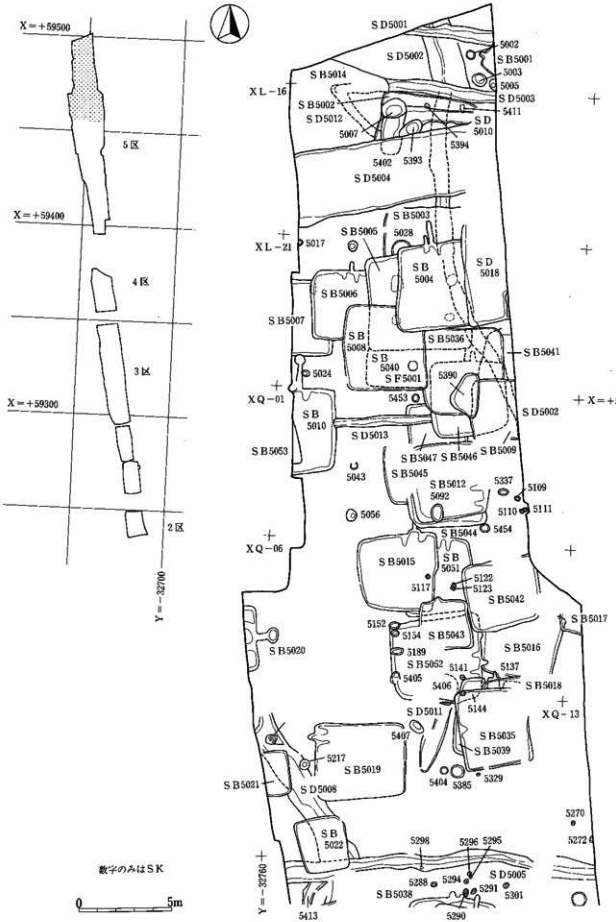
第７図　遺構分布(１)　２区北・３区南　古代



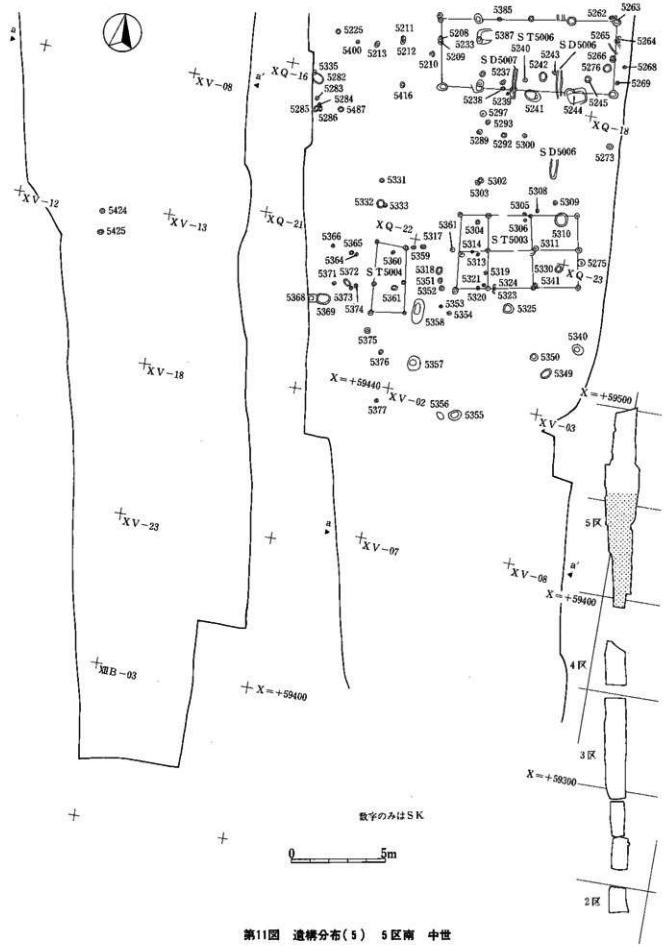
第8図　遺構分布(2)　3区北・4区　古代



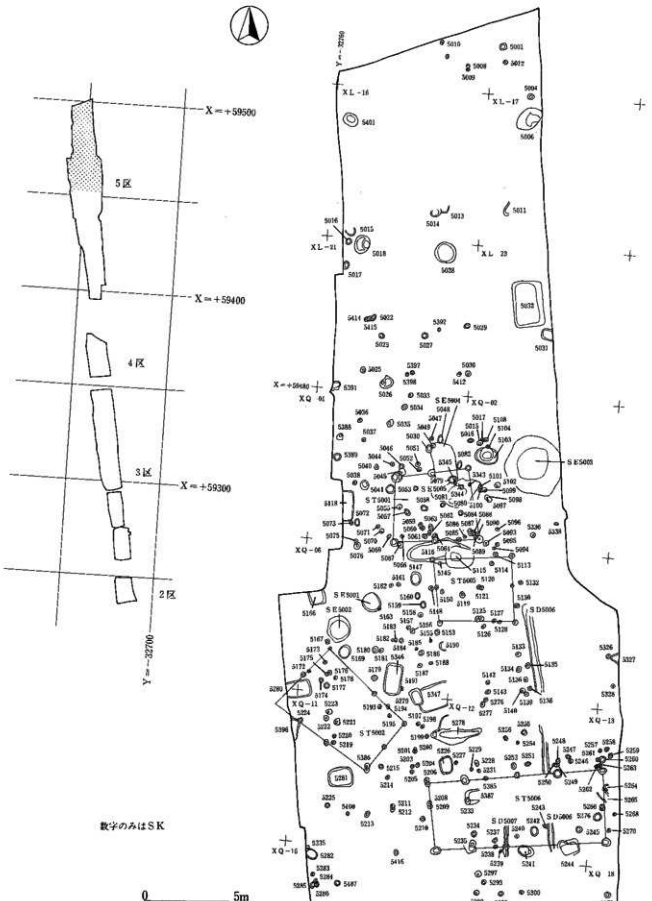
第9図　遺構分布(3)　5区南　古代



第10図　遺構分布(4)　5区北　古代



第11図　遺構分布（５）　５区南　中世



第12図　遺構分布(6)　5区北　中世

第２節　遺構と遺物

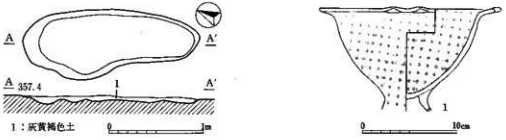
１　弥生時代以前

弥生時代以前の遺構と遺物は極めて希薄な散在状況である。居住域からは外れて生活の痕跡はほとんど認められず、人が移動した痕跡をわずかに窺うことができる程度である。

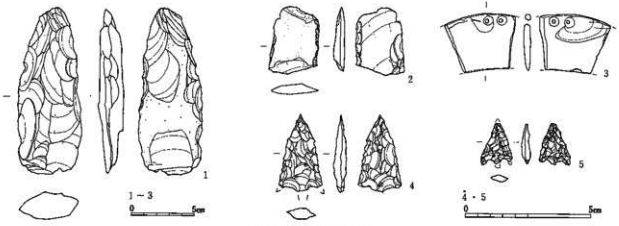
ＳＫ4001（第13図）

唯一検出された弥生時代後期の遺構であり、ⅫＢ－23グリッドに単独で位置し、他の遺構との重複関係はない。長軸で188cm、短軸で74cmの不整長円形で、検出面より５cm以内で底に到達する。底面は凹凸があり、人為的な掘り込みよりも自然の窪みのような様相にある。底面より高坏体部（１）が出土した。内外とも赤色塗彩され、口縁は大きく外反し、口縁には１単位２突起が４単位ある。

この他遺構外の遺物（第14図、ＰＬ16）として、ＸＶ－02グリッドから頁岩製の打製石斧（１）、ＸＶ－01グリッドから頁岩製の横刃型石器（２）、ＳＢ5019の床下から両端を欠損する粘板岩製の磨製石包丁（３）、ＳＢ5027の床下と３区ⅫＬ－20以南の検出面から脚部と茎部を欠損する黒曜石製の石鏃（４・５）が出土した。５は先端も欠損している。３は欠損してから再び磨いた様子はない。１は13.2×5.0×2.2cm、158ｇ、３は幅4.4cm、厚さ0.6cm、４は幅1.8cm、厚さ0.4cm、５は幅1.2cm、厚さ0.3cmである。



第13図　ＳＫ4001



第14図　その他の遺物

2　古代

弥生時代以降、古墳時代は新幹線用地内の更埴条里遺跡では空白の時代であり、奈良時代を迎えて居住選地され始めることとなる。8世紀中頃～9世紀には集落の拠点となり、連綿と居住され続けた結果、住居跡群の重複は極めて激しいものとなっている。10世紀以降も、絶対数は大幅に減じながらも居住域として中世までつながる。竪穴住居跡（竪穴状遺構含む）76軒、溝跡25条、畠跡4面、土坑203基を検出した。

(1)　竪穴住居跡と竪穴状遺構

ＳＢ3001（第15図、ＰＬ3）

位　　置：ⅩⅡＬ－03・04

重複関係：ＳＢ3002、ＳＬ3001を切る。

形　　状：西過半が調査区域外だが、一辺3.6m程度の方形であろう。

覆　　土：壁際に三角堆土をもち、自然埋没。

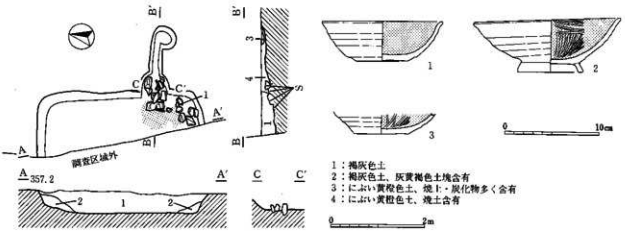
壁　　：傾斜して立ち上がる。Ⅵ層を掘り込み、壁高は検出面から48cmを測る。

床　　面：掘り形をもたずに貼られ、とりわけ中央部で堅固。

カ マ ド：南東コーナー寄りに偏った東側にある。袖石の一部は原位置を保つが、破壊されて南東コーナーに固まって投棄されている。

遺　　物：全般に少ない。カマドの破壊と共に、袖石と相俟って坏類の投棄がみられる。図化できたのは黒色土器Ａ坏Ａ（1・3）、同椀（2）がある。

所　　見：出土土器やカマドの位置・形態から9世紀中頃～後半の住居跡と考えられる。



第15図　ＳＢ3001

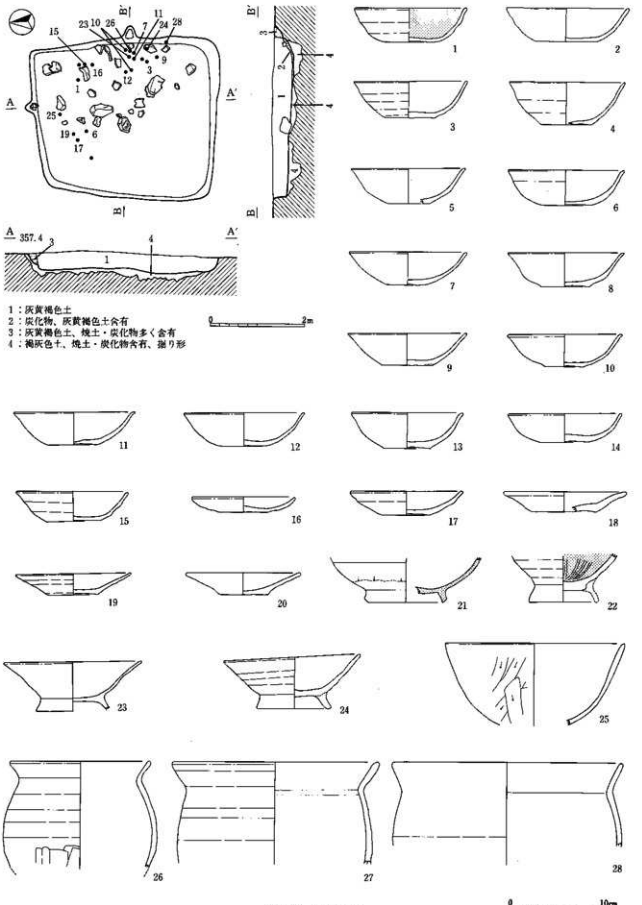
ＳＢ3002（第8図）

位　　置：ⅩⅡＬ－03・04

重複関係：ＳＢ3001、ＳＬ3001に切られる。

形　　状：一部調査区域外だが、一辺3.6m程度の方形と考えられる。

所　　見：形態から住居跡と思われるが検出時点で掘り形が残存するのみであり、壁・床面・カマド等は不明、遺物も皆無である。時期は9世紀以前としかわからない。


A
A'
357.4
1：灰黄褐色土
2：炭化物、灰黄褐色土含有
3：灰黄褐色土、焼土・炭化物多く含有
4：褐灰色土、焼土・炭化物含有、掘り形
0
2m
0
10cm

第16図　ＳＢ3003

ＳＢ3003（第16図、ＰＬ３・12）

位　　置：ⅩⅢＧ－18・19

重複関係：ＳＢ3004・3012、ＳＫ3034・3035を切る。

形　　状：3.7×4.0mの隅丸長方形だが、隅丸方形に近い。

覆　　土：Ⅳ層を基調とする単層。自然埋没と考えられる。

壁　　：ほぼ垂直である。Ⅵ層を掘り込み、壁高は検出面から38cmを測る。

床　　面：不明確で中央部分がわずかに固い。浅く凹凸のある掘り形をもつ。

カ マ ド：北側から東側へ作り替えが成される。北側のものは短い煙道のみ残存、東側のものは短い煙道と袖石がわずかに原位置に留まるが、構築材と考えられる被熱した角礫は床面上に散乱する。

遺　　物：覆土中から床面にかけてカマドを中心に多くが出土し、完形遺物が多い。器種は、黒色土器Ａ坏Ａ（１）、同椀（22）、土師器坏Ａ（２～15他）、同皿Ａ（16～20）、同椀（23・24）、灰釉陶器椀（21）、ロクロ成形外面ヘラ削りの土師器鉢（25）、同ロクロ調整の小型甕（26）、ロクロ成形ナデ調整の同甕（27）、ロクロ調整の同甕（28）がある。20・27は床下遺物。食膳具では黒色土器がわずかに残るが、椀を除いてはロクロ成形、底部糸切り未調整の規格的な土師器が圧倒的となっている。坏Ａは口径11.8～12.8cm、器高3.0～3.8cm、皿Ａは口径11.0～13.0cm、器高1.6～2.3cmの範囲にある。

所　　見：遺物はカマドの破壊直後の投棄と考えられる。出土土器から10世紀前半と思われる。

ＳＢ3004（第８図）

位　　置：ⅩⅢＧ－13・14・18・19

重複関係：ＳＢ3003・3005・3012、ＳＤ3005、ＳＫ3034・3035・3038～3041に切られる。

形　　状：やや不整の方形で、一辺７ｍ弱。

所　　見：掘り形がかろうじて残るのみで、遺物もほとんど無い。９世紀以前としか分からない。

ＳＢ3005（第17図、ＰＬ３・12）

位　　置：ⅩⅢＧ－13・18

重複関係：ＳＢ3004・3013を切る。

形　　状：一辺3.2mの方形と考えられる。西壁の僅かが調査区域外。

覆　　土：Ⅳ層を基調として４分層でき、自然埋没である。

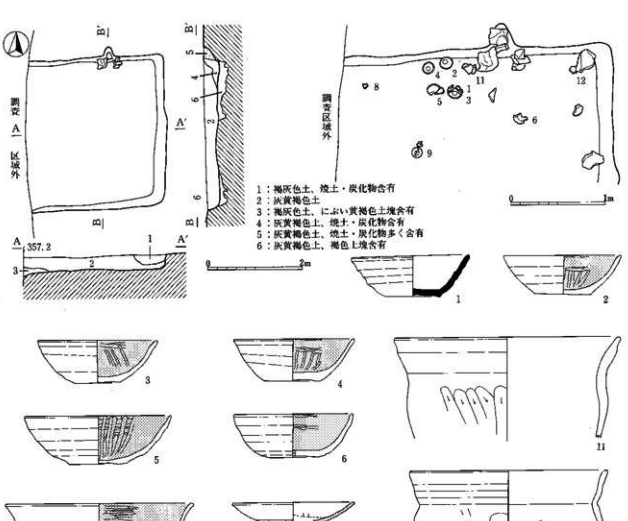
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、壁高は検出面より30cmで壁は垂直に近く立ち上がる。

床　　面：明確な貼り床ではないが、中央から北側にかけてやや固い。

カ マ ド：短い煙道が北壁中央よりやや東寄りにある。袖石と考えられるものが左右にあり、左のものが原位置を保つのみであとは破壊されている。火床も全く残っていない。

遺　　物：覆土中の遺物は少ない。カマド左脇付近に完形遺物が見られる。掲載土器は須恵器坏Ａ（１）、黒色土器Ａ坏Ａ（２～６）、同鉢Ａ（７）、灰釉陶器皿（８）、土師器坏Ａ（９・10）、ロクロ成形ヘラ削り調整の土師器甕（11・12）があり、すべて床面遺物である。黒色土器Ａ坏Ａは２法量（２～４・６と５）が認められる。これらは、内面縦方向のミガキの間隔が粗く、横方向のミガキも２～３周程度で雑である。一方ロクロ成形の土師器が出現している。

所　　見：食膳具はカマドの破壊と同時または直後に投棄されたと考えられる。これらより、９世紀後半の住居跡と考えられる。



第17図　ＳＢ3005

ＳＢ3006・3015（第18図）

位　　置：ⅢＧ－13

重複関係：ＳＢ3006はＳＢ3015に切られる。

形　　状：いずれも一辺４m弱の方形または隅丸方形の住居跡と考えられるが、大部分が調査区域外で不明。

覆　　土：いずれもⅣ層を基調とする単層で自然埋没であろう。

壁　　：いずれもⅥ層を掘り込み、検出面からの壁高はＳＢ3006が20cm、ＳＢ3015が50cmで、ＳＢ3006はやや傾いて、ＳＢ3015はほぼ垂直に立ち上がる。

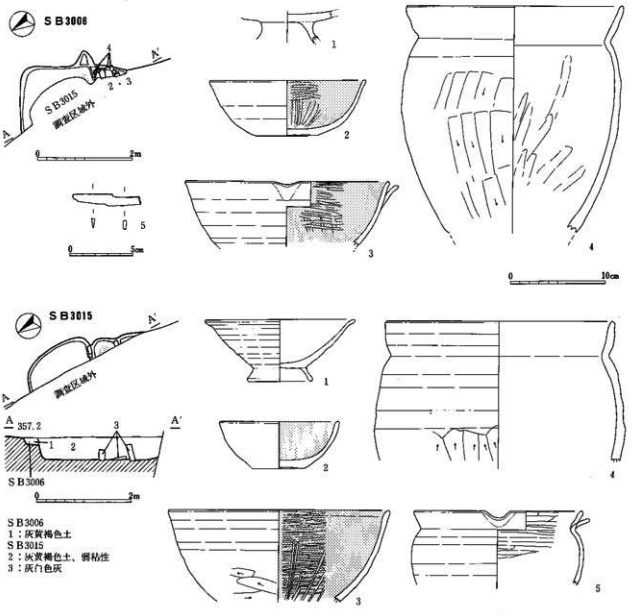
床　　面：ＳＢ3006は軟弱で掘り形をもたない。ＳＢ3015は調査区域内の面積が狭く、詳細ははっきりしない。

カ マ ド：いずれも東カマド。ＳＢ3006は土師器ロクロ成形甕（４）を芯材にした右袖の一部が残り、煙道は短い。ＳＢ3015は石組みカマドで、西半は調査区域外である。煙道は無い。

遺　　物：ＳＢ3006では、カマドの芯材に用いられたロクロ成形ヘラ削り調整の土師器甕（４）の他、カマド左脇床面に黒色土器Ａ坏Ａ（２）と片口付きの同鉢Ａ（３）が重なって出土した。覆土中から土師器盤Ａ（１）と刀子（５）が出土した。４はロクロ成形後、外面を縦方向にヘラ削り、内面をヨコナデ調整する。３は縦方向のミガキがやや粗雑である。

ＳＢ3015では、土師器椀（１）、黒色土器Ａ坏Ａ（２）、同鉢Ａ（３）、ロクロ調整の土師器甕（４）、片口付きの同小型甕（５）がすべてカマド内部から出土した。１は内面にミガキがあるようだが、器肌が荒れており観察できない。３の外面下半部は手持ちヘラ削りされ、内面はよく磨かれる。５はロクロ成形後、口縁内面をヨコミガキする。

所　　見：両者の器種構成がよく似ている。しかし、掘り込みの深さの相違、主軸の微妙なズレ、いずれも自然埋没である点、ＳＢ3015によるＳＢ3006のカマドの破壊等の状況から、拡張や縮小、建て替えではなく、９世紀代後半の短い時間幅に切り合ったものであろう。



第18図　ＳＢ3006・3015

ＳＢ3007（第19図）

位　　置：Ⅻ Ｇ－19・20・24・25　東半は更埴市が３号住居址として調査した。

重複関係：ＳＢ3014、ＳＫ3029を切る。

形　　状：3.8×4.0mの方形。

覆　　土：１はⅢ層、２・３はⅣ層を基調とし、レンズ状の堆土は自然埋没を示す。４の上下がそれぞれ床面であるが、４は人為的な埋没様相になく、含有物のない均質な土である。

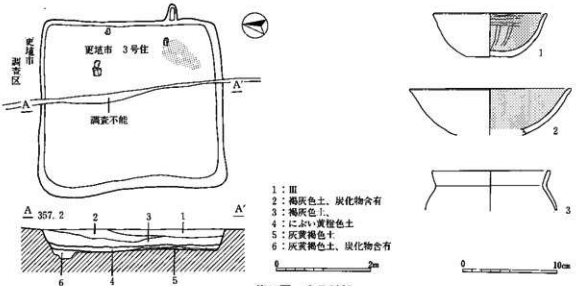
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、急な角度で立ち上がる。壁高は下位の床面まで45cmほどある。

床　　面：２枚あり、いずれも全面貼り床で堅固である。北壁際に深めの掘り形がある。

カ マ ド：東壁の南東コーナー寄りにある。更埴市が調査。

遺　　物：覆土中から床面まで全般に少ない。黒色土器Ａ坏Ａ（１・２他）が覆土中より出土した。ロクロ成形の土師器小型甕（３）は床面より出土した。

所　　見：床が２枚あるが、その間が含有物のない均質な土層であることから、調査担当者は自然災害による埋没と復興を想定している。９世紀半ばの住居跡と考えられる。



第19図　ＳＢ3007

ＳＢ3008（第20図、ＰＬ３・12・16）

位　　置：Ⅻ Ｇ－14・19・20　東壁際は更埴市が２号住居址として調査した。

重複関係：東カマド煙道が更埴市調査分の溝６に切られる。

形　　状：4.3×3.8mの隅丸長方形。

覆　　土：間層に炭化物の層があり、その下層はⅣ層を基調とする自然埋没で、その上層は人為的な埋没様相を示す。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、垂直に近い立ち上がりである。検出面からの壁高は43cmを測る。

床　　面：貼り床をもち中央部で特に固い。掘り形は壁際に多く中央部にはない。

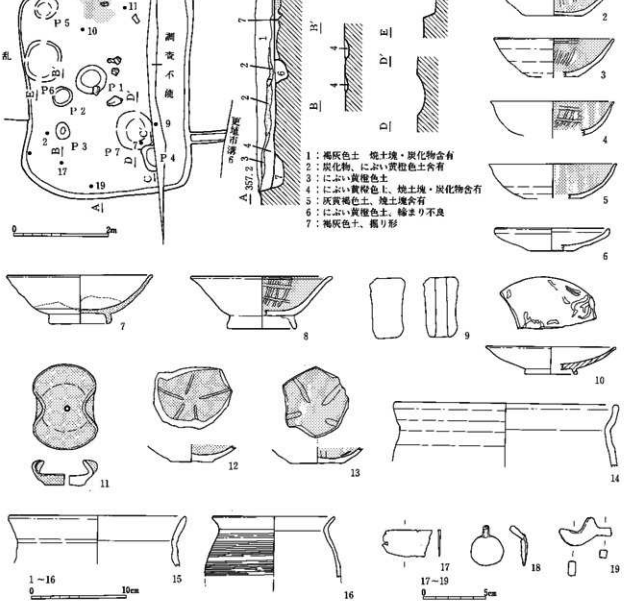
ピ ッ ト：床面に浅いＰ１～Ｐ４があり、床下にＰ５～Ｐ７が検出された。Ｐ１は焼土塊が充填されていた。Ｐ５～Ｐ７の本跡への帰属性は定かではない。

カ マ ド：東壁南東コーナー寄りから、北壁北西コーナー寄りに作り替えられている。東カマドは煙道のみ残存。北カマドは長い煙道と火床が残存する。袖は完全に破壊されていたが、被熱した角礫が床面上に散乱しているので石組みカマドであった可能性が高い。

遺　　物：土器・土製品は須恵器坏Ａ（１）、黒色土器Ａ坏Ａ（２～５、12・13他）、土師器皿Ａ（６）、灰

釉陶器椀（7他）、黒色土器A椀（8）、土師質土鍾（9）、穿孔して灯明皿に転用した黒色土器B耳皿（11）、緑釉緑彩陶器皿（10）、ロクロ調整の土師器甕（14・15）、ロクロ成形カキ目調整の同小型甕（16）を、鉄製品は鎌（17）、鏃形（18）、用途不明（19）を図化した。7・11が床面、1・8がP1、18が床下、他は覆土第1層より出土した。食膳具の主体は黒色土器であり、内面のミガキは極めて粗雑である。10は須恵質でトチン痕がみられる。18は3.3×2.6×0.4cm、2.4g。

所　見：P1～P4のような、焼土塊を含有する床面上の浅いピットは該期の住居跡に散見され、居住期の何らかの営みを表す。埋没過程では窪地が何らかの形で利用され（例えばゴミ穴）、炭化物が入ったり、モノが投げ込まれたりする。覆土第1層の遺物は埋没過程で投棄されたものであろう。9世紀後半の住居跡と思われる。



第20図　SB3008

ＳＢ3009（第21図、ＰＬ12）

位　　置：ⅩⅡＧ－09・14　東過半は更埴市が１号住居址として調査した。

重複関係：ＳＢ3017（更埴市７号住居址）と更埴市４号住居址を切る。

形　　状：4.5×4.3mの隅丸方形。

覆　　土：焼土・炭化物を多めに含有するが、Ⅳ層を基調とする自然埋没と考えられる単層である。

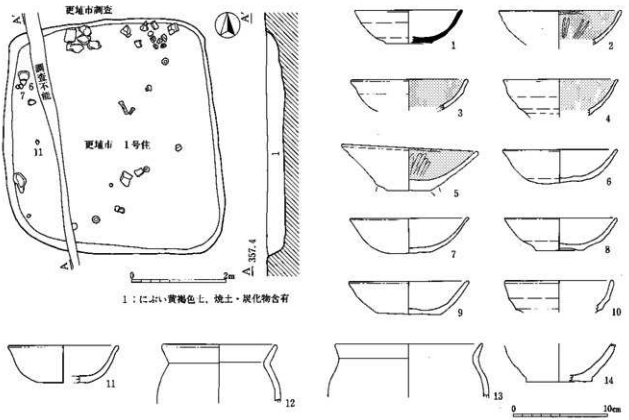
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、床面との境が不明瞭でゆるやかに傾いて立ち上がる。検出面からの壁高は50cmを測る。

床　　面：更埴市域では明確な貼り床が認められたが、西壁際では固い部分はなかった。

カ マ ド：更埴市域北壁中央付近に、炭化物の拡がり、カマド袖石とみられる角礫の散乱、食膳具の投棄が見られ、北カマドであったと考えられる。

遺　　物：覆土中から床面まで完形かそれに近い遺物が多く、西壁際だけで須恵器坏Ａ（１）、黒色土器Ａ坏Ａ（２～４）、同椀（５他）、土師器坏Ａ（６～11）、ロクロ調整の同小型甕（12～14）が出土しており、更埴市域のものを合わせると相当な量になろう。黒色土器のミガキは粗雑であるか、全く施されず、これらに交替する土師器は口縁11.6～12.8cm、器高3.4～3.9cmである。

所　　見：廃絶時から埋没過程に至るまで大量の土器が投棄されたと考えられる。土師器坏Ａを指標として10世紀前半の住居跡と思われる。



第21図　ＳＢ3009

ＳＢ3010（第22図、ＰＬ３・12・16）

位　　置：ⅩⅡＧ－08・09・13・14

重複関係：ＳＤ3009を切り、ＳＫ3050に切られる。

形　　状：3.2×4.4mの隅丸長方形。

覆　　土：単層。Ⅳ層を基調とする自然埋没である。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、ほぼ垂直である。壁高は検出面より24cmである。

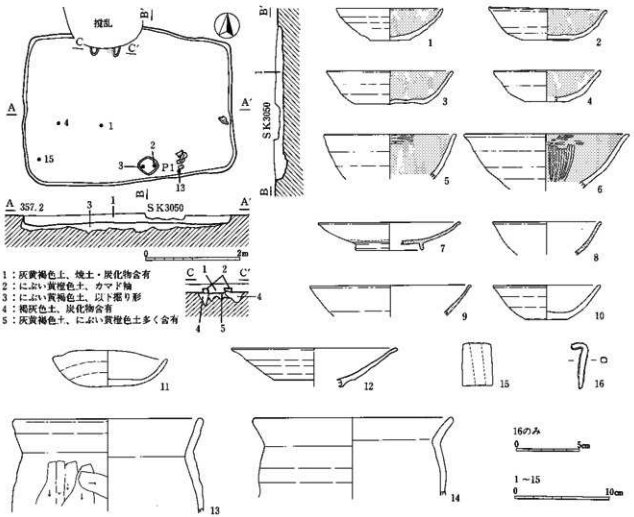
床　　面：不明瞭だが中央付近にやや堅緻な部分があり、床とした。掘り形は浅く、凹凸がある。

ピ　ッ　ト：南壁際にごく浅いＰ１が穿たれていた。

カ　マ　ド：大方を撹乱されていたが、Ⅵ層土に似た土を用いた袖の端部とわずかな火床が残る。

遺　　物：黒色土器Ａ坏Ａ（１～５）、同椀（６）、灰釉陶器Ⅲ（７）、同椀（８・９）、土師器坏Ａ（10・11）、同椀（12）、ロクロ調整同甕（13・14）、土錘（15）、鉄釘（16）を掲載した。２・３はＰ１内の出土、他は覆土中より出土した。１～４は内面ミガキなしで黒色処理される。７・９はハケ塗り施釉である。16は3.6×1.8×0.4cm、2.1g。

所　　見：検出時、東壁が不明瞭であり、もう少し内側に入ると北東コーナーは北壁のくぼんだ辺り、南東コーナーは礫集中の辺りに求められ、方形に近いプランであった可能性もある。土器は９世紀代で幅があり、床面遺物がほとんど無く、埋没過程の投棄と考えられる。出土した土器より９世紀後半頃の所産と思われる。



第22図　ＳＢ3010

ＳＢ3011（第８図）

位　　置：Ⅻ Ｇ－08・13

重複関係：ＳＤ3010・3011を切る。

形　　状：西側の大部分が調査区域外のため不明。北壁から南壁まで4.7mを測る。

覆　　土：Ⅳ層を基調とする褐灰色土の自然埋没で単層。

壁・床：Ⅵ層を掘り込み、壁は傾くが直線的な立ち上がりではない。壁高は検出面より35cmを測る。床は掘り形をもたず、堅固な部分が無い。南壁際は壇状に一段高まった部分がある。

遺　　物：僅少である。

所　　見：住居跡と思われるが大部分が調査区域外のため不明である。

ＳＢ3012（第23図、ＰＬ４・12・13）

位　　置：Ⅲ Ｇ－19

重複関係：ＳＢ3004を切り、ＳＢ3003・3008に切られる。

形　　状：最大幅は南北で3.0m、東西で4.2mを測り、台形状の不整形を成す。

覆　　土：埋没過程で炭化物の間層（３層）を挟むが、その上下ともⅣ層を基調とする自然埋没でレンズ状の堆積を成している。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、傾斜して立ち上がる。壁高は検出面より54cmを測る。

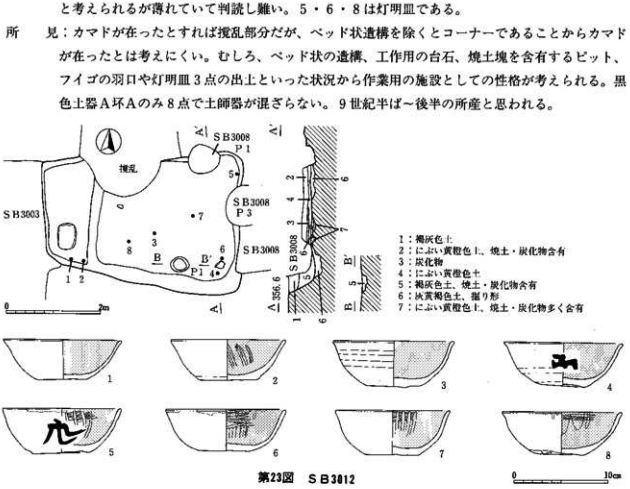
床　　面：貼られ、壁際を除いて堅固である。掘り形は浅く凹凸がある。

ピ　ッ　ト：南壁際に焼土塊を含有するＰ１がある。

施　　設：西側がベッド状に一段高まっている。その南端に平石が埋め込まれている。石の上面は平坦だが中央部分でやや窪み、作業用の台石とみられる。

遺　　物：黒色土器Ａ坏Ａ８点はすべて完形で、５はやや浮いた位置から出土したが、他は床面遺物である。口径12.2～13.0cm、器高4.3～4.8cmと規格性が高い。４・５の墨書は同一記号を表していると考えられるが薄れていて判読し難い。５・６・８は灯明皿である。

所　　見：カマドが在ったとすれば攪乱部分だが、ベッド状遺構を除くとコーナーであることからカマドが在ったとは考えにくい。むしろ、ベッド状の遺構、工作用の台石、焼土塊を含有するピット、フイゴの羽口や灯明皿３点の出土といった状況から作業用の施設としての性格が考えられる。黒色土器Ａ坏Ａのみ８点で土師器が混ざらない。９世紀半ば～後半の所産と思われる。



第23図　ＳＢ3012

ＳＢ3013（第８図）

位　　置：XIIＧ－18

重複関係：ＳＢ3005、ＳＫ3038に切られる。

形　　状：東壁の一部を検出したに過ぎず、大部分が調査区域外のため不明。

覆　　土：IV層を基調とする灰黄褐色土の自然埋没で単層。

壁　　：VI層を検出面から20cm前後掘り込み、ほとんど垂直。

床　　面：固い部分、掘り形はない。

遺　　物：ほとんど出土しなかった。

所　　見：調査範囲が狭く、住居跡なのか判断できない。

ＳＢ3014（第８図）

位　　置：XIIＧ－20・25　東過半は更埴市が３－１号住居址として調査した。

重複関係：ＳＫ3024を切り、ＳＢ3007（更埴市３号住居址）に切られる。

形　　状：一辺3.5m強の隅丸方形。

覆　　土：IV層を基調とする自然埋没で、分層されたがほとんど差異はない。

壁　　：VI層を検出面から48cm程掘り込み、傾斜して立ち上がる。

床　　面：当センター調査区内では明確だが貼ってはいなかった。深めの掘り形をもつ。

カ マ ド：更埴市調査区内にあり、東カマド。

遺　　物：調査ミスでＳＢ3007と混同して掘ってしまい、当センター調査区内のものは不明である。

所　　見：当センター調査区内ではわずかな部分なので判然としない。

ＳＢ3016（第24図）

位　　置：XIIＬ－24・25　本遺跡最南端の住居跡である。

重複関係：ＳＫ3059に切られる。

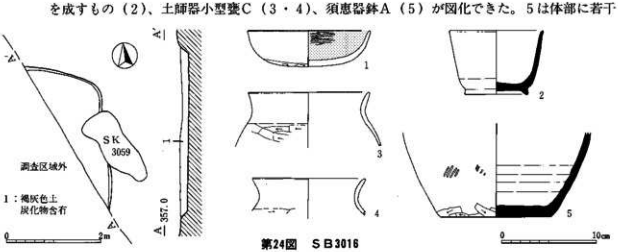
形　　状：東コーナー部分のみの調査となり、大部分が調査区域外のため全体の形状は不明である。

覆　　土：VI層を基調とし、自然埋没。単層である。

壁　　：傾斜して立ち上がる。VI層を検出面より22cm掘り込む。

床　　：明確な貼り床。掘り形はない。

遺　　物：覆土中から床面まで遺物は多く、土師器坏Ｄ（１）、須恵器坏ＢVIの体部を更に深くして鉢状を成すもの（２）、土師器小型甕Ｃ（３・４）、須恵器鉢Ａ（５）が図化できた。５は体部に若干



第24図　ＳＢ3016

タタキが施されるが、甕Eほど大きくはない。

所　見：新幹線用地幅だけでは判らないが、3・4区を9～10世紀の居住域、5区を8～10世紀とりわけ8世紀主体の居住域とすると、本跡は3区の中でも最南端に単独で存在しているだけでなく、8世紀の住居跡が3－4区に他に見られない中で、ポツ然と存在している8世紀の住居跡である。調査面積が狭かったにもかかわらず出土遺物が多く、これらから8世紀半ば～後半に相当する。

ＳＢ3017（第8図）

位　置：Ⅲ Ｇ－09・14　東過半を更埴市が7号住居址として調査した。

重複関係：ＳＢ3009（更埴市1号住居址）および更埴市4号住居址に切られる。

形　状：4.5×4.2mの、やや歪んだ隅丸方形。

覆　土：自然埋没、単層でⅣ層主体。

壁　：Ⅵ層を掘り込み、傾くが比較的急な立ち上がりである。壁高は検出面より47cmを測る。

床　面：明確な貼り床である。掘り形は認められなかった。

カ マ ド：袖・煙道は残っていないが、更埴市域で火床が残っており、北カマドである。

遺　物：当センター調査区内ではほとんど出土していない。

所　見：ＳＢ3009と西壁が一致し、南壁ともほとんど差異がない。拡張・建て替えか、単なる偶然の重複か、更埴市調査分と合わせて検討を要する。

ＳＢ4001（第25図）

位　置：Ⅲ Ｇ－03

重複関係：なし。大幅に攪乱を受ける。

形　状：一辺3.3mの方形と考えられるが、攪乱部分が多く不明。

覆　土：Ⅳ層そのものが単層で自然埋没する。

壁　：Ⅵ層を掘り込み、ほとんど垂直である。検出面からの壁高は最深部で50cmである。

床　面：貼ってはいないが固く、掘り形はなかった。

カ マ ド：攪乱部分が多く不明。

第25図　ＳＢ4001

遺　　物：床面東壁際よりロクロ成形、内面ハケ目調整、外面体部下半をヘラ削り調整した土師器甕（２）と、覆土中より土師器甕Ｃ（１）が出土した。掲載していないが、北東コーナー床面より黒色土器Ａ椀底部と、覆土中より２と同タイプの甕上半部片も出土した。

所　　見：撹乱部分が多く判然としないが、９世紀代の住居跡と思われる。

ＳＢ4003（第26図、ＰＬ４・13）

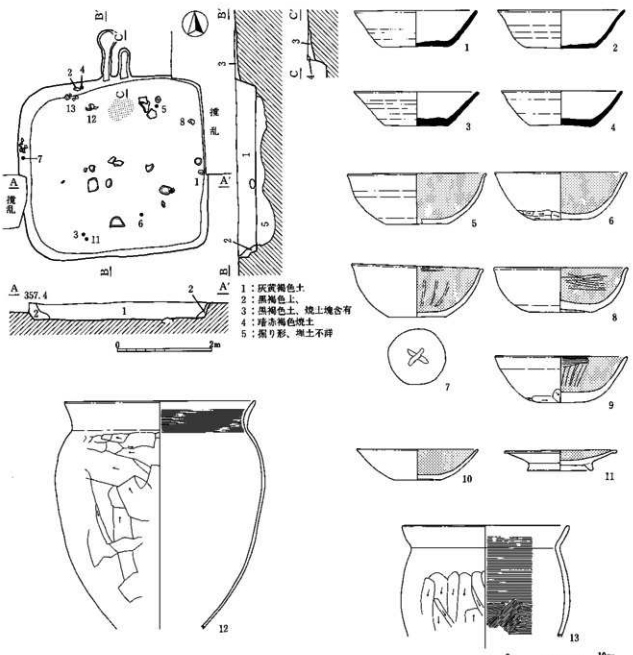
位　　置：ⅩⅢＢ－23、ⅩⅢＧ－03

重複関係：なし。

形　　状：3.8×4.0mの方形。

覆　　土：自然埋没で、壁際に黒褐色土の三角堆土をもち、他はⅣ層が堆積する。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、急な傾斜で立ち上がる。検出面から42cmの深さである。



第26図　ＳＢ4003

床　　面：明確に貼ってはいないが中央部分で堅固である。掘り形は壁際で深い。

カ マ ド：袖は全く残っていない。北壁中央に、煙道は長いものと短いものが並び、短いものの直下に火床が残っていることから、短い煙道の方が新しい。

遺　　物：須恵器坏A（1～4）、黒色土器A坏A（5～10他）、同皿B（11）、ロクロ成形で内外面をナデ・カキ目とヘラ削りで調整した土師器甕（12・13他）等の土器がある。3・4・7・11は床面、9は床下、他は覆土中の出土である。回転糸切り底の1～4の内面底径は6.0～6.8cmである。6～10の内面は荒れていてミガキが不明瞭である。5・7は底部回転糸切り未調整、6～8は回転糸切り後ヘラ削りされる。10は底部の調整は不明で、これのみ他の黒色土器より器高だけが1cm以上低い。掲載していないが、須恵器坏Bの底部ヘラ削り中央部分に7と全く同じヘラ記号がみられた。

所　　見：遺物は廃絶直後から埋没過程での投棄と考えられる。9世紀中頃の典型的な住居跡である。

ＳＢ5001（第10図）

位　　置：ＸＬ－12

重複関係：ＳＤ5001を切る。

形　　状：西コーナーを検出したに過ぎず、全体の形状は不明である。コーナー付近に突出部があり、当初煙道と考えたが焼けておらず、カマドも認められなかった。

覆　　土：自然埋没と考えられる単層でⅣ層に酷似する。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、傾斜する。検出面より壁高10cm前後である。

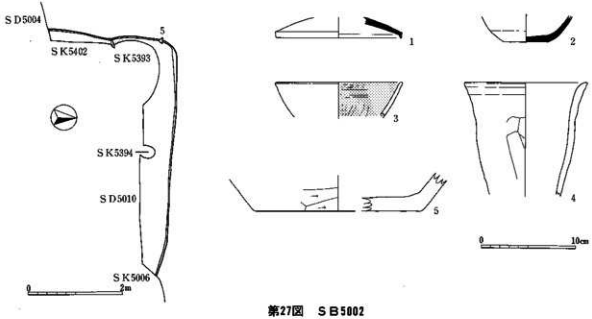
床　　面：軟弱で掘り形をもたない。

所　　見：遺物は皆無で時期・機能とも不明。

ＳＢ5002（第27図）

位　　置：ＸＬ－16・17

重複関係：ＳＢ5014、ＳＤ5002・5003・5012、ＳＫ5411を切り、ＳＤ5004・5010、ＳＫ5006・5007・5393 5394・5402に切られる。



第27図　ＳＢ5002

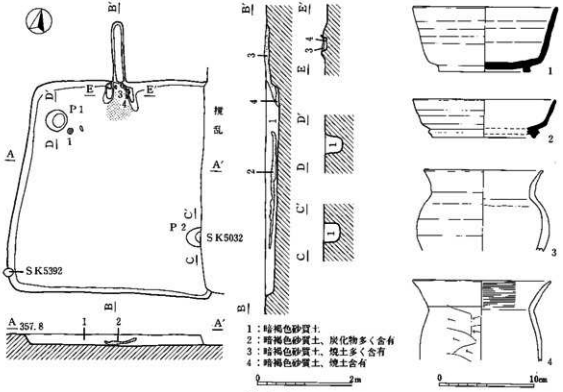
形　状：西壁と北壁際のごく一部を調査したに過ぎず、大部分は切られて不明である。一辺5m以上あったことは間違いない。
覆　土：検出面に床が露出しており、覆土の記録がとれなかった。
床　面：黄褐色土が貼られ、極めて堅緻。床下5cm程度の浅い掘り形がある。
カ マ ド：西壁北西コーナー寄りにカマド左袖石とみられる石と火床の一部がみられるが、大部分はＳＫ5393に破壊されている。
遺　物：須恵器は坏蓋Ｂ（1）と坏Ａ（2）、黒色土器Ａ坏Ａ（3）、底部内外面をナデ、外面を手持ちヘラ削りした土師器甕底部（5）、内外面をナデ、外面を削り調整された同小型甕（4）がすべて床面から出土した。
所　見：9世紀前半～中頃の住居跡と思われる。

ＳＢ5003（第10図、ＰＬ4）

位　置：ＸＬ－16・17・21・22
重複関係：ＳＤ5002を切り、ＳＢ5004・5005、ＳＤ5018、ＳＫ5011・5013・5014・5028に切られる。
形　状：北壁と西壁の一部しか残らず全容は不明。
覆　土：炭化物を含有する黒褐色土が床面に貼りついていた。
壁・床面：壁の残存部はほぼ垂直だが、検出面より5cm程度で床面となり、壁の状態は分からない。掘り形は最深部でも床から10cm程度で、床は比較的固いが掘り形を埋め戻しただけである。
遺　物：土器片僅少。
所　見：8～9世紀の住居跡であるが、それ以上のことは不明である。

ＳＢ5004（第28図、ＰＬ4）

位　置：ＸＬ－16・17・21・22
重複関係：ＳＢ5003・5005・5008・5036、ＳＤ5002、ＳＫ5028を切り、ＳＤ5018、ＳＫ5029・5032・5392に切られる。
形　状：4.6×4.3mの方形。
覆　土：暗褐色砂質土の間層に炭化物を多く含有する。自然埋没と考えられ、炭化物は埋没過程の所産と思われる。
壁　：Ⅵ層を掘り込み、傾斜して立ち上がる。壁高は検出面から22cmを測る。
床　面：貼り床という程ではないが固く明確であった。図化していないが浅く平坦な掘り形があった。
ピ ッ ト：2基見つかったが柱穴ではないと思われる。
カ マ ド：北壁中央付近に一基ある。袖の大方は取り払われているがⅥ層と同質の土で構築されている。煙道は長い。
遺　物：須恵器坏Ｂ（1・2）と土師器小型甕（3・4）がある。1は坏ＢⅢの身の深い法量で、8世紀後半～9世紀前半にみられる。2は坏ＢⅡで高台が外へ開き、その断面は平行四辺形状で8世紀前半的。小型甕はいずれもロクロ成形である。4はロクロ成形後、内面ヨコナデとカキ目、外面ヘラ削り調整され、火床・袖上に割れて散乱していた。カマドの破壊直後の投棄と考えられる。1～3は覆土より出土した。
所　見：重複関係も考慮して9世紀半ば以降の住居跡と考えられる。2は混入であろう。



第28図　ＳＢ5004

ＳＢ5005（第29図、ＰＬ４・13）

位　　置：ＸＬ－21・22

重複関係：ＳＢ5003・5006・5040、ＳＤ5002、ＳＫ5028を切り、ＳＢ5004・5008・5036、ＳＤ5018に切られる。

形　　状：5.3×5.6mの方形。

覆　　土：黒褐色土の単層で人為的な埋め戻しの疑い有り。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、急な傾斜で立ち上がる。壁高は検出面より35cmである。

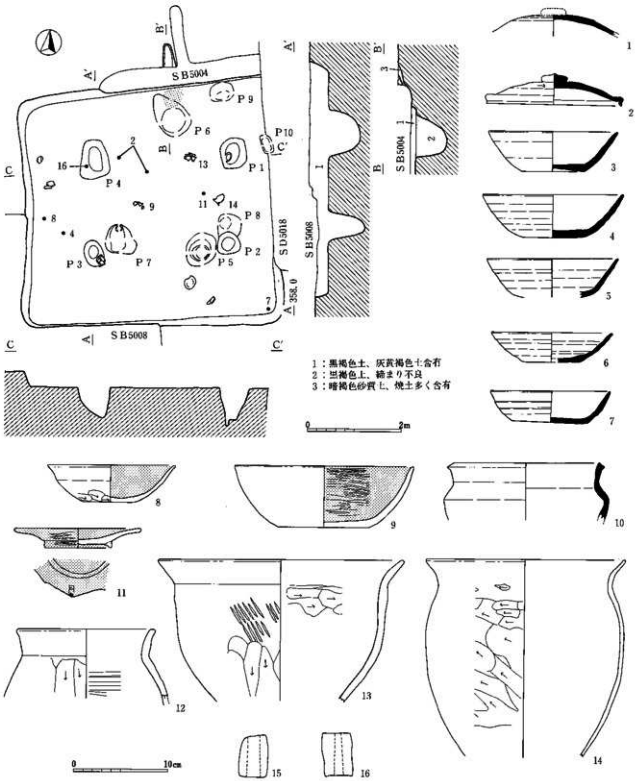
床　　面：貼り床・掘り形とも図化できなかったが、全面貼り床で固く、掘り形は30～40cmもあり深い。

ピ　ッ　ト：Ｐ１～Ｐ４は柱穴。Ｐ５～Ｐ10は床下検出ピットで、本跡への帰属性は定かではない。

カ　マ　ド：北カマドであるがＳＢ5004に切られ、煙道先端と火床のみ残存する。

遺　　物：須恵器坏蓋Ｂ（１・２）、同坏Ａ（３～７）、黒色土器Ａ坏Ａ（８・９他）、黒色土器Ｂ皿Ｂ（11）、須恵器鉢Ａ（10）、土師器甕Ｃ（14他）、同小型甕（12他）、北陸で鍋と称されるもの（13）、土錘（15・16）があるが、９世紀代の遺物に８世紀半ばのものが混じっている。４・６・７は底部ヘラ切り、９は底部手持ちヘラ削り、３・５・８は底部回転糸切りで、５はやや軟質である。黒色土器Ａ坏ＡはⅠ・Ⅱの２法量が認められ、Ⅱは８の他に破片がもう１点ある。８のミガキは不明瞭だが、もう１点のⅡと９は横方向にのみ磨かれている。黒色土器Ｂ皿Ｂの11は内外面とも横方向によく磨かれているが、見込み部だけ格子目状に磨かれており、外面に「月□」と刻書されるが、２文字めの途中で欠損して判読できない。床～床下出土の４・６・７はこの住居ができる以前のものと考え、これらを除いた場合、食膳具では須恵器と黒色土器の量が拮抗している。２・４は床面、３・５～８・14は床下から出土した。

所　　見：Ｐ１・Ｐ７に底部痕跡のみの柱痕が認められるが、竪穴の規模に比して細いのが気になる。遺物と重複関係から９世紀前半～中頃の住居跡と思われる。



第29図　ＳＢ5005

ＳＢ5006（第30図、ＰＬ４）

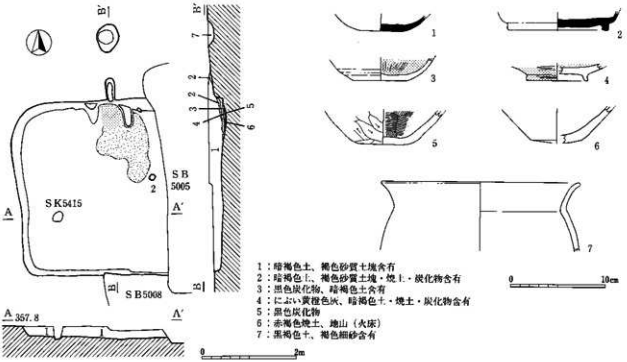
位　　置：ＸＬ－21

重複関係：ＳＢ5007を切り、ＳＢ5005・5008、ＳＫ5022・5023・5414・5415に切られる。

形　　状：一辺3.8mの隅丸方形。

覆　　土：暗褐色土の単層で人為的埋め戻しの疑いがある。

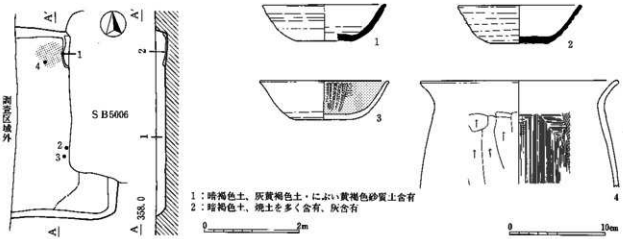
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、床面との境が明瞭で傾斜して立ち上がる。検出面からの壁高は約30cmを測る。
床　　面：堅緻な貼り床。掘り形調査は実施しなかった。
カ マ ド：北壁中央に在り、Ⅵ層土を袖に利用し、長い煙道の先端が膨らむ。袖は上過半が取り払われ、支脚は抜去されている。
遺　　物：廃絶に伴い床面上に投棄されている。破片が多く図化できるものは少ない。須恵器坏A底部（1）は見込み部にも糸切り痕をもつ。須恵器坏B底部（2）は転用硯で床面出土である。掲載していないが須恵器坏B底部3点、黒色土器A坏A（3）、黒色土器B皿B（4）、内面ハケ目、外面ヘラ削り調整の土師器甕底部（5）、ナデ調整の同甕底部（6）等食膳具・煮炊具ともに底部ばかりが出土した。2は床下、3は床面、ロクロ成形の土師器甕（7）はカマド内出土である。
所　　見：9世紀前半～中頃の住居跡と思われる。



第30図　ＳＢ5006

ＳＢ5007（第31図）

位　　置：ＸＬ－21
重複関係：ＳＢ5006に切られる。
形　　状：一辺4.0mの住居跡と考えられる。
覆　　土：基調土と異質の土相が含まれ、人為的埋没と考えられる。
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、傾斜して立ち上がり、検出面より壁高24cmを測る。
床　　面：堅緻な貼り床である。床下調査は実施できなかった。
カ マ ド：北カマドで、右袖とよく焼けた火床が残存する。煙道はない。
遺　　物：底部回転糸切りの須恵器坏A（1・2）はいずれもやや軟質で、内面底径はいずれも6cm前後である。1と土師器甕（4）はカマド火床直上、2と黒色土器A坏A（3）は近接して床面上にあった。3のミガキは精緻である。4は外面を大きくヘラ削り、内面は横方向のち縦方向のハケ目で調整される。
所　　見：遺物は廃絶時の投棄と考えられ、9世紀前半の住居跡と思われる。



第31図　ＳＢ5007

ＳＢ5008（第32図、ＰＬ４）

位　　置：ＸＬ－21

重複関係：ＳＢ5005・5006・5040を切り、ＳＢ5004、ＳＫ5026・5030に切られる。

形　　状：4.5×4.8mの方形。

覆　　土：単層。自然埋没であろう。

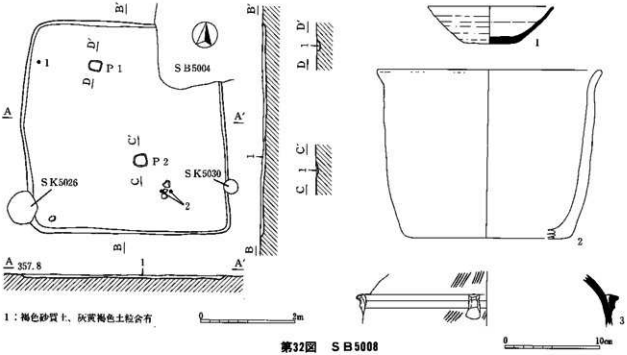
壁　　：ゆるやかである。検出面から７cmと浅い。

床　　面：軟弱で不明確である。

ピ　ッ　ト：２基みつかったが、本跡への帰属性は疑わしい。

遺　　物：全般に少なく、多くは混入片である。覆土中より出土した須恵器坏Ａ（１）、ナデ調整された鉢状の土師器（２）、須恵器甕Ｄ（３）を図示した。１・２は床面出土である。

所　　見：９世紀代の遺構と思われる。カマドも無く、住居跡とする根拠はない。



第32図　ＳＢ5008

ＳＢ5009（第33図、ＰＬ４）

位　　置：ＸＬ－22、ＸＱ－02

重複関係：ＳＢ5036・5041・5046、ＳＤ5002を切り、ＳＫ5390に切られる。

形　　状：一辺3.2mの方形と考えられるが、東側が調査区域外のため全容は不明。

覆　　土：３分層されるが、基調土は同一で自然埋没である。

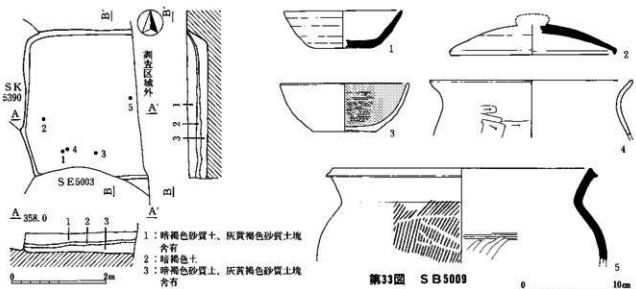
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、壁は傾斜する。検出面からの最深部で44cmを測る。

床　　面：地山を平坦に仕上げ、比較的堅い。

カ マ ド：東側の調査区域外に位置すると考えられる。

遺　　物：掲載した５点はいずれも３層～床面出土だがみな破片である。底部回転ヘラ削りの須恵器坏Ａ（１）、同坏蓋Ｂ（２）、底部に窯印「×」を有す黒色土器Ａ坏Ａ（３）、土師器甕Ｃ（４）、須恵器甕Ｅ（５）がある。１は底部回転ヘラ削り、２は底部回転糸切りである。

所　　見：遺物と重複関係から８世紀後半頃の住居跡と思われる。８世紀前半と思われる２、９世紀前半と思われる３は混入か。



第33図　ＳＢ5009

ＳＢ5010（第34図、ＰＬ４・13）

位　　置：ＸＬ－21、ＸＱ－01

重複関係：ＳＤ5013を切り、ＳＢ5053、ＳＫ5391に切られる。

形　　状：西側が調査区域外だが、一辺4.5mの方形と考えられる。

覆　　土：単層で基調土に灰黄褐色または褐色土塊を含有し、人為的な埋没か。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、傾斜する。検出面からの最深部で38cmを測る。

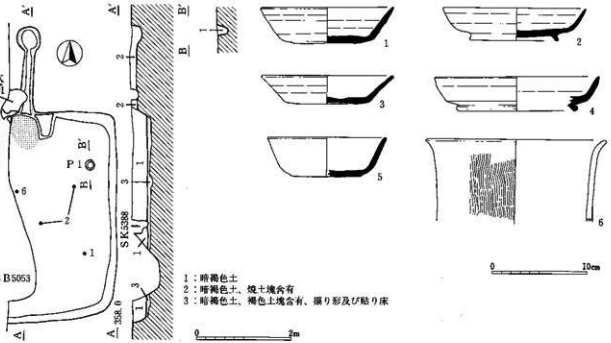
床　　面：極めて堅緻な貼り床で全面貼りである。掘り形の底部から貼られている。

ピ ッ ト：東壁際に浅く小さなピットが１基ある。

カ マ ド：北壁中央にあり、袖はⅥ層の地山を削り出して作られている。よく発達した火床をもち、長い煙道内もよく焼けている。

遺　　物：須恵器坏Ａ（１・３・５）、同坏Ｂ（２・４）、土師器甕Ｂ（６）はいずれも投棄されたものと考えられ、１・６は床面、他は床面に近い覆土中から出土した。坏Ａの底部は、１が回転ヘラ削り、３・５がヨコナデでいずれも底径が大きい。坏Ｂは口径が大きく、身が浅く、外側へ開く高台の断面は平行四辺形状を成す。

所　　見：８世紀前半頃の住居跡と思われる。



第34図　ＳＢ5010

ＳＢ5012・5044（第35図、ＰＬ５）

位　　置：ＸＱ－01・02

重複関係：ＳＢ5012はＳＢ5044・5047を切り、ＳＥ5003～5005、ＳＴ5001、ＳＫ5080・5082・5084・5092・5097～5104・5343・5344に切られる。ＳＢ5044はＳＢ5015・5045を切り、ＳＢ5012、ＳＥ5005、ＳＫ5080・5087・5088・5092・5096に切られる。

形　　状：ＳＢ5012は一辺4.0mの方形。ＳＢ5044は切られ残りから推定して一辺4.2mの方形であろう。

覆　　土：ＳＢ5012はⅣ層を基調として主に２分層され、上層が砂質、下層がシルト質の自然埋没である。ＳＢ5044は黒褐色土が単層で自然埋没する。

壁　　：いずれもⅥ層を掘り込み、急な傾斜で直線的に立ち上がる。ＳＢ5044は検出面からの深さ36cmを測り、ＳＢ5012はそれより15cm程深い。

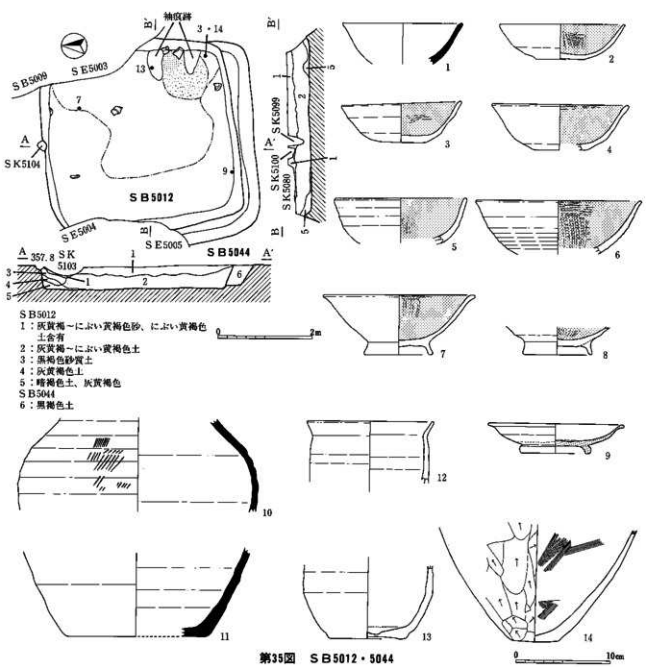
床　　面：ＳＢ5012は東壁から中央部にかけて貼り床をもつ。ＳＢ5044は切られている部分が多く、判らない。

カ マ ド：ＳＢ5012は東壁南東コーナー寄りに１基あり、袖の痕跡と火床のみが残存している。袖の痕跡から判断して地山削り出しカマドと考えられる。ＳＢ5044は切られて不明。

遺　　物：ＳＢ5012は須恵器坏Ａ（１）、黒色土器Ａ坏Ａ（２～６他）、同椀（７・８）、灰釉陶器皿（９他）、須恵器短頸壺Ｃ（10）、同鉢Ａ（11）、土師器小型甕（12・13）、砲弾形の同ケズリ甕底部（14）が出土した。３・７・14は床面、13は覆土上層、他は覆土下層で出土した。光ケ丘１号窯式の９に重ね焼き痕、10にタタキのちロクロナデ、13底部に回転糸切り痕が見られる。黒色土器のミガキは６以外は精緻でないか、内面荒れのためよく見えず、３は横方向にわずかに磨かれているだけである。ＳＢ5044は覆土中に僅少の土器片が認められたのみである。

所　　見：ＳＢ5012の遺物は廃絶時と埋没過程での投棄と思われる。９世紀後半の住居跡であろう。

ＳＢ5044との関係は、根拠は無いが建て替えではなく、切り合いであると判断している。ＳＢ5044の埋没途上の窪地を利用して構築しているかもしれない。ＳＢ5044は重複関係から、９世紀半ば前後の住居跡と考えられる。



第35図　ＳＢ5012・5044

ＳＢ5013（第36図、ＰＬ５）

位　　置：ＸＱ－16

重複関係：ＳＢ5023、ＳＤ5008、ＳＫ5332に切られる。

形　　状：4.0×3.7mの方形。

覆　　土：単層で自然埋没。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、傾斜する。検出面からの深さ15cm前後である。

床　　面：掘り形をもたず、Ⅵ層を平坦に仕上げてそのまま床にしている。

ピ　ッ　ト：７基見つかり、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ６が主柱穴である。

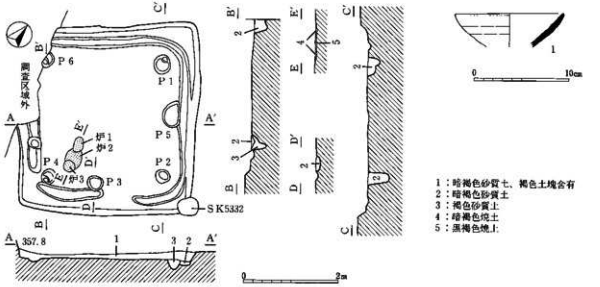
炉　　：カマドは無く、南コーナー付近で炉が３基切り合う。炉２が一番古い。

周　　溝：北東壁の一部に接し、他は壁から少し離れて床面より５cm前後の深さでほぼ一巡する。

他 施 設：周溝が南東壁際中央で途切れており、出入り口として機能していたと思われる。

遺　　物：床面には無く、覆土中も僅少。須恵器坏A（1）が覆土中に在った。

所　　見：住居を兼備しない完全な作業小屋、とりわけ鍛冶用の仕事場であった可能性がある。このため、遺物もほとんど出土しなかったと思われる。1は9世紀前半～半ばの土器である。



第36図　ＳＢ5013

ＳＢ5014（第37図、ＰＬ５）

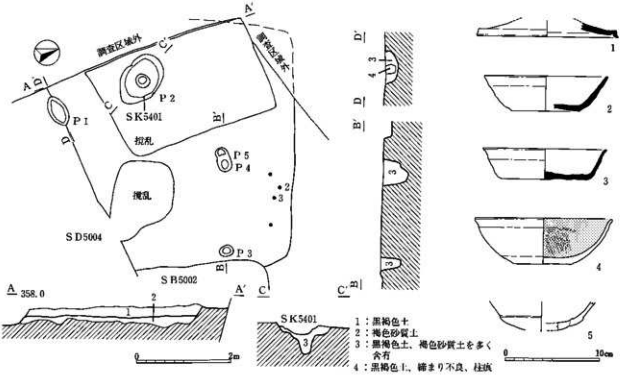
位　　置：ＸＬ－11・16

重複関係：ＳＤ5003・5012を切り、ＳＢ5002、ＳＤ5004、ＳＫ5401に切られる。

形　　状：切られ、攪乱され、調査区域外に広がるが、残存部と調査区壁セクションから推定して一辺5ｍ強の方形と考える。

壁・床面：検出面に貼り床が露出し、壁や覆土は残っていなかった。凹凸があるが浅い掘り形を有する。

ピ　ッ　ト：5基見つかったが、本跡への帰属性は不明である。Ｐ１には柱痕も伴ったが、本跡のものとす



第37図　ＳＢ5014

ると位置が不自然である。

カ マ ド：在るとすれば、調査区域外の西壁である。

遺　　物：北壁際北東コーナー寄りの床面に集中してあった。このうち須恵器坏A（2・3）が床面、同坏蓋B（1）、黒色土器A坏A（4）、土師器坏F（5）は床下から出土した。底部は、2が回転糸切り、3・4は回転ヘラ削りである。

所　　見：貼り床を有し、住居跡であることは間違いない。8世紀全般の遺物を含んでいるが、8世紀後半の住居跡と考えられる。

ＳＢ5015（第38図、ＰＬ５）

位　　置：ＸＱ－01・02・06・07

重複関係：ＳＢ5051を切り、ＳＢ5043・5044、ＳＴ5001・5005、ＳＫ5115～5117・5148・5159～5161他ＳＫ多数に切られる。

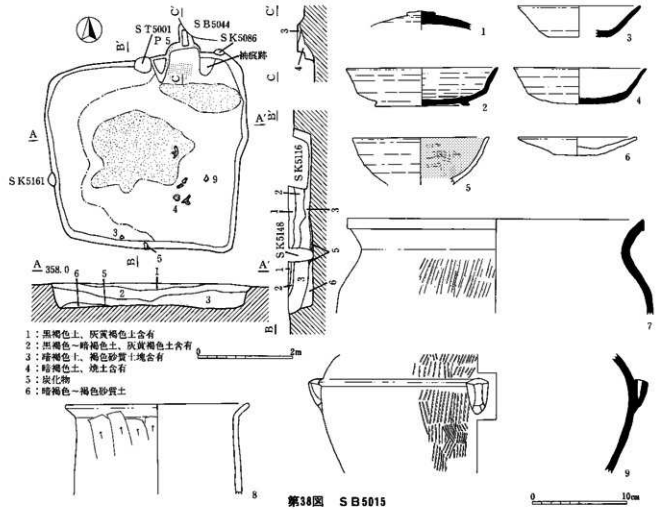
形　　状：4.2×4.3mのやや歪んだ隅丸方形。

覆　　土：主に4分層され、いわゆるレンズ状の堆積で自然埋没であることが判る。

壁　　：検出面から52cmほど深く、床面から角度がついて急な傾斜で立ち上がる。

床　　面：西壁から南西・北西コーナーにかけてを除いて、大部分に貼り床が認められる。

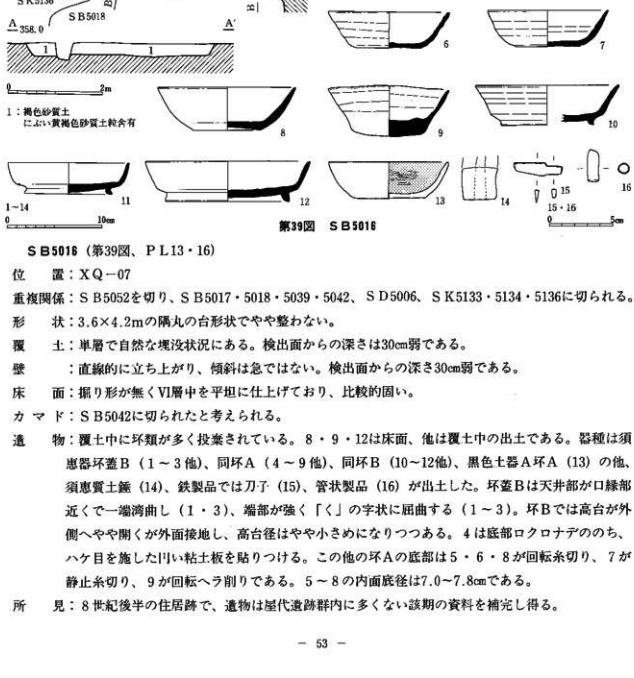
カ マ ド：北東コーナー寄りの北カマドで、壁外へ張り出すタイプ。右袖は痕跡のみ残存する。袖は地山を削り出して作られている。



第38図　ＳＢ5015

遺　物：すべて2～3層の土器で、須恵器坏蓋B（1）、同坏B（2他）、同坏A（3・4他）、黒色土器A（5）、土師器皿A（6）、須恵器甕E（7）、凸帯付四耳壺としては大型の同甕D（9）、土師器削り甕（8他）がある。床面中央付近3カ所に獣骨がある。

所　見：遺物は埋没過程で獣骨と相俟って投棄されたと考えられる。カマドの形態は8世紀半ば～後半によくみられるタイプである。一方遺物は2・4・8など8世紀前半～中頃のものと、3・5・6・7など9世紀半ば～後半のものが混在しており、後者に時期設定せざるを得ない。



第39図　SB5016

SB5016（第39図、PL13・16）

位　置：XQ－07

重複関係：SB5052を切り、SB5017・5018・5039・5042、SD5006、SK5133・5134・5136に切られる。

形　状：3.6×4.2mの隅丸の台形状でやや整わない。

覆　土：単層で自然な埋没状況にある。検出面からの深さは30cm弱である。

壁　：直線的に立ち上がり、傾斜は急ではない。検出面からの深さ30cm弱である。

床　面：掘り形が無くVI層中を平坦に仕上げており、比較的固い。

カ マ ド：SB5042に切られたと考えられる。

遺　物：覆土中に坏類が多く投棄されている。8・9・12は床面、他は覆土中の出土である。器種は須恵器坏蓋B（1～3他）、同坏A（4～9他）、同坏B（10～12他）、黒色土器A坏A（13）の他、須恵質土錘（14）、鉄製品では刀子（15）、管状製品（16）が出土した。坏蓋Bは天井部が口縁部近くで一端湾曲し（1・3）、端部が強く「く」の字状に屈曲する（1～3）。坏Bでは高台が外側へやや開くが外面接地し、高台径はやや小さめになりつつある。4は底部ロクロナデののち、ハケ目を施した円い粘土板を貼りつける。この他の坏Aの底部は5・6・8が回転糸切り、7が静止糸切り、9が回転ヘラ削りである。5～8の内面底径は7.0～7.8cmである。

所　見：8世紀後半の住居跡で、遺物は屋代遺跡群内に多くない該期の資料を補完し得る。

ＳＢ5017（第40図、ＰＬ５）

位　　置：ＸＱ－07・08

重複関係：ＳＢ5016を切る。

形　　状：南東コーナーを調査したに過ぎず、ほとんどの部分が調査区域外のため不明である。

覆　　土：Ⅳ層を基調とする自然埋没である。

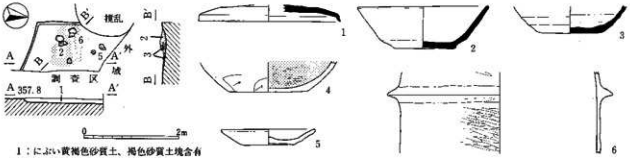
壁　　：検出面から５cm前後の深さで急な傾斜である。Ⅵ層に達する。

床　　面：掘り形をもたないが地山をそのまま床にはせず、極めて堅緻な貼り床を設けている。

カ マ ド：火床のみ残存し、よく焼けている。袖石と考えられる石が火床上に投棄され、散乱している。

遺　　物：土師器坏Ａ（５）は火床直上、同羽釜Ａ（６）が火床傍らの床面の出土であり、須恵器坏蓋Ｂ（１）、同坏Ａ（２・３）は覆土中、黒色土器Ａ坏Ａ（４）は床下の出土である。

所　　見：床面上の５・６とカマドの位置・形態から11世紀末～12世紀の住居跡と思われる。１～４は８世紀半ば～９世紀半ばの遺物で全く時期が符合せず、１～３は埋没時流れ込み、４は床が貼られる以前からそこに在ったものと解釈した。



第40図　ＳＢ5017

ＳＢ5018（第41図）

位　　置：ＸＱ－07・12

重複関係：ＳＢ5016・5039を切り、ＳＢ5035、ＳＤ5006に切られる。

形　　状：大幅に切られており不明。

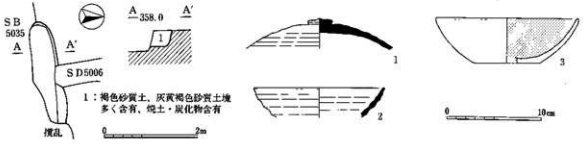
覆　　土：自然埋没と思われるが、Ⅳ層土塊を多く含有する褐色砂質土が単層で堆積する。

壁　　：検出面からの壁高約30cmで、ほぼ垂直である。

床　　面：掘り形はなく、地山のⅥ層をそのまま床にしている。

遺　　物：須恵器坏蓋Ｂ（１）、同坏Ａ（２）、黒色土器Ａ坏Ａ（３）が覆土中より出土した。本跡に帰属するとは思えない。

所　　見：重複関係も含めて８世紀後半～９世紀前半の住居跡と思われる。



第41図　ＳＢ5018

ＳＢ5019（第42図、ＰＬ５・14）

位　　置：ＸＱ－11

重複関係：ＳＤ5008を切り、ＳＴ5002・5006、ＳＫ5197～5201・5278・5281・他ＳＫ多数に切られる。

形　　状：4.8×4.2mの隅丸長方形。

覆　　土：単層自然埋没で、Ⅳ層を基調とすると思われる。

壁　　：Ⅵ層に達し、覆土が浅く判然としないが、あまり急な傾斜ではないようである。

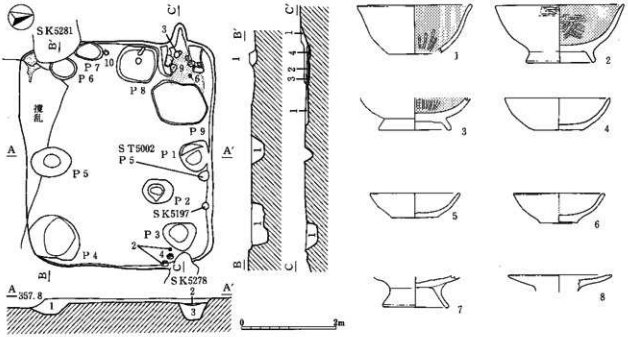
床　　面：浅い掘り形を埋めるだけのところ、Ⅵ層を平坦に仕上げるところがあり、比較的固い。

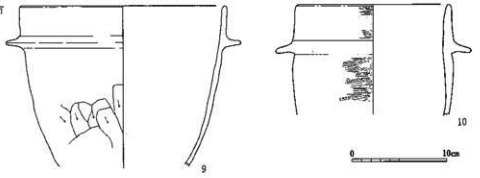
ピ　ッ　ト：９基見つかり、Ｐ１～Ｐ５は30～40cm強と深く、Ｐ６～Ｐ９は20cm以内と浅い。

カ　マ　ド：北西コーナーに極端に寄った西壁にある。芯材に石を入れ、黄褐色の粘質土を用いる。

遺　　物：黒色土器Ａ椀（１～３）、土師器坏Ａ（４～６）、同椀（７他）、同羽釜Ａ（９・10他）があり、８は土師器盤ＢⅡか。１はミガキが形骸化している。２は口唇内外面に横ミガキ、内面は斜方向のミガキが施され、底部は回転糸切り痕がある。３のミガキは精緻で、底部までロクロナデされる。土師器坏Ａの法量は口径9.6～11.2cm、器高2.6～3.4cmである。羽釜は、９がロクロ成形後、体部下半をヘラ削り、10は外面口唇部をヨコナデのちヨコミガキ、鍔下を削りのちミガキ、内面をヨコナデしている。３・６・９が火床上、他は床面の出土である。

所　　見：遺物は廃絶時の投棄と思われる。10世紀後半～11世紀前半の典型的な住居跡である。





第42図　ＳＢ5019

ＳＢ5020（第43図、ＰＬ６）

位　　置：ＸＰ－10、ＸＱ－06

重複関係：なし。

形　　状：大部分が調査区域外だが東壁一辺が3.4mあり、一辺3.4mの方形であろう。

覆　　土：２分層でき、自然埋没である。下層はⅣ層に酷似する。

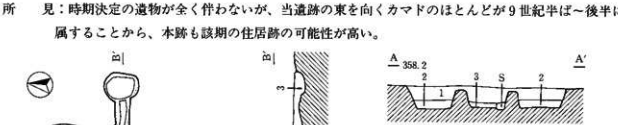
壁　　：Ⅵ層を掘り込み検出面からの壁高50cm前後、急な傾斜で立ち上がる。

床　　面：掘り形は無く、固い。

カ　マ　ド：非常に肉厚の袖は地山（Ⅵ層）を削り出している。本来の姿で破壊を受けていないカマドかも知れない。火床がよく発達し、袖の内側、煙道の内壁や先端もよく焼けている。

遺　　物：覆土中に流没と考えられる土器片が僅少で、カマド内部、カマド脇とも全く遺物が無い。

所　　見：時期決定の遺物が全く伴わないが、当遺跡の東を向くカマドのほとんどが９世紀半ば～後半に属することから、本跡も該期の住居跡の可能性が高い。



第43図　ＳＢ5020

ＳＢ5021（第10図、ＰＬ６）

位　　置：ＸＯ－15、ＸＱ－11

重複関係：ＳＤ5008、ＳＫ5396に切られる。

形　　状：一辺2.4mの方形と思われるが、西半が調査区域外にかかり不明。

覆　　土：Ⅳ層を基調とする自然埋没で単層。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、傾斜する。壁高は検出面より20cm以内である。

床　　面：Ⅵ層中を平坦に仕上げて床としている。

ピ　ッ　ト：南壁際に１基ある。

遺　　物：覆土中に流没または投棄と考えられる土器片が僅少在ったのみである。

所　　見：調査区域外の西壁にカマドが存すれば住居跡だが、住居跡にしては規模が小さい。

ＳＢ5022（第44図、ＰＬ６）

位　　置：ＸＱ－11・16

重複関係：ＳＤ5005・5008を切り、ＳＫ5213に切られる。

形　　状：2.8×2.6mの方形。東半は掘り形でプランをつかんでいる。

覆　　土：単層で極めて浅いが、Ⅳ層を基調とする自然埋没と考えられる。

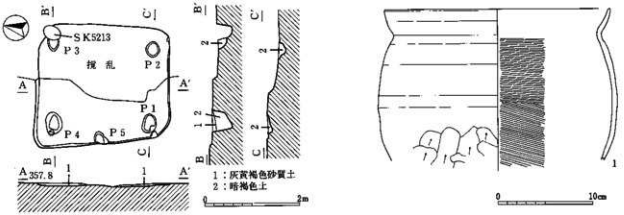
壁・床面：床面までが５cm程度で、壁の状況は判らない。撹乱を受けていない西半は全面貼られている。

ピ　ッ　ト：主柱穴Ｐ１～Ｐ４と壁柱穴Ｐ５がある。

カ　マ　ド：在ったとすれば撹乱を受けた東壁側ということになる。

遺　　物：ロクロ成形、内面ハケ目、外面下半部ヘラ削り調整の土師器甕（１）が床面から出土した。

所　　見：重複関係と覆土の質から９世紀代の所産と思われる。



第44図　ＳＢ5022

ＳＢ5023（第９図、ＰＬ６）

位　　置：ＸＱ－16

重複関係：ＳＢ5013、ＳＤ5008を切る。

形　　状：一辺2.4mの方形。

覆　　土：Ⅳ層そのものが自然埋没する。

壁・床面：検出面からの深さ８cmで、壁はほぼ垂直。床は掘り形をもたず、貼ってはいないが堅緻である。

遺　　物：破片で僅少。

所　　見：住居跡とする根拠は無く、竪穴状の遺構とするのが妥当であろう。

ＳＢ5024（第45図、ＰＬ６・14）

位　　置：ＸＱ－16・17

重複関係：ＳＢ5038を切り、ＳＴ5003に切られる。

形　　状：4.7×5.4mの長方形。

覆　　土：Ⅳ層を基調とする単層で自然埋没である。

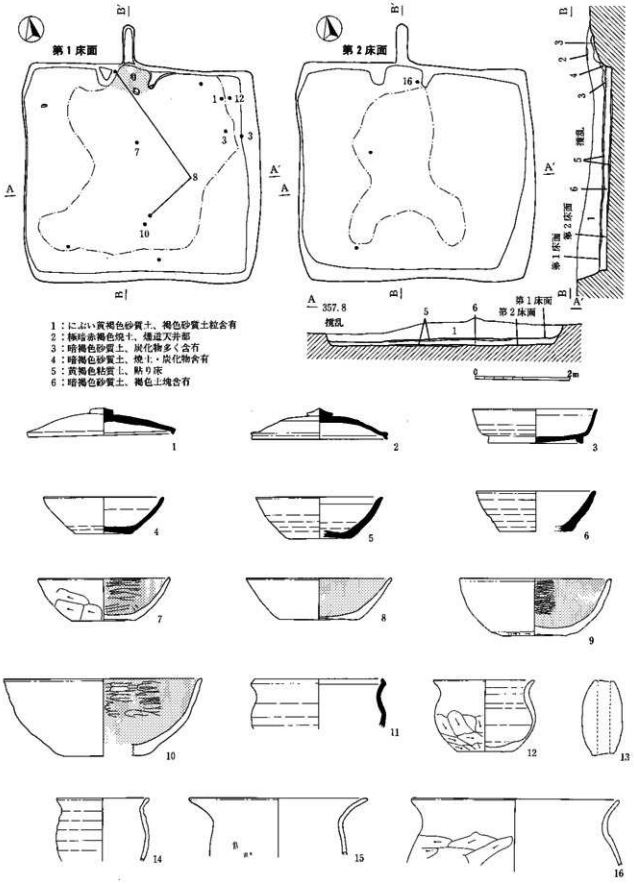
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、最深部で60cmを測る。急な傾斜で立ち上がる。

床　　面：Ⅵ層中を平坦に仕上げて床を貼り、それから上方へ10cm程隔てて２枚めの床が貼られる。

カ マ ド：北壁中央付近に在り、黄褐色の粘質土で袖をつくる。火床がよく発達し、袖と壁の内側や煙道の内壁はよく焼けている。石製で支脚が残存する。

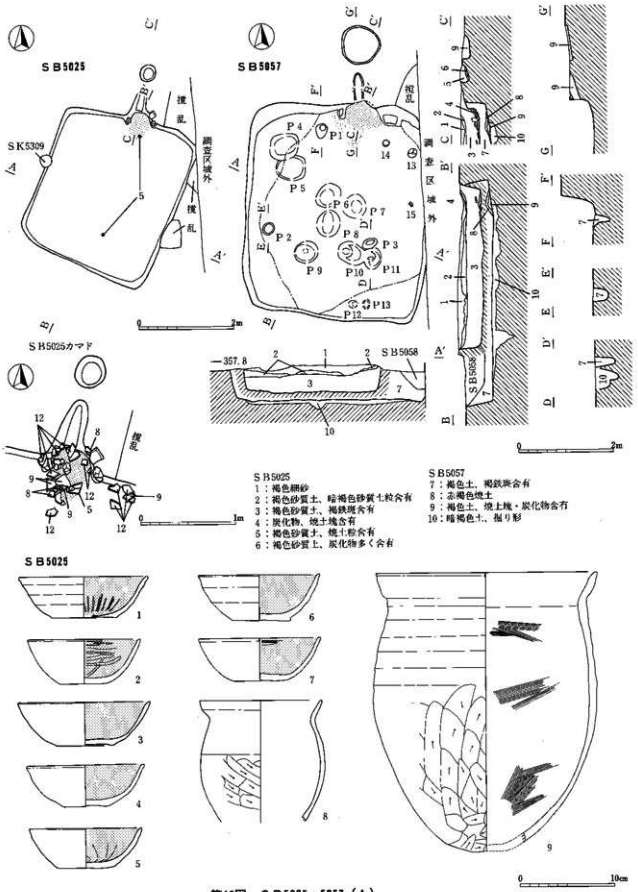
遺　　物：覆土全般に多い。土器・土製品は、須恵器坏蓋Ｂ（１・２他）、同坏Ｂ（３他）、同坏Ａ（４～６他）、黒色土器Ａ坏Ａ（７～９他）、同鉢Ａ（10）、須恵器鉢Ａ（11他）、ロクロ成形で体下半部と底部ヘラ削り調整の土師器小型甕（12）、同小型甕Ｄ（14）、同ロクロ調整甕（15）、同甕Ｃ（16）、須恵質の土錘（13）などがあり、３・７・10・12は第１床面、16は第２床面、他は第１床面覆土より出土した。１は美濃須衛窯産で重ね焼き痕がみられる。須恵器坏Ａはすべて回転糸切り底で、内面底径5.4～6.0cmである。７～９・12は底部を手持ちまたは回転ヘラ削りで調整している。黒色土器は荒れのためミガキの見えない８を除いては、内面は横方向にのみ磨かれている。同坏Ａは２法量が分化している。

所　　見：覆土中には８世紀後半～９世紀半ばの遺物が混在している。９世紀前半～半ばの住居跡と思われる。

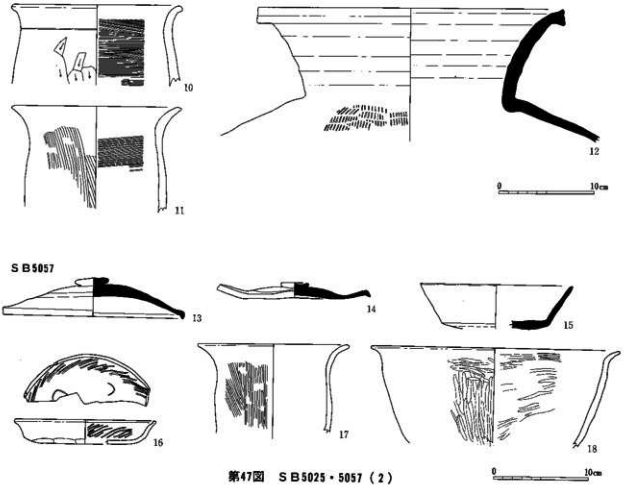


1：におい黄褐色砂質土、褐色砂質土粒含有
2：極端赤褐色焼土、燃焼天井部
3：暗褐色砂質土、炭化物多く含有
4：暗褐色砂質土、焼土・炭化物含有
5：黄褐色粘質土、貼り床
6：暗褐色砂質土、褐色土塊含有

第45図　ＳＢ5024



第46図　ＳＢ5025・5057（１）



第47図　SB5025・5057（2）

SB5025・5057（第46・47図、PL6・9・14）

位　　置：XQ－17・18に在り、SB5057はXQ－22・23にもかかる。

重複関係：SB5025はSB5030・5057・5058を切り、ST5003、SK5309に切られ、SB5057はSB5025・5030・5058、ST5003、SK5309・5311に切られる。

形　　状：SB5025は3.4×2.9mの長方形、SB5057は4.6×3.9mの長方形。

覆　　土：SB5025は自然埋没で3分層され、最上層は洪水砂に酷似。SB5057は単層、自然埋没である。

壁　　：いずれも垂直に近く深い。壁高はSB5025が最深55cm、SB5057が最深70cmである。

床　　面：SB5025は軟弱、SB5057は堅緻な貼り床である。

ピ　ッ　ト：SB5025では皆無。SB5057では小ピットはP1～P3が、床下検出ピットはP4～P13が見つかった。床下検出ピットは、検出レベルや集中性からSB5057のものとみて間違いないが、どのように機能したかは不明であり、また掘り形との区別もし難い。

カ　マ　ド：SB5025は石組み、SB5057は地山削り出しのカマドであるが、僅かな部分しか残っておらず、袖の大部分は取り払われている。火床はいずれも発達している。

遺　　物：調査上のミスで2軒の遺物が混ざってしまい、整理段階で可能な限り分けた。

SB5025では、黒色土器A坏A（1～7）、ロクロ成形で内面ハケ目のちナデ、外面下半ヘラ削り調整の土師器砲弾形甕（9）、各種調整の同小型甕（8・10・11）、須恵器甕A（12）が第3層から床面にかけて出土した。食膳具は黒色土器だけで須恵器が混ざらないが、まだロクロ成形の土師器は出現していない。内面のミガキは粗雑か省略された横方向のもの（2・7）と、暗文

風の縦方向のもの（1・5）があり、3・4・6は器肌の荒れでミガキが観察できない。法量は口径12.0～14.0cm、器高は4.3～4.8cmで規格的である。

ＳＢ5057では、須恵器坏蓋Ｂ（13・14）、須恵器坏Ａ（15）、非ロクロ成形の畿内系土師器坏（16）、土師器小型甕Ｂ（17）、同甕Ｆ（18）が床面から出土した。14は著しく歪み、外面に坏Ｂの高台が溶着する。15底部はヘラおこしのちナデ、16底部は手持ちヘラ削りが見られる。

所　見：いずれもカマド内やカマド脇の遺物は廃絶時の投棄と考えられる。ＳＢ5025は９世紀半ば頃、ＳＢ5057は８世紀前半～中頃の住居跡と思われる。

ＳＢ5026（第48図、ＰＬ７）

位　置：ＸＱ－16・17・21・22

重複関係：ＳＢ5027・5037、ＳＫ5365に切られる。

形　状：大幅にＳＢ5027に切られているが、一辺4.7mの方形である。

覆　土：Ⅳ層が埋没し、その下位にある第２層は三角堆土に相当することから自然埋没である。

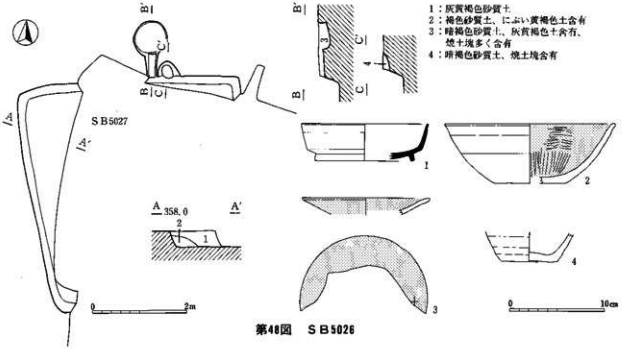
壁　：Ⅵ層を掘り込み、垂直に近い傾斜で、検出面からの比高38cmを測る。

床　面：切られ残った部分はⅥ層中を平坦に仕上げた軟弱な床である。

カ マ ド：北カマドで、新旧は不明だが、煙道のみが長短計２つ残存する。

遺　物：覆土中より須恵器坏Ｂ（１）、黒色土器Ａ坏Ａ（２）、黒色土器Ｂ皿Ｂ（３）、底部を回転ヘラ削りする土師器小型甕底部（４）が出土した。３は十文字状の刻書があるが欠損し、判読できない。

所　見：遺物は埋没時投棄と考えられ、重複関係も加味して９世紀前半～中頃の住居跡と思われる。



第48図　ＳＢ5026

ＳＢ5027（第49図、ＰＬ７・16）

位　置：ＸＱ－17・18・21・22

重複関係：ＳＢ5026を切り、ＳＢ5037、ＳＴ5004、ＳＫ5358～5365・5372～5374他ＳＫ多数に切られる。

形　状：一辺5.0mの方形。

覆　土：Ⅳ層を基調とする自然埋没で単層。

壁　：Ⅵ層を掘り込み検出面からの壁高45cm、垂直に近い急傾斜の壁である。

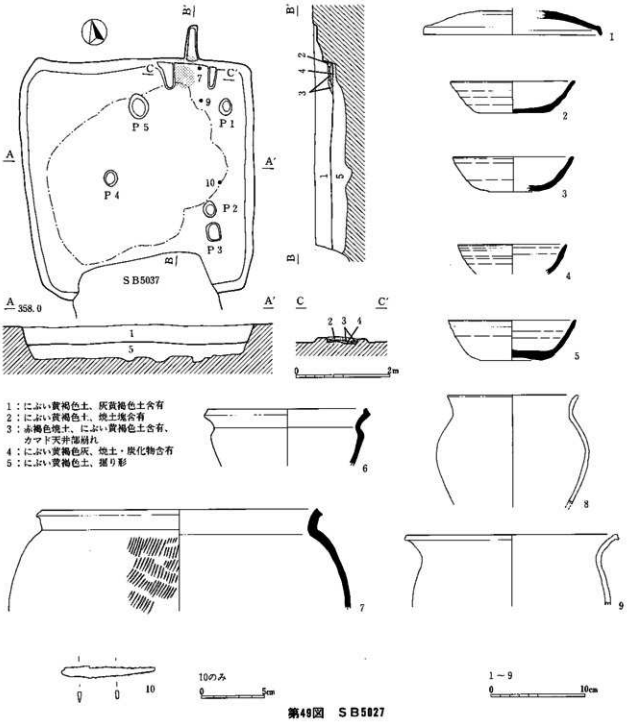
床　　面：中央部が貼られる。掘り形は30cm前後と深く、比較的平坦である。

ピ　ッ　ト：５基見つかり、Ｐ１・Ｐ２が深さ40cm前後、他は30cm以内である。

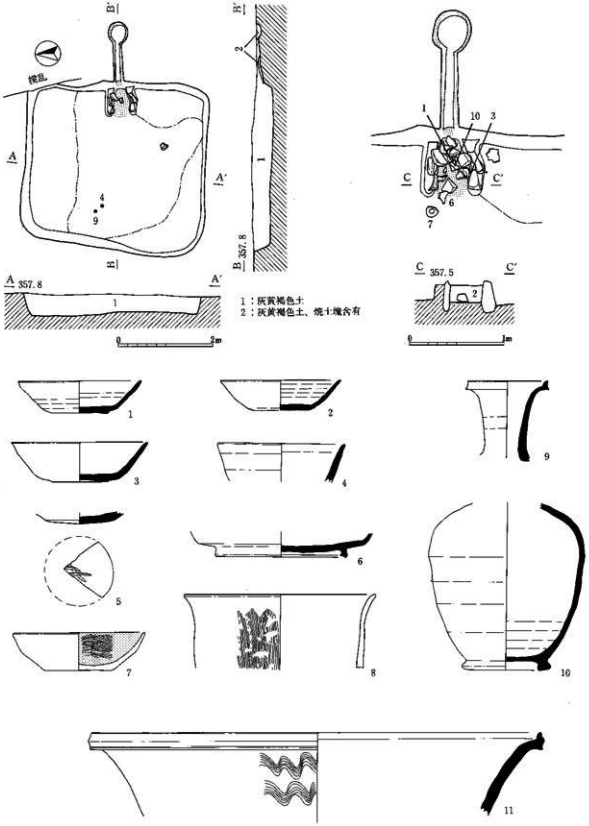
カ　マ　ド：北壁の北東コーナー寄りにあり、幅広の袖の残りは上半部が取り払われているが比較的よい。
　　Ⅵ層の地山と同一土か、地山を削り出して作られている。火床は焼土がよく形成され、袖や壁の内側、煙道の内壁もよく焼けている。

遺　　物：須恵器坏蓋Ｂ（１個）、同坏Ａ（２～５個）、同鉢Ａ（６）、同甕Ｅ（７）、ロクロ成形の土師器甕（８・９）、軟質須恵器坏Ａ底部、黒色土器Ａ坏Ａ底部などの土器と刀子（10）があり、７がカマド内、９が床面、４・５が床下、他は覆土中より出土した。５は転用硯である。

所　　見：遺物の大方は埋没過程の投棄による。黒色土器は１点しかないが、重複関係から９世紀半ば頃の住居跡と考えられる。１は８世紀前半、２は同中頃～後半のもので混入であろう。



第49図　ＳＢ5027


B'
B
A
A'
357.8
1
2
4
9
B
B'
357.8
1
2
1：灰黄褐色土
2：灰黄褐色土、焼土塊含有
0
2m
1
10
3
C
C'
6
7
C
357.5
C'
2
0
1m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
0
10cm

第50図　ＳＢ5028

ＳＢ5028（第50図、ＰＬ７）

位　　置：ＸＱ－22、ＸＶ－02

重複関係：ＳＢ5054～5056を切り、ＳＫ5357に切られる。

形　　状：3.7×3.8mの方形。

覆　　土：Ⅳ層そのものが単層で自然埋没する。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、垂直に近い急な傾斜の立ち上がりで、検出面からの比高は48cmある。

床　　面：中央部に貼り床をもち、掘り形は局部的でごく浅い。

カ マ ド：石組みカマドが東壁中央にあり、崩れているが比較的残存状態がよい。火床は焼土がよく形成され、長い煙道の内壁と先端はよく焼ける。角礫を用いた支脚が原位置を保って残存する。

遺　　物：須恵器坏Ａ（１～３・５）、同坏Ｂ（４・６）、黒色土器Ａ坏Ａ（７）、土師器甕Ｂ（８）、須恵器長頸壺Ａ（９・10）、同甕Ａ（11他）などがあり、１・３・６・10はカマド内、４はカマド前方の床面、他は覆土中から出土した。黒色土器が１点のみあるが、食膳具の主体は須恵器であり、回転糸切り底の坏Ａの内面底径は6.4～7.4cmである。

所　　見：カマド内の遺物は廃絶時、覆土内の遺物は埋没時の投棄と考えられる。８世紀末～９世紀はじめ頃の住居跡と思われる。

ＳＢ5029（第９図）

位　　置：ＸＱ－22・23

重複関係：ＳＢ5030・5058を切り、ＳＴ5003、ＳＫ5323・5324・5460に切られる。

形　　状：4.1×3.6mの長方形。

覆　　土：単層で、Ⅳ層を基調とする自然埋没である。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、傾斜する。壁高は検出面より10cm強である。

床　　面：Ⅵ層を平坦に仕上げて床面とし、軟弱である。

カ マ ド：在ったとすれば北壁で、攪乱部分になる。

遺　　物：覆土から床面まで全般に僅少。

所　　見：形状と規模から住居跡とは思われる。重複関係と形状・規模および覆土の質から９世紀代の所産であろう。

ＳＢ5030（第51図）

位　　置：ＸＱ－17・18・22・23

重複関係：ＳＢ5057・5058を切り、ＳＢ5025・5029・5031、ＳＴ5003、ＳＫ5319～5321・5323・5324・5330に切られる。ＳＢ5024との関係は不明である。

形　　状：南北長が5.6m、東西長が6.2m以上の長方形である。規模は当遺跡内では大きい。

覆　　土：単層で自然埋没と考えられる。

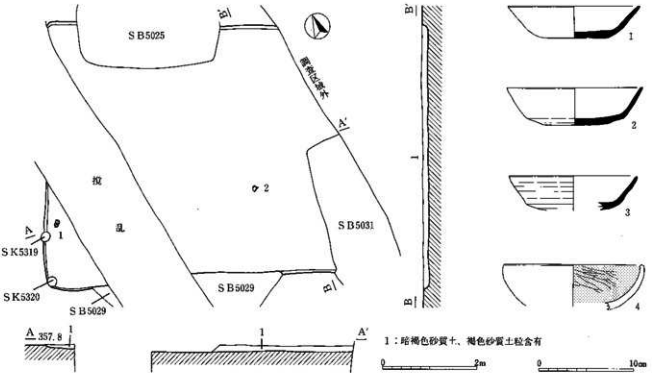
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、検出面との比高は10cm前後、ゆるやかに立ち上がる。

床　　面：Ⅵ層を平坦に仕上げているので掘り形は無く、軟弱である。

カ マ ド：切られている部分に在ったかも知れない。

遺　　物：全般に少なく、須恵器坏Ａ（１～３）のうち１・２が床面、３と黒色土器Ａ坏（４）が覆土中から出土した。坏Ａに糸切り底のものはない。４は杯Ｄではなく、ロクロ成形されている。

所　　見：８世紀中頃の住居跡か。



第51図　ＳＢ5030

ＳＢ5031（第52図、ＰＬ７）

位　　置：ＸＱ－23

重複関係：ＳＢ5030を切り、ＳＫ5340に切られる。

形　　状：東辺半が調査区域外にあり全容は不明。南北軸で3.6mある。

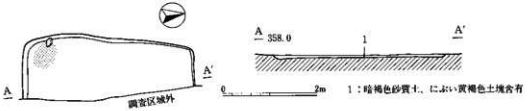
覆　　土：単層自然埋没。

壁・床面：検出面から５㎝程度で床となる。Ⅵ層を掘り込み、掘り形は無いが、全面貼り床で極めて固い。

カ マ ド：火床のみ残存で南西コーナーにある。カマド石が１個のみ火床上に乗っている。

遺　　物：ほとんど出土しなかった。

所　　見：カマドの位置・形態から10世紀後半以降の住居跡と思われる。床面レベル、貼り床の在り方、火床の位置がＳＢ5017と酷似する。



第52図　ＳＢ5031

ＳＢ5032（第53図、ＰＬ７）

位　　置：ＸＶ－01・02

重複関係：ＳＬ5001に切られる。

形　　状：2.8×3.0mの方形。

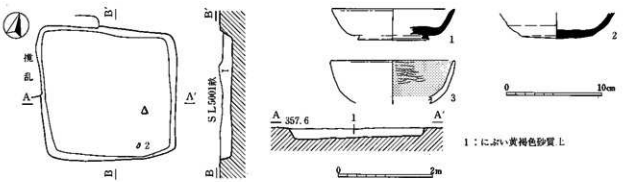
覆　　土：Ⅳ層を基調とする単層で、暗褐色土塊・焼土塊が各５％程含まれ、人為的な埋め戻しか。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、急な傾斜で立ち上がる。検出面からの壁高は26㎝。

床　　面：Ⅵ層中を平坦に仕上げただけの床だが比較的固い。

遺　　物：床面に須恵器坏A（2）があり、覆土中から同坏B（1）、黒色土器A坏（3）が出土した。1は底部にヘラ削りがみられ、高台は中央にくぼみをもって外側で接地する。2は底部ヘラナデ調整である。

所　　見：9世紀代の遺物を出土する畠跡ＳＬ5001の畝が覆土の上部を横切っている。遺物から8世紀後半～9世紀はじめ頃の竪穴状遺構と思われる。規模が小さいうえカマドが無く、住居跡とする根拠は無い。



第53図　ＳＢ5032

ＳＢ5033（第54図、ＰＬ7）

位　　置：ＸＶ－02

重複関係：ＳＢ5054、ＳＫ5457を切り、ＳＬ5001に切られる。

形　　状：東壁を撹乱で失っているが、一辺3.5mの方形であろう。

覆　　土：単層。自然堆没。

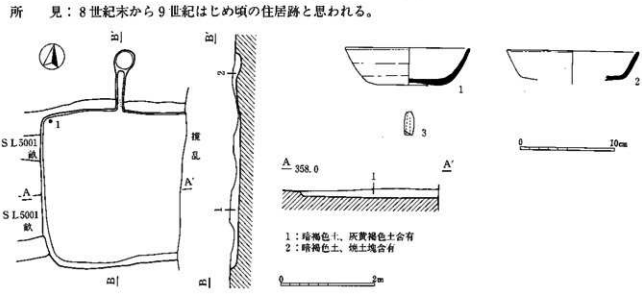
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、傾斜は急ではない。検出面からの比高は20cmである。

床　　面：掘り形は無く、Ⅵ層中を平坦に仕上げて床とし、軟弱である。

カ マ ド：袖・火床等全く残っていない。煙道のみ残存し、その内壁はよく焼けている。

遺　　物：全般に少ないが、床面北西コーナーに須恵器坏A（1）、覆土から同坏B（2）、土師質の土錘（3）が出土した。1は回転糸切り底で内面底径7.0cmである。

所　　見：8世紀末から9世紀はじめ頃の住居跡と思われる。



第54図　ＳＢ5033

ＳＢ5034（第55図、ＰＬ７）

位　　置：ＸＶ－02・07

重複関係：ＳＬ5001に切られる。

形　　状：3.4×3.7mの隅丸方形。

覆　　土：Ⅳ層を基調とする単層で自然埋没と思われる。

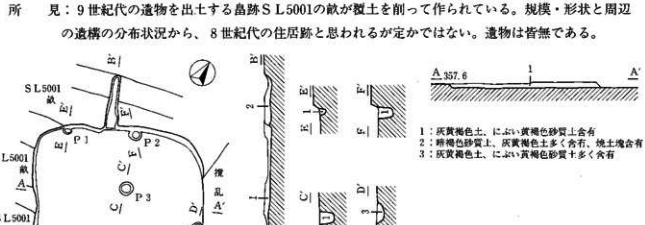
壁　　：覆土が浅く判然としないが、急な傾斜の壁でⅥ層を掘り込んでいる。

床　　面：Ⅵ層中を平坦に仕上げて床としていると思われるが、軟弱で不明確である。

ピ　ッ　ト：小ピットが４基、うち３基が壁柱穴の様相だが、４基とも本跡への帰属性は定かではない。

カ　マ　ド：袖・火床とも全く確認できず、煙道のみ残存する。煙道内壁はほとんど焼けておらず、煙道覆土中に焼土塊が少量含まれるだけである。

所　　見：９世紀代の遺物を出土する畠跡ＳＬ5001の畝が覆土を削って作られている。規模・形状と周辺の遺構の分布状況から、８世紀代の住居跡と思われるが定かではない。遺物は皆無である。



第55図　ＳＢ5034

ＳＢ5035（第56図、ＰＬ７・14・16）

位　　置：ＸＱ－12

重複関係：ＳＢ5018・5039・5052を切り、ＳＴ5006、ＳＤ5006に切られる。

形　　状：3.7×4.0mの方形。

覆　　土：主に２分層してあるがほとんど差異が無く、間層に炭化物の層を挟む。Ⅳ層を基調とする自然埋没である。

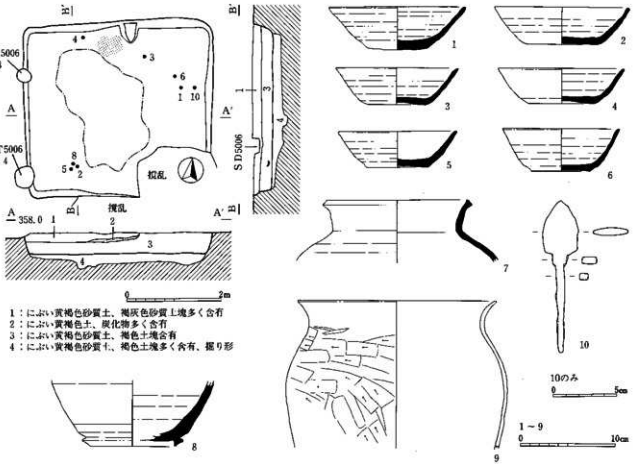
壁　　：壁と床の境は丸いが垂直に近い急な立ち上がりで、壁高は検出面より最深37cmを測る。

床　　面：中央部に貼り床がある。厚さ20cm程ある深めの掘り形の上に貼られている。

カ　マ　ド：西壁中央にあり、袖は右側のみ残存し、火床は発達する。煙道はない。

遺　　物：土器は須恵器坏Ａ（１～６）、同短頸壺Ｃ（７）、同長頸壺Ａ（８）、土師器甕Ｃ（９）と、鉄鏃（10）がある。食膳具に黒色土器はまだ含まれず、底部ナデ調整の坏Ａは１が１点のみ残る。５はわずかに内傾する。回転糸切り底の２～６の内面底径は6.6～7.6cmである。２・４・５・８は床面、１と10は床下、他は覆土からの出土である。10は12.1×2.8×0.6cm、23.9g。

所　　見：遺物は住居廃絶直後から埋没過程で投棄されたものと思われ、８世紀後半から末頃の住居跡と考えられる。



1：にぶい黄褐色砂質土、褐灰色砂質土塊多く含有
2：にぶい黄褐色土、炭化物多く含有
3：にぶい黄褐色砂質土、褐色土塊含有
4：にぶい黄褐色砂質土、褐色土塊多く含有、掘り形

第56図　ＳＢ5035

ＳＢ5036（第57図、ＰＬ８）

位　　置：ＸＬ－21・22、ＸＱ－01・02

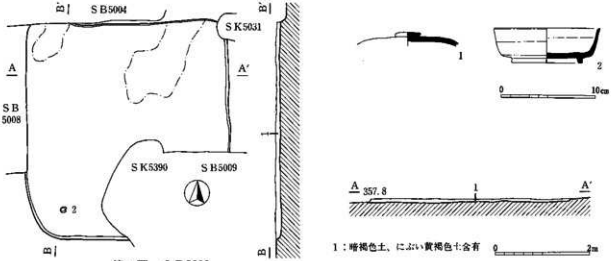
重複関係：ＳＢ5005・5040・5041・5046・5047、ＳＫ5030を切り、ＳＢ5004・5008・5009、ＳＫ5390に切られる。

形　　状：4.6×4.3mの隅丸方形。

覆　　土：単層で基調土と異なる土塊を含有し、人為的な埋没の疑いがある。

壁　　：検出面より５cm強で床となり、壁の状態はよく分からない。

床　　面：大部分が軟弱で不明瞭だが、北壁際に局部的に貼り床が認められた。掘り形は下位の住居跡の



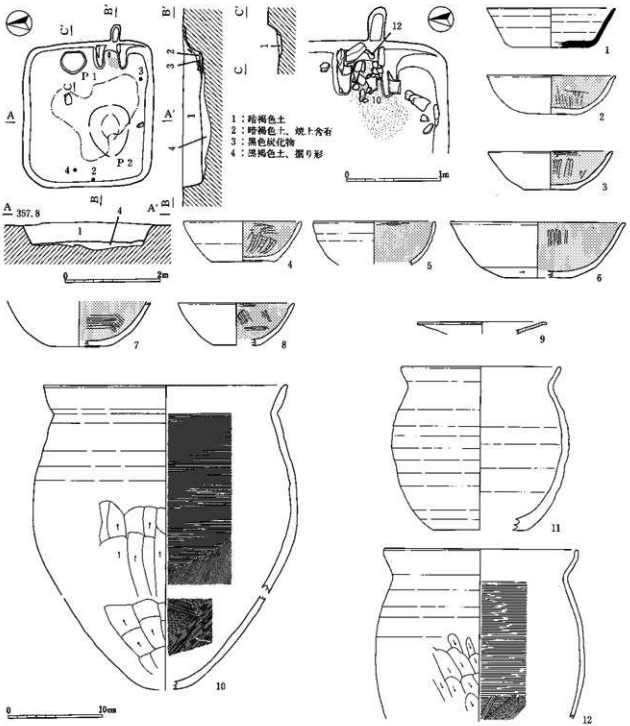
1：暗褐色土、にぶい黄褐色土含有

第57図　ＳＢ5036

覆土と区別し難いが、浅くあったものと思われる。

遺　物：全般に少なく、床面から須恵器坏蓋Ｂ（１）、床下から同坏Ｂ（２）が出土した。

所　見：２は本跡の遺物としても矛盾しないが、床下から出ておりＳＢ5046に帰属するかもしれない。重複関係から見ても８世紀末～９世紀はじめ頃の遺構と考えられる。貼り床は局部的にあるものの、カマド等施設がなく住居跡とする根拠に欠ける。



第58図　ＳＢ5037

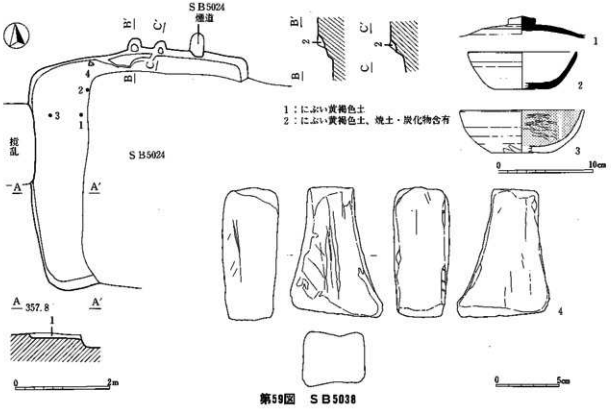
ＳＢ5037（第58図、ＰＬ８・14・15）

位　　置：ＸＱ－21・22

重複関係：ＳＢ5026・5027を切り、ＳＴ5004、ＳＫ5375・5376に切られる。

形　　状：3.1×2.8mの隅丸長方形。
覆　　土：単層で自然埋没である。
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、検出面との比高約40cmの壁は急な傾斜で立ち上がる。
床　　面：中央部に貼り床が見られた。掘り形は中央部でやや深い。
ピ　ッ　ト：カマド左脇にごく浅いＰ１がある。床下では浅く大きなＰ２が検出された。
カ　マ　ド：東壁南東コーナー寄りにあり、残存状態はよい。Ⅵ層と同様な土に角礫を芯材としたもので、角礫を用いた支脚が屹立したまま残存していた。火床はやや発達、短い煙道の内壁は薄く焼ける。
遺　　物：やや軟質で底部をロクロナデする須恵器坏Ａ（１）、黒色土器Ａ坏Ａ（２～８他）、光ケ丘１号窯式の灰釉陶器皿（９）、内面をハケ目またはカキ目、外面下半をヘラ削りするロクロ成形の土師器砲弾形甕（10・12他）、同小型甕Ｄ（11）があり、３は床下、４は床面、10・11はカマド内、他は覆土から出土した。食膳具の主体は黒色土器であり、口径17～18cm前後、器高６cm弱のⅠ（６・７）と、口径13cm前後、器高４cm強のⅡ（２～５・８）の２法量がある。内面のミガキは不明瞭か粗雑なものが多い。
所　　見：小型だが９世紀中頃の典型的な住居跡である。

ＳＢ5038（第59図、ＰＬ８・16）
位　　置：ＸＱ－16・17
重複関係：ＳＢ5024に切られる。
形　　状：切られている部分が多いが３コーナーが残り、4.8×4.3mの隅丸方形である。
覆　　土：Ⅳ層を基調とする単層の自然埋没である。
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、床との境は丸みをもって急傾斜で立ち上がる。検出面から最深部が47cmある。
床　　面：Ⅵ層中を平坦に仕上げて床としており軟弱である。
カ　マ　ド：北壁中央にあり、短い煙道が２基残存する。



第59図　ＳＢ5038

遺　　物：床面より須恵器坏蓋Ｂ（１）、覆土中から同坏Ａ（２）、床下から黒色土器Ａ坏Ａ（３）、砂岩製の砥石（４）が出土した。回転糸切り底の２の内面底径は6.0cmである。４は10.5×7.3×4.3cm、408gである。

所　　見：遺物や重複関係から、９世紀前半頃の住居跡と考えられる。

ＳＢ5039（第60図、ＰＬ８）

位　　置：ＸＱ－07・12

重複関係：ＳＢ5016・5052を切り、ＳＢ5018・5035、ＳＤ5006、ＳＫ5136～5140・5144に切られる。

形　　状：ＳＢ5035に大幅に切られるが、残存部より一辺3.8mの方形と考えられる。

覆　　土：単層。自然堆没であろう。

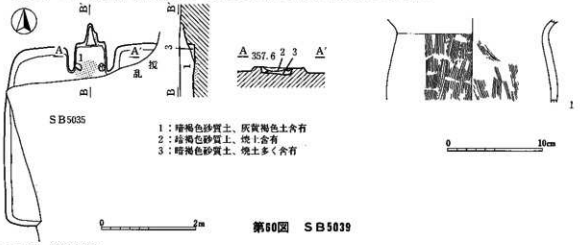
壁　　：検出面より壁高30cm弱で傾斜する。Ⅵ層を掘り込む。

床　　面：Ⅵ層中を平坦に仕上げて床とし、軟弱である。

カ マ ド：北壁中央に１基ある。火床と袖・壁・煙道の内壁はよく焼けている。袖は地山削り出しによる。

遺　　物：土師器甕Ｂ（１）が火床上にあった。

所　　見：カマドの形態、重複関係から見て８世紀後半頃の住居跡であろう。



第60図　ＳＢ5039

ＳＢ5040（第61図）

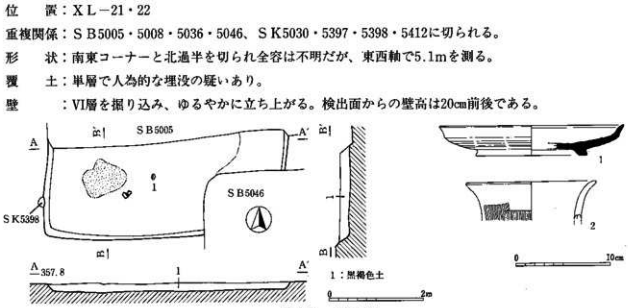
位　　置：ＸＬ－21・22

重複関係：ＳＢ5005・5008・5036・5046、ＳＫ5030・5397・5398・5412に切られる。

形　　状：南東コーナーと北過半を切られ全容は不明だが、東西軸で5.1mを測る。

覆　　土：単層で人為的な埋没の疑いあり。

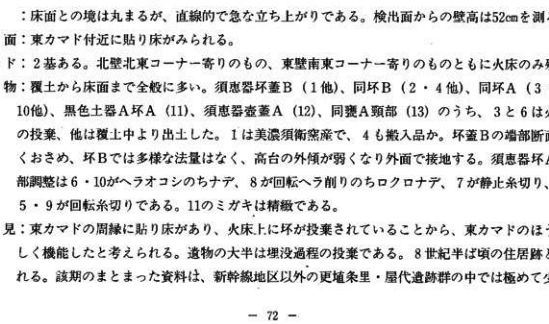
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、ゆるやかに立ち上がる。検出面からの壁高は20cm前後である。



第61図　ＳＢ5040

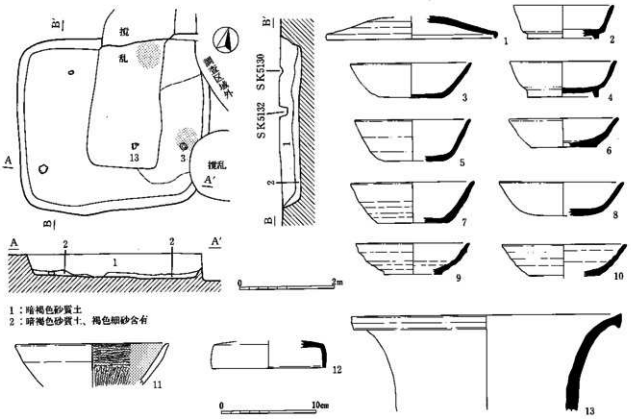
床　　面：堅緻な貼床。
カ マ ド：ＳＢ5005に切られる部分にあったかもしれない。
遺　　物：須恵器盤（1）、ロクロ成形ハケ目調整の土師器小型甕（2）が覆土中より出土。
所　　見：８世紀後半頃の住居跡と思われる。

ＳＢ5041（第62図）
位　　置：ＸＬ－22
重複関係：ＳＢ5046を切り、ＳＢ5009・5036、ＳＫ5031・5390に切られる。
形　　状：北西コーナーの一部を調査したに過ぎず、全容は不明である。
覆　　土：単層で、Ⅳ層土塊を含有し、人為的な埋没様相を示す。
壁　　：Ⅵ層を掘り込み垂直に近い。検出面からの壁高45cmを測る。
床　　面：中央部分に堅緻な貼り床がある。掘り形調査は実施できなかった。
遺　　物：覆土中には全般に多いが図化できたのはロクロ成形、内面カキ目調整の土師器甕（1）のみ。
所　　見：重複関係からみて、８世紀後半頃の住居跡と思われる。



第62図　ＳＢ5041

ＳＢ5042（第63図、ＰＬ８）
位　　置：ＸＱ－07
重複関係：ＳＢ5016・5051・5052を切り、ＳＢ5043、ＳＴ5005、ＳＤ5006、ＳＫ5130・5132に切られる。
形　　状：3.7×4.1mの隅丸長方形。
覆　　土：２分層してあるが、基調土は同一で自然埋没である。
壁　　：床面との境は丸まるが、直線的で急な立ち上がりである。検出面からの壁高は52cmを測る。
床　　面：東カマド付近に貼り床がみられる。
カ マ ド：２基ある。北壁北東コーナー寄りのもの、東壁南東コーナー寄りのものともに火床のみ残存。
遺　　物：覆土から床面まで全般に多い。須恵器坏蓋Ｂ（１他）、同坏Ｂ（２・４他）、同坏Ａ（３・５～10他）、黒色土器Ａ坏Ａ（11）、須恵器壺蓋Ａ（12）、同甕Ａ頸部（13）のうち、３と６は火床上の投棄、他は覆土中より出土した。１は美濃須衛窯産で、４も搬入品か。坏蓋Ｂの端部断面は丸くおさめ、坏Ｂでは多様な法量はなく、高台の外傾が弱くなり外面で接地する。須恵器坏Ａの底部調整は６・10がヘラオコシのちナデ、８が回転ヘラ削りのちロクロナデ、７が静止糸切り、３・５・９が回転糸切りである。11のミガキは精緻である。
所　　見：東カマドの周縁に貼り床があり、火床上に坏が投棄されていることから、東カマドのほうが新しく機能したと考えられる。遺物の大半は埋没過程の投棄である。８世紀半ば頃の住居跡と思われる。該期のまとまった資料は、新幹線地区以外の更埴条里・屋代遺跡群の中では極めて少ない。



第63図　ＳＢ5042

ＳＢ5043（第64図、ＰＬ８）

位　　置：ＸＱ－17

重複関係：ＳＢ5015・5042・5051・5052を切り、ＳＴ5005、ＳＫ5125～5128に切られる。

形　　状：一辺2.6mの方形。

覆　　土：Ⅳ層を基調とする自然埋没で単層である。

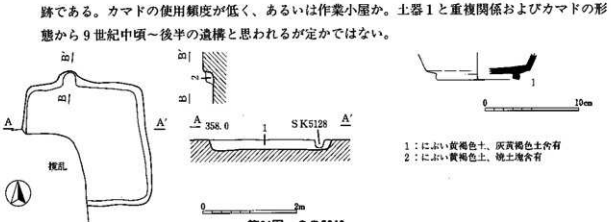
壁　　：Ⅵ層を掘り込み急な傾斜である。床面との境は丸みを帯びる。壁高は検出面から20cm強ある。

床　　面：掘り形をもたずに、Ⅵ層中をﾚﾍﾞﾙ仕上げで床としている。

カ マ ド：北壁のやや西寄りに、壁外張り出しタイプのものが１基ある。壁の内壁がうっすらと焼ける程度で火床は検出できなかった。

遺　　物：覆土中に土器片が少量ある。須恵器坏Ｂ（１）もそのひとつである。

所　　見：カマドの袖は元より無く、壁がそのまま袖のように機能したと思われる。極めて小規模な住居跡である。カマドの使用頻度が低く、あるいは作業小屋か。土器１と重複関係およびカマドの形態から９世紀中頃～後半の遺構と思われるが定かではない。



第64図　ＳＢ5043

ＳＢ5045（第10図）

位　　置：ＸＱ－01

重複関係：ＳＢ5012・5044、ＳＴ5001、ＳＥ5004・5005、ＳＫ5050・5081に切られる。

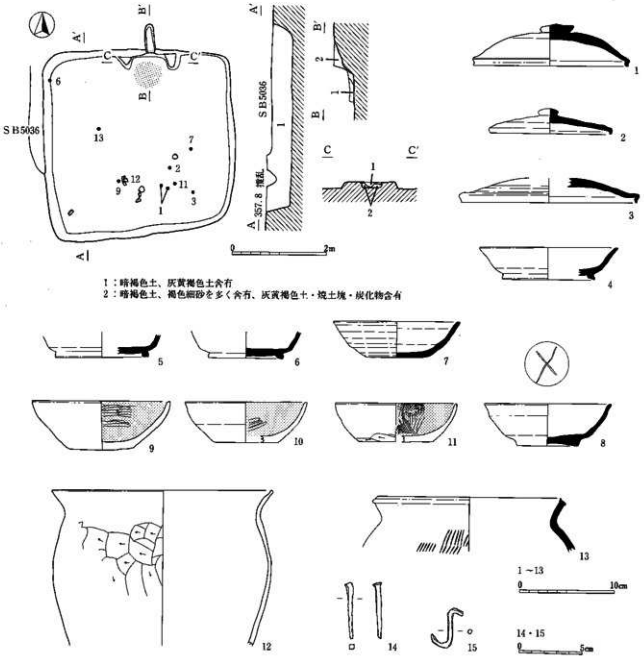
形　　状：西壁際の僅かな部分が切られ残っているのみで、全容は不明である。隅丸方形であるとすると、残存部より一辺3.1mである。

覆　　土：黒褐色土の単層で自然埋没であろう。

壁・床面：掘り形のない軟弱な床から壁は丸く立ち上がる。検出面との比高８cmである。

遺　　物：土器片が２片出土したのみ。

所　　見：住居跡の可能性を全く否定することはできず、不明の竪穴状遺構である。



第65図　ＳＢ5045

ＳＢ5046（第65図、ＰＬ８・15）

位　　置：ＸＬ－22、ＸＱ－02

重複関係：ＳＢ5040・5047、ＳＤ5013を切り、ＳＢ5009・5036・5041、ＳＥ5003、ＳＫ5105・5107・5108・5390に切られる。

形　　状：一辺４ｍの隅丸方形。

覆　　土：単層で基調土と異なる土または土塊を含有し、人為的な埋没様相にある。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み壁は傾斜する。壁高は検出面より52cmを測る。

床　　面：全面的に貼られている。掘り形は調査しなかった。

カ マ ド：北壁のほぼ中央にあり、袖は壁に取り付く部分が残存し、地山を削り出して作られている。よく発達した火床が形成され、袖・壁・煙道の内側も焼けている。

遺　　物：カマドと反対の南壁際に多く投棄されている。土器は須恵器坏蓋Ｂ（１～３）、同坏Ｂ（４～６）、同坏Ａ（７・８）、黒色土器Ａ坏Ａ（９～11）、土師器甕Ｃ（12他）、須恵器甕Ｅ（13）があり、鉄製品は釘（14）と用途不明（15）が出土した。１・３は「く」の字状の口縁端部、美濃須衝窯的な２は三角形状の端部をもち、いずれも天井部のヘラ削り範囲は広い。４は高台中央部が凹んで外側で接地し、５・６は高台がほぼ垂直に降りる。回転糸切り底の７・８の内面底径は、７が6.0cm、８が7.6cmで、８は見込み部にヘラ記号「×」がある。黒色土器では、底部は９・11が手持ちヘラ削り、10がナデ調整され、いずれも定型化以前の形態と思われる。２・７は見込み部平滑で転用硯か。14は4.4×0.5×0.4cm、2.9g。１～３・７・９～13は床面遺物である。

所　　見：重複関係から８世紀末頃の住居跡と思われる。

ＳＢ5047（第66図）

位　　置：ＸＱ－01・02

重複関係：ＳＢ5012・5036・5046、ＳＤ5013、ＳＥ5004、ＳＫ5004～5006に切られる。

形　　状：切られている部分が多いが、方形だとすれば残存部より一辺3.1mである。

覆　　土：単層でⅣ層基調だが、基調土と異なる土を多く含み、人為的埋没の疑いがある。

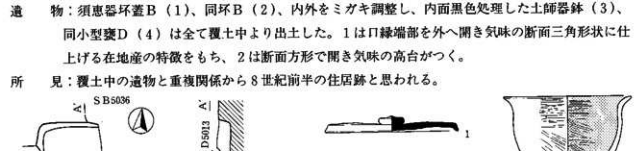
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、急な傾斜の立ち上がりで、検出面からの壁高は26cmを測る。

床　　面：Ⅵ層中を平坦に仕上げて床とし、軟弱である。

カ マ ド：在ったとすれば北壁か東壁であるが、切られて不明である。

遺　　物：須恵器坏蓋Ｂ（１）、同坏Ｂ（２）、内外をミガキ調整し、内面黒色処理した土師器鉢（３）、同小型甕Ｄ（４）は全て覆土中より出土した。１は口縁端部を外へ開き気味の断面三角形状に仕上げる在地産の特徴をもち、２は断面方形で開き気味の高台がつく。

所　　見：覆土中の遺物と重複関係から８世紀前半の住居跡と思われる。



第66図　ＳＢ5047

ＳＢ5048（第９図）

位　　置：ＸＶ－12・13

重複関係：ＳＫ5428に切られる。

形　　状：西半が調査区域外で全容は不明。方形だとすれば一辺2.6mである。

覆　　土：単層。自然埋没。

壁　　：Ⅵ層を掘り込んでおり、傾斜する。壁高は検出面から10cm前後である。

底　　面：不明確で軟弱である。

遺　　物：覆土中に土器片が僅少。

所　　見：住居跡とする根拠は無い。時期不明の竪穴状遺構である。

ＳＢ5049（第67図、ＰＬ８）

位　　置：ＸＶ－12・17

重複関係：なし。

形　　状：西半が調査区域外で全容は不明。隅丸方形だとすれば一辺3.2mである。

覆　　土：単層で自然埋没である。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、傾斜する。壁高は検出面から30cmである。

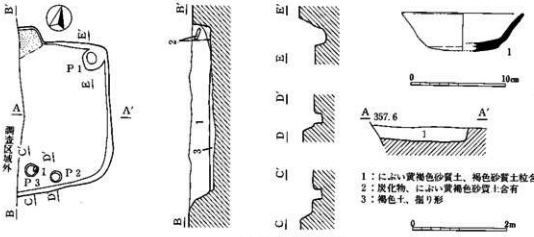
床　　面：浅い掘り形を埋めると同時に貼り床し、堅緻である。

ピ　ッ　ト：小ピットが３基見つかった。２基は壁柱穴気味だが、柱穴ではないだろう。

カ　マ　ド：北壁中央と思われる位置に在り、張り出しカマドと思われるが調査区域外に続くうえ、調査区域内は重機で削平してしまい、判然としない。

遺　　物：覆土・床面とも全般に少ない。須恵器坏Ａ（１）がＰ３上の床面レベルに投棄されていた。底部もロクロナデされ、白色で美濃須衛窯産か。

所　　見：単層なので遺物の帰属性は不明確だが、８世紀前半の住居跡と思われる。



第67図　ＳＢ5049

ＳＢ5050（第９図、ＰＬ９）

位　　置：ＸＶ－13・18

重複関係：なし。

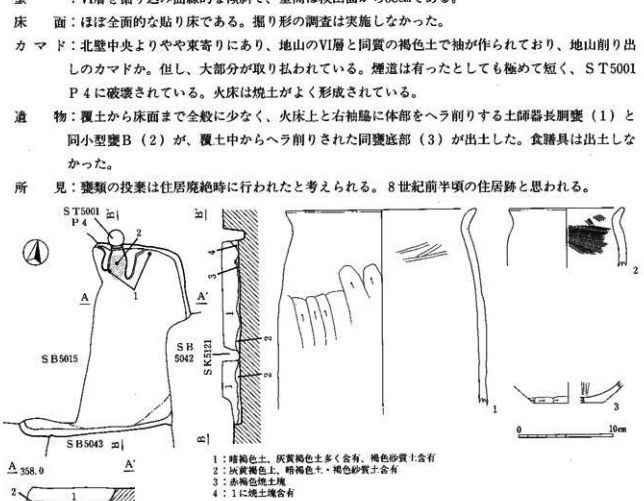
形　　状：方形と思われる。主軸方向で煙道を除いて4.6mあるが、東西軸のうち東半は調査区域外と排土の都合で調査できなかった。

覆　　土：単層。自然埋没であろう。

壁・床面：検出面から5～8cmで床となり、壁の状況は判らない。床はⅥ層中を平坦に仕上げ軟弱である。
カ マ ド：煙道のみ残存し、袖・火床は確認できなかった。煙道もほとんど焼けていない。
遺　　物：土器片僅少。
所　　見：ＸＶ区以南の５区は８世紀代の住居跡しか存在しておらず、本跡も８世紀代か。

ＳＢ5051（第68図、ＰＬ５）

位　　置：ＸＱ－02・07
重複関係：ＳＢ5015・5042・5043、ＳＴ5001・5005、ＳＫ5093～5095・5113・5114・5120～5123に切られる。
形　　状：切られている部分が多いが、4.0×3.8mの隅丸方形であることが判る。
覆　　土：２分層してあるが漸移的であり、基調土と異なる土が混在し、人為的埋没と思われる。
壁　　：Ⅵ層を掘り込み曲線的な傾斜で、壁高は検出面から38cmである。
床　　面：ほぼ全面的な貼り床である。掘り形の調査は実施しなかった。
カ マ ド：北壁中央よりやや東寄りにあり、地山のⅥ層と同質の褐色土で袖が作られており、地山削り出しのカマドか。但し、大部分が取り払われている。煙道は有ったとしても極めて短く、ＳＴ5001Ｐ４に破壊されている。火床は焼土がよく形成されている。
遺　　物：覆土から床面まで全般に少なく、火床上と右袖脇に体部をヘラ削りする土師器長胴甕（１）と同小型甕Ｂ（２）が、覆土中からヘラ削りされた同甕底部（３）が出土した。食膳具は出土しなかった。
所　　見：甕類の投棄は住居廃絶時に行われたと考えられる。８世紀前半頃の住居跡と思われる。



第68図　ＳＢ5051

ＳＢ5052（第69図、ＰＬ９・15・16）

位　　置：ＸＱ－06・07・11・12
重複関係：ＳＢ5016・5035・5039・5042・5043、ＳＴ5005、ＳＫ5126～5128・5141～5144・5152～5155・5188～5190他ＳＫ多数に切られる。
形　　状：5.0×4.7mの隅丸方形。
覆　　土：３～４種類の土質が斑状に混在しており、人為的な埋没様相にある。

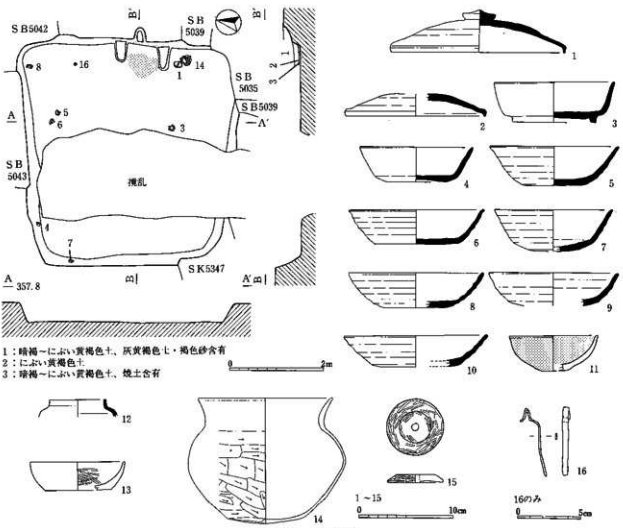
壁　　：床面と明確な境をもって傾斜する。Ⅵ層を掘り込み、検出面からの壁高は最深54cmを測る。

床　　面：全面的な貼り床である。

カ マ ド：東壁ほぼ中央にあり、地山削り出し方式で構築されている。袖間の幅は広く、袖の上半は取り払われている。火床は焼土がよく形成され、袖・壁・短い煙道の内側も焼けている。

遺　　物：覆土中に多い。須恵器坏蓋Ｂ（1・2）、同坏Ｂ（3）、同坏Ａ（4～10）、内外面黒色処理した土師器坏（11）、口径6cmの須恵器短頸壺（12）、底部糸切り痕のある灯明専用器と思われる土師器坏Ａ（13）、同武蔵型の小型甕Ｃ（14）、土師質の紡錘車（15）、鉄製品は鍋子（16）があり、1・3は床面、他は覆土の出土である。1・2の口縁端部は断面Ｓ字状にならず、丸い。3は外面接地の高台径が広く、転用硯の疑いがある。須恵器坏Ａの底部調整では、4が回転糸切り、5がナデ、6が糸切りのち手持ちヘラ削り、7が手持ちヘラ削り、8～10がヘラオコシのちナデである。4・6の内面底径はそれぞれ7.3cm、8.4cmである。16は長さ5.5cm、厚さ0.1cm。

所　　見：8世紀半ばの住居跡と思われる。大幅に攪乱されているもののカマドも残り、良好な遺物のセットは更埴条里・屋代遺跡群の中でも最も少ない該期の貴重な資料を呈示している。



第69図　ＳＢ5052

ＳＢ5053（第10図）

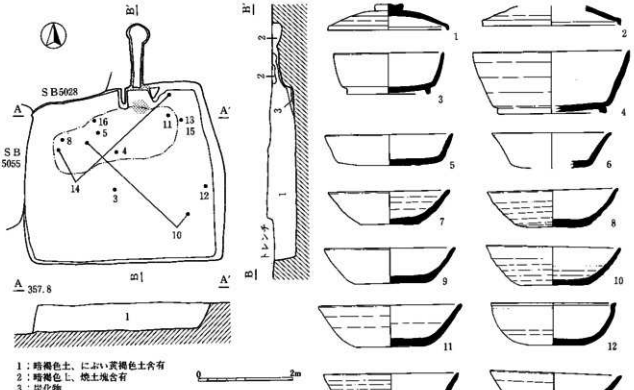
位　　置：ＸＱ－01

重複関係：ＳＢ5010を切る。

形　　状：ほとんどが調査区域外のため不明。

覆　　土：Ⅳ層が単層で自然堆没する。
壁　　：ＳＢ5010の固い貼り床を壊して掘り込まれ、ほとんど垂直である。ＳＢ5010より20cm強深い。
床　　面：不明確な貼り床で、ごく浅い掘り形がある。
遺　　物：覆土中からは須恵器片の出土が多かった。
所　　見：竪穴住居跡のコーナーだと思われる。８世紀代の住居跡であろう。

ＳＢ5054（第70図、ＰＬ９・15）
位　　置：ＸＱ－22、ＸＶ－02
重複関係：ＳＢ5056を切り、ＳＢ5028・5033・5055、ＳＫ5355・5356、ＳＬ5001に切られる。
形　　状：3.8×4.3mのやや歪んだ長方形。
覆　　土：単層で自然堆没。
壁　　：東壁を除き、ほぼ垂直である。Ⅵ層を掘り込み、検出面からの壁高は56cmと深い。
床　　面：カマドの前方に堅緻な部分がある。掘り形を埋め戻しただけの床である。
カ マ ド：北壁中央よりやや東寄りにあり、袖は３割程度残存し、地山削り出しカマドである。火床は小さいがよく焼け、袖・壁の内側、長めの煙道の内壁と先端もよく焼けている。
遺　　物：覆土下層に多い。須恵器坏蓋Ｂ（１・２）、同坏Ｂ（３・４）、同坏Ａ（５～15）、黒色土器Ａ坏Ａ（16）があり、４・14が床面、11～13・15が覆土上層、他は覆土下層で出土した。１の端部断面は三角形状でわずかに開き気味につくりだされる。２の端部は初源的な「く」の字状。坏ＢではⅢ（４）とⅤ（３）の２法量がみられ、高台径は大きい。須恵器坏Ａの底部調整では、５・12



第70図　ＳＢ5054

が回転ヘラ削り、美濃須衛窯産の6がロクロナデ、7・9・10・15がヘラオコシ、8が手持ちヘラ削りのちナデ、11・13・14が回転糸切りで、回転糸切りの比率は2割強である。11・13・14の内面底径は8.4～9.4cmである。16は坏E的な形態を残しながら、平底でロクロナデされる。

所　　見：遺物は廃絶後間もなく投棄されたものが多い。8世紀半ばの典型的な住居跡である。屋代遺跡群では集落が最も希薄となる時期であり、遺物の良好なセットは貴重な資料呈示になろう。

ＳＢ5055（第71図、ＰＬ９・17）

位　　置：ＸＱ－21・22、ＸＶ－01・02

重複関係：ＳＢ5054・5056を切り、ＳＢ5028、ＳＫ5356・5377・5457に切られる。

形　　状：3.5×3.8mのやや台形状に歪んだ隅丸方形。

覆　　土：4分層でき、レンズ状の自然堆積。

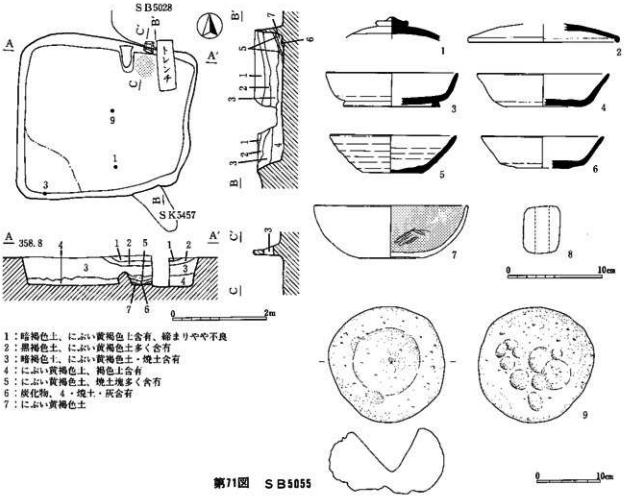
壁　　：Ⅵ層を掘り込み垂直に近い傾斜で、検出面からの壁高は最深部で60cmを測る。

床　　面：ほぼ全面的に貼られている。床下調査は実施できなかった。

カ マ ド：北壁中央より東寄りにある。袖は地山削り出し方式で、上半を取り払われている。トンネル状の煙道が確認できたが、ＳＢ5028に切られている。火床は焼土がよく形成されている。

遺　　物：掲載遺物は全て覆土出土で、須恵器坏蓋Ｂ（1・2他）、同坏Ｂ（3）、同坏Ａ（4～6他）、出現期の黒色土器Ａ坏Ａ（7）、土師質の土錘（8）、安山岩製石鉢（9）がある。2は美濃須衛窯産である。回転糸切り底の4の内面底径は7.5cm、5・6の底部調整はヘラオコシである。

所　　見：遺物は埋没過程の投棄と見られ、本跡は8世紀中頃の住居跡である。



第71図　ＳＢ5055

ＳＢ5056（第72図、ＰＬ９）

位　　置：ＸＱ－21・22、ＸＶ－02

重複関係：ＳＢ5028・5054・5055、ＳＫ5357に切られる。

形　　状：南側５分の２を切られて失っているが、一辺4.1mの隅丸方形であろう。

覆　　土：堆積状況等不明である。

壁　　：南壁と北壁で原形を確認でき、壁高は最深部で56cmを測る。

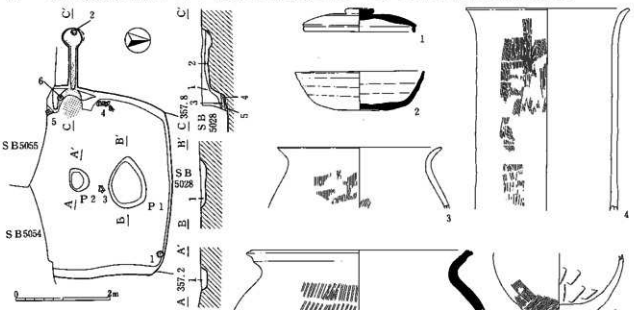
床　　面：全面的に貼られている。

ピ ッ ト：中央付近にごく浅いものが大小計２基ある。

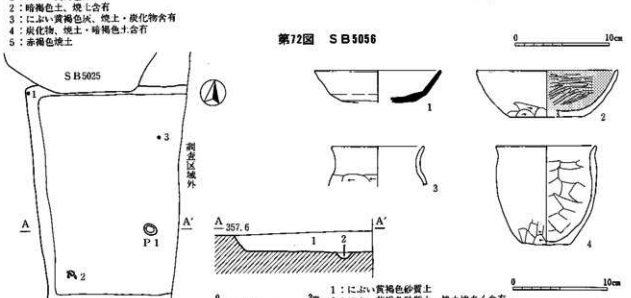
カ マ ド：地山削り出しのカマドが西壁にあり、火床、袖の内側、長めの煙道の内側と先端はよく焼けている。袖の先端はＳＢ5028に破壊されている。

遺　　物：床面南東コーナーより須恵器坏蓋Ｂ（1）、煙道先端より同坏Ａ（2）、カマド左袖内外から同甕Ｅ（5）と土師器鉢（6）、覆土および右袖脇床面より同甕Ｂ（3・4）が出土した。

所　　見：住居廃絶時、カマドを中心に土器が投棄されている。８世紀前半頃の住居跡である。



第72図　ＳＢ5056



第73図　ＳＢ5058

ＳＢ5058（第73図、ＰＬ９）

位　　置：ＸＱ－17・18・22・23

重複関係：ＳＢ5057、ＳＫ5459を切り、ＳＢ5025・5029・5030・5031、ＳＴ5003、ＳＫ5275・5459に切られる。

形　　状：東側３分の１が調査区域外だが、一辺4.7mの方形と考えられる。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、床面との境は明瞭で、直線的に傾斜する。

床　　面：全面的に貼られている。

ピ　ッ　ト：浅い小ピットが１基ある。

カ　マ　ド：調査区域外の東壁にあるものと思われる。

遺　　物：全般に少なく、須恵器坏Ａ（１）は覆土、黒色土器Ａ坏Ａ（２）は床面、土師器小型甕Ｃ（３・４）はそれぞれ床面と覆土より出土した。４底部には木葉痕がある。

所　　見：重複関係から８世紀前半頃の住居跡と思われる。

(2) 溝跡

溝跡は規模・形状・方向に様々なものがあり、39条を平安時代以前の所産とするが、ＳＤ3002～3005・3006はＳＬ3001の、ＳＤ3012～3019はＳＬ3002の畝間と考えられることから、これらも除くと25条を数えることができる。ほとんどが用途不明である。

ここでは、規模・形状・出土遺物などから特異なもの５条だけを個別に記す。

ＳＤ3001（第７図）

位　　置：ⅩⅡＬ－14・15にあり、Ⅵ層上面で検出された。

重複関係：ＳＫ3001を切る。

形　　状：調査区域内における全長は9.2m、幅約1.7mで、北側が浅く南側が深い２段構造で、浅い部分は皿状、深い部分は弓状の断面形を成す。検出面からの深さは、浅い部分が30cm以内、深い部分が45cm以内の比高差をもつ。底部は凹凸がある。東端で突如として終わっており、端部は角張って作り出されている。ほぼ東西方向に走る。

覆　　土：Ⅳ層を主体としてⅥ層のブロックが多く含有される。自然埋没か。

遺　　物：土器片が３片出土しただけである。

所　　見：本溝跡を境に北側にＳＬ3001、南側にＳＬ3002が展開する。このＳＤ3001を境に、北側のＳＬ3001の畝は明瞭だが、南側のＳＬ3002の畝は不明瞭である。両畠跡が同時期に存在したものと仮定した場合、両畠跡に若干の比高差があったか、利用のされ方が異なっていたということが考えられる。本溝跡は、２つの畠跡の利用に関連した溝の可能性が考えられるとともに、畠界の区画的な溝とも考えることができる。２段構造については、利用が繰り返された結果であると考えられ、当初は狭い幅で深く、後に幅広で浅く掘られたものと解釈した。黒色土器を含んでいることやＳＬ3001と集落との関係、覆土のあり方から９世紀代に所属すると思われる。

ＳＤ5002（第74図）

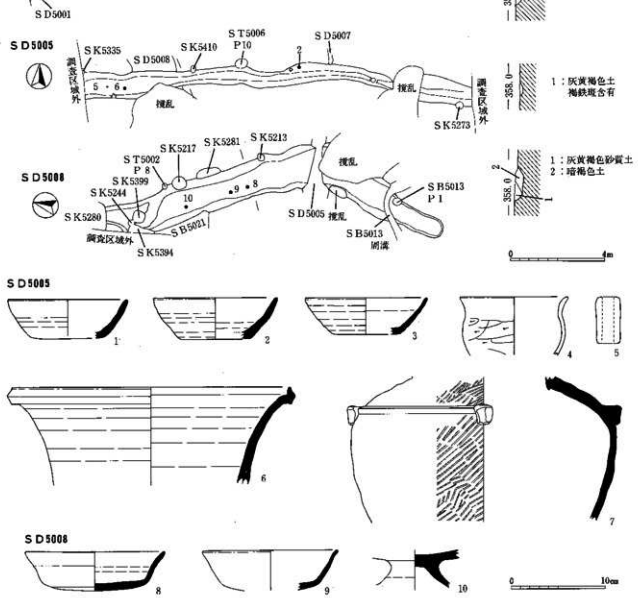
位　　置：ＸＬ－11・12・16・17・22、ＸＱ－02を縦断する。

重複関係：ＳＢ5002～5005・5009・5036・5041・5042、ＳＤ5001・5003・5004・5010・5018、ＳＫ5001・5012に切られる。

形　状：調査区域内における全長28.7m、最大幅1.8m、検出面との比高差は最深91cmで、断面形はゆるやかなV字状を成す。北々西から南々東方向にゆるやかに蛇行する。検出面まで立ち上がるのは北端のごく一部で、あとは各遺構に上部を削平されている。

覆　土：Ⅵ層よりわずかに色調を暗くした砂質土が単層で自然埋没する。他の遺構には見られない。

所　見：８軒の住居跡、５条の溝跡に切られ、すべての遺構より古い。居住が開始される８世紀はじめ以前に存在した溝と考えられ、弥生時代・古墳時代の溝である可能性も十分ある。断面形状から見ても人為的なものであることは間違いないが、全く遺物を含まないのは、居住が開始される８世紀までには完全に埋没しきっていたということを表している。



第74図　ＳＤ5002・5005・5008

ＳＤ5004（第10図）

位　　置：ＸＬ－16・17を東西に横切る。

重複関係：ＳＢ5002・5014、ＳＤ5012、ＳＫ5013～5015・5393・5402を切る。

形　　状：幅3.6m、調査区域内での全長10.0m、検出面からの深さ40cmを測る。幅があるわりには浅い。断面形は皿状であり底部は平坦である。

覆　　土：暗褐色の砂質土で２分層され、下層に褐鉄斑が沈着しており、自然埋没であろう。

遺　　物：比較的多い。覆土中に８～９世紀代の土師器片、須恵器片を含んでいるが、破片ばかりで図化し得るものは無かった。

所　　見：５区の遺構の中では新しいと考えられるが、９世紀後半には本溝の埋没が完了したと思われる。

ＳＤ5005（第74図、ＰＬ11・15）

位　　置：ＸＱ－11・12・16・17・18を東西に横切る。

重複関係：ＳＤ5008、ＳＫ5298・5413を切り、ＳＴ5006、ＳＤ5007、ＳＫ5273・5282・5410に切られる。

形　　状：最大幅1.1m、調査区域内での全長16.6m、検出面からの比高は最深36cmを測る。断面形は弓状である。

覆　　土：単層でⅣ層を基調とする自然埋没であろう。下部で褐鉄斑が集積している。

遺　　物：須恵器坏Ａ（１～３）、土師器小型甕Ｃ（４）、須恵器甕Ａ（６）、同甕Ｄ（７）、土師質土錘（５）を図化した。２は底部、他は覆土中の出土である。１～３はすべて回転糸切り底で、その内面底径は6.0～6.8cmである。７は体部全面に平行叩き目が施され、四耳部は無孔、断面四角形の凸帯付四耳壺である。

所　　見：遺物のほとんどは埋没時の混入または投棄であろう。９世紀前半頃の溝と思われる。区画溝と考えられるが、本溝で分けられる南北に集落内の差異はあまり見いだせない。

ＳＤ5008（第74図、ＰＬ11・15）

位　　置：ＸＱ－11・16

重複関係：ＳＢ5013・5021～5023、ＳＴ5002、ＳＤ5005、ＳＫ5213・5217・5219・5224・5281・5334・5394・5400に切られる。

形　　状：平均幅1.5m、残存長15.2m、検出面からの深さ最深43cmを測る。断面形はゆるやかなＵ字状を成す。ＸＱ－16グリッドの北端から南へ1.5m付近で進路が変わり、それ以北は北々西―南々東方向、以南は北々東―南々西方向に走る「へ」の字状の溝である。北端はＳＫ5280に切られて不明だが収束しつつあり、ほぼ全長が残存していよう。

覆　　土：第１層は８世紀頃に特徴的な埋土で、遺物の大方はこの層から出土している。第２層は地山のⅥ層に酷似した自然埋没土である。

遺　　物：埋没の終末段階で、須恵器坏Ａ（８・９）と同盤（10）が投棄されている。

所　　見：８世紀前半頃の溝と考えられる。用途は不明である。

(3) 土坑

２区から５区までで521基の土坑を検出した。これらのうち５区の土坑が424基あるが、５区では中世の土坑が古代と同一の検出面で見つかっており、埋没している土質の差異によって整理段階で中世土坑の分離を試みた。結果、５区の土坑の４分の３にあたる317基は中世土坑に相当すると判断でき、これらと４区

に1基だけある弥生時代のものを除いて、203基を古代の土坑として扱うことができる。しかし、これらの大半は用途不明であり、何も遺物が出土しないか、出土しても埋没時混入と考えられ、遺構への帰属性を認め得ないものであった。

ここでは、規模・形状・出土遺物などから特異なもの3基だけを個別に記す。

ＳＫ3050（第75図、ＰＬ11）

位　　置：XIIＧ－14

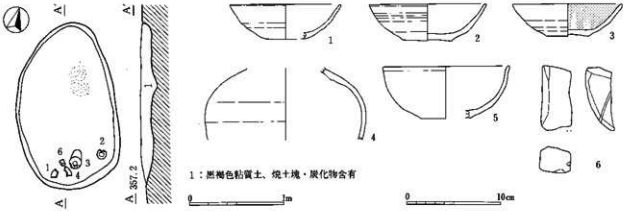
重複関係：ＳＢ3010の覆土を掘り込んでおり、土の差で明瞭。

形　　状：長軸176cm、短軸105cmの長円形で、最深部は検出面より18cmと浅く、断面形は皿状を成す。底部は凹凸があり、北側に焼土の集中がある。焼土はブロック状で原位置にはなく、火床のようなものではない。

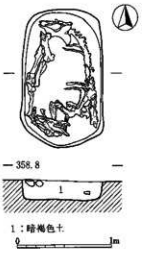
覆　　土：焼土塊、炭化物を含有する単層で、多くの土器を投棄してから人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺　　物：土師器坏Ａ（1・2・5）、黒色土器Ａ坏Ａ（3）、土師器長頸壺（4）、砂岩の砥石（6）が南坑壁際にまとまって投棄されていた。1・2・5の口径・器高はそれぞれ、11.8・12.6・13.6cm、3.7・4.3・5.5cmである。

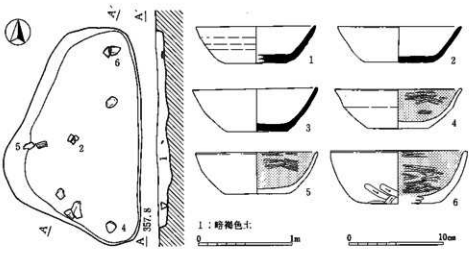
所　　見：10世紀前半頃の遺構と考えられる。ごみ捨て穴か。



第75図　ＳＫ3050



第76図　ＳＫ5382



第77図　ＳＫ5390

ＳＫ5382（第76図、ＰＬ11）

位　　置：ＸＱ－21

重複関係：なし。

形　　状：長軸146cm、短軸86cmの隅丸方形。検出面との比高は20cmを測る。断面形はタライ状で、Ⅵ層上面をほぼ垂直に掘り込んでいる。

覆　　土：墓であり、人為埋没である。

遺　　物：馬１頭分の骨が出土した。土器は須恵器大甕片（甕Ａか？）２片が胸と腹の上に置かれていた。破片のため図化し得ず掲載できない。

所　　見：馬１頭分を丸めてぎりぎり収まる最小限の大きさの土坑である。更埴市で３例めの馬の土坑墓で、１頭分の入るぎりぎりの穴を据って丸めて入れられた様子は生仁遺跡例とよく似る。須恵器片は、大きめの破片であることから埋め戻し時に偶然に紛れ込んだとは考えられず、馬と共に入れられたものと考えた。この土器と、埋土の在り方から９世紀代の墓と思われる。馬は水霊信仰の魂鎮めとしての“贄”＝捧げ物という認識で捉えられることが多いが、本坑の場合は供献とする根拠がなく、埋葬例と考えられる。骨の鑑定結果は付章を参照されたい。

ＳＫ5390（第77図、ＰＬ15）

位　　置：ＸＬ－22、ＸＱ－02

重複関係：ＳＢ5009・5036・5046を切る。

形　　状：長軸231cm、短軸147cmの隅丸三角形で、不整形といった方が良いか。検出面との比高は20cm弱である。断面形は皿状で、壁は西半が緩やか、東半では垂直に近い。

覆　　土：微量の焼土粒・炭化物が含まれていたが、人為的に埋め戻した状況は看取れなかった。

遺　　物：回転糸切り底の須恵器坏Ａ（１～３）、黒色土器Ａ坏Ａ（４～６）が底面上に投棄され、散在していた。１～３の内面底径は6.6～7.6cmで、２はやや軟質である。４～６内面は縦方向のミガキはみられず、底部は手持ちまたは回転ヘラ削りされる。

所　　見：９世紀前半頃の遺構と考えられる。ごみ捨て穴か。

(4) 畠跡

３区で３面、５区で１面、合計４面の畠跡が確認された。３区では、ⅩⅡＧ－14グリッド以南からⅩⅡＱ－10グリッド以北までにＳＬ3001～3003が拡がっている。５区ではＸＶ－01～03・06～08グリッド付近にＳＬ5001が拡がっている。いずれもⅥ層上面を検出面として、Ⅳ層またはⅣ層を基調とする土が畝間に残る状態で溝状の列として確認された。畝間の深さは10cm前後である。実際にはもっと広範囲にわたって畠跡が展開していたことも考えられる。ＳＬ3001とＳＬ3002は一本の溝跡ＳＤ3001で隔てられているのみである。またＳＬ3002とＳＬ3003も隔絶しているようだが、中間の空白部にも畝が存在していたとも考えられる。これらのことからＳＬ3001～3003は一連なりの畠であった、即ち比較的大規模な生産域が存在していたという可能性も十分あり得る。

ＳＬ3001（第78図、ＰＬ２）

位　　置：ⅩⅡＧ－14・18～20・23～25、ⅩⅡＬ－03～05・09・10・14・15

重複関係：ＳＢ3002・3004、ＳＫ3034・3035を切り、ＳＢ3001、ＳＫ3002～3005・3011・3030・3054他ＳＫ多数に切られる。

検出状況：Ⅵ層上面で検出された。検出されたのは畝間である。畝間にはⅣ層そのものが埋没するが、Ⅵ層土のブロックを20％以内で含有しているものもある。畝間の断面形はＵ字状を成す。畝間の幅は20～30㎝前後で、40～50㎝前後の間隔で出現することを基本とする。畝間は全部で38条が確認されたが、さらに倍近い畝が存在したものと思われる。畝間の長さは調査区域外まで伸びるので、ひとつの畝はかなり長い。畝間の方向はほぼ東西方向だが、真東よりも２～３度北へ振る傾向にある。本跡全体の幅は41.4ｍあり、調査区域内の面積で430㎡に及ぶ。南端にはＳＤ3001が在って、そこで終わる。

遺　物：検出時に須恵器、黒色土器Ａ、同Ｂ、灰釉陶器、土師器の破片があったがいずれも細片で図化し得ない。

所　見：本跡の時期を重複関係で考えると、先ずＳＢ3002・3004を切るが、住居跡の時期が特定できないため上限は設定できない。ただ本遺跡に居住が始まるのが８世紀前半であることから、８世紀以降の畠跡である。一方、９世紀半ば～後半のＳＢ3001に切られ、ＳＢ3003・3005・3007・3008・3012等９世紀半ば以降の住居跡の内部には畝間が横切らないことから、９世紀半ば以前の畠跡ということがいえる。次に遺物から本跡の時期を探ると、上面から黒色土器Ｂや灰釉陶器が出土しており、９世紀中頃～後半頃の畠跡となる。以上を総合し、本跡には９世紀半ば頃という時期が与えられる。一重山の麓から連続する生産域と居住域との境はⅫＧ－14～ⅫＬ－04グリッドの辺りにあり、その境目は時期により変動した、即ち居住域を生産域に、生産域を居住域にという変換が行われるのが分かる。なお、本跡南端にはＳＤ3001があり、ＳＤ3001の項でも記述した通り、この溝跡は本跡に関連しているとも考えられ、この溝を隔ててＳＬ3002が展開している。

ＳＬ3002（第７図）

位　置：ⅫＬ－19・20・25

検出状況：Ⅵ層上面で検出された。ＳＤ3001を隔ててＳＬ3001から畠跡が連続している。溝跡として登録したＳＤ3012～3019は畝間と考えられる。埋没土はⅣ層であるがＳＬ3001のような明瞭な状況になく最深でも７㎝で底に達し、痕跡といった状態である。畝間の方向はほぼ東西方向、真東よりも２－３度南へ振る傾向にあるが、確認部分が僅かなため判然としない。

遺　物：検出時、黒色土器Ａ坏Ａの細片が１片みつかった。

所　見：確認された部分はごく一部に過ぎないと考えられる。このため実際の規模は分からない。一応、ＳＬ3001と同時期で連続しているものと考えており、出土した土器片１片もこれに矛盾しない。本跡の西側または範囲に位置するＳＢ3016とは直接重複しないが、上述の状況から本跡の方がＳＢ3016より後発の遺構と考えられる。

ＳＬ3003（第78図、ＰＬ２）

位　置：ⅫＱ－05・10、ⅫＲ－01・06

検出状況：検出面、埋没土はＳＬ3001・3002と同じである。畝間の間隔はＳＬ3001と同じであると思われるが、ＳＬ3002と同じく残様であり規模は不明である。畝間の最深部は検出面から８㎝である。ＳＬ3001・3002にはみられなかった南北方向の畝間があり、東西方向の畝間がこれにほぼ直交して切っている。

所　見：遺物は出土しなかったが、検出面や埋没土のあり方、畝間の形状や間隔、周縁の検出状況や重複関係から、ＳＬ3001～3003は一連の畠跡と考えられる。

ＳＬ5001（第78図、ＰＬ２）

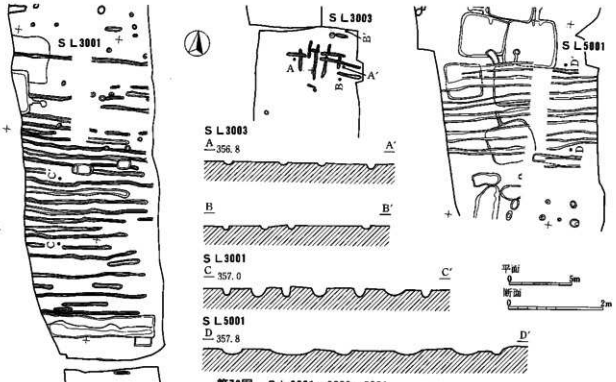
位　　置：ＸＶ－01～03・06～08

重複関係：ＳＢ5032～5034・5054、ＳＤ5009、ＳＫ5457を切る。

検出状況：Ⅵ層上面で検出された。検出されたのはやはり畝間であり、６条の畝間が間断無く調査区の西から東へ横切る。畝間への埋没土は褐色～暗褐色の砂質土で、Ⅵ層が土壌化したもののようにも思えるが１・２区のⅤ層程は腐植が進行していない。この埋没土は、基本的にはⅣ層が若干異なる色調を帯びて、異相を成したものと考えられる。畝間幅はＳＬ3001～3003に比して50～70cm前後と倍以上の幅をもつ。畝間の深さは検出面より５～10cmで断面形は弓状を成し、幅のある割りに深くはない。畝間の間隔すなわち畝幅は40～100cm前後と、これも広い。最も南側の畝間のすぐ脇から、近世から現代と思われる新しい水田造成により削平されてしまっているため、実際にはさらに南側へ連続していたものと思われる。調査区域内の残存する部分の面積は90m²と算出された。

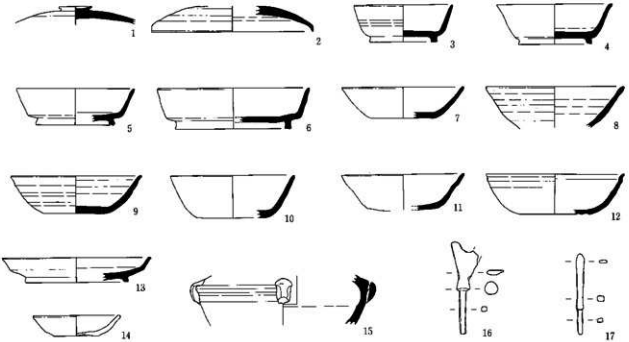
遺　　物：検出時に８～９世紀代の須恵器、黒色土器Ａ、土師器の破片と中世の内耳鍋、山茶碗の細片が出土した。このうち、８世紀代の須恵器坏Ａを２個体実測した（第79図、22・24）。底部は22が回転ヘラ削りのちナデ、24が回転糸切りで、いずれもやや軟質である。

所　　見：本跡が８世紀代の住居跡群の上部を耕作するものであることから第79図22・24の出土は説明でき、グリッド遺物として取り上げた上、本跡への帰属性が明らかでないため、遺構外遺物として掲載した。いずれも８世紀半ば～後半に相当する遺物である。中世の遺物は、検出面直上がⅢ層（中世生産域相当層）であることから、層理面にあったものと考えられ、畝間の埋没土の土質が中世のそれではないことからも本跡に帰属するものではないと考えられる。重複関係からは９世紀はじめ以降、出土遺物からは決め手に欠けるが、ＳＬ3001～3003との併存性は指摘できる。

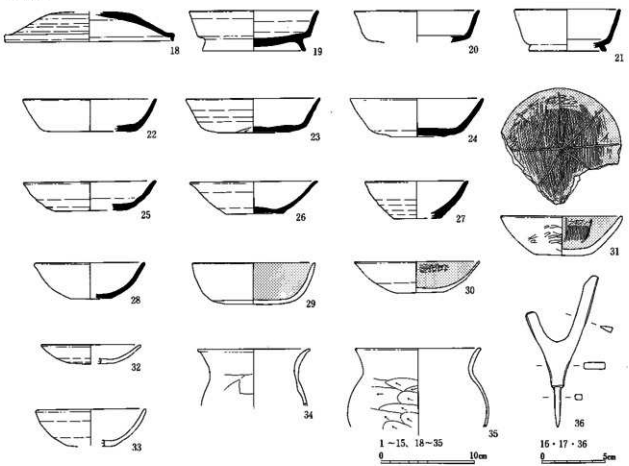


第78図　ＳＬ3001・3003・5001

その他の遺構



遺構外



第79図　その他の遺物

(5)　その他の遺物（第79図、ＰＬ15・16）

紙数の都合により遺構の個別図は掲載できなかったが、１～17は遺物のみを掲載した。土器は、須恵器坏蓋Ｂ（１・２）、同坏Ｂ（３～６）、同坏Ａ（７～12）、同盤（13）、土師器坏Ａ（14）、須恵器甕Ｄ（15）、鉄製品は鉄鎌（16・17）を図化した。

須恵器坏Ｂは、いずれも底部を回転ヘラ削り調整するが、３は中央に回転糸切り痕が残る。法量は３～５が坏ＢＶ、６が坏ＢⅡに相当する。６は転用硯か。須恵器坏Ａは、10が回転ヘラ削り、11が手持ちヘラ削り、７・９・12が回転糸切りの底部をもつ。８～10はやや軟質である。13は底部を回転ヘラ削り調整し、内外面に火だすきがある。14はロクロ成形で底部回転糸切り未調整である。15の凸帯および耳部は台形状を成し、耳部の孔は貫通する。15は美濃須衛窯～灰釉的である。16は雁又鎌、17は尖根鎌である。

１はＳＫ5037、２はＳＫ5007、３・４・７はＳＤ5006、５はＳＫ5355、６はＳＫ5406、８はＳＫ5032、９・17はＳＫ5125、10はＳＫ5146、11はＳＫ5458、12はＳＫ5368、13・16はＳＫ5115、14はＳＫ5340、15はＳＫ5281から出土した。

遺構外の遺物は18～36を掲載した。土器は、須恵器坏蓋Ｂ（18）、同坏Ｂ（19～21）、同坏Ａ（22～28）、黒色土器Ａ坏Ａ（29～31）、土師器坏Ａ（32・33）、同小型甕Ｃ（34・35）、鉄製品は鉄鎌（36）を図化した。

19・21は外側に踏ん張る高台をもち、19は底部を回転ヘラ削りで調整、21は調整不明である。20は高台が剥離している。法量は19・20が坏ＢⅣ、21が坏ＢⅤに相当する。22・25は底部を回転ヘラ削りのちナデ、23は底部をナデ、他は回転糸切り底である。22・24はやや軟質である。29・30は底部を回転ヘラ削りする。31の内面のミガキは精緻かつ特異である。32・33は底部回転糸切り未調整である。36は雁又形で、幅5.5㎝、厚さ0.8㎝、茎部は無欠損である。

18・19はＸＱ－06、20はＸＱ－23、21・35はＸＱ－07、22・24はＸＶ－07、27はＸＱ－22、29・34はＸＱ－21、30はＸＬ－21、31はＸＱ－12、36はⅢＧ－13の各グリッド、23・26は５区試掘坑、32・33は３区試掘坑から出土し、25・28は５区表面採集遺物である。

3　中世

中世の遺構は５区ＸＶ－12以北に数多く拡がっている（第11・12図）。遺構には掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、火葬施設、土坑がある。検出面ではⅥ層上面で古代遺構と同時に調査した。遺物は僅少で、青磁碗・白磁皿片、石臼がごく一部の遺構から見つかったのみである。これらを出土した埋没土と同質の土を覆土にもつ遺構を中世に所属するものとして、整理段階で古代遺構と分離した。この土は中世に特徴的な漆黒色から黒褐色の砂質土であり、大方は古代遺構の覆土と明瞭に区別できた。中世の遺物のみ、または中世遺物と古代遺物の双方を出土したものは中世の遺構とし、古代遺物のみを出土したものについては覆土の質によって中世遺構と古代遺構を分類した。このため何も出土しない大多数の土坑のうち、一部の遺構では古代遺構か中世遺構か判断に苦しむものもあり、両者が錯綜して分離の完全性に欠ける面も排除できず、限界を感じた。ここでは、掘立柱建物跡の全て、井戸跡の全て、１基のみ見つかった火葬施設、特徴的な方形土坑を扱うこととし、大多数の円形土坑については項を設けない。円形土坑は303基を数え全般に深いという特徴がある。径の小さなものでもかなり深いものもある。大部分は単層自然埋没で断面Ｕ字状かＶ字状であり、遺物は皆無である。

４区以南の中世の様相は極めて希薄であり、５区にみられる中世に特徴的な漆黒～黒褐色の砂質土は存在していない。確実に中世と認め得るものは４区の井戸跡１基のみである。３区以南の中世は水田が展開しており（Ⅲ層）、その上面は近世から現代の水田に撹拌されて畦や田面が残っていないことから、試掘後

の調査対象からはずれた。2区には時期不詳の掘立柱建物跡が1基あるが、中世の遺構である可能性があり、これもここで扱いたい。4区以南には以上の2つしか遺構がないため、その2つのみを掲載するだけの遺構分布全体図は作成せず、4区以南では古代の遺構分布全体図に含めて位置を表し、中世であることを明記した（第7・8図）。結果、中世の遺構分布全体図は5区のみとした。

後背湿地内の微高地の中でも最も地形的に高かった5区にだけ居住がされ、痕跡を残したものと考えられる。

(1) 掘立柱建物跡

ＳＴ2001（第80図、ＰＬ10）

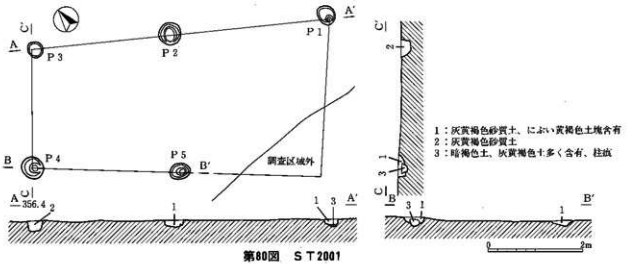
位　置：XIIＲ－21・XIIＷ－01　　重複関係：ＳＫ2002を切る。
形　態：梁行1間×桁行2間の側柱式。　　規　模：梁行2.6m×桁行6.3m
面　積：18.2㎡　　棟　軸：Ｅ－30°－Ｓ
柱　間：東西列3.0～3.3m、南北列2.6～3.2m　柱　穴：円形。断面Ｕ字状。深さ12～24㎝
柱　痕：Ｐ3を除いて確認された。径は14～20㎝で、Ｐ1・Ｐ4は掘り形上部で不明瞭に消滅し、Ｐ2・Ｐ5は底部痕跡のみ。
覆　土：Ⅲ層に酷似する。掘り形は含有土塊があり、人為的な埋め戻しが窺える。
所　見：宅地造成時の攪乱がⅥ層深くまで達し、どこから掘り込まれたものか分からない。重複関係もなく、時期は不明である。5区の中世埋没土とは全く異なるが、柱穴覆土がⅢ層に酷似する点、古代の集落とは隔絶し、本遺跡では古代の掘立柱建物跡が1棟も見つかっていない点から一応中世に帰属するものと考えた。

ＳＴ5001（第81図、ＰＬ10）

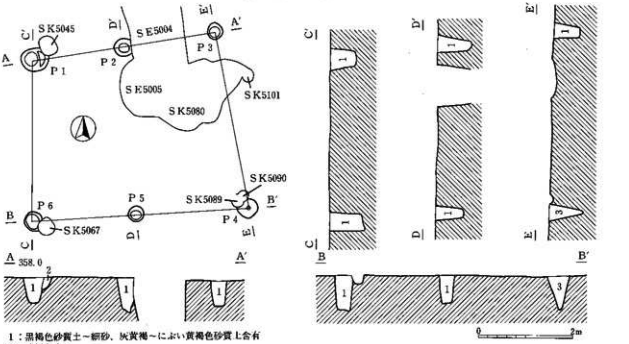
位　置：ＸＱ－01・02・06
重複関係：ＳＢ5012・5015、ＳＫ5064を切り、ＳＥ5004、ＳＫ5045・5067・5089・5090に切られる。
形　態：梁行1間×桁行2間の側柱式。　　規　模：梁行3.5m×桁行4.6m
面　積：15.7㎡　　棟　軸：Ｅ－8°－Ｎ
柱　間：東西列1.9～2.4m、南北列3.5～3.8m
柱　穴：平面円形で、断面Ｕ字状またはＶ字状。深さ54～74mを測る。
覆　土：5区のみにみられる中世特有の黒褐色土の単層。含有土塊があり、人為埋没か。
所　見：全体が若干歪んだ形態だが、柱穴の形状と深さで周縁の数多いピット群と一線を画す。

ＳＴ5002（第82図、ＰＬ10）

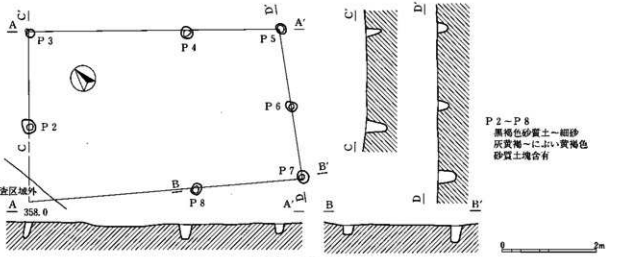
位　置：ＸＱ－06・11　　重複関係：ＳＤ5008、ＳＫ5386に切られる。
形　態：梁行2間×桁行2間の側柱式。　　規　模：梁行3.2m×桁行5.3m
面　積：17.0㎡　　棟　軸：Ｗ－40°－Ｎ
柱　間：東西列2.0～3.4m、南北列1.5～2.0m　柱　穴：円形。断面形Ｕ字状。深さ20～45㎝
覆　土：5区のみにみられる中世特有の黒褐色土の単層。含有土塊があり、人為埋没か。
所　見：極めて貧弱な作りである。5区にある他の5棟とは棟軸が異なる。



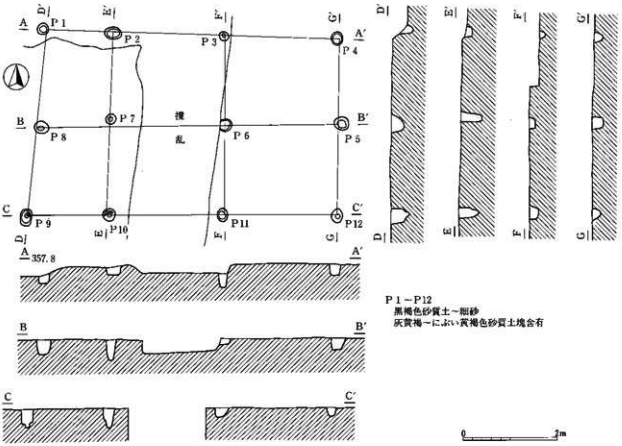
第80図　ＳＴ2001



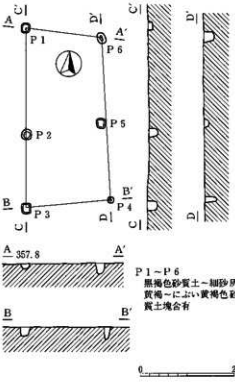
第81図　ＳＴ5001



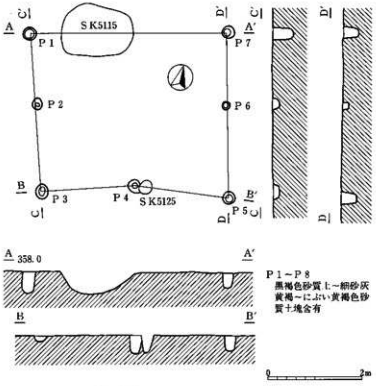
第82図　ＳＴ5002



第83図　ＳＴ5003



第84図　ＳＴ5004



第85図　ＳＴ5005

ＳＴ5003（第83図、ＰＬ10）

位　置：ＸＱ－17・18・22・23　　重複関係：ＳＢ5024・5025・5029・5030を切る。
形　態：梁行２間×桁行３間の総柱式。　　規　模：梁行3.7m×桁行6.4m
面　積：23.7㎡　　棟　軸：Ｅ－10°－Ｎ
柱　間：東西列1.4～2.4m、南北列1.8～2.0m
柱　穴：円形～長円形。Ｐ2・Ｐ９が長円形である。断面形はＵ字状で深さは14～44cmの範囲にある。
柱　痕：Ｐ９・Ｐ10に底部痕跡が確認できた。
覆　土：５区にみられる中世特有の黒褐色砂質土の単層。径50mm以内の含有土塊があり、人為埋没か。
所　見：径10cm前後の細い柱で構成されると思われる。５区の６棟のうち唯一の総柱式である。

ＳＴ5004（第84図、ＰＬ10）

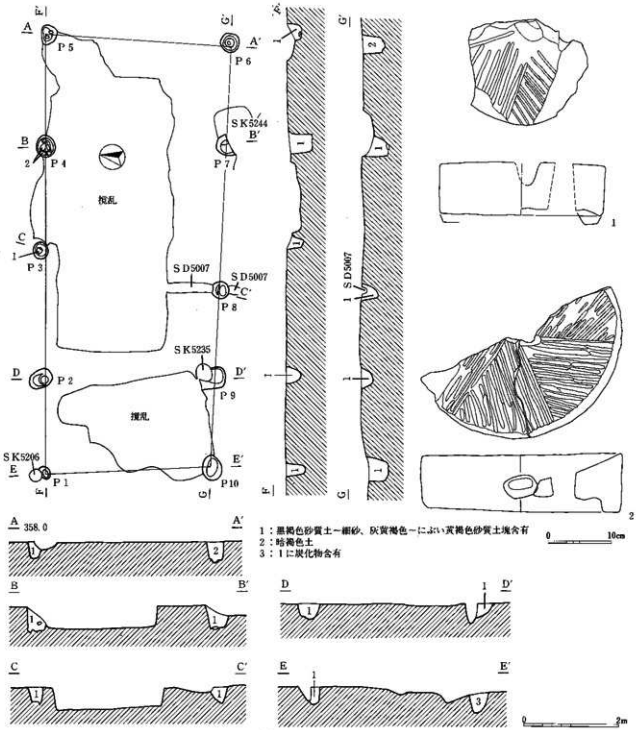
位　置：ＸＱ－21・22　　重複関係：ＳＢ5027を切る。
形　態：梁行１間×桁行２間の側柱式。　　規　模：梁行1.6m×桁行3.4m
面　積：6.5㎡　　棟　軸：Ｎ－７°－Ｗ
柱　間：東西列1.6～1.7m、南北列3.4～3.8m　柱　穴：方形。断面形Ｕ字状。深さ10～27cm
覆　土：５区のみにみられる中世特有の黒褐色細砂の単層。含有土塊があり、人為埋没か。
所　見：５区の６棟のうち唯一方形の柱穴で、角柱をもっていたと考えられる。規模から倉庫か。

ＳＴ5005（第85図、ＰＬ10）

位　置：ＸＱ－06・07　　重複関係：ＳＫ5116を切り、ＳＫ5115・5125に切られる。
形　態：梁行２間×桁行２間の側柱式。　　規　模：梁行3.3m×桁行4.2m
面　積：13.9㎡　　棟　軸：Ｅ－６°－Ｎ
柱　間：東西列2.0m、南北列1.5～1.9m　柱　穴：円形。断面形Ｕ字状。深さ10～47cm
覆　土：５区のみにみられる中世特有の黒褐色砂質土が単層で堆積。含有土塊があり、人為埋没か。
所　見：柱穴の深さがやや揃わない。Ｐ２・Ｐ６は極めて小規模なピットで補助的な支持柱か。

ＳＴ5006（第86図、ＰＬ10・17）

位　置：ＸＱ－11～13　　重複関係：ＳＤ5007、ＳＫ5206・5235・5244に切られる。
形　態：梁行１間×桁行４間の側柱式。　　規　模：梁行3.5m×桁行9.3m
面　積：33.6㎡　　棟　軸：Ｅ－８°－Ｎ
柱　間：東西列1.8～3.0m、南北列3.5～3.9m
柱　穴：Ｐ１・Ｐ３～Ｐ８は円形、Ｐ２・Ｐ10は長円形、Ｐ９は方形気味である。断面形はＵ字状で、深さは検出面から30～48cmを測る。Ｐ３～Ｐ５・Ｐ７は底部に石が配されていた。これらは割栗石ではなく礎石的な用いられ方をした根固めの石と考えられる。Ｐ６底部には石の抜去痕がある。
覆　土：中世特有の黒褐色砂質土の単層に径50mm以内の含有土塊があり、一気に埋め戻した様相である。
遺　物：底部配石のうち、Ｐ３とＰ４のものは石臼の破片を転用したものである。Ｐ３のものが１、Ｐ４のものが２である。
所　見：本遺跡の中で、最も頑強な上屋構造を想定し得るものである。梁行に較べて桁行が長く、全体が細長い特徴がある。併存性は立証できないが、ＳＴ5001・5003・5005とほぼ棟軸を同じくする。



第86図　ＳＴ5006

(2)　井戸跡

4区に1基、5区に5基ある。

ＳＥ4001（第87図）

位　　置：ⅢＢ－18

重複関係：なし。

形　　状：径114cmの円形である。断面形は筒状である。

覆　　土：Ⅲ層に相当すると考えられる単層で、5区の井戸跡に見られるような大型の含有土塊が含まれ

ず、均質な埋没土であった。自然埋没と考えてよいものか。

壁・底面：垂直に掘り込まれている。底面は平坦にならない。検出面との比高は234cmを測る。

遺　物：覆土下位から龍泉窯系の青磁片が出土した。

所　見：鎌倉時代以前の井戸跡である。周辺に該期の遺構は、他には一切無い。井戸のような深いものしか残らなかったということもあり得るが、素掘りで木枠をもたないことから、灌漑用の井戸であったかもしれない。

ＳＥ5001（第87図）

位　置：ＸＱ－06

重複関係：なし。

形　状：径92cmの円形である。断面形はもともとは筒状であったと思われるが、下部の原形は水の作用で崩壊している。

覆　土：３層以上は埋め立て、４層以下は自然埋没と考えられる。

壁・底面：素掘りで、垂直に掘り込まれている。元来の底部は、検出面から2.1m下がった７層下位から11層下位付近であったと考えられる。

遺　物：皆無。木枠もなし。

所　見：下部の断面にみる算盤玉状の形状は、元来の掘り形ではない。９層は壁外の自然層そのものであり、汲み上げられた水と同量の水が、水脈から井戸内へ浸潤するのを繰り返すうちに壁が溶出しはじめ、持ちこたえられなくなった地山の９層土の上部にクラックを生じて、９層土が下方へ崩落した結果、間隙に４層や８層が形成されたものと考えられる。したがって本来の掘り形は、６層・７層の外縁部付近であったと思われる。10～12層は掘り形底部の堆積物で、繰り返し水が汲み上げられることによって底部が掘れ、地下水の営力で粒土の異なるものが徐々に堆積したものであろう。地下水脈は７・９層と10層の境めにあったと考えられる。繰り返し使用されたことを物語る堆積状況である。

ＳＥ5002（第87図、ＰＬ15）

位　置：ＸＱ－06

重複関係：なし。

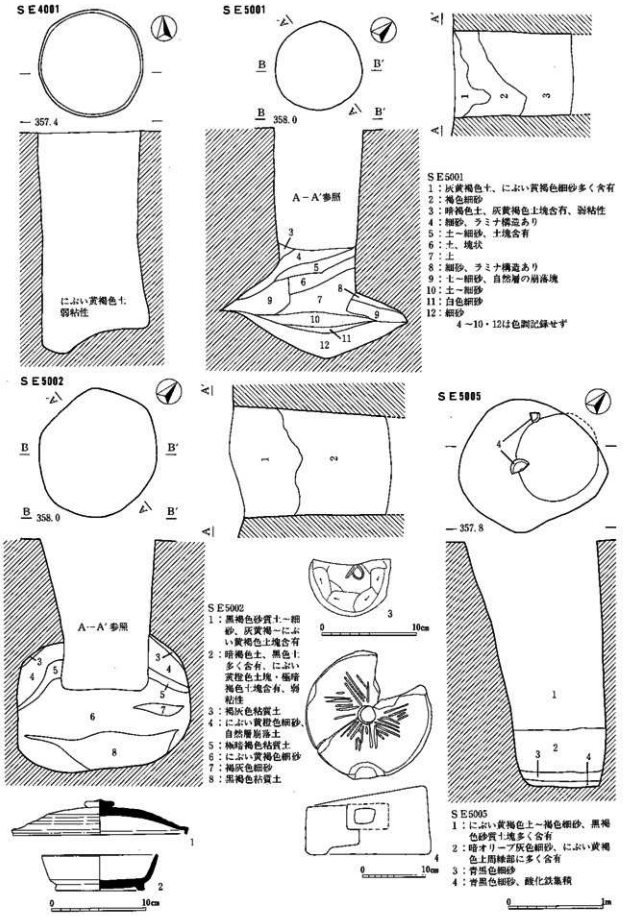
形　状：径120～140cmのほぼ円形。断面形はもともと筒状であったと思われるが、下部の原形は水の作用で崩壊している。

覆　土：２層以上は埋め立て、３層以下は自然埋没である。図示しなかったが、最上層には多数の巨礫が投げ込まれている。

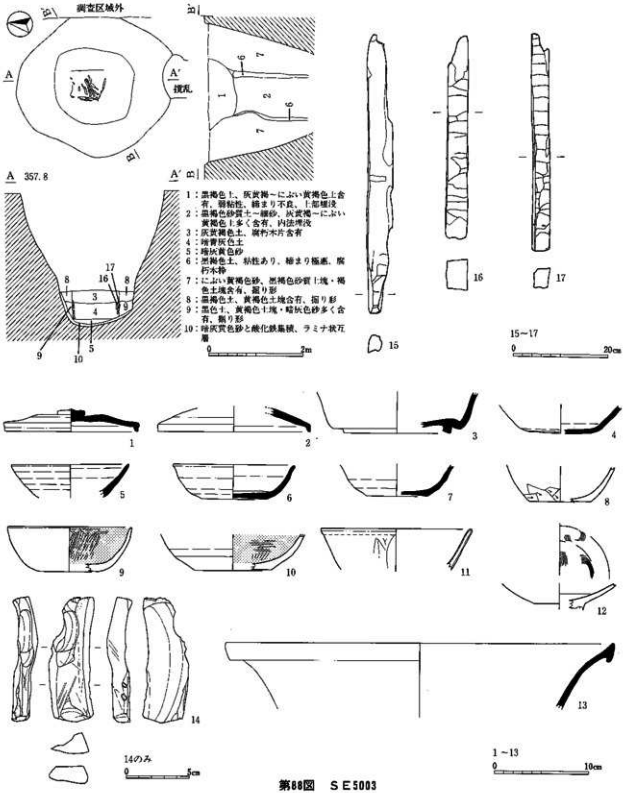
壁・底面：素掘りで、ほぼ垂直に掘り込まれている。元来の底部は６層と８層の層界付近と考えられ、検出面との比高は212cmである。

遺　物：須恵器坏蓋Ｂ（１）と同坏Ｂ（２）が覆土より出土した。８世紀後半から９世紀前半のものである。木枠はもとより無かったと思われる。

所　見：当初、須恵器１・２より古代の遺構と考えたが、１・２層が中世に特徴的な埋没土で他の井戸跡の覆土と差異がないことから中世の遺構と考えている。遺物は埋め戻し時の、故意または偶然の混入であろう。下部のフラスコ状の拡がりは、ＳＥ5001と同ような成因によるものと考えられるが、坑壁内法の原形が分からなくなるほど地下水の作用が進行し、壁が溶出してしまっている。



第87図　ＳＥ4001・5001・5002・5005



第88図　ＳＥ5003

ＳＥ5003（第88図、ＰＬ11・15・16　）

位　　置：ＸＱ－02

重複関係：ＳＢ5009・5012・5046を切る。

形　　状：掘り形の形状は、上部ではやや整わないが径3.2m前後の円形、下部では１辺1.2mの隅丸方形

である。実際、井戸として機能した時の内法は0.9mと考えられる。断面形は、掘り形はバケツ状、内法は筒状である。

覆　土：1～5層は井戸として機能していたときの実質的内法で、1・2層は人為埋没、3～5層は自然埋没である。10cm弱の幅で屹立する6層は木枠が腐朽したもので、底部付近ではまだ木質が残存していた。7～9層は木枠埋設掘り形で、人為埋没だが8・9層は地下水の作用を受けている。10層は地下水の営力で形成されたラミナ状の自然堆積層である。

壁・床面：木枠埋設掘り形は底部付近で垂直に近くなるが、全般に急な傾斜である。つまり、上部ほど広がっている。底部は若干くぼむ。木枠を埋設した実際の井戸の内法は垂直であったと考えられる。底部までの深さは288cmある。

遺　物：須恵器坏蓋B（1・2外）、同坏B（3）、同坏A（4～7）、土師器小型甕底部（8）、黒色土器A坏A（9・10）、須恵器甕A頸部（13）、流紋岩製で9.9×3.2×1.6cm、63gの砥石（14）は1・2・7層中より出土した。鎬蓮弁文の龍泉窯系青磁碗片（11）、白磁皿片（12）は2層下部から出土した。15～17は井戸木枠の骨木で、ノミの跡が明瞭な角材である。木枠の樹種は付章を参照されたい。

所　見：全部で6基見つかった井戸のうち、他の5基が素掘りであるのに対し、唯一木枠が掘り形をもって埋設されており、もっとも丁寧なつくりである。11・12から12～13世紀頃まで存続した井戸と思われるが古代遺物も多い。1～10・13など、8世紀半ばから9世紀半ばまでの遺物は、本跡が古代遺構が最も密集する地点に構築されたことにより、木枠埋設掘り形である7層や埋め戻し土である1・2層に混入したものと考えられる。構築時期がいつまで逆上るかは判然としない。

ＳＥ5004（第89図）

位　置：ＸＱ－01

重複関係：ＳＢ5012・5045・5047、ＳＴ5001、ＳＫ5048を切り、ＳＥ5005、ＳＫ5049・5050・5079・5080に切られる。

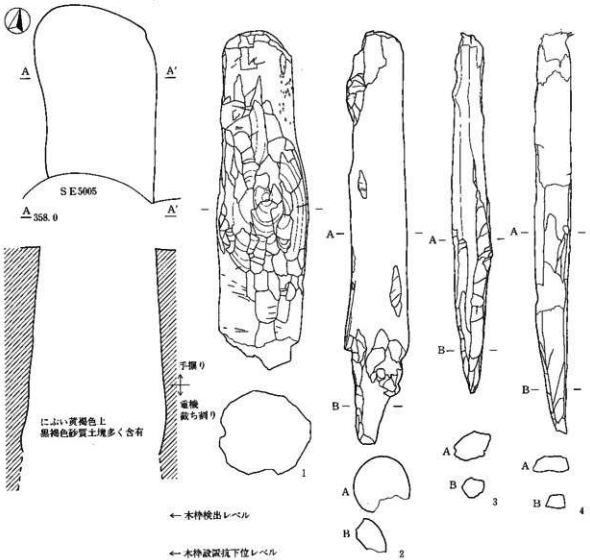
形　状：長軸の残存長2.1m、短軸1.3mの平面長円形、断面形は筒状だが、2m程下がったところに最大径がある。保安上の問題と、出水の激しさのため、深さ2.3m以下は平断面ともに図化できなかった。

覆　土：単層。一気に埋められたと考えられ、基調土にそれと異なる大きな土塊が含有される。

壁・床面：素掘りでほぼ垂直に掘られているが、わずかに下方へ拡がっている。底面の状況はつかめなかったが、木枠の出土レベルから判断して、検出面からの深さは3.0m前後あったと思われる。

遺　物：底部から井戸木枠部材（1～4）が検出された。井戸木枠（1・2）は、これらと同様に丸太を粗雑に調整したもう2本と1セットを成し、方形に組まれて水平に据えられていた。木枠設置杭（3・4）は割り材を粗雑に調整して先端を尖らせ、木枠の4カ所のコーナーの内側に打ち込まれていた。その他の遺物はない。木枠の樹種は付章を参照されたい。

所　見：ＳＴ5001、ＳＥ5005との切り合いから、中世の井戸であることは間違いないが、古代の遺物も全く含まず、土を運んできて埋めたとも考えられる。



第89図　SE5004

SE5005（第87図、PL11・15・17）

位　　置：XQ－01

重複関係：SB5012・5044・5045、SE5004を切り、SK5079・5080・5345に切られる。

形　　状：径135～152cmのやや不整の円形で断面形は筒状を成す。

覆　　土：1層は人為埋没、2～4層は自然埋没と考えられる。

壁・底面：素掘りで、ほぼ垂直に掘られているが、やや北方向に斜掘されている。底面は平坦で深さ260cm。

遺　　物：3は黒色土器A坏A底部で、窯印と思われるものがある。9世紀代の遺物の混ざり混みである。
　　石臼（4）は、他の礫・獣骨とともに1層の中程に投棄されていた。木枠は無かった。

所　　見：中世の井戸の埋め戻しの際、石臼を投棄している例はしばしば見られる。

(3) 火葬施設と方形土坑群（第90図）

火葬施設はＸＱ－11・12グリッドにまたがって１基だけある。方形土坑はＸＱ－01・06・11・12付近に集中し、火葬施設の周縁部にあるようにも見え、示唆的である。ＳＫ5346を除いて骨片・骨粉・遺物は検出されなかったが、方形土坑の覆土はＳＫ5226を除き、基調土と異なる含有土塊をもつ単層で、人為的な埋没様相にある。ただし、すべてが中世に特徴的な覆土ではなく、古代遺構と判別に苦しむものもあり、完全に中世土坑とは断言できないものもある。方形土坑の規模・長軸方向・深さ・配置は、バラつきがあり秩序がないようにも思えるが、密集するほどではないにせよ５区中央部にまとまり、これより北側や南側に存在していないのは特筆に値する。

ＳＫ5278（ＰＬ11）

位　置：ＸＱ－11・12

重複関係：ＳＢ5019、ＳＤ5011、ＳＫ5199・5407～5409を切る。

形　状：浅い平坦な土坑を貫いて、燃焼部と煙り出しを兼ねた溝状の深い部分が東西に張り出す。浅い土坑は南北方向に1.54mあり、深さは10cm以内である。溝状部分は東西方向に2.73mあり、深さは31cmで、東の張り出し部の方が長い。溝状部の中央付近の壁は被熱してレンガ状に赤化している。攪乱を受けているが、失われた部分はわずかである。

覆　土：１層は自然埋没と思われる。２・３層は施設上部の崩れ、４・５層は使用時に溜まったものと考えられる。６層は地山のⅥ層に酷似する。

遺　物：溝状底部４層に、骨片・骨粉が検出され、用いられた材が炭化して横たわっていた。張り出し部の東端底部より碗形の鉄製品が出土したが、ボロボロで保存処理が間に合わず、掲載には至らなかった。銭貨はなかった。

所　見：ごく一般的な形態の火葬施設である。よく火葬墓とする報告が見られるが、そのまま墓になっている例は少なく、本跡も焼骨を集めて別の場所に再葬したと考えられる。

ＳＫ5118

位　置：ＸＱ－01　　重複関係：ＳＫ5395を切り、ＳＫ5074に切られる。

規　模：長軸160cm、短軸の調査区域内58cm、深さ20cm。　　壁・底面：ほぼ垂直で、底部は平坦。

所　見：古代土坑の可能性もある。

ＳＫ5166

位　置：ＸＱ－06　　規　模：長軸の調査区域内88cm、短軸87cm、深さ64cm。

壁・底面：垂直に近い急傾斜で、底部は平坦。

ＳＫ5226

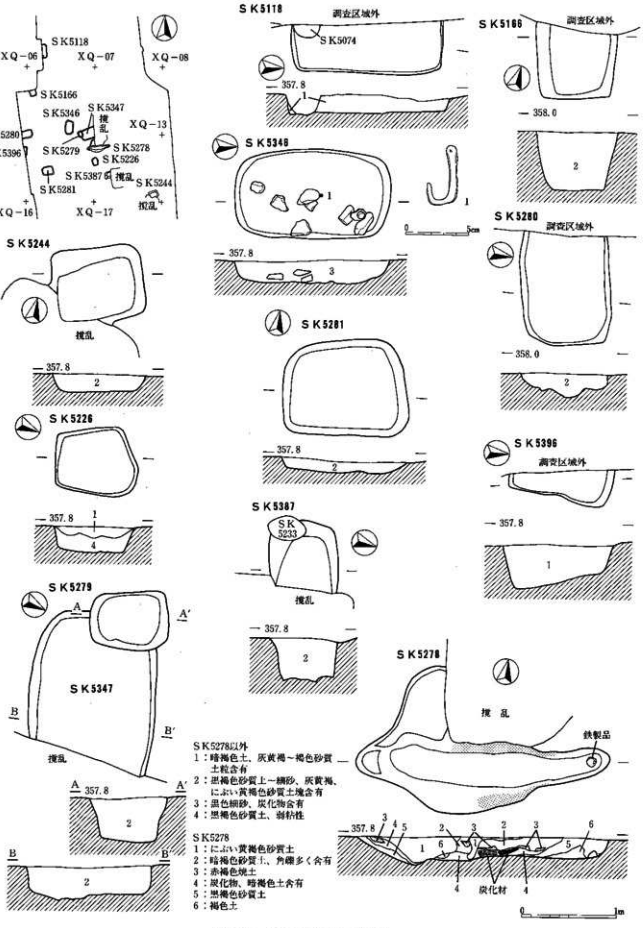
位　置：ＸＱ－12　　重複関係：ＳＤ5011を切る。　　規　模：88×74cm、深さ27cm。

壁・底面：急な傾斜で、底部は平坦。

ＳＫ5244

位　置：ＸＱ－12　　重複関係：ＳＴ5006を切る。　　規　模：96×82cm、深さ24cm。

壁・底面：平坦な底部から丸く立ち上がり、壁は傾く。



第90図　火葬施設と方形土坑群

ＳＫ5279

位　　置：ＸＱ－06・11　重複関係：ＳＫ5397を切る。　　規　　模：82×64cm、深さ49cm。
壁・底面：下半でほぼ垂直、上半でやや開いて急傾斜。底部は平坦。

ＳＫ5280

位　　置：ＸＰ－10・15、ＸＱ－06・11　　重複関係：ＳＤ5008を切る。
規　　模：長軸の調査区域内125cm、短軸87cm、深さ23cm。
壁・底面：凹凸がある底部から丸く立ち上がり、壁はほぼ垂直。

ＳＫ5281

位　　置：ＸＱ－11　　重複関係：ＳＤ5008を切る。　　規　　模：134×103cm、深さ13cm。
壁・底面：緩やかで、底部はほぼ平坦。

ＳＫ5346（ＰＬ11・16）

位　　置：ＸＱ－06　　重複関係：ＳＫ5199を切る。　　規　　模：166×93cm、深さ27cm。
壁・底面：ほぼ平坦な底部から丸く立ち上がり、壁は急傾斜。
遺　　物：ほぼ中央部覆土中から銅製の釣り針（１）が出土した。覆土中には拳大の礫10個が入れられ、炭化物と骨粉が検出された。１は4.7×2.6×0.4cm、4.7g。
所　　見：唯一、はっきり土坑墓と考えられる方形土坑である。

ＳＫ5347

位　　置：ＸＱ－06・07・11・12　　重複関係：ＳＫ5405を切り、ＳＫ5279に切られる。
規　　模：172×137cm、深さ34cm。
壁・底面：やや凹凸のある底部から丸く立ち上がり、壁は垂直である。

ＳＫ5387

位　　置：ＸＱ－12　　重複関係：ＳＫ5233に切られる。
規　　模：残存する長軸81cm、短軸62cm、深さ49cm。
壁・底面：垂直に近い急な傾きで、底部は凹凸がある。

ＳＫ5396

位　　置：ＸＰ－15、ＸＱ－11　　重複関係：ＳＤ5008を切る。
規　　模：南北軸で114cmを測るが、調査区域外不明。深さ49cm。
壁・底面：垂直に近く、底面は南側に傾斜する。

第３節　まとめ

１　はじめに

更埴条里遺跡といえば、９世紀代の大規模開発による条里的地割りの広範囲の広がりと９世紀末の大洪水によるその埋没が著名であるが、今回、新幹線用地内で集落跡、それも周縁の更埴条里・屋代遺跡群内に多くない８世紀中頃から後半の集落跡、条里水田に前後または併行する９世紀代の集落跡等がみつかったことは大きな成果であろう。また、洪水後の土地利用が分かりにくくなっている善光寺平南部の遺跡群において10～12世紀や中世の集落跡が確認できたことも成果として挙げられよう。

本節では、居住遷地の開始される８世紀以降の古代集落について、集落景観の変遷、竪穴住居跡の規模と主軸方向や形態の変遷について概述してまとめとしたい。なお、古代土器、とりわけ時期決定に関わる食器類については、本遺跡のみでは変遷がとらえにくいため、屋代遺跡群と合わせて第３章第５節で述べることとする。

中世以降では、主屋・納屋と思われる掘立柱建物跡が６棟抽出でき、更に井戸跡、火葬場、多数の土坑と共にひとつの生活の単位を窺い得る。多数の土坑の存在から、実際には確認できた以上の建物や柵等が存在していた可能性が高いが、遺物も僅少であり、中世についてはこれ以上の言及は避け、第２章第２節３での記述までとしたい。

２　古代集落景観の変遷

古代集落の起興、盛衰、消滅の状況は、狭長な新幹線用地内の調査範囲では全貌を明らかにすることは不可能である。全時期を通じて集落の核心部分は、第３図に示す地形の在り方から見ても、今回の調査範囲よりさらに西側の微高地上に展開している可能性が高いと思われる。従って、集落の核心部分の位置が時期的にどのような変化を遂げているかが分からないため、集落景観の変遷についての考究は極めて断片的なものに終始せざるを得ず、今回の調査区における集落の盛衰が、そのまま集落全体の盛衰の縮図であるとは到底考えにくいということを大前提とした上で、敢えて今回の調査範囲内における集落景観の変遷を時期をおってたどってみたい。古代集落の変遷は第91・92図に示す。図示したものは、竪穴住居跡を中心に20～40年前後の時間幅に限定できたものであり、若干の推定部分をも含んでいることを了承されたい。

今回調査された微高地上が本格的に居住域として利用されるのは８世紀前半である。このころは微高地上でも最も高まった５区に住居が散在し、それらより微高地側には性格不明の溝ＳＤ5008も設けられる。４区以南ではまだ居住地としては占地されず、畠等の生産域が広がっていた可能性はあるが土地利用状況は判然としない。住居は小規模で、一辺５ｍを越すものは見当たらない。調査範囲内の住居跡が集落の縁辺部であるとすれば、集落付近を主体的に開発した者は調査範囲の西方に存在したと思われる。該期は各地に国家的政策のもとに一斉に開発が始まる時期に相当し、７世紀以前には空白であった地に新たに集落を展開させた状況はそれに符合している。屋代遺跡群高速道地点では該期までの木簡が多数出土しており、開発を指導した官衙が本遺跡の北方～西方に位置したことを想定させる。

８世紀中頃から後半においても、３区に１軒だけ出現したＳＢ3016を除き、住居が５区に占地される状況に変化はなく、調査範囲内の住居の軒数・規模に大きな増減・相違がない。８世紀後半では、調査範囲内の住居の拠点が５区の中でも北側へ移行した感がある。

８世紀末～９世紀はじめでは住居の軒数を若干減じ、調査範囲内の併存住居は３～４軒と考えられ、よ

り散在した状況にある。居住が5区のみに占められる状況は9世紀前半まで変化がない。

9世紀前半では5区中央に東西に走るＳＤ5005が掘削され、住居はこの溝の南側に近接するものと、5区の北端に構築する群との隔たりがみられ、5区内で2分した様相にある。ＳＤ5005には水流を窺わせる覆土堆積や底部集積はみられず、区画的な溝と考えられる。集落内で異なるグループが存在し、ＳＤ5005がその区分として機能していた可能性がある。住居は散在しているにもかかわらず、一定箇所で重複するか近接しており、占地上の規制がはたらいて短い間隔で建て替えが成されたと考えられる。5区南側のＳＬ5001（粗い網点部分）は既述のとおり不明な点も多いが、集落に近接した状態で該期に開発された可能性が考えられる畠である。

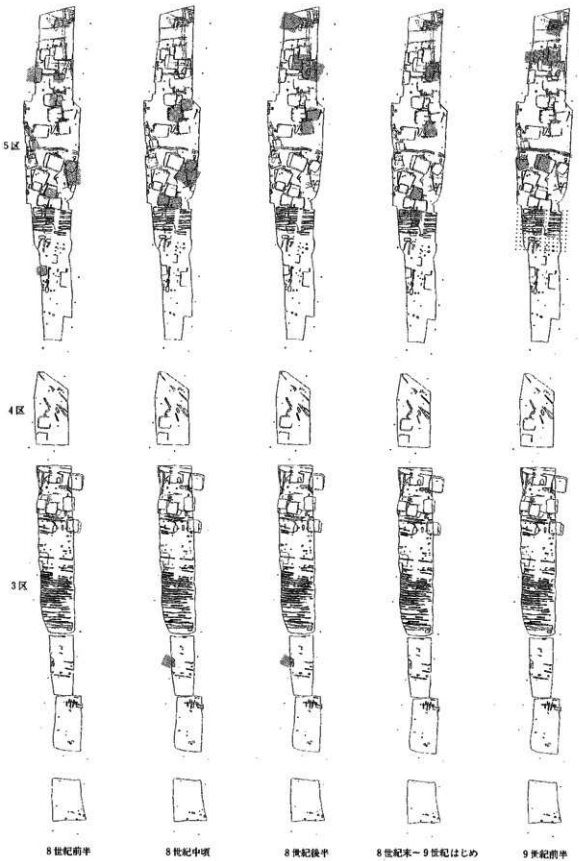
9世紀中頃は集落が最も活況を呈した時期であり、集落内に大きな変動がおきる。住居軒数は前段階までの倍以上に増加し、前段階まで開発の及ばなかった4区以南に居住が開始され、畠が広く開拓される。5区の北端のＳＤ5004は、微高地上の5区から北側の五十里川の微凹地へ落ち込んでいく臨界地点に、集落の範囲をその南側に限定する意味合いで設けられたことも想像される。後背湿地内の微高地に相当する3～5区全体が居住域として利用される一方、生産域としても土地利用され、周縁に条里水田が展開する中での畠の広がりは、微高地ゆえの引水の難しさ等の地形上の制約や集落内の社会的な規制がはたらいていたことが想像される。ＳＬ3001～3003（3区粗い網点部分）とＳＬ5001が併存したとすれば、集落の景観は南から生産域―居住域―生産域―居住域という住居群と畠のセットの繰り返しが展開したことになる。第3図の地形分類図に示すように、5区南端は旧河道が横切った痕跡が認められ、微高地上でも若干低まった地形を成していたとも考えられ、この部分を畠として利用したと思われる。既述のようにＳＬ5001の南側は中世以降の水田に削平されており、畠はさらに南側まで広がる規模をもっていたものとも考えられる。以上のことから9世紀中頃には、村落が地形的な制約を巧みに利用しながら一定の秩序を保って最も大きな規模で展開した様相が窺える。しかし、調査範囲内の住居跡は一辺5.5m前後の規模をもつものが最大で、際立った規模をもった住居がみられず、施釉陶器・文字が書された土器も見受けられない。即ち、集落の中核を成すような住居、識字者・有力者、富豪層は調査範囲内には認め得ず、村落内の構成員の決定的な格差がほとんど看取れない。集落の核心部分は調査範囲外に存していたか、生産力・労働力を担う役割としての本集落を、有力者がやや隔絶した地点で掌握・統括していたとも考えられる。

9世紀後半では前段階よりも住居の数を減じ、大きな変化としては9世紀中頃まで住居群が主体的に存在する地区が、5区から3区へ移ることである。ＳＬ3001～3003・5001等の畠は、依然存在した可能性が残るものの、ＳＬ3001を切ってＳＢ3001が構築されることから、生産域を再び居住地へ戻したり、集落近縁の畠の規模を縮小したりする変化がみられる。緑釉緑彩陶・灰釉陶器と、黒色土器Ｂ耳皿の灯明皿転用器を出土したＳＢ3008は最も財力を感じさせる住居であるが、規模は大きくない。

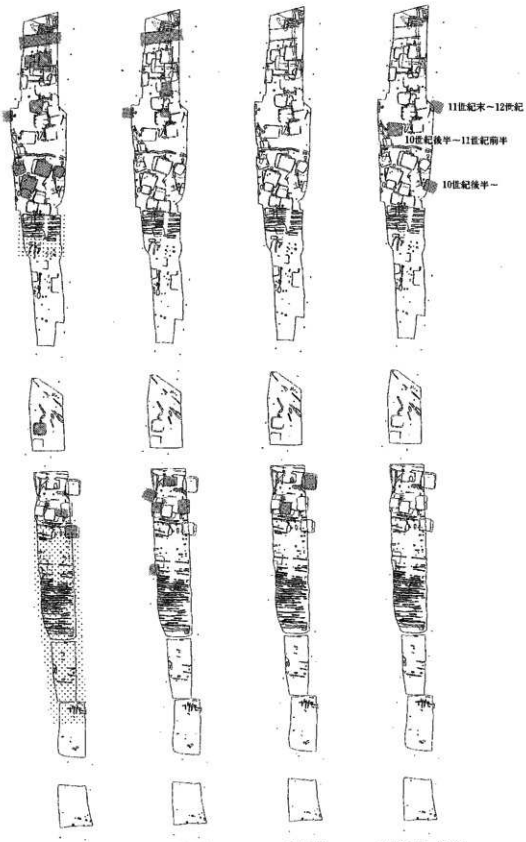
10世紀前半では、3区に2軒の住居と1基の土坑が認められるのみである。8世紀以降、微高地上でも最も高く、100年以上居住が存続してきた5区にはついに住居が消滅する。前段階から該期の間には大洪水が起こっている。洪水の及ばなかった当遺跡においても住居は大幅に減じてしまう。集落と人の移動について考慮する必要はあろうが、条里水田の埋没を招いた自然災害が生産基盤に甚大な打撃を与え、農民の逃亡や農村の荒廃へとつながった事態は、当集落の減衰とも無関係ではあるまい。

10世紀中頃から12世紀の住居は、再び5区に出現して3区で消滅しているが、約200年間で3軒が認められるのみであり、調査範囲内では単独に近い状態でしか確認できない。

新幹線地点における古代集落の変遷は以上のようにたどることができ、8世紀前半の国家的規模の開発、9世紀中頃の、それまでに開発の及ばなかった地域への開発の波及、そして自然災害と時期を同じくする集落の衰退傾向は、当遺跡においても例にもれないことが判る。



第81図　古代集落の変遷（１）（８世紀前半～９世紀前半）



第92図　古代集落の変遷（２）（９世紀中頃～12世紀）

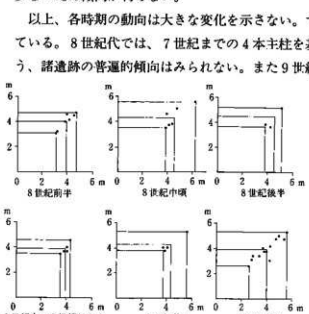
3　竪穴住居跡の規模・主軸方向と形態

竪穴住居跡の規模については推定可能なものも含めて第93図に時期別の様相を示した。調査区域外にかかるか、切られて一辺のみしか判らないものについても、大筋の傾向に支障のないものとして方形と仮定し、図化してある。縦軸に主軸方向の床面の辺長を、横軸にそれと直交する方向の床面の辺長を計測して各1軒をドットで示し、各軸の最大値・最小値・平均値を線で表した。但し、10世紀後半以降の2軒は、1方の時期の下限を明確にできず、平均値は示していない。第2節2（1）の個別記載における方形・長方形・隅丸方形等の表現は、一定の比率化した数値に基づくものではなく感覚的なものであり、本節においても形状と規模の分類は敢えて行わない。

集落が最も繁栄した9世紀中頃を除いて、各期とも検討すべき住居の絶対軒数が十分とはいえないため、各期毎の傾向も出しにくいが、概ね次のようになる。

8世紀前半では一辺3m強の小型の2軒と一辺4～4.5m前後の中型の群の2つの規模が存在する。8世紀中頃では、直交軸方向にやや長い長辺6m強のやや大型の規模が1軒出現するが、その他は8世紀後半まで一辺3.5～5mの範囲におさまる。8世紀末～9世紀はじめでは、一辺3.5～4.5mの中規模で規格性が高い。9世紀前半では一辺4m前後の規格性の高い群の他に、一辺5.5m前後の大型に近い1軒が出現する。9世紀中頃では最もヴァリエーションがあり、古代を通じて最も矮小な一辺2.6mのものから、最大5.5m前後の大型に近いものまで特に偏る規模がなくバラついている。9世紀後半では、一辺3m強～4.5m前後の小型～中型の規模でバラついており、比較的規格性をもっている。10世紀前半は、一辺4m前後のもののみとなる。10世紀後半では、長辺5m弱の、主軸方向に長いものが出現しているが該期の絶対数が少ないため傾向が判らない。

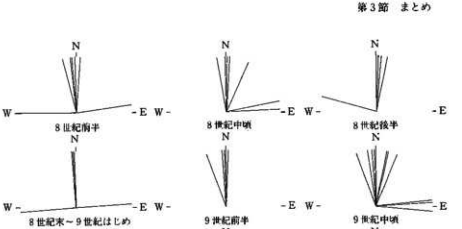
以上、各時期の動向は大きな変化を示さない。すべての時期を通じて、平均値は一辺4m前後に終始している。8世紀代では、7世紀までの4本主柱を基本とする比較的規模の大きな住居跡が認められるという、諸遺跡の普遍的傾向はみられない。また9世紀中頃～後半においても、集落の中核を成すような大型の住居とその周囲を取り巻く中型・小型の住居といったセット関係は看取されない。古代全般を通じて、核となるような規模・財・権力をもった住居は集落内に出現しなかったか、調査範囲が集落の核心を外れたと思われる。



第93図　竪穴住居跡の規模

住居の主軸方向は、カマドの位置の推定可能なものも含めて第94図に示した。10世紀前半まで集落内の土地区画と地形の条件によってか、北方向に規制されていたことが判る。もう少し細かくみると、8世紀後半では北～やや東へ振れた北方向、8世紀前半・8世紀末～9世紀前半・9世紀後半～10世紀前半では北～やや西へ振れた北方向、8世紀中頃と9世紀中頃では北～東西へ10～25°振れた北の方向に主軸をもつ傾向がある。8世紀前半と8世紀末～9世紀はじめには東西方向に各1軒、8世紀中頃には東方向に2軒、8世紀後半には西方向に1軒が認められるが、これらはごく稀な存在であり、他の住居の主軸方向である北方向に

直交する方向に主軸方向をもつことから、集落内の土地区画や配置方向に逆らうものではなく、何ら不自然な景観は生じていなかったと考えられる。9世紀中頃～後半では、それまでの主軸方向として普遍的な北方向の他に、それらと直交する方向の東方向の主軸をもつものが3割～5割弱の比率でみられて特異な存在ではなくなり、北方向の統一制が緩んだことが判る。10世紀前半の東方向のものは、北方向のものの作り替えである。



第94図　竪穴住居跡の主軸方向

10世紀後半以降では、それまで圧倒的な存在であった北方向のものが初めて消滅し、西方向のみとなる。

次にカマドについて触れる。構築位置が壁中央からコーナー方向に寄っていくという段階的な変遷は、単純に比率を増加させるものではない。壁中央からやや寄ったものは、8世紀前半で既に1軒存在し、8世紀中頃では該期の絶対件数が少ないながら、むしろ主流となる。この点は当遺跡に限って特徴的である。これらは、このまま増加の一途をたどらず、8世紀後半～9世紀前半ではほとんどが再び壁中央の構築に終始するようになる。構築位置が壁中央からやや外れたものから、コーナーに近づいたものまでの比率は、9世紀中頃に突然増大して6割を占め、壁中央に作られるものを凌駕する。9世紀後半でも半数を占めているが、10世紀前半の2軒はいずれも壁中央に作られている。10世紀後半から11世紀前半のＳＢ5019はほとんどコーナーに接近しているが、袖の取り付き方は壁に直角である。この他の10世紀後半以降の2軒は火床のみしか残存していないので不明だが、ＳＢ5031はその位置から完全にコーナーカマドであった可能性が高い。

カマド構築材については、古代において廃絶時の破壊の習慣が普遍化したことから、良好な遺存状態を留めたものはほとんど見られず、火床のみしか残存していないものも少なくなく、分類を困難にしている。確実とはいえないが、床面上に被熱した礫が散乱したものは石組みカマドの可能性が高く、個別記載ではそのことを記述した。カマドは一般的には、主に石組みカマドと粘土カマドに2大別されているが、実際には多様である。石組では、多くの礫で構成されるものから単独の石を芯材にするものまである。また石組み以外のカマドは広義に粘土カマドとして総称されているが、この傾向にはあまり賛同できない。7世紀までの文字どおりの「粘土」カマドに比して、古代においては決して「粘土」あるいは「粘質土」ではない土を用いたものが少なくなく、この傾向は当遺跡に限ったことではない。実際に粘質土を用いたものは、9世紀代で1軒、10世紀後半以降で1軒が確認されたのみである。これら以外は比較的粗粒で通水性も悪くない土で構築されている。そのほとんどは「地山削り出し方式」によると考えられ、竪穴掘削時に既にカマドの位置を決定してその部分を掘り残したのち、整えられたと考えられる。あるいは地山削り出しと断じられなくとも、混和土のない、地山と同質土で構築されて固められ、結果的に地山削り出し方式と判別できなくなっているものもあるかもしれない。これらの地山削り出し方式あるいは地山と同質土のカマド、またはこれらの疑いのあるものは、8世紀前半から9世紀半ばまで圧倒的多数を占めている。一

方、石組みカマドは8世紀末に1軒が出現するが急激に主流となる訳ではなく、9世紀前半・中頃に各1軒が確認できるのみである。ところが9世紀後半では急激に石組みカマドが普及し、石を用いないものは1軒のみとなり、10世紀以降では石組みのみとなっている。

廃絶時のカマドの状態では、支脚の残存するものが8世紀末～9世紀半ばに3軒みられるのみであり、食膳具等の投棄は古代全般にみられた。支脚や袖の破壊については重複関係等により、廃絶に伴うもののみではないとしても、廃絶時の破壊は例外少なく行われていたと考えられる。

柱穴は、時期を特定できないものを含めて9世紀代で3軒、10世紀後半から11世紀前半で柱穴的配列の想定し得るものが1軒、合計4軒で確認されたのみであり、集落の特徴として古代全般で小型～中型の住居が構成のほとんどを占める状況を反映してか、古代全般で実に93%の住居が無柱穴である。無柱穴の住居は、垂木が竪穴外の地面まで配された合掌型の上屋構造が従来想定され、風雨に耐え得るものとして葺き屋根を土で覆わせたり石を乗せたりするなどの工夫は行われていたものとしても、構造事態は全般的に貧弱な印象でとらえられてきているが、周堤の内部から上屋が立ち上がるような構造についても考慮した方が良いように思われる。竪穴を掘削した土は遠方まで運んで捨てられるのではなく、必ずや竪穴を取り巻いていたはずである。垂木が地面まで配されたとしてもそれが痕跡を残さないのと同様、調査時に周堤の残存が確認されるケースがまず無いことを考えると、周堤内部の構造も痕跡を留めなくとも不思議ではない。やや過ぎた推論になるが以上の推定では、上屋の壁から壁までの距離が竪穴の壁から壁までのそれに一致するとは必ずしも言い切れず、単に竪穴の小型化が住居全体の小型化に通じているとは言えなくなる可能性もあるかもしれない。いずれにせよ竪穴の内側の床面であれ、竪穴の外側の地表面であれ、穴を穿たなければ柱は建たないとする発想だけでは無柱穴住居の問題は解決できないであろう。無論、穴を穿たずに床面上に柱を立てたり、壁際に横木を寝かせてそこから柱を立ちあげたりする想定もされている。実際に、第3章で後述する屋代遺跡群のＳＢ6030は後者に相当し、横木の枕石として壁際の石列が機能した可能性が高い。しかしながら前者の想定の場合や、枕石を用いずに床面に直接横木を置いた場合に、それらの圧痕が床面上に確認されるケースはほとんどなく、これらの想定が的を得ていないことを表しているように思える。

文献

宮本長二郎　1983　「古代の住居址と集落」『講座 日本技術の社会史7 建築』日本評論社
　　1986　「住居」『岩波講座 日本考古学4 集落・祭祀』岩波書店
桐原　健　1988　「Ⅳ 4 古墳時代の住居と集落」「5 奈良・平安時代の住居と集落」『長野県史考古資料編全一巻（四）遺構・遺物』長野県史刊行会
原　明芳　1989　「第8章 吉田川西遺跡の歴史的特質」『吉田川西遺跡』長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
望月　映　1990　「第3章第1節 古代の竪穴住居址」『総論編』長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
井原今朝男　1990　「平安時代の生活と村落」『長野県史通史編』1 長野県史刊行会
岡村　秀雄　1991　「第3章第18節5 (3)遺構の分析、(4)集落の変遷」『栗毛坂』長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化センター

第３章　屋代遺跡群

第１節　遺跡の概観と調査の概要

１　遺跡の概観

本遺跡は更埴市大字屋代に所在し、千曲川右岸の自然堤防上に広がる屋代遺跡群の西端にあたり、南側は五十里川を挟んで更埴条里遺跡から続き、北側は平成３年度に長野自動車道更埴インターチェンジのランプウェーの建設に伴い、当センターで調査した地の目・一丁田遺跡に近接し、東側には屋代高校用地内である馬口遺跡がある。平成６年度に当センターで調査し、国符木簡・郡府木簡等が出土した上信越自動車道関係の屋代遺跡群は、本遺跡から東へ880mの位置にある。北陸新幹線としては、五里ケ峯トンネルの入り口より北方へ約760mの地点から長野自動車道更埴インターチェンジのランプウェーをまたぐ地点までの総延長約750m、幅～24mの範囲になり、現地表で標高356～359mの間にある。

遺跡は千曲川右岸の自然堤防上とその後背湿地の一部を含み、更埴条里遺跡から連続する条里的地割りに則ると考えられる条里水田と、それらを営む前後の集落遺跡が接しており、生産域と居住域の明確な境界が認められた点と、居住域に大開発が入って生産域に変換された跡が明瞭に認められた点が、大きな成果として挙げられる。一帯の現況は、水田・畑など耕作地として利用されている。

２　調査の概要

調査対象となった面積は３ケ年で8200㎡である。最初に遺構・遺物・包含層の有無、土層の堆積状況、本調査必要範囲の確認のための試掘調査を行った。便宜上遺跡を南から１～７の区に分け、６区はさらにａ～ｅに分け（第95図）、用地の事情で数回に分けて重機による試掘を行った。

１・２・４区は現水田面に重機による試掘トレンチを入れた。１区では、現水田面直下に何面かの水田土壌の堆積が確認できた。しかし、遺物も少なく遺構も確認できなかったため面的な調査の必要はないと判断した。自然流路、旧五十里川の縁も確認されたが、断面観察にとどまった。２区は、弥生時代から平安時代にかけての集落跡と平安時代の水田跡、４区でも平安時代の水田跡が見つかり、面的な調査を行うこととなった。

６区は人力による試掘を行った。その結果、ｂ区から北に集落が広がることが確認され、面的な調査を行うことになった。ｂ区の南のａ区には洪水砂に覆われた平安時代の水田が確認された。しかし、地表下約２ｍに在る水田面の調査は、洪水砂が約1.5m堆積し、出水も多いため保安上の問題からトレンチにより畦畔を確認する短期間の調査にとどまった。

３区は工事の工程上、立ち会い調査も行えなかったが、２区の北端、および４区に平安時代の洪水砂に覆われた水田が確認されていることから、３区にも同様に平安水田があったものと想定される。５区は範囲が非常に狭いため、計画当初から立ち会い調査となった。結果、平安時代の水田面が確認された。

７区は６ｅ区の西側に34m隔たって平行する側道兼農道部分にあたり、平成８年度、更埴市と分担して調査を行なった。この地区は一丁田遺跡に相当するが、本書の扱いの範囲では便宜上７区として報告する。

3　調査の経過

平成５年度

4月14日　４区試掘
4月19日　４区表土剥ぎ開始
5月11日　４区空中写真撮影　６区試掘開始
5月21日　４区調査終了
5月27日　６区試掘終了
6月10日　６ａ区調査開始
6月30日　６ｂ区表土剥ぎ開始
7月１日　６ａ区調査終了
7月19日　６ｂ区　第２検出面空中写真撮影
7月21日　６ｄ区表土剥ぎ開始
8月24日　６ｂ区　第３検出面空中写真撮影
9月13日　６ｂ区調査終了
11月15日　２区試掘開始
11月19日　２区試掘終了
11月22日　１区試掘開始
11月25日　１区試掘終了
12月14日　６ｄ区調査終了

平成６年度

4月11日　２区表土剥ぎ開始
6月６日　６ｃ・６ｅ区試掘
6月14日　２区空中写真撮影
7月４日　１区南端試掘
7月18日　２区調査終了
7月19日　６ｃ区表土剥ぎ開始
8月18日　６ｅ区（ⅡＰ・Ｕ区）表土剥ぎ開始
9月７日　６ｅ区（ⅡＰ・Ｕ区）　第２検出面空中写真撮影
9月13日　６ｃ区　第３検出面空中写真撮影
10月17日　６ｅ区（ⅡＫ・Ｐ区）表土剥ぎ開始
10月18日　６ｃ区　第４検出面空中写真撮影
10月21日　６ｃ区調査終了
10月26日　６ｅ区　第４検出面空中写真撮影
11月２日　６ｅ区調査終了
１月17日　２区補充調査開始
１月18日　２区補充調査終了

平成８年度

4月18日　７区表土剥ぎ開始
5月２日　７区調査終了

４区調査風景（平成５年度）

６ｄ区調査風景（平成５年度）

4　基本層序

遺跡の基本層序を、1区北側・2区集落・2区水田・4区・6a区南端・6a区中央・6c区南端・6e区中央・7区を柱状概念図で表した（第95図）。なお、連続する更埴条里遺跡の柱状概念図と対比できるように更埴条里遺跡5区の柱状図も併せて載せた。分層は以下のとおりである。

Ⅰ層：色調多様。現耕作土。

Ⅱ層：灰黄褐～にぶい黄橙色土。弱粘性で溶脱層と集積層のセットが観られる。旧耕作土。

Ⅲ層：褐～明黄褐色砂。洪水砂層。

Ⅳ層：褐灰～にぶい黄褐色粘質土。平安水田対応層。集積層をⅣ′層と呼ぶ。

Ⅴ層：黒褐色土。

Ⅵ層：にぶい黄褐色砂質土。

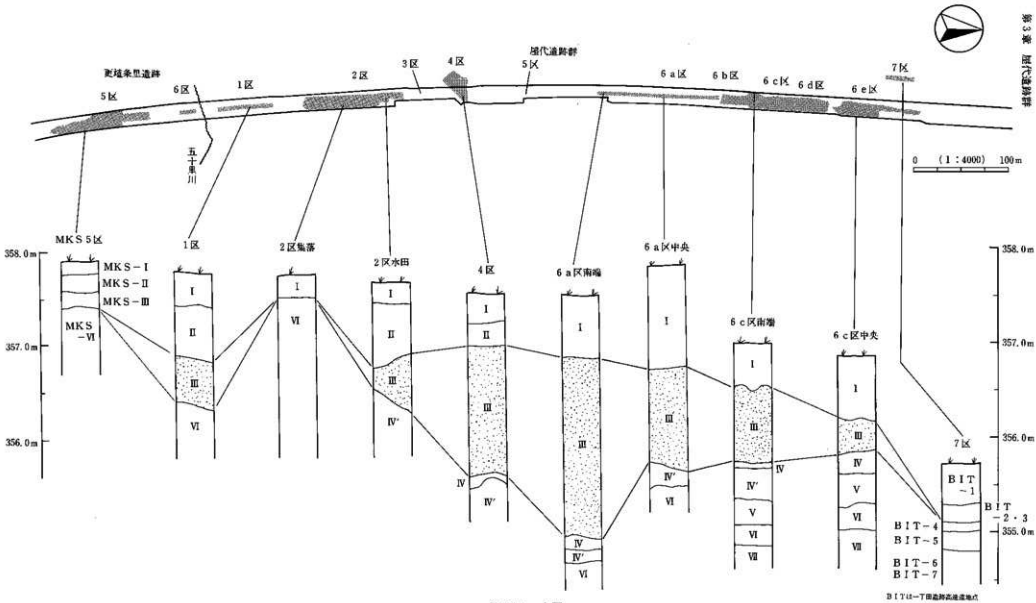
Ⅶ層：褐色砂質土。Ⅶ－1層はⅦ層が土壌化したもの。

調査区は南北に広範であるが層序は比較的安定し、対比が可能である。2区の集落域を除き、Ⅴ層以下はいずれの地区にも普遍的に存在している。2区の集落域ではⅥ層から現地表面までが極めて浅く、Ⅴ層以上が微高地上にあってもともと堆積していないか、近現代の耕作土に置換している。ⅡP－02グリッド以北の6e区と7区のⅣ層以上にも同様なことが言える。これら以外の地区では、洪水砂層であるⅢ層が厚い堆積を示し、良好なキー層を成している。Ⅲ層は現存値で、1区で0.6m、集落域を除く2区で0.7m、4区で1.5m、6a区で1.9m、6b区水田で1.1m、6b区集落で0.8m、6c区で0.8m、6d区～ⅡP－07・08グリッド以南の6e区で0.3mが堆積しており、再開発を放棄してしまうほどの厚い堆積であり、Ⅲ層を掘り込む遺構は極めて少なく、また近代以降においてもⅠ・Ⅱ層の耕作や攪乱がⅢ層の途中までで止まってしまうため、Ⅳ～Ⅵ層に包蔵されている埋没水田やそれより下位の遺構は極めて保存状態がよい。過去の調査成果では、埋没水田を覆う砂は厚さと粒径組成分布から屋代高校付近で千曲川が氾濫した結果と推定されており、4～6b区、とりわけ6a区のⅢ層の堆積状況は真にこれを追証している。

集落跡は2区と6・7区で見つかり、その間に埋没水田が広がるのは、千曲川が2区と6・7区の間を大きく抉り込むように蛇行した旧河道の埋没部分を利用しているからであると考えられる。2区ではこのⅢ河道と考えられる、捉えきれないほどの大きな落ち込み（SD2021）を確認している。平安水田が開発された時点ではそれまでの旧河道は埋没して水田化され、河道はさらに西側へ後退していたことが現況の土地利用の航空写真からもつかめ、洪水砂をもたらした欠壊部分の蛇行外縁部は6a区の西寄り付近に相当するものと思われる。

実際の調査は、堆積の様相の異なる2区・6e区北端・7区を除き、Ⅲ層上面、Ⅲ層下面、Ⅳ層半ば、Ⅴ～Ⅵ層の4面を行っている。Ⅲ層上面は、洪水埋没後の土地利用や再開発を探る目的で行ったが、遺構は僅少で中世に至ってもほとんど遺物は散見されない。Ⅲ層下面は、洪水直前の上地利用が明確にパックされており、9世紀後半の水田や廃絶された集落跡が確認されている。Ⅳ層半ばは、9世紀後半の水田耕土を取り除いた面で、平安時代相当層である。埋没水田より古相の水田やそれを営む9世紀前半～中頃後半の集落が包蔵される。Ⅴ～Ⅵ層は古墳時代～奈良時代相当層で、6世紀末～8世紀末の集落が包蔵される。

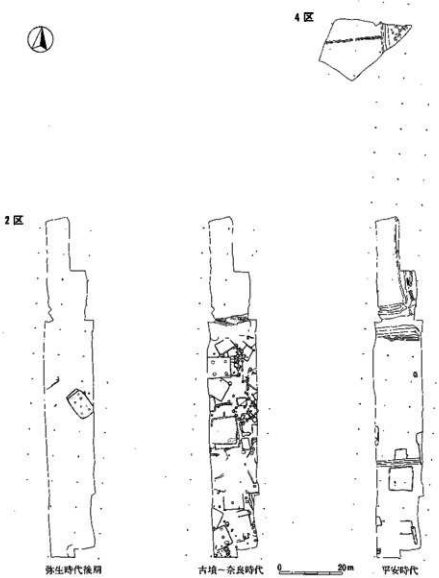
P115表に当センターで調査した屋代遺跡群内の土層の対比を示す。報文中の土層表記の参考とするとともに、当センターにおいて、本書に先駆けて刊行された報告書および本書より遅れて刊行される報告書との対比の一助にし得るものと考える。


居代遺跡群
5区
6区
1区
2区
3区
4区
5区
6a区
6b区
6c区
6d区
6e区
7区
五十鈴川
0　(1：4000)　100m
MKS 5区
1区
2区集落
2区水田
4区
6a区南端
6a区中央
6c区南端
6c区中央
7区
358.0m
357.0m
356.0m
MKS－I
MKS－II
MKS－III
MKS－VI
BIT－1
BIT－2・3
BIT－4
BIT－5
BIT－6
BIT－7
BITは－T居遺跡高速道地点

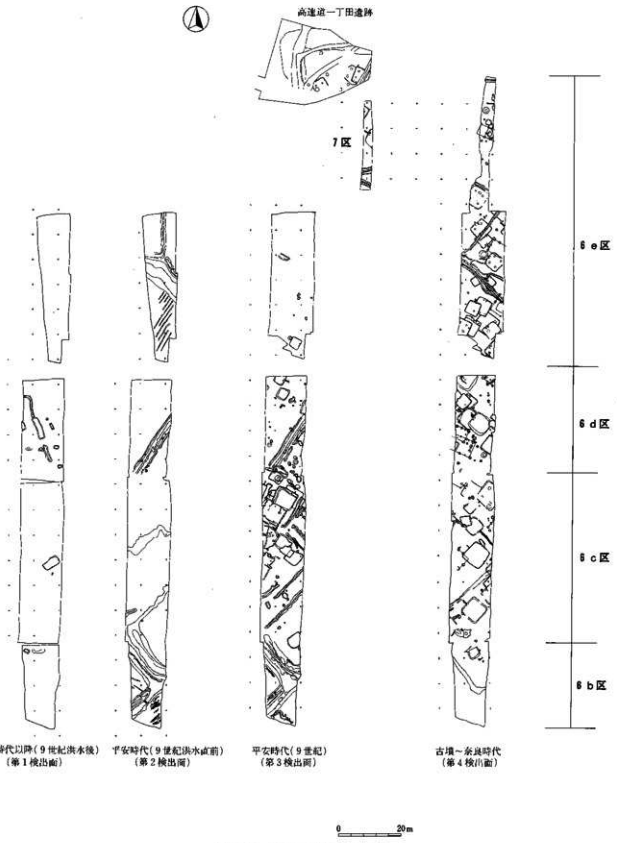
第95図　土層

土層対比

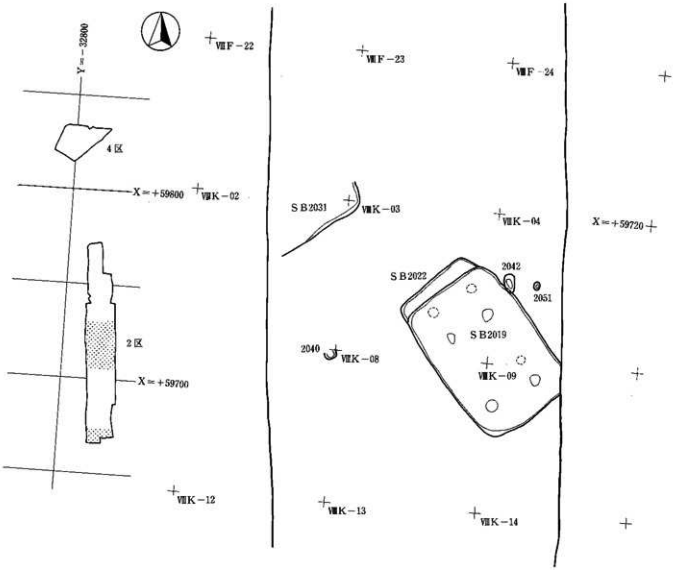
更埴条里遺跡 新幹線地点	屋代遺跡群 新幹線地点	地の目・一丁田遺跡 高速道地点	更埴条里・屋代遺跡群 高速道地点
Ⅰ	Ⅰ	1	Ⅰ
Ⅱ・Ⅲ	Ⅱ	2・3	Ⅱ
堆積みられず	Ⅲ	堆積みられず	Ⅲ－1 Ⅲ－2
Ⅳ	Ⅳ	堆積みられず	Ⅳ－1
	Ⅳ′		Ⅳ－2～
堆積みられず	堆積みられず	堆積みられず	Ⅴ
Ⅴ	Ⅴ	4	Ⅵ
Ⅵ	Ⅵ	5	Ⅶ～Ⅸ
	Ⅶ	6	
		7	

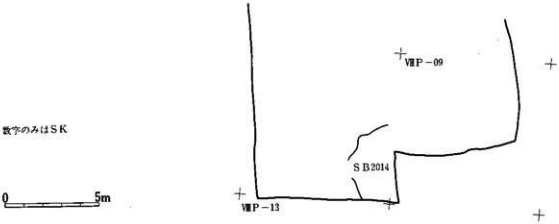


第97図　2区・4区　全遺構分布

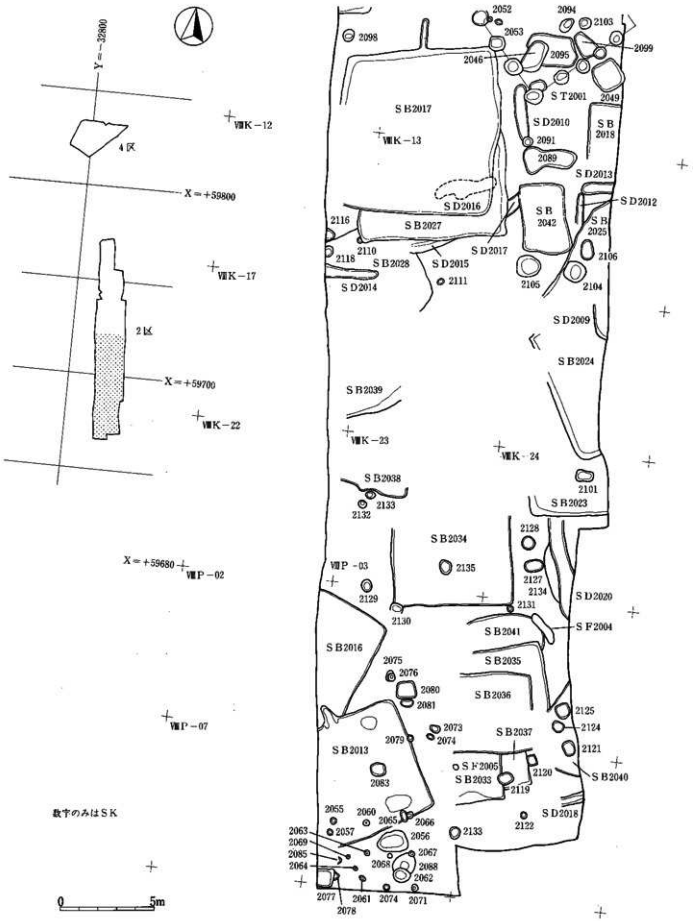


第97図　6区・7区全遺構分布

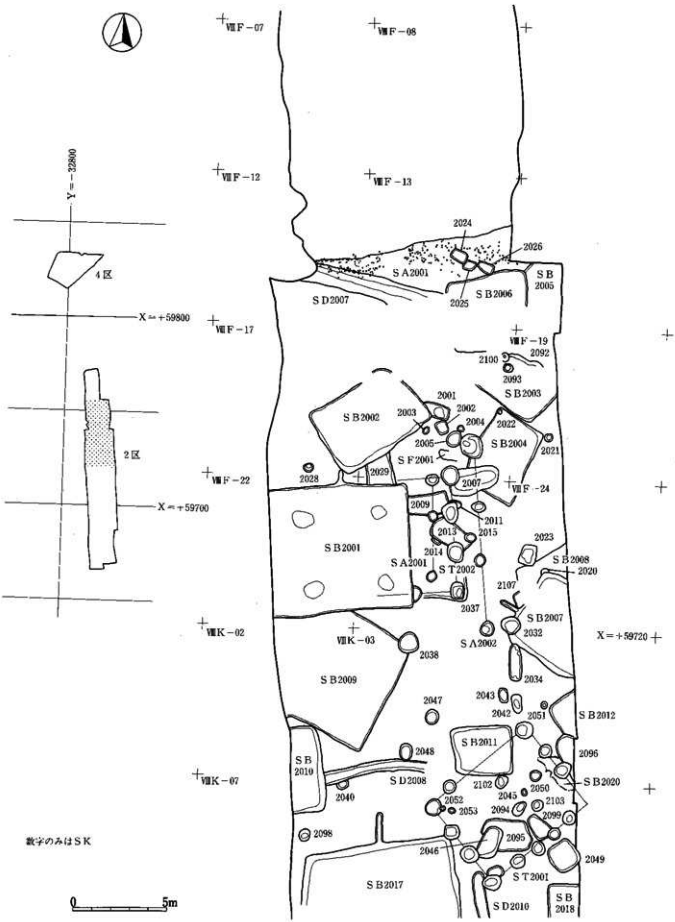




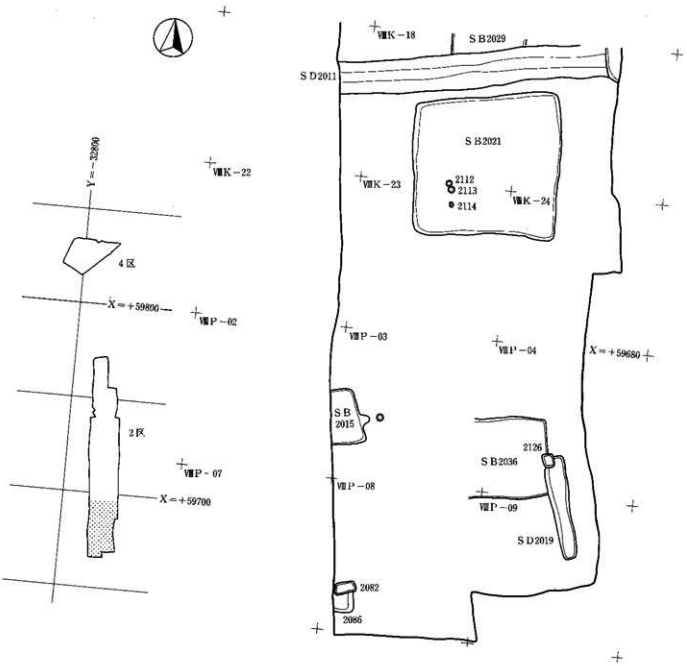
第98図　遺構分布（１）　２区　弥生時代後期



第99図　遺構分布（２）　２区南　古墳～奈良時代



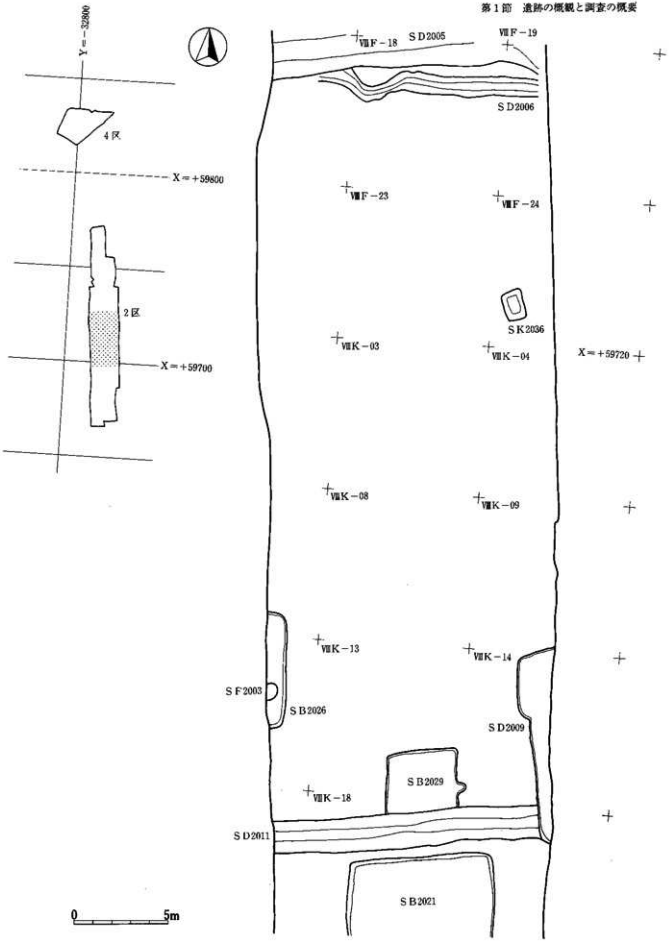
第100図　遺構分布（３）　２区北　古墳～奈良時代



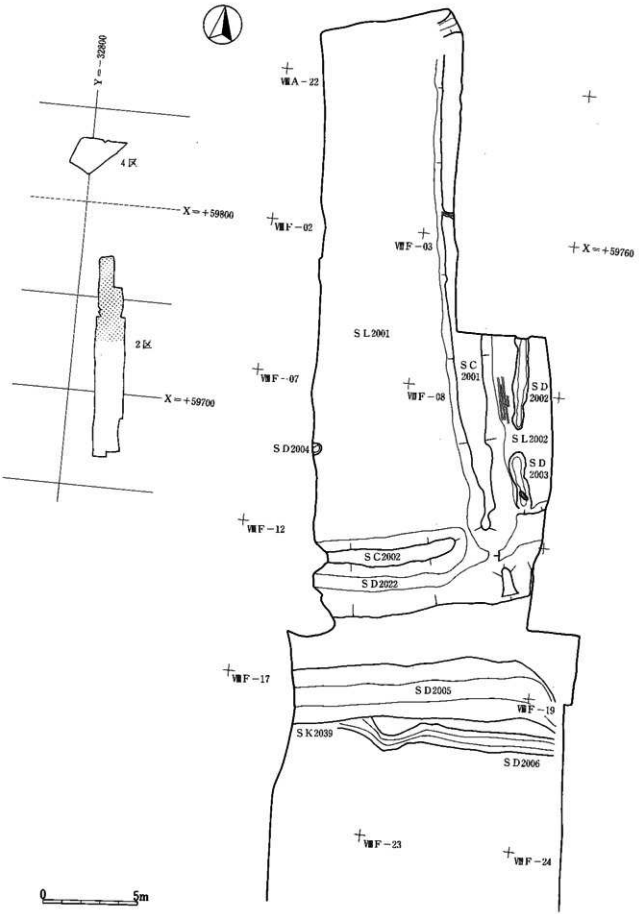
数字のみはＳＫ

0　5m

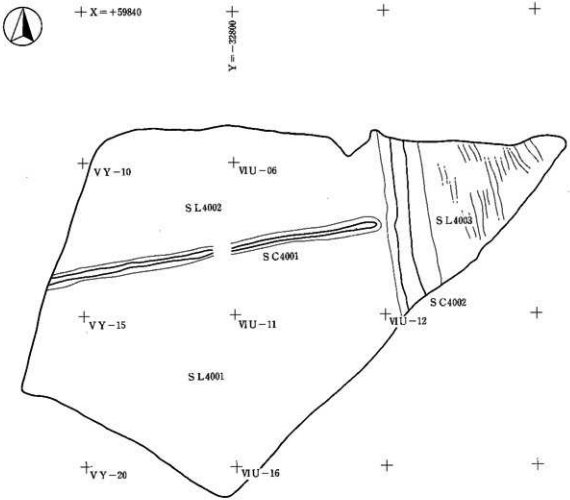
第101図　遺構分布（４）　２区南　平安時代

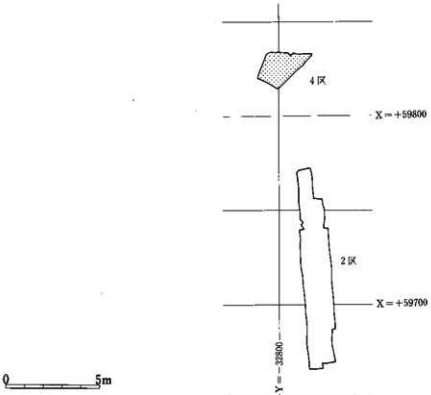


第102図　遺構分布（５）　２区中　平安時代

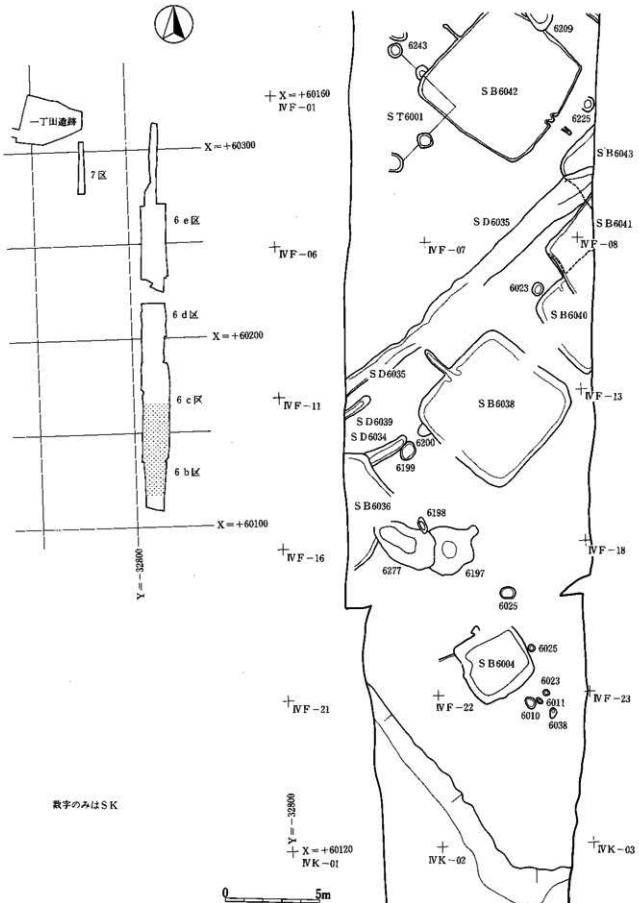


第103図　遺構分布（６）　２区北　平安時代

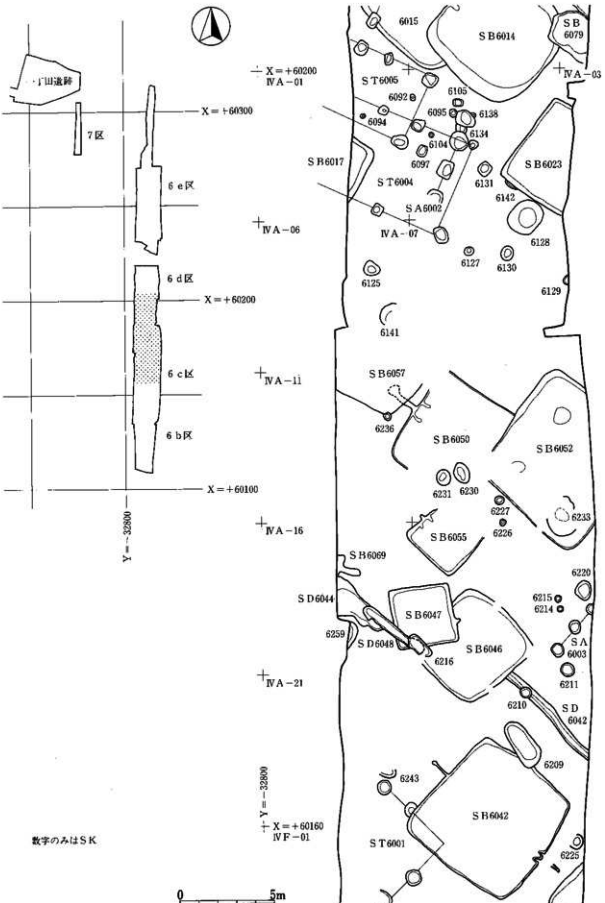




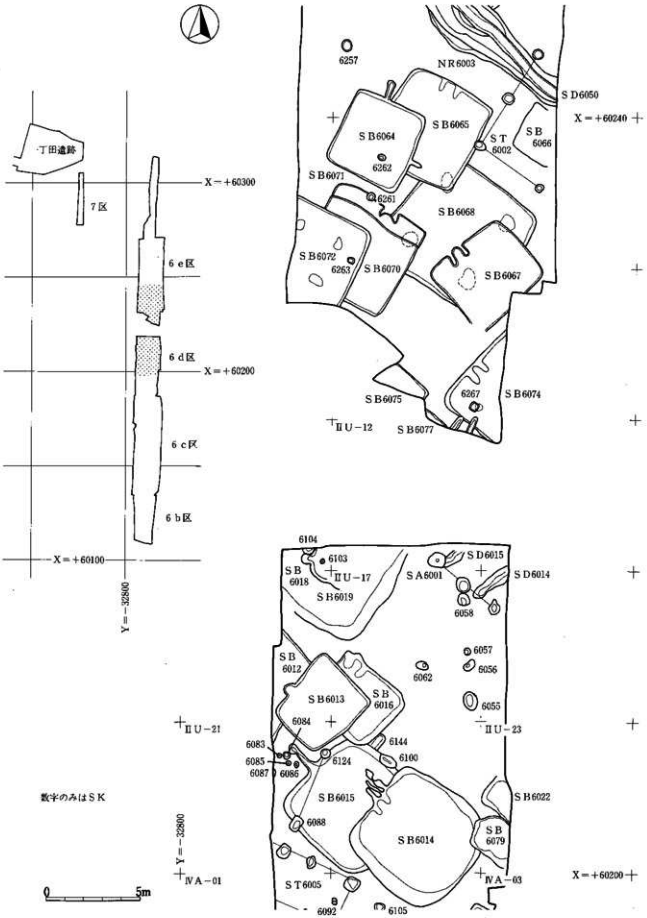
第104図　遺構分布（7）　4区　平安時代



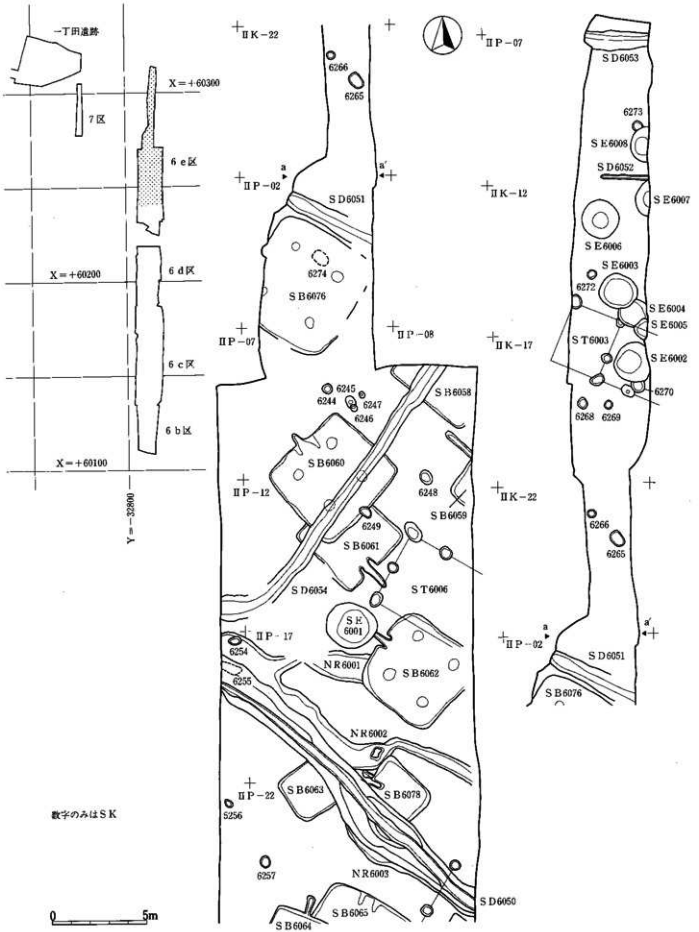
第105図　遺構分布(８)　６ｂ区・６ｃ区南　古墳～奈良時代(第４検出面)



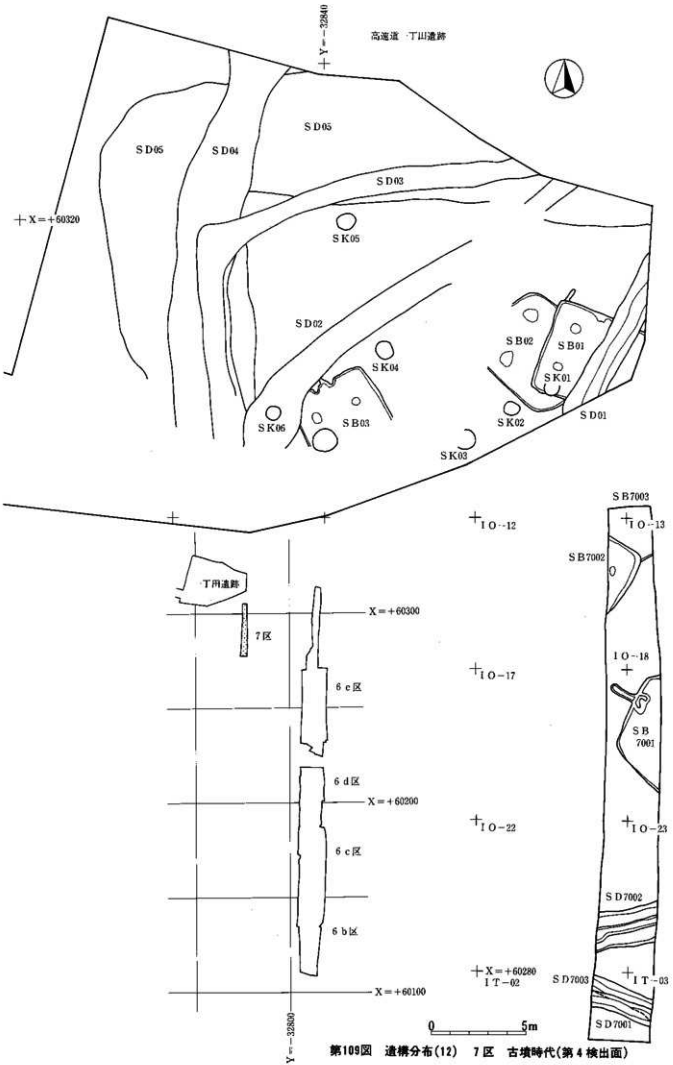
第108図　遺構分布(9)　6ｃ区北・6ｄ区南　古墳～奈良時代(第4検出面)



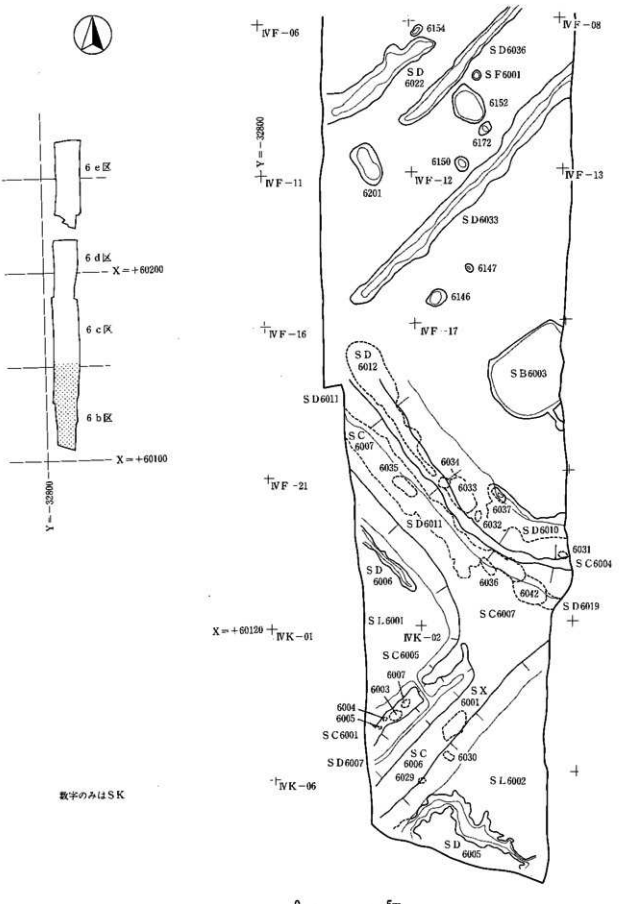
第107図　遺構分布(10)　６ｄ区北・６ｅ区南　古墳～奈良時代(第４検出面)



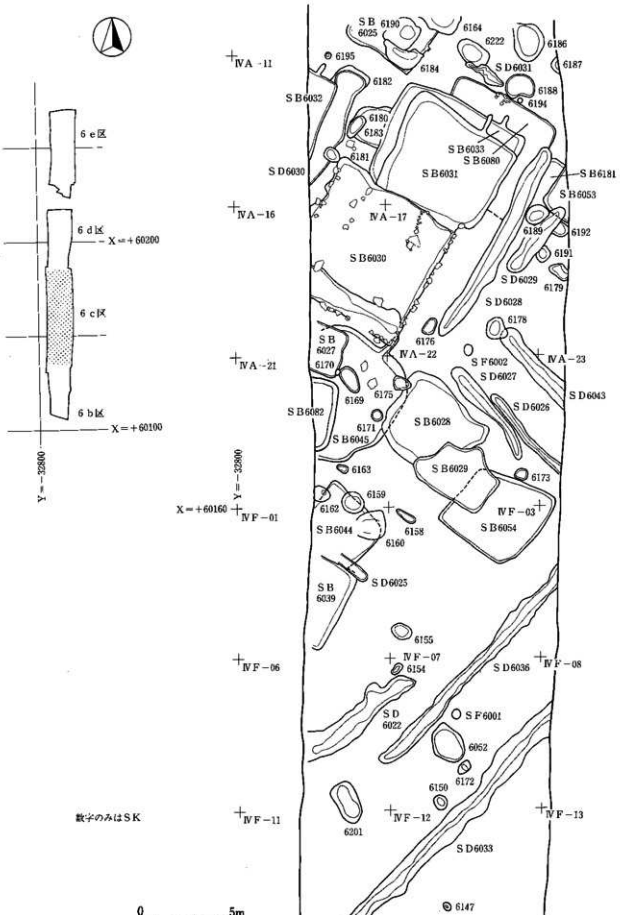
第108図　遺構分布(11)　６ｅ区中～北　古墳～奈良時代(第４検出面)



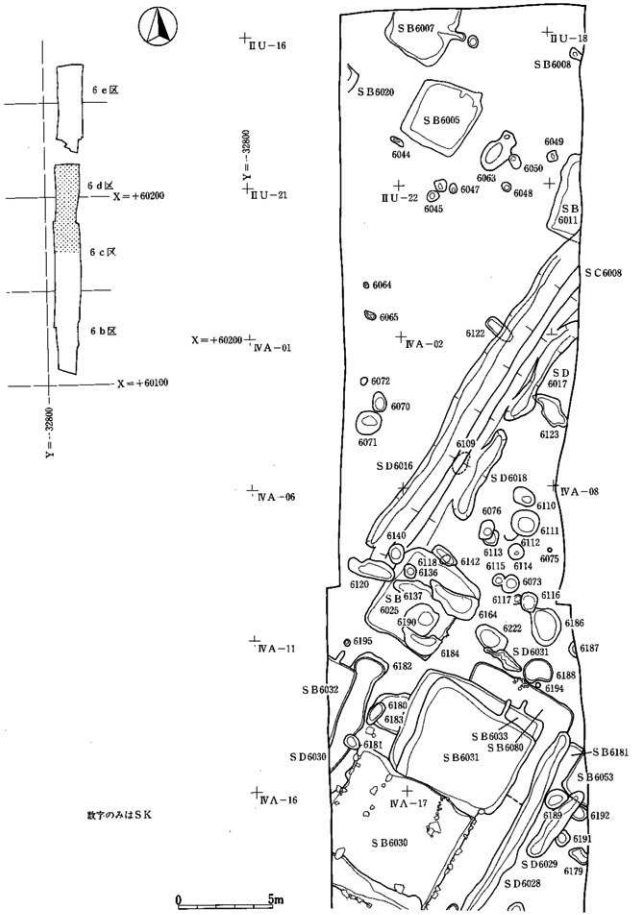
第109図　遺構分布(12)　7区　古墳時代(第4検出面)



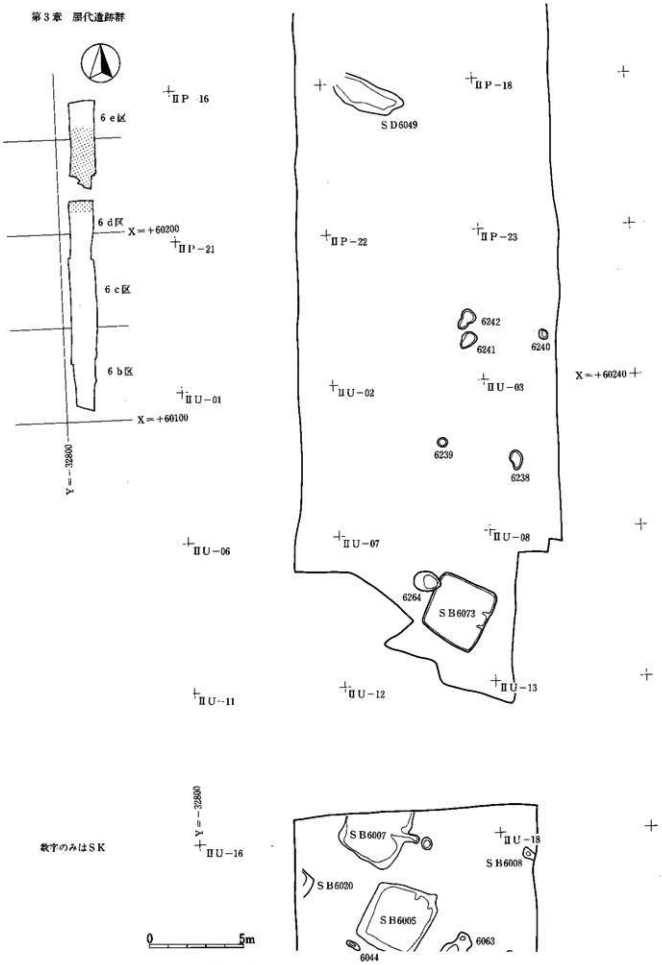
第110図　遺構分布(13)　６ｂ区・６ｃ区南　平安時代(９世紀)(第３検出面)



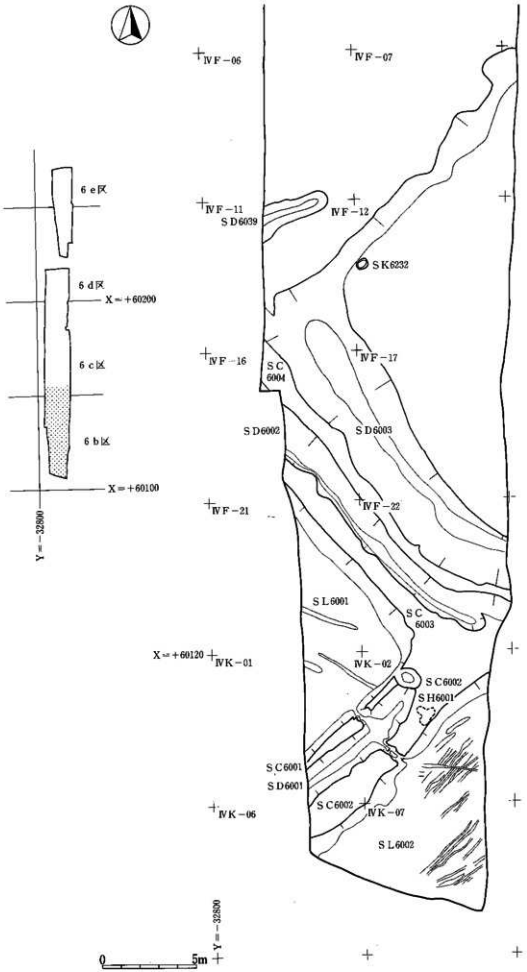
第111図　遺構分布(14)　６ｃ区　平安時代(９世紀)(第３検出面)



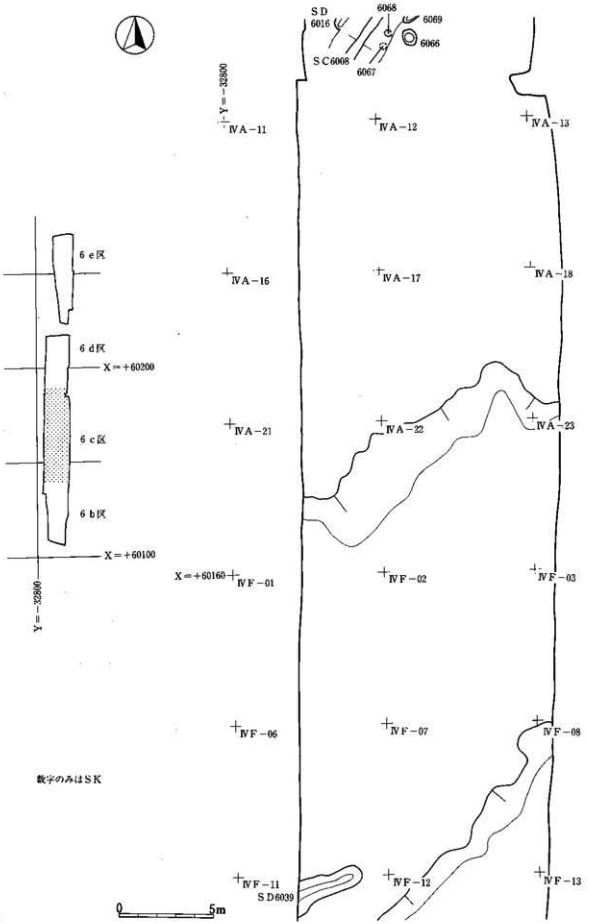
第112図　遺構分布(15)　6 c 区北・6 d 区　平安時代(9世紀)(第3検出面)



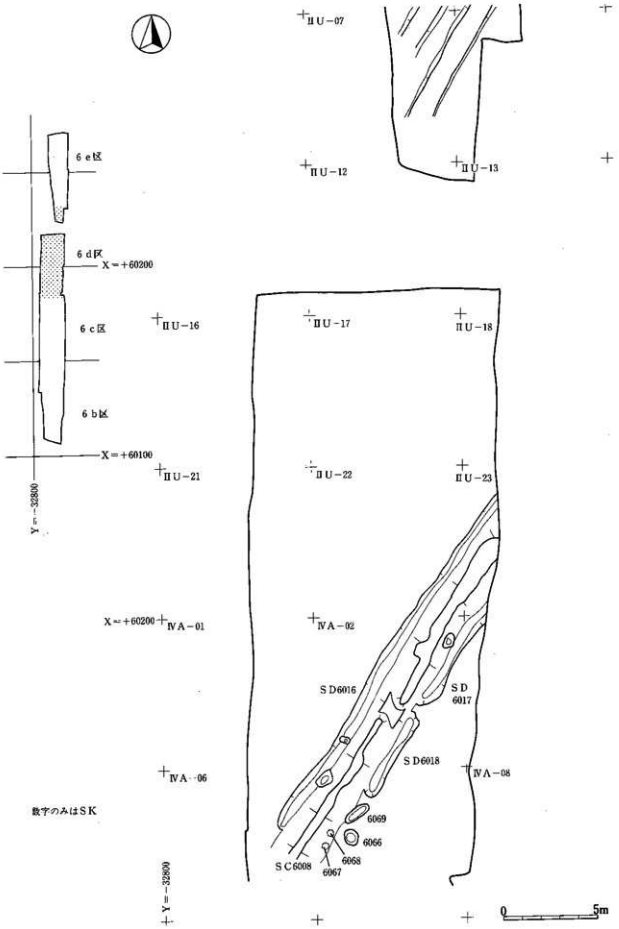
第113図　遺構分布(16)　8 e区　平安時代(9世紀)(第3検出面)



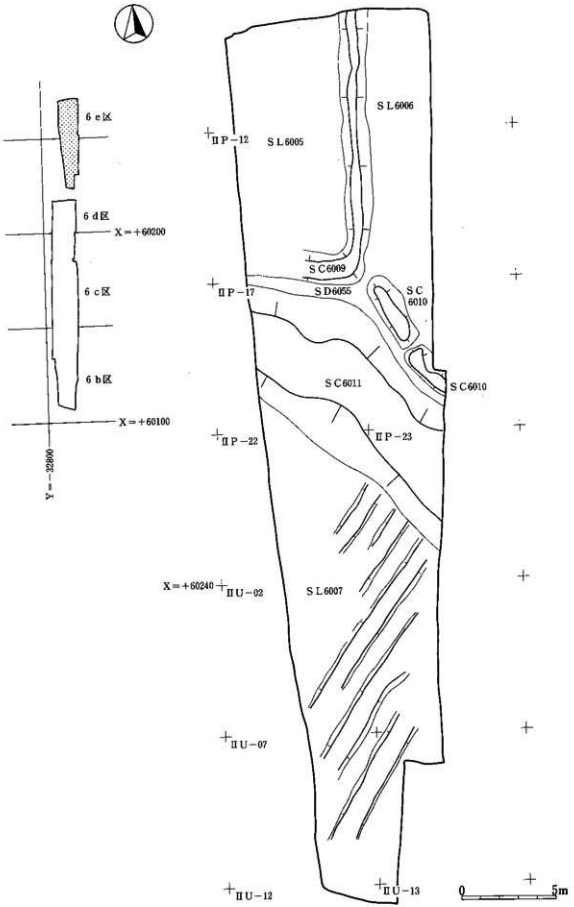
第114図　遺構分布(17)　6 b区・6 c区南　平安時代(9世紀洪水直前)(第2検出面)



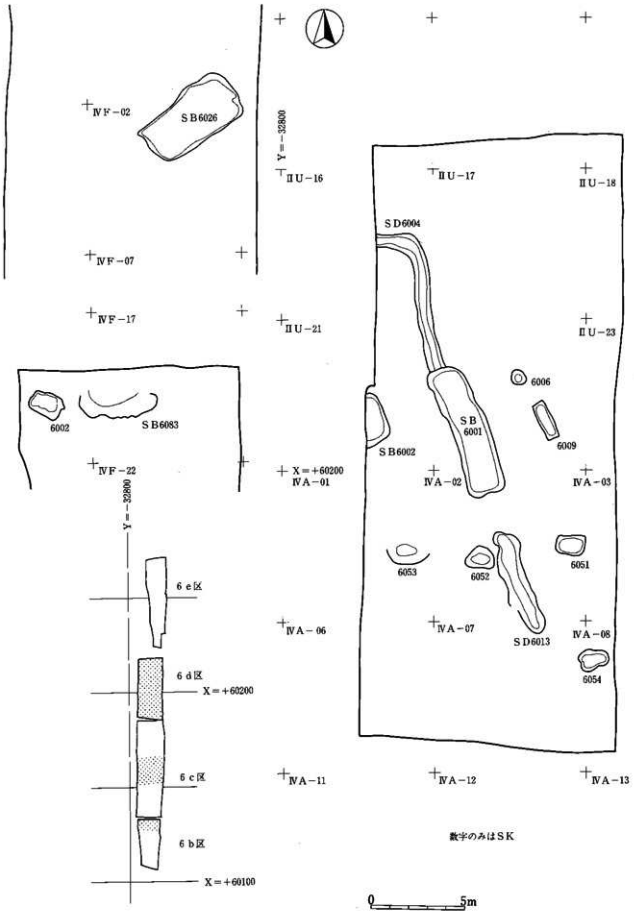
第115図　遺構分布(18)　６ｃ区　平安時代(９世紀洪水直前)(第２検出面)



第116図　遺構分布(19)　６ｄ区　平安時代(９世紀洪水直前)(第２検出面)



第117図　遺構分布(20)　6 e区　平安時代(9世紀洪水直前)(第2検出面)



第118図　遺構分布(21)　6b区～6d区　平安時代以降(9世紀洪水後)(第1検出面)

第２節　２区の遺構と遺物

屋代遺跡群は調査対象範囲が細長いため調査区により様相が異なる。居住域は２区と６・７区に隔絶して認められる。古墳時代では、６・７区が６～７世紀（主に７世紀代）の居住域であるのに対し、２区では５～７世紀（主に５世紀代）の住居跡が多く見つかっている。また、６・７区には全く見られない弥生時代後期の住居跡が２区には少ないながら認められる。２区と６・７区の間は千曲川の旧河道の蛇行が抉り込む形で低くなっていると考えられ、２区北端では５世紀代に、埋没途上のこの旧河道に遺物が投棄されている。９世紀には、この旧河道はほぼ埋没しきって低湿化しており、水田に開発されたと考えられる。

以上のような遺跡の特徴から、遺構・遺物については２区と６・７区についてはそれぞれ別々に述べ、水田関係遺構については同一時期のものと考えられるので区を越えて最後にまとめて述べることとする。なお、１・３・５・６ａ区については、調査の概要で述べたことをもって本報告にかえる。

２区では、弥生時代の住居跡４軒、古墳時代の住居跡９軒、掘立柱建物跡１棟、土坑列２列、溝跡２条、焼土跡１基、古代の住居跡（竪穴状遺構および時期不明含む）27軒、掘立柱建物跡１棟、水田２面、畦畔２条などを検出した。土坑と溝跡は、弥生時代～古代合わせて118基と22条を検出した。

２区では弥生時代から古代の遺構がすべて同一面で検出されている。水田を除くすべての遺構はⅥ層上面で検出され、本来の包含層は現耕作土として攪拌されている。従って現耕作土の直下が検出面となり、遺構がどこから掘り込まれているのか判らなくなっている。このため以下の記述では「壁」の項の「Ⅵ層を掘り込む」という表現は省略する。また、６・７区と比較するうえでの整合性をはかり、遺構分布図は弥生時代を分離し、さらに集落に大開発がおよぶ９世紀代と８世紀以前との分離を試みた。なお、この操作は確実に弥生時代であるもの、および確実に９世紀代であるものに限られるため、時期不明の竪穴状遺構や土坑は５世紀～８世紀という広い幅の中に収めてある。

１　弥生時代

(1)　竪穴住居跡

ＳＢ2014（第98図）

位　　置：ⅧＰ－08・09

重複関係：ＳＫ2067・2088・2123に切られる。

形　　状：調査区域外に拡がることと床のみの検出のため不明。

床　　面：貼り床というほどではないが、踏み固められた堅緻。

炉　　：地床炉とみられる浅い窪みが２基ある。

遺　　物：床面直上から弥生時代後期の土器片が出土した。

所　　見：箱清水期の住居跡と思われるが不明。

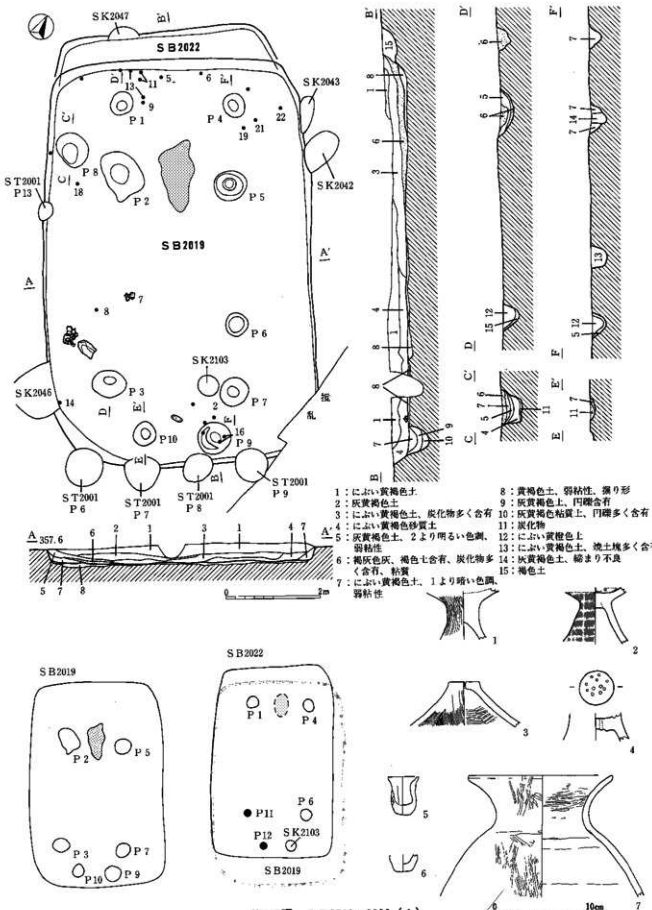
ＳＢ2019・2022（第119・120図、ＰＬ20・30・42・43）

位　　置：ⅧＫ－03・04・08・09

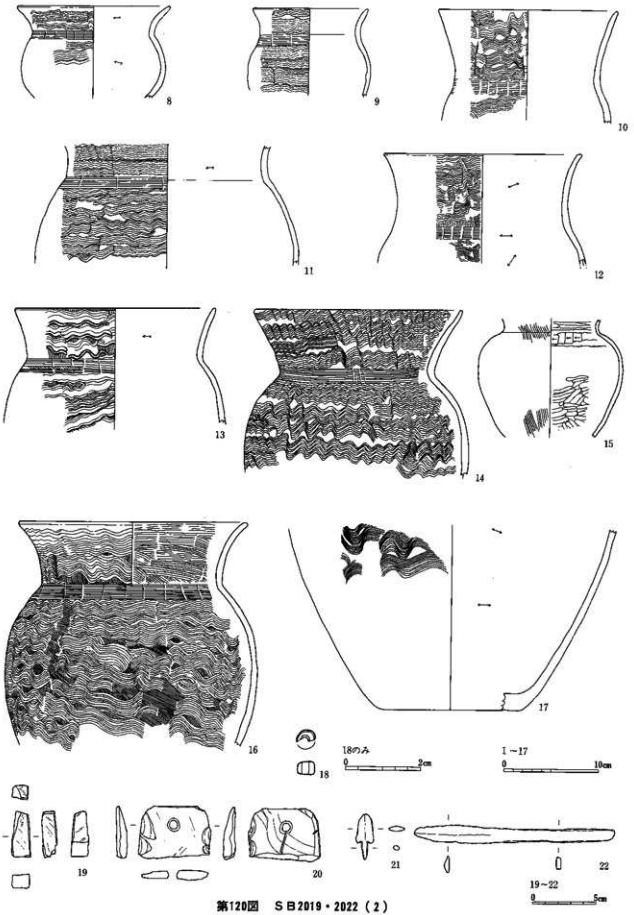
重複関係：ＳＴ2001、ＳＫ2042・2043・2046・2047に切られる。

形　　状：8.6×5.7mの隅丸長方形である。ＳＢ2022も同規模と推定される。

覆　　土：主に７分層されるが６層を除き漸移的で、壁際に三角堆土をもち、自然埋没である。ＳＢ2022は単層で人為埋没である。



第119図　ＳＢ2019・2022（１）

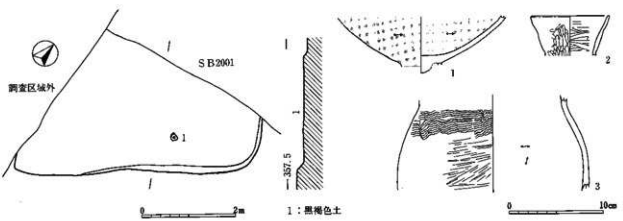


第120図　S B2019・2022（2）

壁　　：傾斜して立ち上がる。長軸方向では緩やか。壁高は検出面からそれぞれ最深52cm、32cmを測る。
床　　面：全面的に貼られている。掘り形は浅く凹凸がある。ＳＢ2022の床の状況は判然としない。
ピット：Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ７はＳＢ2019の、Ｐ１・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ11はＳＢ2022の主柱穴、Ｐ９・Ｐ10はＳＢ2019の、Ｐ12とＳＫ2103はＳＢ2022の入り口施設である（第119図左下参照）。ただし、Ｐ11・Ｐ12は検出できなかった。Ｐ８は貯蔵目的か。
炉　　：奥壁の主柱穴間にある。床はほとんど窪まずに赤化している。ＳＢ2022は不明。
遺　　物：全般に多く、奥壁付近と入り口付近に多い。土器では、高坏（１・２他）、単孔の壺（３）、多孔の壺（４）、無赤彩の壺（７）、簾状文と櫛描波状文の施された台付甕（８）、同様の甕（９～14・16・17他）、外来系と思われる系統不明の甕（15）、ミニチュア土器（５・６）等がある。甕類の出土量に比し、壺類の出土量は極めて少ない。３は内外面ともハケ目のちミガキ調整される。頂部の調整は不明である。９・13・16は波状文の下に地文としてハケ目がある。16は内面頸部に横方向のハケ目をもつ。15は外面にハケ目、内面は磨いたのち頸部をヘラ削りで一巡する。土器以外では砂岩製の小型砥石（19）、粘板岩製の単孔石器（20）、ガラス小玉（18）、銅鏃（21）、ヤリガンナ（22）がある。２・５～７・10・11・16・19は床面、９は床下、他は覆土より出土した。18は径4.5cm、厚さ3.5cm、ライトブルーの色調である。20は幅5.6cm、欠損品である。21は3.6×1.4×0.4cm、4.8g、22は16.0×1.4×0.4cm、13.0g。
所　　見：第119図左下に表したようにＳＢ2022からＳＢ2019へ、やや短軸を縮め入り口を１m前後手前にずらして建て替えを行ったと考えられる。弥生時代終末期の住居跡と考えられる。

ＳＢ2031（第121図）

位　　置：Ⅷ Ｆ－22・23、Ⅷ Ｋ－02・03
重複関係：ＳＢ2001・2009に切られる。
形　　状：調査区域外および切られて不明。
床　　面：掘り形はなく軟弱である。
遺　　物：両面赤彩の高坏体部（１）が床面から、内面を横方向、外面を縦方向に磨いた小型土器（２）と櫛描波状文の下位を磨く甕（３）が覆土から出土した。２は坩の頸部か。
所　　見：住居跡と思われるが不明。弥生時代的な要素を残しながら、２・３の土器にみられるように既に古墳時代に移行しつつあると思われる。



第121図　ＳＢ2031

2　古墳時代

(1)　竪穴住居跡と竪穴状遺構

ＳＢ2002（第122図、ＰＬ19）

位　　置：Ⅷ Ｆ－17・18

重複関係：ＳＫ2001・2029を切り、ＳＤ2006に切られる。

形　　状：3.9×5.6mの隅丸長方形。

覆　　土：単層。Ⅳ層を基調とする自然埋没である。

壁　　：ほぼ垂直である。壁高は検出面より14cmである。

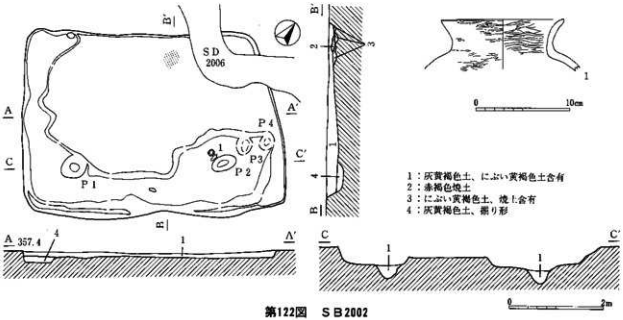
床　　面：貼り床は不明瞭だが中央付近に堅緻な部分がある。掘り形は浅く、南壁際と西壁際にある。

ピ ッ ト：Ｐ１・Ｐ２は主柱穴と考えられるが、これと対応する北側のものが検出できなかった。Ｐ３・Ｐ４は床下検出。

カ マ ド：北壁中央よりやや東寄りに火床のみ残存する。

遺　　物：土師器ミガキ甕（１）が掘り形より出土した。

所　　見：７世紀後半の住居跡か。長方形のプラン、カマドの形態など疑問な点も多い。



第122図　ＳＢ2002

ＳＢ2003（第123図）

位　　置：Ⅷ Ｆ－18・19

重複関係：ＳＢ2004を切り、ＳＤ2005・2006に切られる。

形　　状：１コーナーが見つかったに過ぎず、ＳＤ2005・2006に挟まれた部分のプランも不明。

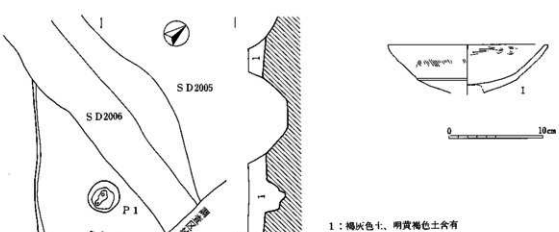
覆　　土：Ⅳ層を基調とする単層で自然埋没である。

壁　　：検出面からの壁高は26cmで傾斜する。

床　　面：掘り形をもたないが、残存部は貼られている。

遺　　物：土師器高坏体部（１）が壁際床面上から出土した。脚部との接合部は擬口縁が認められる。

所　　見：５世紀中頃～後半の住居跡とみられるが不明。



第123図　ＳＢ2003

ＳＢ2004（第100図、ＰＬ19）

位　　置：Ⅷ Ｆ－18・19・23・24

重複関係：ＳＢ2003、ＳＡ2002、ＳＫ2007・2022に切られる。

形　　状：4.3×3.2mの長方形。

掘 り 形：検出時点で床はなく、浅く凹凸のある掘り形のみが残存する。

所　　見：遺物は皆無だが、重複関係から５世紀以前の遺構とだけ言い得る。

ＳＢ2005（第100図）

位　　置：Ⅷ Ｆ－14・19

重複関係：ＳＢ2006、ＳＤ2005に切られる。

形　　状：切られている部分が多く調査区域外にものび、不明。

覆　　土：２分層されるがⅣ層を基調とする自然埋没である。

壁　　：垂直に近い立ち上がりである。壁高は34cmを測る。

床　　面：貼り床をもち中央部で特に固い。掘り形はごく浅く平坦で炭化物を多量に含んでいる。

遺　　物：土師器坏片が覆土中にあったが、図化できるものは無かった。

所　　見：わずかな遺物から５世紀後半の住居跡と思われる。

ＳＢ2009（第124図、ＰＬ19・29）

位　　置：Ⅷ Ｆ－22・23、Ⅷ Ｋ－02・03

重複関係：ＳＢ2031を切り、ＳＢ2001、ＳＫ2038に切られる。

形　　状：切られ、調査区域外に伸びるが、南北軸6.6m、東西軸７m弱の隅丸方形と考えられる。

覆　　土：焼土・炭化物を多量に含有する単層である。人為埋没か。

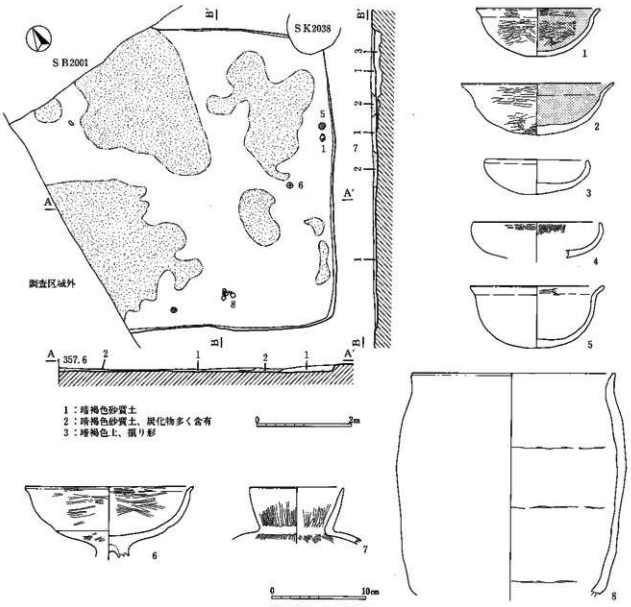
壁　　：ほぼ垂直で、検出面からの壁高は12cmを測る。

床　　面：明確な貼り床は認められないが中央部では固い。南壁際のみ浅い掘り形がみられた。

遺　　物：土師器坏（１～５）、同高坏（６）、同壺（７他）、同甕（８）が床面から出土した。坏は、口縁部が稜をもって外反するもの（１・２・５）と内湾するもの（３・４）があり、４の内面を除き、内外面とも横ミガキ調整される。３の調整は不明。底部は２・３・５が肥厚する。６の坏部

は内面口縁部と外面下部に稜をもち、内外面とも横ミガキ調整される。７は縦方向に磨かれたのち、頸部のくびれをナデで一巡する。８はナデ調整。焼成は４がやや軟、他は良好である。

所　　見：焼却住居で、土器は投棄されたものと考えられる。炉・柱穴等検出できなかった。５世紀中頃～後半の住居跡と思われる。



第124図　ＳＢ2009

ＳＢ2010（第125図）

位　　置：ⅧＫ－02・07

重複関係：ＳＤ2008を切る。

形　　状：西半が調査区域外だが、おそらく一辺4.5mの方形と思われる。

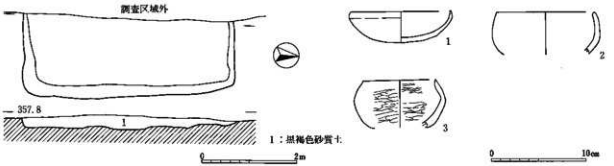
覆　　土：黒褐色土の単層で自然埋没だろう。

壁　　：壁は傾くが不明瞭。壁高は検出面より32cmを測る。

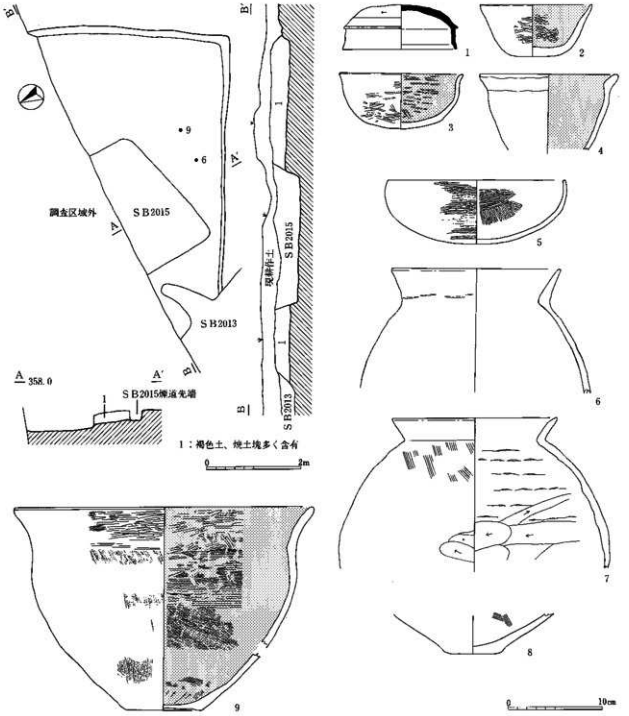
床　　面：掘り形をもたず軟弱で凹凸がある。検出ミスの疑いもある。

遺　　物：全般に少なく、覆土中より土師器坏（１～３）が出土した。１の底部の調整は削りか。

所　　見：５世紀半ば以降の住居跡と思われるが判然としない。



第125図　ＳＢ2016



第126図　ＳＢ2016

ＳＢ2013（第127・128図、ＰＬ19・29・30）

位　　置：Ⅷ Ｐ－03・08

重複関係：ＳＢ2016を切り、ＳＫ2065・2066・2082・2083・2086に切られる。

形　　状：一部調査区域外だが、一辺6.4mの方形と考えられる。

覆　　土：単層で自然埋没と思われる。

壁　　：緩やかに傾斜して立ち上がる。壁高は検出面より18cmを測る。

床　　面：貼り床は明確でないが、全面固い。掘り形はない。

ピ　ッ　ト：６基見つかったが、いずれも柱穴としては位置・規模または深さが不適当である。

カ　マ　ド：北壁中央にある。袖は粘土を用い先端に石を配す。火床はよく赤化し、支脚およびその抜き取り痕は残存しない。南壁にも煙道のみ残存する。

遺　　物：すべて土師器で、坏（１～３）、高坏脚部（９）、鉢（４・５・16）、ミガキ調整の甑（７）、外面ハケ目、内面ナデ調整の小型甕（８）、球形胴のミガキ甕（６）、長胴甕(11～15・17)、土製小玉（10）と安山岩製の敲石（18）がある。坏はいずれも下半から底部が肥厚し、１・２は内外面とも横方向にハケ目調整、３はナデ調整され、底部は１・３がヘラ削り、２がミガキを施す。４・５はナデ調整される。９は外面をミガキ、内面はヘラ削りされる。長胴甕は最大径を口縁部にもつもの（11・13）と胴部にもつもの（12・17）があり、17以外は体部のヘラ削りを基本とする。17は内外面とも、底部付近に細かいハケ目、胴上半は内外面とも粗いハケ目を部分的に施し、のち外面にはところどころ沈線を刻む。16は内外面にハケ目、内面に黒色処理が施される。18は12.8×7.6×4.8cm、720ｇ。４・７・10～13・15・17はカマド、他は床面から出土した。

所　　見：７世紀前半の指標的な住居跡である。

ＳＢ2016（第126図、ＰＬ30）

位　　置：Ⅷ Ｐ－02・03

重複関係：ＳＢ2013・2015に切られる。

形　　状：方形と思われるが調査区域外および切られて不明。

覆　　土：自然埋没で単層。

壁　　：検出面から最深28cm掘り込み、傾斜する。

床　　面：軟弱で掘り形はない。

遺　　物：須恵器では蓋（１）、土師器では坏（２・３・５）、鉢（４・９）、球形胴の甕（６～８）がある。５は極めて精緻なミガキが施されている。９は内外面ともハケ目のちミガキ調整される。

所　　見：５世紀中頃～末の住居跡と思われる。

ＳＢ2020（第100図）

位　　置：Ⅷ Ｋ－04・09

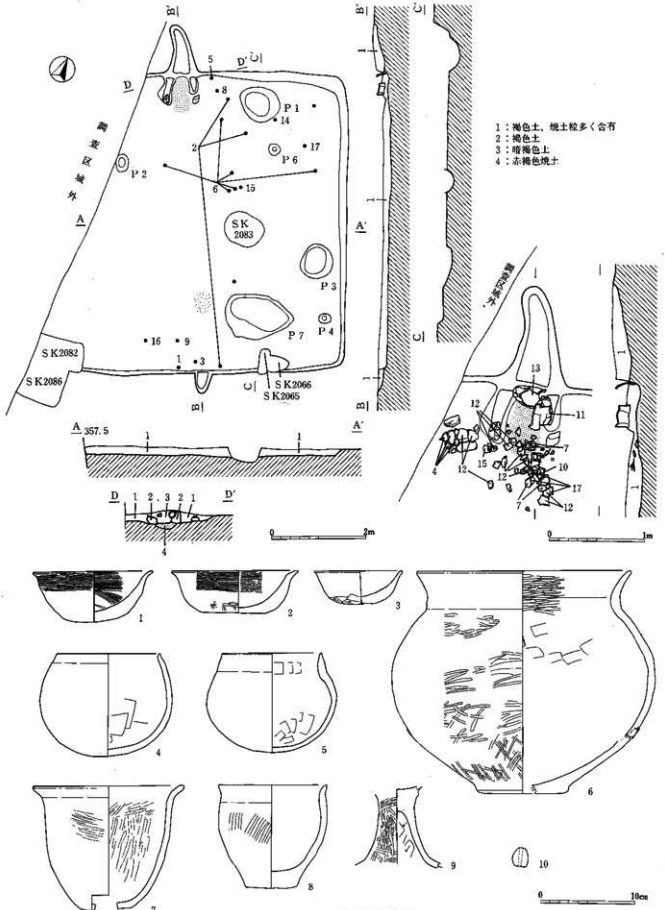
重複関係：ＳＢ2019を切り、ＳＴ2001、ＳＫ2096に切られる。

形　　状：本跡は貼り床の残骸であり、竪穴のプランは不明。

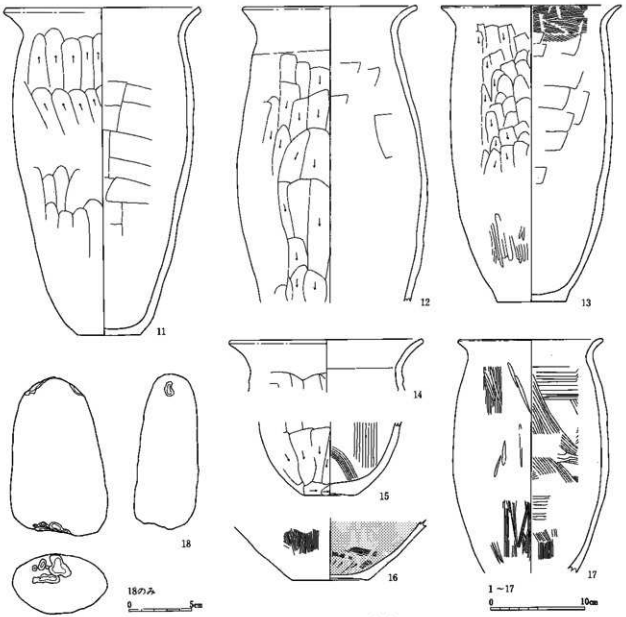
床　　面：明確な貼り床の一部が残る。

遺　　物：３段成形の高坏２個体分の体部小片が床面上にあった。

所　　見：検出面に床の一部が露出し、壁や床の全容は不明である。５世紀末～６世紀頃の住居跡と思われる。



第127図　ＳＢ2013（１）



第128図　ＳＢ2013（２）

(2)　その他の遺構

ＳＴ2002（第129図、ＰＬ20）

位　　置：Ⅷ Ｆ－18・23

重複関係：ＳＫ2007・2009・2011・2013・2037を切り、ＳＢ2001に切られる。

形　　態：梁桁が判然としないが、恐らく２×３間の側柱式であろう。

規　　模：梁行は4.8mと想定され、桁行は6.3mである。

棟　　軸：Ｎ－８°－Ｗ

柱　　間：東西列2.4m、南北列2.0～2.3m

柱　　穴：Ｐ１・Ｐ３は円形、Ｐ２は長円形、Ｐ４は隅丸方形、Ｐ５は切られて不明。断面はいずれも外反気味のＵの字状で、深さ22～51cmである。

柱　　痕：Ｐ４に20cm強のものが確認され、Ｐ３・Ｐ５に底部痕跡が認められた。

覆　土：Ｐ２のみ３分層されるが基調土は同じである。他はＰ４の柱痕を除くと単層である。

遺　物：箱清水式土器片、土師器・須恵器片が覆土中に混じる。

所　見：Ｐ５に対応する北側のピットは検出できなかったが、ＳＢ2001に切られることからそれ以前の建物跡と考えられる。古墳時代として扱ったが、古代（８世紀前半）の建物跡の可能性も高い。

ＳＡ2001（第129図、ＰＬ20・31）

位　置：Ⅷ Ｆ－18・23

重複関係：ＳＫ2009を切る。

形　態：Ｐ１・Ｐ３は円形、Ｐ２は隅丸方形で、深さはＰ１が60cm、Ｐ２・Ｐ３が20cm弱である。坑間距離は、Ｐ１・Ｐ２間が２m、Ｐ２・Ｐ３間は3.2mで、全長5.2mを測る。

覆　土：Ｐ１は３分層、Ｐ２は単層、Ｐ３は２分層され、それぞれ異なる埋没様相を示すが、いずれも基調土と含有土が混在し、人為埋没と考えられる。

遺　物：Ｐ２には土師器高坏（３）と、その坏部の５cmほど上方からニホンジカの頭骨が出土した。３は内外面ともよく磨かれ、体部内面は黒色処理され、脚部には三角形の透かしが入る。Ｐ３には、実測に至らなかったが土師器甕の大きめの破片が入っていた。

所　見：本跡はＳＡとして登録したが、各土坑の形状・深さ・埋没様相に相違があり、坑心間も一定でないうえ３基だけなので偶然の並びと考えられる。Ｐ２の背は３の高坏の坏部にのせられて埋納された可能性があり、Ｐ２は祭祀的な土坑である。少なくともＰ２は５世紀末～６世紀半ばの遺構と考えられる。

ＳＡ2002（第129図、ＰＬ20）

位　置：Ⅷ Ｆ－18・23

重複関係：ＳＢ2004を切り、ＳＫ2005に切られる。

形　態：Ｐ１～Ｐ４いずれもほぼ円形を呈するが、Ｐ１は他の３基に比して大きい。深さは15～42cmで、坑間距離は2.4～3.7m、全長9.9mである。坑列軸はＮ－６°－Ｗである。

覆　土：Ｐ１は２分層され、下層は人為的な埋没様相を示す。Ｐ２は焼土・炭化物が充填されている。Ｐ３・Ｐ４は単層である。

所　見：各ピットの規模や深さ・堆積状況に相違があり、柱列ではなさそうである。

ＳＤ2007（第130図）

位　置：Ⅷ Ｆ－12・13

重複関係：ＳＡ2003、ＳＤ2005に切られる。

形　状：幅110m、深さは最深57cmで、残存長7.9mを測り、西北西から東南東方向にほぼ直線的。

覆　土：単層で自然埋没であろう。

遺　物：覆土中より内面黒色処理された須恵器模倣坏（１・２）が出土。

所　見：５世紀末～６世紀初頭の溝跡と思われる。集落の区画的な溝か。

ＳＤ2021（第131図、ＰＬ31）

位　置：Ⅷ Ｆ－02・03・07・08、それ以北にも拡がる可能性あり。断面でのみ捉えられた。第131図の平面図は９世紀の水田面のものであるが、位置を明確にするために掲載した。

重複関係：ＳＬ2001に覆われる。

形　　状：不明。7.3mの幅までは確認したが断面の南半分でしか過ぎず、全幅はこの倍前後かそれ以上と考えられる。また出水激しく保安上の問題もあり、底部まで掘り下げられなかった。ほぼ東西方向に走っているとみられる。

覆　　土：自然埋没により幾層にも分かれる。

壁　　：緩やかに傾斜している。

遺　　物：６層に多く含まれ、８層にもわずかにみられた。６層中から土師器高坏（１）と、同様な高坏の脚部２点計３点の高坏が出土した。他に土師器片や弥生後期の土器片を伴う。

所　　見：本跡は断面形状、規模、方向からみて千曲川の旧河道に相当すると思われる。５世紀の中頃には７層までが埋没し、河道はさらに北側へ移動していたものと思われる。５世紀中頃には埋没途上の本跡と自然堤防上の集落とは3.5m程の比高があり、遺物の投棄は集落側から埋没途上の本跡へ行われ、弥生後期の遺物もこの段階の廃棄に伴ったものとみられる。本跡は９世紀はじめ頃には完全に埋没し、水田化されている。集落の拡がる微高地と河道との崖状の落差や遺物の出土状況は、高速道屋代遺跡群の６区との類似点が多い。

ＳＦ2001（第129図、ＰＬ20・31）

位　　置：Ⅷ Ｆ－18

重複関係：なし。

形　　状：長軸110cm×短軸55cmで、ややくぼんだ部分が赤化して火床状を成す。掘り込みはないので覆土はない。

遺　　物：土師器高坏（２）が火床上につぶれてのっていた。

所　　見：５世紀末以降の焼土跡と思われる。

ＳＫ2002（第129図）

位　　置：Ⅷ Ｆ－18

重複関係：なし。

形　　状：平面はやや隅丸方形気味で一辺68cm。深さは18cmで坑底中央がやや盛り上がる。

覆　　土：単層。人為埋没か。

所　　見：調査時点では、本跡とＳＦ2001、ＳＴ2002Ｐ１～Ｐ４の並びを想定したが、坑径・坑間距離がＳＴ2001とは異なり、軸もわずかにずれることから単独の土坑と考えたい。

ＳＫ2005（第129図）

位　　置：Ⅷ Ｆ－18

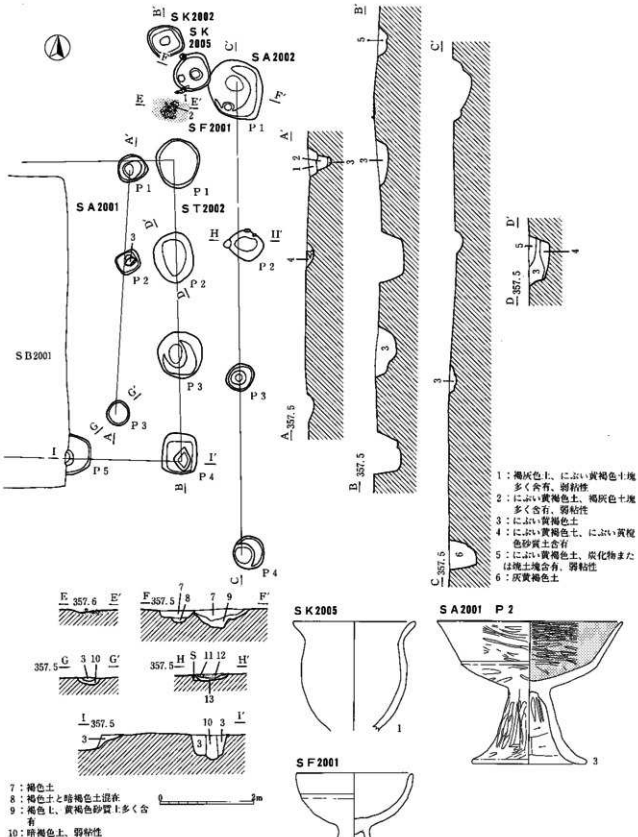
重複関係：ＳＡ2002Ｐ１を切る。

形　　状：最大径87cmのほぼ円形で、坑央に柱痕状のくぼみをもつ。その最深部は検出面から27cmを測る。

覆　　土：掘り形は単層だが、柱痕状のくぼみには含有土がある。

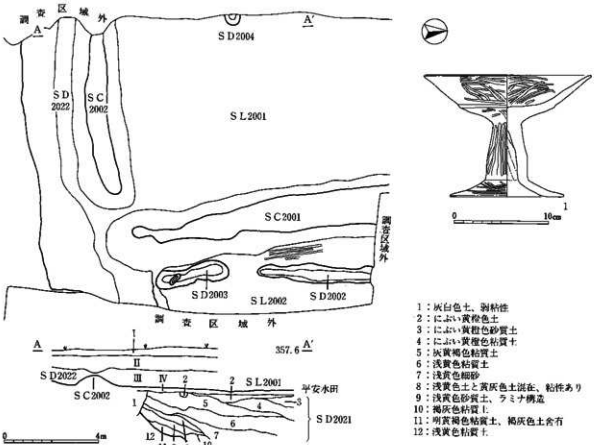
遺　　物：坑内と上端の外にもはみ出して、非ロクロ成形の土師器小型甕（１）が出土した。図化できなかったが北坑壁付近にも土器が散乱し、坑底に拳大の石が１個入る。

所　　見：出土遺物とその散乱状況からみて、ＳＦ2001と関連する土坑か。

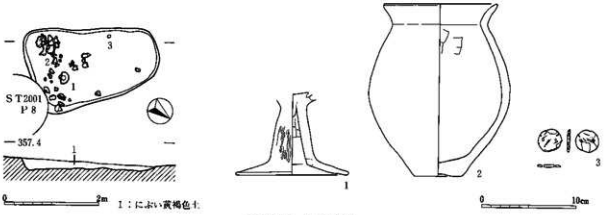


第129図　ST2002、SA2001・2002、SF2001、SK2002・2005

第130図　ＳＤ2007



第131図　ＳＤ2021



第132図　ＳＫ2099

ＳＫ2099（第132図、ＰＬ21）

位　　置：Ⅷ Ｋ－09

重複関係：ＳＢ2019を切り、ＳＴ2001に切られる。

形　　状：長軸141cm×短軸92cmの不整形。深さは検出面より12cmと浅い。

覆　　土：単層。人為埋没と認める根拠なし。

遺　　物：南東側に土器片が多く出土したが図化し得るものは少なく、土師器高坏脚部（1）、非ロクロ成形の同小型甕（2）、径2.5cm、厚さ0.25cm、3ｇ、蛇紋岩製の石製模造品（3）を掲載できただけである。骨粉も出土した。

所　　見：5世紀中頃～末の祭祀的な遺構または墓跡とみられる。

3　古代以降

(1)　竪穴住居跡と竪穴状遺構

ＳＢ2001（第133図、ＰＬ19・29）

位　　置：Ⅷ Ｆ－17・22・23

重複関係：ＳＢ2009、ＳＴ2002、SK2009・2029を切る。

形　　状：6.7×7.4m以上の長方形。

覆　　土：2分層され、レンズ状の堆積は自然埋没と考えられる。

壁　　：ほぼ垂直である。壁高は検出面から34cmを測る。

床　　面：Ⅵ層中を平坦に仕上げて掘り形をもたない床で、比較的堅緻である。

カ マ ド：北壁中央に1基あるが煙道のみ残存、火床や袖は確認できなかった。カマド付近に散乱する礫は袖石と考えられる。

遺　　物：器種は、須恵器坏壺Ｂ（1）、同坏Ｂ（2）、同坏Ａ（3～5）、非ロクロ成形の土師器坏（6）、須恵器短頸壺Ｂ（7）、同平瓶（8）、土師器甕Ｆ（9）、須恵器甕Ｅ（10）がある。1はやや軟質で、口縁端部は断面三角形、天井部が高い。2はつくりが粗雑である。4は底部に粘土板の貼り付けを行う。6は底部までミガキ調整される。7は底部回転ヘラ削りされ、スワリは悪い。10は頸部のくびれが丸く稜がなく、丸底に近い等古い要素がある。2・3・8・10は床面、他は覆土より出土した。

所　　見：10の出土状態にみられるように遺物はカマドの破壊と同時または直後の投棄と考えられる。出土土器から8世紀前半頃の住居跡と思われる。把手と高台の付く小型の平瓶は8世紀後半以降に出現するとされるが、8の出土は新知見になり得るか。

ＳＢ2006（第100図）

位　　置：Ⅷ Ｆ－13・14・18・19

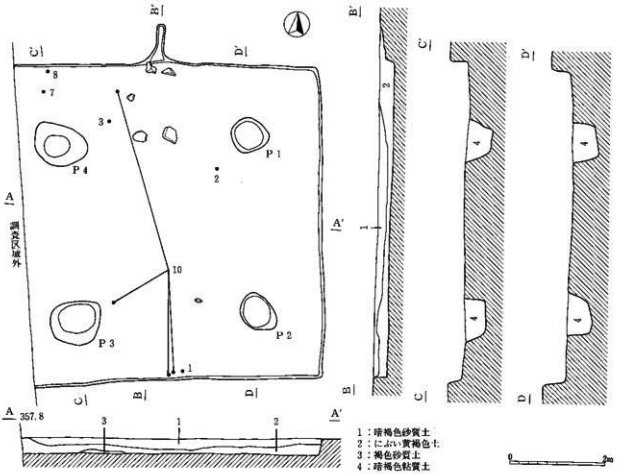
重複関係：ＳＢ2005を切り、ＳＤ2005、ＳＫ2026に切られる。

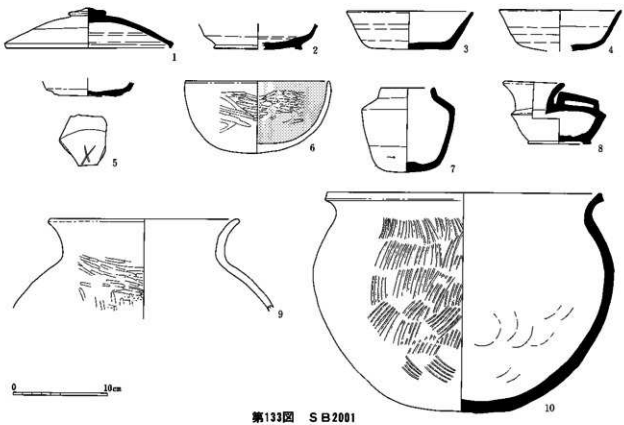
形　　状：4.3×4.0mの隅丸方形。

覆　　土：Ⅳ層を基調とする自然埋没で単層。

壁・周溝：検出面から32cm程掘り込み、垂直。壁直下に周溝が巡る。ほぼ全周すると思われる。

床　　面：不明確で軟弱。掘り形をもたない。

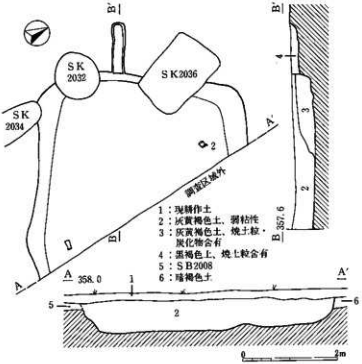


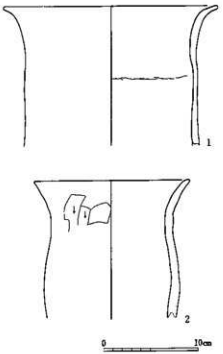


第133図　ＳＢ2001

遺　　物：覆土中に流没とみられる土器片が僅少。
所　　見：住居跡と思われるが不明。時期決定遺物はないが、重複関係から5世紀後半から8世紀の間にある。本遺跡で周溝をもつ唯一の住居跡である。

ＳＢ2007（第134図、ＰＬ19）
位　　置：Ⅷ Ｆ－23・24、Ⅷ Ｋ－04
重複関係：ＳＢ2008、ＳＫ2107を切り、ＳＫ2032・2034・2036に切られる。
形　　状：３分の１が調査区域外だが、一辺4.5mの隅丸方形であろう。
覆　　土：Ⅳ層を基調とする自然埋没。単層である。
壁　　：緩やかに立ち上がる。検出面より50cm掘り込む。
床　　面：明確な貼り床。掘り形はない。
カ マ ド：煙道のみ残存。図示していないが覆土中に被熱したカマド袖石とみられる礫が散乱していた。
遺　　物：覆土中から床面まで遺物は多くない。覆土中の土師器甕Ａ（１・２）が図化できた。２は頸部にわずかにヘラ削りが見られる。
所　　見：坏類が出土せず不明だが、８世紀前半頃の住居跡か。





第134図　ＳＢ2007

ＳＢ2008（第100図）
位　　置：Ⅷ Ｆ－24
重複関係：ＳＢ2007、ＳＫ2020・2023・2036に切られる。
形　　状：多くを切られ、調査区域外に拡がるため不明。
覆　　土：単層でⅣ層主体の自然埋没。調査区東壁で確認した。
壁　　：緩やかな立ち上がりであるが、壁高が検出面より６cmしかなく、判然としない。
床　　面：明確な貼り床で、浅い掘り形がある。
所　　見：住居跡と思われるが不明。時期は８世紀前半以前だが、古墳時代に帰属するものかも知れない。

ＳＢ2011（第135図、ＰＬ19）

位　　置：ⅧＫ－03・04

重複関係：ＳＢ2019を切る。

形　　状：3.2×2.5mの長方形。

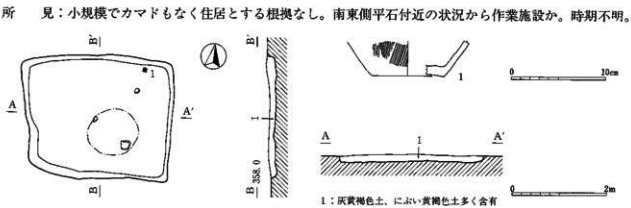
覆　　土：Ⅳ層を基調とし、単層で自然埋没する。

壁　　：ほとんど垂直である。床面との境は丸みをおびる。検出面からの壁高は最深部で20cmである。

床　　面：中央部南寄りに円く狭い貼り床あり。その範囲に四角い平石が取り込まれる。掘り形はない。

遺　　物：土師器甕Ｂとみられる底部（1）、須恵器甕Ｅ口縁部片が覆土中より出土した。

所　　見：小規模でカマドもなく住居とする根拠なし。南東側平石付近の状況から作業施設か。時期不明。



第135図　ＳＢ2011

ＳＢ2012（第100図）

位　　置：ⅧＫ－04

重複関係：ＳＫ2096に切られる。

形　　状：西コーナーを調査したに過ぎず、調査区域外に拡がり不明。

覆　　土：自然埋没で単層。埋没土はⅣ層を基調とするものか。

壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。検出面から30cmの深さである。

床　　面：明確に貼ってはいないが中央部分で堅固である。掘り形はない。

遺　　物：流れ込みとみられる土器片が覆土中に僅少。

所　　見：床の状況から住居跡と思われるが、調査部分が狭く不明。時期不明。

ＳＢ2015（第136図、ＰＬ30）

位　　置：ⅧＰ－02・03

重複関係：ＳＢ2016を切る。

形　　状：西半が調査区域外だが、一辺3.1m程度の方形と考えられる。

覆　　土：単層で自然埋没と思われる。

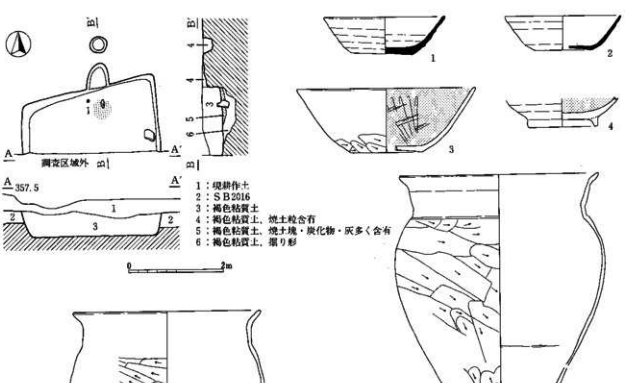
壁　　：急な傾斜で深さ45cm。

床　　面：軟弱で貼り床・掘り形はない。

カ マ ド：東壁中央付近に１基ある。袖は取り払われて残っていないが、煙道、火床と支脚石が残存する。

遺　　物：須恵器坏Ａ（１・２他）、黒色土器Ａ坏ＡⅠ（3）、同椀（4）、土師器甕Ｃ（５・６）を掲載した。須恵器坏Ａは回転糸切り底で内面底径は5.6～6.0cm、焼成は良好である。３の底部は回転糸切り後、手持ちヘラ削りされる。甕Ｃは「コ」の字型の口縁部に移行している。

所　　見：９世紀前半頃の住居跡と思われる。



第136図　SB2015

SB2017（第137・138図、PL19・30・42）

位　　置：ⅧK－07・08・12・13

重複関係：SB2026、ST2001に切られる。

形　　状：8.7×8.6mの隅丸方形。

覆　　土：カマド付近と中央部のわずかな部分を除き、ほぼⅣ層を基調とする単層。自然埋没であろう。

壁　　：傾斜して立ち上がり、深さは検出面より47cmを測る。

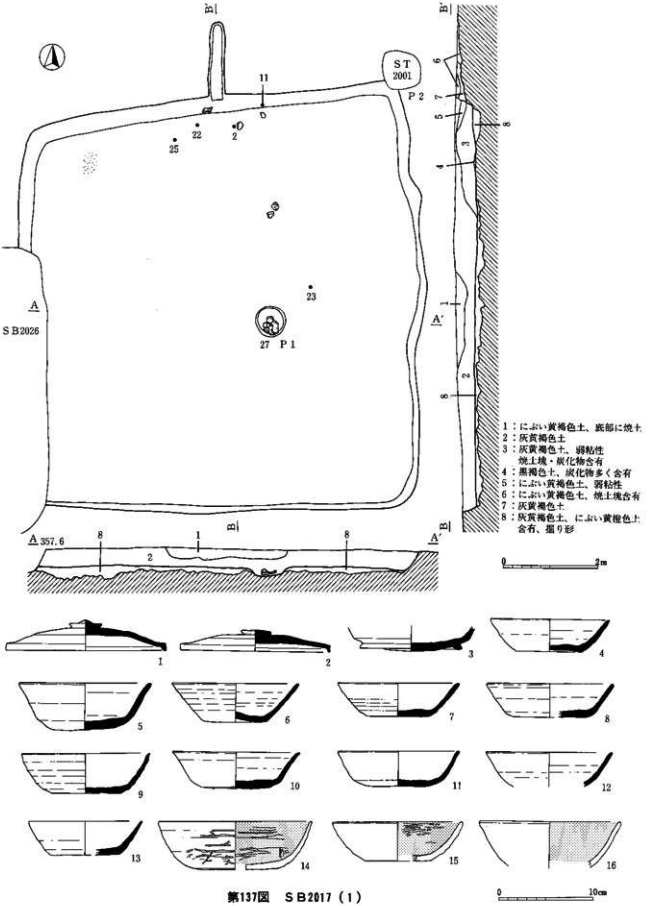
床　　面：貼ってはいないが堅固で、浅く凹凸のある掘り形をもつ。

ピ　ッ　ト：中央部付近に浅いものが1基あり、礫が5個入れられていた。

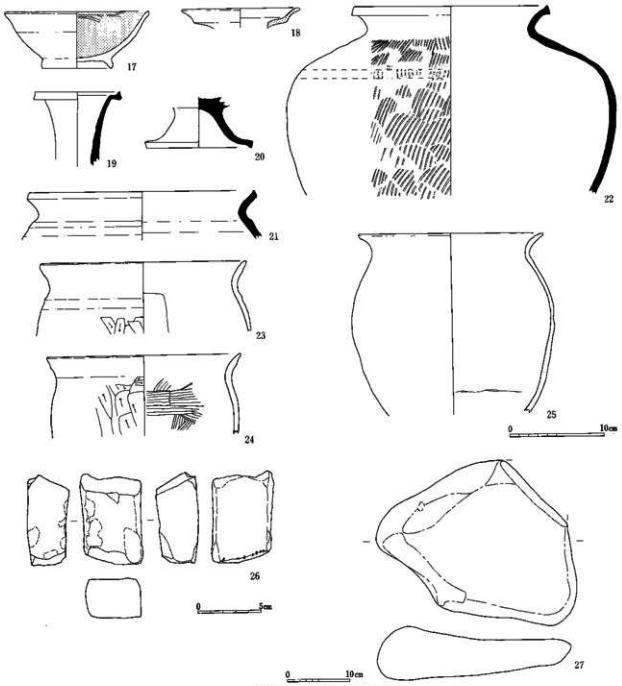
カ　マ　ド：長い煙道のみ残存し、火床・袖は確認できなかった。礫がわずかに残るが袖石か。

遺　　物：床面遺物は少なく覆土からの出土が多い。須恵器坏蓋B（1・2他）、同坏B（3）、同坏A（4～13他）、黒色土器A坏A（14～16）、同椀（17）、灰釉段皿（18）、須恵器長頸壺A頸部（19）、同高台盤高台部（20）、同甕E（21）、同甕C（22）、土師器ロクロ成形甕（23・24他）、同非ロクロ甕（25）と砥石（26・27）があり、2・11・22・25はカマド付近、他は覆土中より出土した。須恵器坏蓋Bでは、口縁端部がやや外側へ開き気味の三角形を成す。3は見込み部平滑で、転用硯か。須恵器坏Aは底径が大きく、回転糸切り底は4・6・7・9、他はヘラオコシのちナデで底部を調整され、回転糸切り底の比率は5割に満たない。回転糸切り底の内面底径は6.6～9.2cmである。黒色土器は規格性が不統一で、坏E的なものもあり定型化する前の形態である。このほか掲載していないが、底部木葉痕をもつ甕が4つある。26は流紋岩製、27は安山岩製。

所　　見：8世紀半ば頃の住居跡と思われる。17・18は混入であろう。



第137図　ＳＢ2017（１）



第138図　ＳＢ2017（２）

ＳＢ2018（第139図、ＰＬ19・42）

位　　置：ⅧＫ－09・14

重複関係：ＳＤ2009に切られる。

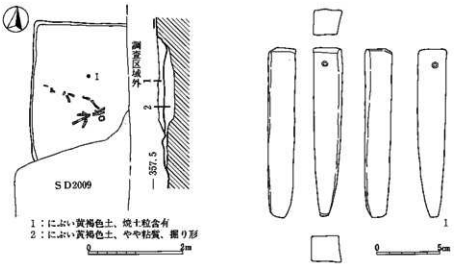
形　　状：北西コーナーを調査したに過ぎず、切られ、さらに調査区域外のため不明。

覆　　土：焼土粒を含有する均質な単層だが、人為埋没の疑いあり。

壁・床面：検出面より15cm前後の深さで壁は緩やかに立ち上がる。床は不明確で軟弱。

遺　　物：頭部を東、脚部を西にした人骨１体分が床面上に横たわっていた。流紋岩製の砥石（１）は覆土より出土した。14.4×2.3×2.1cm、105gである。土器は覆土中に須恵器・土師器・黒色土器があるが、図化し得るものはない。骨の鑑定結果は付章を参照されたい。

所　　見：時期は不明だが廃屋墓か。



第139図　ＳＢ2018

ＳＢ2021（第140図、ＰＬ31・43）

位　　置：Ⅷ Ｋ－18・19・23・24

重複関係：ＳＢ2023・2024・2038・2039を切り、ＳＫ2112～2114に切られる。

形　　状：7.7×7.8mの方形。

覆　　土：単層。自然埋没と思われる。

壁　　：傾斜して立ち上がる。深さは検出面から30cmを測る。

床　　面：明確な貼り床が壁際を除いて広がる。掘り形は溝状のものが、南壁際と西壁際の一部にある。

カ マ ド：北壁中央に火床のみ残存。

遺　　物：須恵器坏蓋Ｂ（１・２他）、同坏Ａ（３・４他）、黒色土器Ａ坏Ａ（５～９）、須恵器長頸壺頸部(10)、土師器小型甕（11）、鉄鎌（12）を掲載した。食膳具は須恵器が軟質化し、黒色土器が須恵器を凌駕する。須恵器坏Ａの内面底径は5.6～6.6cmで外傾が強い。黒色土器Ａ坏Ａは底部回転糸切りのち手持ちヘラ削りされ、大小の２法量が分化している。12は12.3×2.2×0.3cm、19.7g。４・５・８・９は床面、７はカマド火床、他は覆土から出土した。

所　　見：９世紀半ば頃の住居跡と思われる。

ＳＢ2023（第141図）

位　　置：Ⅷ Ｋ－19・24

重複関係：ＳＤ2020を切り、ＳＢ2010・2024、ＳＫ2101に切られる。

形　　状：調査区域外、および切られて不明。

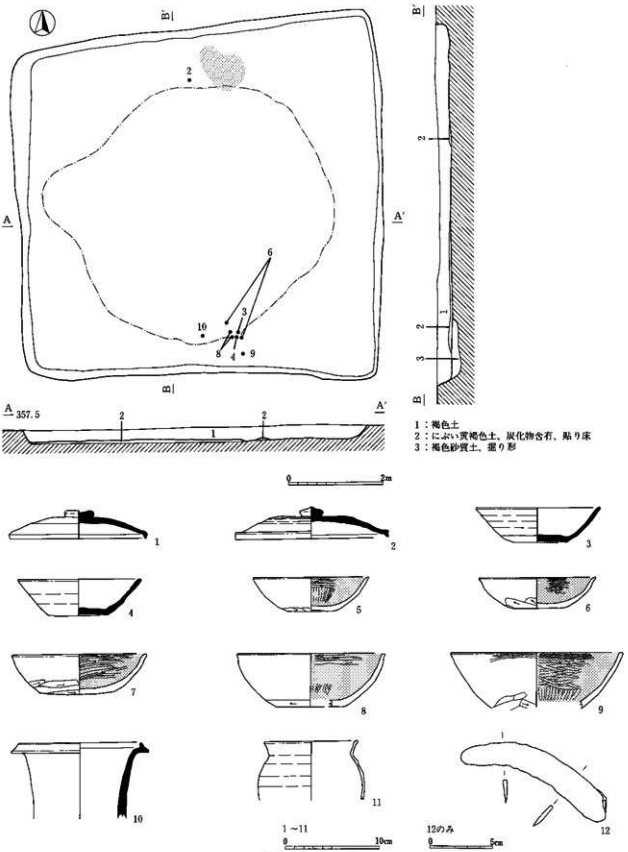
覆　　土：単層。自然埋没と思われる。

壁　　：傾斜し、現耕作土直下から50cm前後の深さがある。

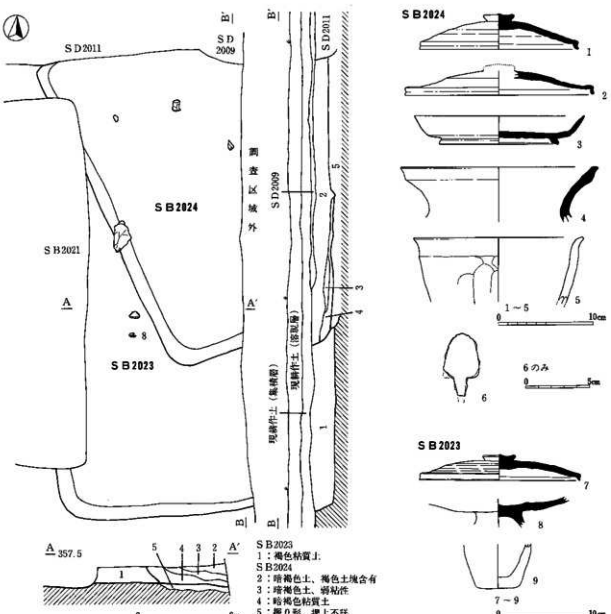
床　　面：不明確で軟弱。掘り形はもたない。

遺　　物：覆土中から全般に少なく、須恵器坏蓋Ｂ（７）、同盤（８）、土師器小型土器（９）を掲載した。８が床面から出土した。

所　　見：８世紀前半～中頃の住居跡と思われる。



第140図　ＳＢ2021



第141図　ＳＢ2023・2024

ＳＢ2024（第141図、ＰＬ43）

位　　置：Ⅷ K－19・24

重複関係：ＳＢ2023を切り、ＳＢ2021、ＳＤ2009・2011に切られる。

形　　状：東側は調査区域外に拡がり、北壁も切られて残らないが、一辺7.0mの方形と思われる。

覆　　土：３分層されるが漸移的で自然埋没である。

壁　　：緩やかで曲線的な傾斜で、検出面から40cm強掘り込まれている。

床　　面：不明確で軟弱。掘り形をもたない。

遺　　物：土器は須恵器坏蓋Ｂ（１・２）、同坏Ｂ（３）、同甕Ａ（４）、ロクロ成形の土師器小型甕（５）、鉄鎌（６）が覆土中より出土した。３は口径18.0cm、器高3.0cmの際立った法量で盤状である。

所　　見：８世紀後半～９世紀はじめ頃の住居跡と思われる。

ＳＢ2025（第99図）

位　　置：ⅧＫ－14・19

重複関係：ＳＤ2012を切り、ＳＤ2011・2013、ＳＫ2104・2106に切られる。

形　　状：南側を切られ、東側が調査区域外のため不明。調査区域内は不整形。

覆　　土：単層。自然埋没。

壁　　：緩やかで、検出面からの最深部は34cmを測る。

底　　面：凹凸がある。

所　　見：意味不明の竪穴状遺構。遺物は皆無であり、窪地状の自然地形ということも考えられる。いずれにしても住居跡ではない。

ＳＢ2026（第142図）

位　　置：ⅧＫ－07・12

重複関係：ＳＢ2017を切り、ＳＫ2117に切られる。

形　　状：西側の大部分が調査区域外にあるが、一辺6.4mの方形と思われる。

覆　　土：単層。Ⅳ層を基調とする自然埋没。

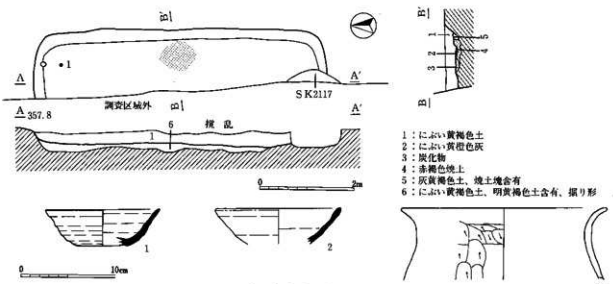
壁　　：緩やかな立ち上がりで、検出面からは最深32cmを測る。

床　　面：軟弱で不明確。浅く凹凸のある掘り形をもつ。

カ マ ド：東壁中央にあるが、火床しか確認できなかった。

遺　　物：須恵器坏Ａ（１・２他）、土師器甕Ｃ（３）が覆土中より出土した。回転糸切り底の須恵器坏Ａの内面底径は5.4～7.0cm、２はやや軟質である。

所　　見：８世紀末～９世紀前半頃の住居跡と思われる。



第142図　ＳＢ2026

ＳＢ2027（第143図）

位　　置：ⅧＫ－08・12・13

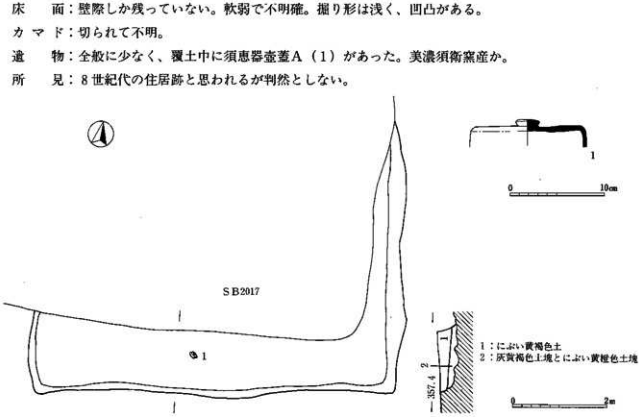
重複関係：ＳＤ2015・2017、ＳＫ2110を切り、ＳＢ2017に切られる。

形　　状：大部分を切られているが、残存部から一辺８mの方形と思われる。

覆　　土：Ⅳ層を基調とする自然埋没で単層である。

壁　　：緩やかな傾斜をもち、検出面からの深さは30cmである。

床　　面：壁際しか残っていない。軟弱で不明確。掘り形は浅く、凹凸がある。
カ マ ド：切られて不明。
遺　　物：全般に少なく、覆土中に須恵器壺蓋A（1）があった。美濃須衛窯産か。
所　　見：8世紀代の住居跡と思われるが判然としない。



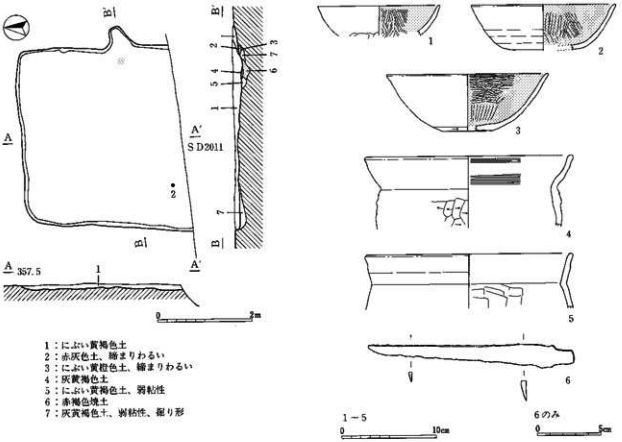
第143図　SB2027

SB2028（第99図）

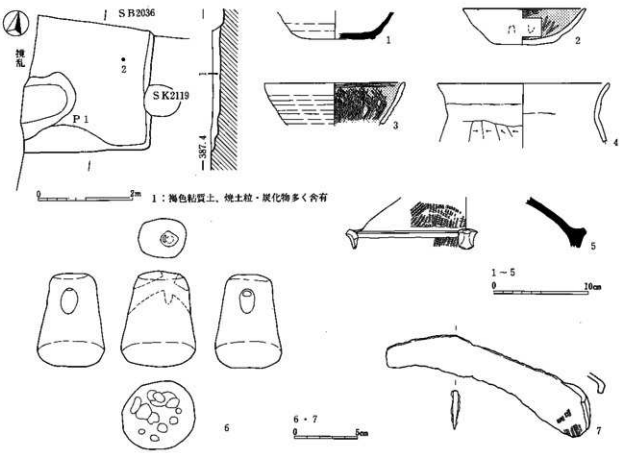
位　　置：ⅧK－12・13・17・18
重複関係：SB2027、SD2011・2014・2015、SK2110・2111・2118に切られる。
形　　状：方形と思われるが検出時点で床しかなく、不明。
覆　　土：調査区西壁で確認し、床面直上の炭化物を除いて単層自然埋没とみられる。
壁　　：検出時点で床しかなく、調査区西壁でも両端が切られて不明。
床　　面：貼り床が検出面に露出していた。掘り形は浅く平坦である。
所　　見：住居跡の残骸とみられるが遺物も皆無で、重複関係から8世紀以前とだけ判る。

SB2029（第144図、PL43）

位　　置：ⅧK－13・14・18
重複関係：SD2011に切られる。
形　　状：南壁を失っているが、東西軸から一辺4.0mの方形とみられる。
覆　　土：Ⅳ層を基調とする自然埋没、単層である。
壁　　：ほぼ垂直。検出面より10cmと浅い。
床　　面：掘り形はほとんど無く、地山のⅥ層を床としている。あまり堅固ではない。
カ マ ド：東壁に、短い煙道とわずかな火床が認められるが、袖は完全に取り払われている。
遺　　物：黒色土器A坏A（1～3）、ロクロ成形の土師器甕頸部（4・5）、刀子（6）が覆土より出土した。1・2は底部を手持ちヘラ削り、3は回転ヘラ削りする。大小2法量があり、食膳具に須恵器は含まれない。6は16.4×2.9×0.4cm、10.3g。
所　　見：9世紀後半頃の住居跡と思われる。



第144図　SB2029



第145図　SB2033

ＳＢ2033（第145図、ＰＬ42・43）

位　　置：Ⅷ Ｐ－09

重複関係：ＳＢ2037を切り、ＳＢ2036、ＳＦ2005、ＳＫ2119に切られる。

形　　状：北側を切られ、西側を撹乱され不明。

覆　　土：単層。自然埋没と思われる。

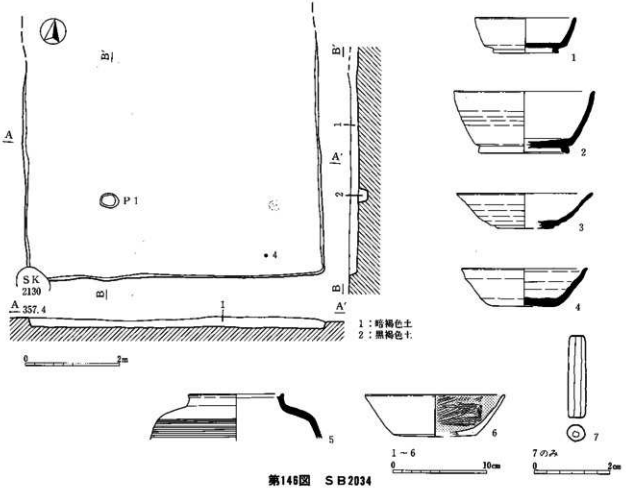
壁　　：垂直な箇所と緩やかな箇所がある。検出面からの深さは20cmある。

底　　面：やや堅固である。掘り形はない。

ピ ッ ト：大きめのＰ１がある。

遺　　物：土器には須恵器坏Ａ（１）、黒色土器Ａ坏Ａ（２・３）、土師器甕Ｃ（４）、須恵器甕Ｄ（５）、石製品には砂岩製の有孔石製品（６）、鉄製品には鎌（７）がある。１は回転糸切り底で内面底径は7.0cmで、小さな粘土塊を貼りつけてスワリを調整する。２は床面出土、底部手持ちヘラ削りで外面に黒ずみが見られるが墨書とは思われない。４は「コ」の字状の頸部に移行しつつあるが明確ではない。５は内面ナデ、外面叩き調整ののち、断面三角形の凸帯、無孔の四耳部を取り付ける。６は7.6×5.9×5.4cm、300ｇ。７は16.9×3.7×0.5cm、54.8ｇで着柄部に木質が付着する。

所　　見：８世紀末～９世紀前半の遺構と思われるが、壁やＰ１が特異で性格は不明である。



第146図　ＳＢ2034

ＳＢ2034（第146図、ＰＬ31）

位　　置：Ⅷ Ｋ－23・24、Ⅷ Ｐ－03・04

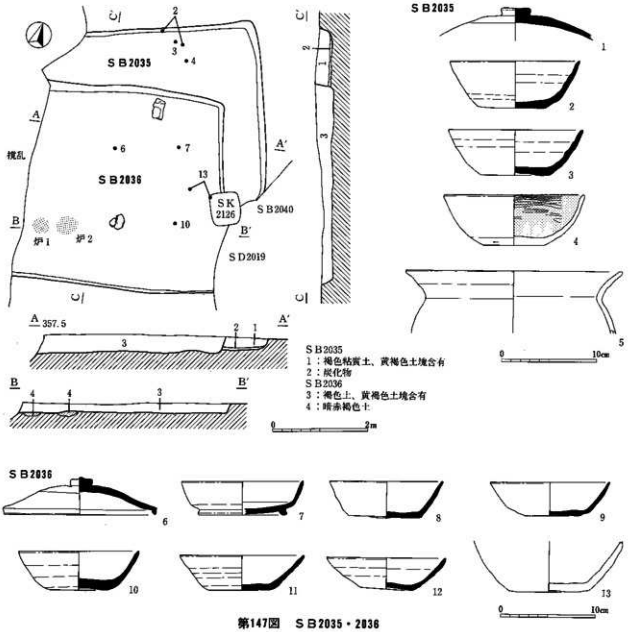
重複関係：ＳＫ2130・2131に切られる。ＳＢ2001・2038 との関係は不明。

形　　状：北壁が不明瞭だが、一辺6.3mの方形と考えられる。

覆　土：単層。自然埋没であろう。
壁　：ほぼ垂直で、検出面より深さ20cmを測る。
床　面：不明確で軟弱。掘り形はない。
ピット：1基（P1）。柱穴ではない。
カマド：不明。北壁際にあって切られたか。
遺　物：須恵器坏B（1・2）、同坏A（3・4）、同短頸壺A（5）、黒色土器A坏A（6）、管玉（7）があり、4が床面、他は覆土から出土した。1・2はそれぞれ坏BⅤ・坏BⅢの法量で、底部は回転糸切り痕が残り、高台は外面接地する。3・4は回転糸切り底で、内面底径6.6～7.0cm、いずれもやや軟質である。7は径4.5cm×長さ23.0cm。
所　見：8世紀末～9世紀前半の住居跡と思われるが、カマドの痕跡も検出できなかった。

SB2035（第147図、PL31）
位　置：ⅧP－03・04
重複関係：SB2041を切り、SB2036・2040、SD2019、SK2126に切られる。
形　状：切られていて判然としないが、長軸4.6m以上、短軸3.9m前後の長方形である。
覆　土：2層に分かれ、上層は基調土と異なる含有土塊がある。下層は炭化物の層である。人為埋没か。
壁　：ほぼ垂直で、床との境は丸みを帯びる。壁高は検出面より33cmを測る。
床　面：掘り形をもたずにⅥ層中を平坦に仕上げて床とし、堅固である。
カマド：不明。西壁か。
遺　物：全般に少ない。須恵器坏蓋B（1）、同坏A（2・3）、黒色土器A坏A（4）、ロクロ成形の土師器甕（5）を図化した。2・3は床面、他は覆土より出土した。2・3は回転糸切り底で、内面底径は7.0cm前後、いずれもやや軟質である。4は底部を回転ヘラ削りする。
所　見：8世紀末～9世紀はじめ頃の住居跡と思われる。

SB2036（第147図、PL31）
位　置：ⅧP－03・04・08・09
重複関係：SB2033・2035・2037を切り、SD2019、SK2126に切られる。
形　状：東西軸4.7m以上、南北軸4.4mで、西壁を攪乱で失う。方形と思われるが切られて不明。
覆　土：単層。自然埋没であろう。
壁　：垂直に近い急傾斜で、壁高は検出面より38cmを測る。
床　面：掘り形をもたずにⅥ層中を平坦に仕上げて床とし、堅固である。
炉　：南西側に平坦な地床炉が2基ある。
遺　物：須恵器坏蓋B（6）、同坏B（7）、同坏A（8～12）、土師器甕底部（13）が出土した。10・13は床面、他は覆土中からの出土である。8は底部ヘラオコシのちナデ、9は底部回転ヘラ削り、10～12は底部回転糸切り痕がみられ、10は内外面に火だすきがある。11は転用硯の疑いがある。12は軟質である。須恵器回転糸切り坏の内面底径は10が7.2cm、11・12がいずれも6.0cmである。
所　見：須恵器は8世紀末～9世紀前半までばらつきがあるが、11・12からみて本跡は9世紀前半の所産と思われる。7～9は混入か。カマドはなく、炉1・2は併設ではなく新旧であろう。作業用の台石とみられる平石が炉2の近くと北壁際にあり、カマドをもたないことや2基の炉との関連から、鍛冶目的の作業屋であった可能性がある。



第147図　SB2035・2036

SB2037（第99図）

位　　置：Ⅷ P－09

重複関係：SB2033・2036、SK2119・2120に切られる。

形　　状：南東コーナーが切られ残ったに過ぎず、全容は不明。

覆　　土：単層。自然埋没であろう。

壁　　：急な傾斜の立ち上がりで、壁高は検出面より18cmである。

床　　面：軟弱で不明確。

遺　　物：覆土中に土器片僅少。

所　　見：住居跡のコーナーか。8世紀以前の遺構。

SB2038（第99図）

位　　置：ⅧK－17・18・22・23

重複関係：SB2021・2039に切られる。

形　　状：南壁以外を切られ、不明。
覆　　土：単層。自然埋没か。
壁　　：垂直に近い。深さは28cmある。
底　　面：軟弱で凹凸が激しい。
遺　　物：覆土中に流没とみられる土器片僅少。
所　　見：用途・時期等不明。住居跡ではない。竪穴状遺構。

ＳＢ2039（第99図）
位　　置：Ⅷ K－17・18
重複関係：ＳＢ2038を切り、ＳＢ2021、ＳＤ2011に切られる。
形　　状：切られて不明。
所　　見：壁は緩やかな傾斜と思われる。出水激しく、掘り下げ途上で調査不能となった。

ＳＢ2040（第99図）
位　　置：Ⅷ P－04・09
重複関係：ＳＢ2035を切り、ＳＤ2019、ＳＫ2121・2124・2125に切られる。
形　　状：調査区域外にかかり不明。
覆　　土：単層。人為埋没と認める根拠無し。
壁　　：緩やかで検出面より20cm程掘り込まれる。
床　　面：軟弱であり不明確。
所　　見：住居跡と思われるが遺物は皆無で不明。８世紀以前の遺構である。

ＳＢ2041（第99図）
位　　置：Ⅷ P－03・04
重複関係：ＳＢ2035、ＳＦ2004に切られる。
形　　状：切られて不明だが、長円形を呈すると思われる。
覆　　土：単層。含有物もなく自然埋没だろう。
壁　　：緩やかな傾斜で、検出面より20cm弱掘り込まれる。
底　　面：不明確かつ軟弱。
遺　　物：流没と考えられる土器片僅少。
所　　見：用途不明の竪穴状遺構で、８世紀以前の所産である。

ＳＢ2042（第99図）
位　　置：Ⅷ K－13・14
重複関係：ＳＤ2017を切る。
形　　状：長軸3.8m、短軸2.5mの長方形。
覆　　土：Ⅳ層を基調とすると思われる自然埋没。
壁・底面：緩やかに検出面より10cmほど掘り込まれる。底はやや凹凸がある。
所　　見：遺物は皆無。用途不明の竪穴状遺構である。

(2)　その他の遺構

ＳＴ2001（第148図、ＰＬ20）

位　　置：ⅦＫ－03・04・08・09

重複関係：ＳＢ2017・2019・2020、ＳＤ2010、ＳＫ2046・2096・2099を切り、ＳＢ2011に切られる。

形　　式：梁行３間×桁行５間の側柱式。　　規　　模：梁行5.1m×桁行6.4m

面　　積：32.6㎡　　棟　　軸：Ｅ－42°－Ｎ

柱　　間：東西列1.1～2.0m、南北列1.4～1.8m

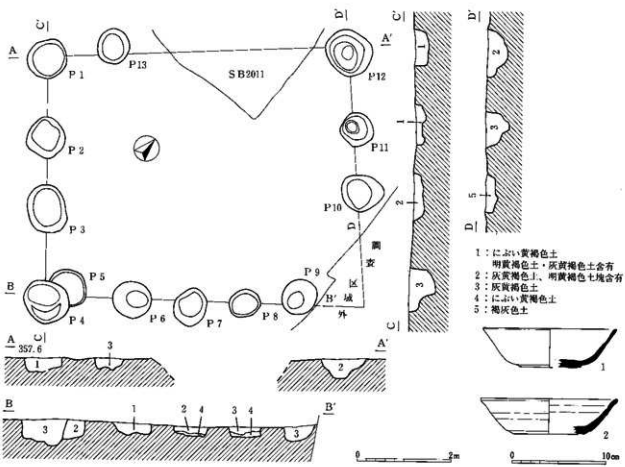
柱　　穴：円形。断面形Ｕの字状か逆凸の字状。深さ20～58cm

柱　　痕：Ｐ11・Ｐ12に底部痕跡がみられる。これより柱径は25cm前後とみられる。

覆　　土：Ｐ７・Ｐ８は２分層、他は単層だが、いずれもⅣ層を基調とする。基調土と異なる含有土塊をもつものが多く、埋め戻しが窺える。

遺　　物：いずれの柱穴からも土器片が出土した。下位ＳＢ2019が弥生後期の住居跡であることから、弥生後期の遺物が多く、土師器・須恵器・黒色土器片も混在する。Ｐ８から１、Ｐ７から２の須恵器坏Ａが出土した。いずれも回転糸切り底で、内面底径はそれぞれ6.6cmと7.8cm、１はやや軟質で転用硯の疑いがある。

所　　見：遺物の帰属性は疑わしいが、一応８世紀末～９世紀はじめの建物跡とみたい。



第148図　ＳＴ2001

ＳＤ2005（第149図、ＰＬ20）

位　　置：Ⅷ Ｆ－12～14・17～19

重複関係：ＳＢ2003・2005・2006、ＳＤ2006・2007、ＳＫ2039を切る。

形　　状：最大幅3.1m、調査区域内での全長15.0m、検出面より最深116cmを測る。断面形は椀状を成す。ほぼ東西方向に走り、調査区の東端で収束している。

覆　　土：単層。自然埋没であろう。

遺　　物：底部ヘラオコシのちナデ調整の須恵器坏Ａ（１）が覆土中より出土した。この他、弥生後期土器・黒色土器・灰釉陶器・土師器の破片が出土した。東側底部で獣骨を検出した。

所　　見：１は８世紀のものだが、最も新しくかつ比重の集まる遺物に時期を求め、９世紀代の溝跡、それも生産域である水田と集落を画する溝であると思われる。東側の収束部は推測の域を出ないが、再び溝幅が拡がるとすれば居住域と生産域を結ぶ通路の役割が考えられる。

ＳＤ2006（第149図、ＰＬ20・31）

位　　置：Ⅷ Ｆ－17～19

重複関係：ＳＢ2002・2003を切り、ＳＤ2005、ＳＫ2039に切られる。

形　　状：幅1.0m、調査区域内での全長8.8m、深さ44cmを測る。断面形は椀状を成す。東西方向に走る。

覆　　土：単層。Ⅳ層を基調とする自然埋没であろう。

遺　　物：覆土下層に須恵器甕Ｃ（２）が出土した。この他、弥生後期土器・黒色土器・土師器・須恵器片など弥生時代後期～平安時代までの遺物を含む。

所　　見：ＳＤ2005に先行し、ＳＤ2005と同様に集落の縁辺部の溝跡と考えられる。

ＳＤ2011（第149図、ＰＬ20）

位　　置：Ⅷ Ｋ－14・17～19

重複関係：ＳＢ2024・2028・2029・2039を切る。

形　　状：1.8mの一定幅で東西にほぼ直線的。東西とも調査区域外に伸びる。調査区域内での全長は14.2mを測る。深さは検出面より最深68cmを測る。断面形は円弧状。

覆　　土：３分層される。自然埋没である。

遺　　物：３層出土の黒色土器Ａ坏Ａ（３）、土師器坏（４）を図化した。覆土中に多く、弥生後期土器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・土師器片がある。とりわけ、黒色土器の比率が高い。

所　　見：重複関係と遺物の状況から９世紀後半の溝跡であろう。規格的で整然とし、基幹水路または集落の区画的な溝と思われる。

ＳＤ2019（第149図、ＰＬ31）

位　　置：Ⅷ Ｐ－04・09

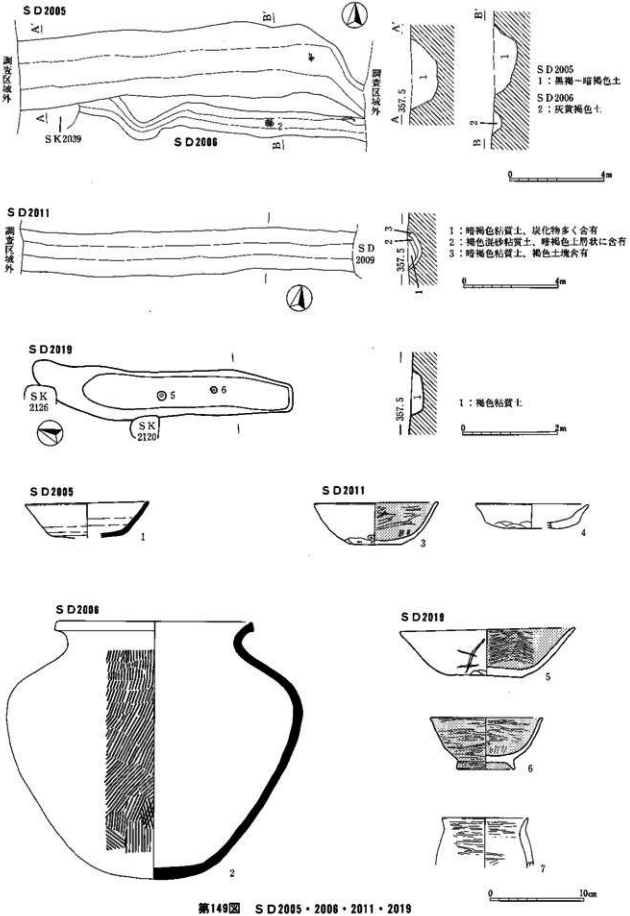
重複関係：ＳＢ2035・2036・2040を切り、ＳＤ2018、ＳＫ2120・2126に切られる。

形　　状：全長5.6m、最大幅103cm、検出面からの深さ25cmを測る。断面形は開放気味のタライ状。

覆　　土：単層。自然埋没か。

遺　　物：底面から黒色土器Ａ坏Ａ（５）、覆土から黒色土器Ｂ椀（６）、土師器小型ミガキ甕（７）が出土した。５は「丈」が逆位に刻書される。

所　　見：９世紀半ば～後半頃の遺構と思われる。性格不明。



第149図　SD2005・2006・2011・2019

ＳＫ2036（第150図）

位　　置：Ⅷ Ｆ－24

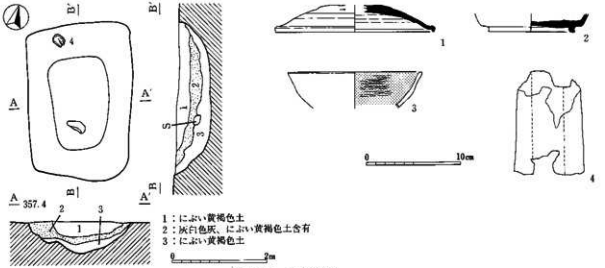
重複関係：ＳＢ2007・2008、ＳＫ2107を切る。

形　　状：長軸162cm、短軸112cmの隅丸方形。検出面との比高40cmである。断面形は円孤状または椀状。

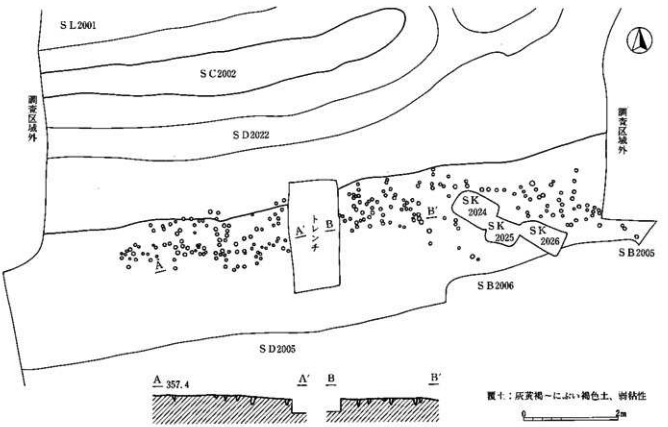
覆　　土：３分層。最上層と最下層は酷似し、この２層は自然埋没と考えられる。間層は灰の層である。

遺　　物：須恵器坏蓋Ｂ（１）、転用硯の同坏Ｂ（２）、黒色土器Ａ坏Ａ（３）、フイゴ羽口（４）が２層中から出土した。

所　　見：埋没状況と遺物出土状況から、自然埋没途上で何らかの人的営みがあったと考えられる。ごみ捨て穴か。９世紀前半頃の遺構と考えられる。



第150図　ＳＫ2036



第151図　ＳＡ2003

ＳＡ2003（第151図、ＰＬ20）

位　　置：Ⅷ Ｆ－12～14

重複関係：ＳＤ2007を切り、ＳＫ2024～2026に切られる。

形　　態：平均径６㎝、平均深さ12㎝の杭跡の集合であり、集中帯の幅はほぼ1.4m以内で、調査区の西端から東端へＳＤ2005と平行して連続する。

覆　　土：Ⅳ層によく似たやや粘質土が良好な締まりで詰まっている。

所　　見：柵列が繰り返し設置されたことが想像される。時期は不明だが、９世紀の開発に伴えば、生産域と居住域の境に設けられたもの、それ以前から存在していれば集落の縁辺部で崖状部への転落防護をするものなどが考えられる。

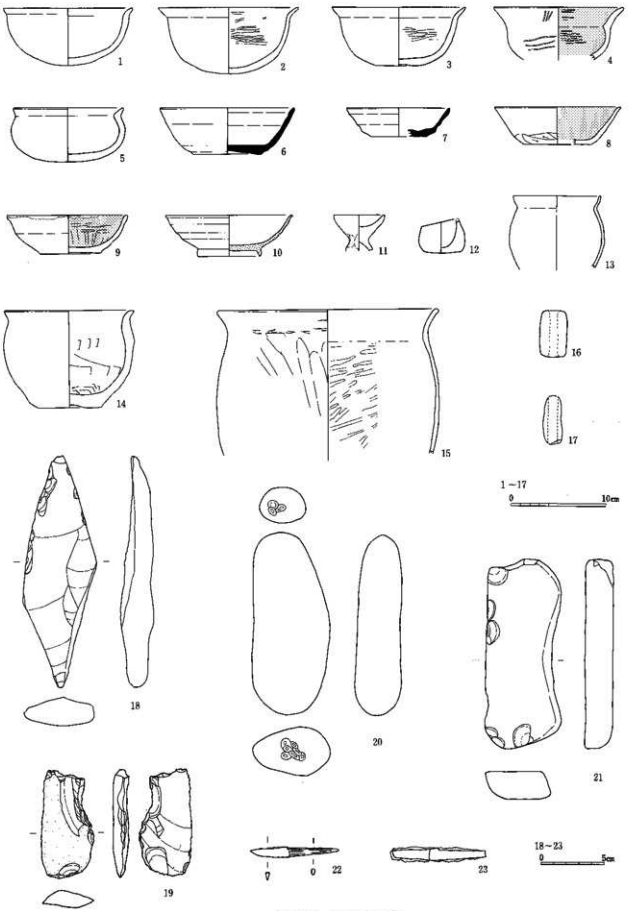
4　その他の遺物

その他の遺物は第152図１～23を掲載した。土器は土師器坏（１～５）、須恵器坏Ａ（６・７）、黒色土器Ａ坏Ａ（８・９）、灰釉陶器椀（10）、土師器ミニチュア（11・12）、同小型甕（13）、同鉢（14）、同甕（15）、土錘（16・17）、石器は使用痕のある剥片（18・19）、敲石（20）、砥石（21）、鉄製品は刀子（22・23）を図化した。

１～５は非ロクロ成形で、内外面は横ミガキを主体として調整していると思われるが、内外とも器面の荒れのため不明瞭なものが多い。これらは５世紀中頃～後半に属するものと思われる。６・７は回転糸切り底で、６はやや軟質である。８は底部を手持ちヘラ削りされ、９は底部回転糸切り未調整である。９は口端にタール状炭化物が付着し灯明皿と思われ、無欠損である。10は光ケ丘窯式、無欠損である。11の坏部と脚部のくびれは削り出されている。12は内外面ナデ調整される。14は外面調整不明、内面ナデ調整である。15は外面削り、内面ミガキ調整である。16・17は土師質である。18・19は頁岩製で、18は出土位置から弥生時代後期に属するものと思われる。20は安山岩製、21は砂岩製である。20は両端、21は４面が機能している。22は7.1×0.9×0.3㎝で、茎部に木質が付着する。

１はＳＫ2049、７はＳＫ2086、10はＳＤ2004、12・15はＳＫ2077、13はＳＫ2126、16はＳＤ2020、18はＳＴ2001 Ｐ１、22はＳＤ2001、23はＳＫ2095からそれぞれ出土した。

２はⅧＦ－14、４・14・21はⅧＦ－18、５はⅧＦ－23、６はⅧＦ－17、８はⅧＰ－04、11はⅧＫ－13、17はⅧＫ－19、20はⅧＫ－23、19はⅧＫ－24の各グリッド、３と９は試掘トレンチから出土した。



第152図　その他の遺物

第3節　6・7区の遺構と遺物

6・7区では、古墳時代後期～末の竪穴住居跡（竪穴状遺構含む）17軒、掘立柱建物跡1棟、8～9世紀の竪穴住居跡（竪穴状遺構および時期不明含む）57軒、掘立柱建物跡5棟、柱列4列、水田・畠跡9面、畦畔・土壇12条、6～9世紀の溝跡48条、土坑220基を検出した。

6区では基本的に4面調査を実施した。第1検出面は9世紀後半の大洪水により堆積した厚い洪水砂を掘り込む遺構で、量的にはごく僅かである。時期的には9世紀末以降で、層位的にはⅢ層上面である。第2検出面は洪水砂を除去した面で、大洪水が及ぶ直前の9世紀後半の状況である。層位的にはⅢ層下面である。第3検出面は9世紀前半の大開発の前後の集落の姿と大開発によって造成された水田が広がる。居住域を生産域へ変換した様子と、それによって土手で見事に集落と水田を区切る様子が明瞭である。層位的にはⅣ層の中程である。平安水田耕土や、平安水田前後の集落の包蔵層を除去した第4検出面は、7～8世紀の集落が展開する。層位的にはⅤ層上面となる。しかし、実際には第2～4検出面は大きな比高差が無く、各層位が不明瞭となる地点もあって調査時には上下の遺構が錯綜している。このため、調査時点では第4検出面で調査された遺構の一部は第3検出面に帰属させる等の机上操作を整理段階で施した。

なお、4面調査を実際に施せたのは6b・6c・6dの各区である。6a区では平安水田の上面を捉えたトレンチ調査のみとなり、その下位には集落は存在しない。6e区北側では平安水田耕土さえも後の土地利用で撹乱されており、第4検出面のみの調査となった。7区でも洪水砂（Ⅲ層）や平安水田耕土（Ⅳ層）の堆積が無く、第4検出面のみの調査となった。

なお7区は新幹線の路線から34m西側へ隔たっており、関連道路工事に伴い調査を実施した。遺跡としては一丁田遺跡の一部となり、隣接する中央自動車道長野線更埴インターチェンジの側道およびランプウェー部分を当センターで調査・報告している。本区では平成3年度の一丁田遺跡調査時の土層をもとに調査を行い、6区の土層の呼称とは異なる。対比は第3章第1節の4に示した。実際には7区も6区と連続する集落であり、6区と同時に項を設けて扱うこととする。

1　古墳時代

(1)　竪穴住居跡と竪穴状遺構

SB6015（第153図、PL23・33）

位　　置：6d区、ⅡU－21・22（第4検出面）

重複関係：SK6144を切り、SB6014・6016、SK6088・6100・6124に切られる。

形　　状：5.7×5.8mの隅丸方形。

覆　　土：主に3分層されたが漸移的であり、Ⅳ層を基調とする自然埋没である。

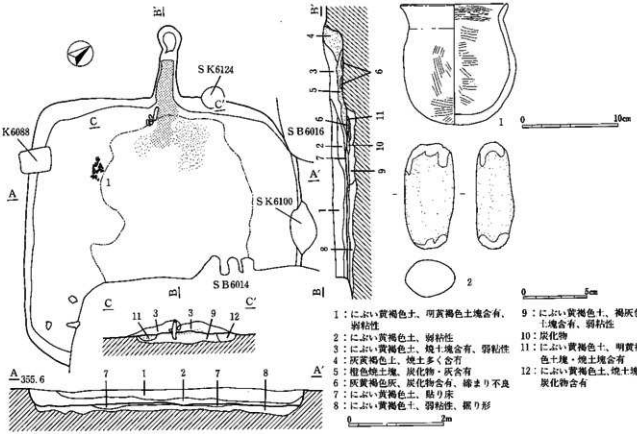
壁　　：Ⅴ層を掘り込み、傾斜して立ち上がる。壁高は検出面より28～38cmを測る。

床　　面：壁際を除き、固く叩き締められている。深さ15cm前後の掘り形をもつ。

カ マ ド：北西壁中央に左袖石がわずかに残り、黄褐色の粘土で固めた形跡があった。煙道の長さは1.6mで、遺存状態は良い。煙道内下部は焼土が厚く堆積し、火床から連続して赤化していた。

遺　　物：非ロクロ成形で内外面に粗いハケ調整を施した土師器小型甕（1）が床面より、この他非ロクロ成形の同坏破片複数、花崗岩の敲石（2）が覆土から出土した。

所　　見：7世紀代の住居跡と思われる。



第153図　SB6015

SB6038（第154図、PL24・33）

位　　置：6c区、IVF−06・07・11・12（第4検出面）

重複関係：SK6200を切り、SD6033に切られる。

形　　状：6.4×6.5mの隅丸方形。

覆　　土：主に2層からなるが、漸移的で自然埋没である。

壁　　：IV層中を掘り込み、やや緩やかに立ち上がる。

床　　面：軟弱で不明確。カマド火床を基準にした。浅く凹凸のある掘り形がある。

カ マ ド：北西壁中央に位置し、煙道は約1.6m伸びる。粘土で構築された袖がわずかに残存し、支脚石が火床奥に接して屹立したまま残存する。

遺　　物：掲載遺物はすべて床面遺物である。回転ナデのち外面ヘラ削り調整の土師器坏（1）、外面ナデ、内面ハケ目のちヨコナデ調整、底部木葉痕のある同鉢（2）、外面ヘラ削り、内面ヨコナデ調整の同甕（3）、外面ヘラ削り・ミガキ、内面ハケ目・ヨコナデ調整の同甕上半部（4）、外面ナデのちヘラ削り、内面ナデ調整、底部木葉痕の同甕底部（5）がある。南東壁際に遺存状態のわるい人骨が頭を北東にして横たわる。

所　　見：7世紀中頃〜後半の住居跡である。人骨は壁際の屋内埋葬と考えると2・5は供献か。

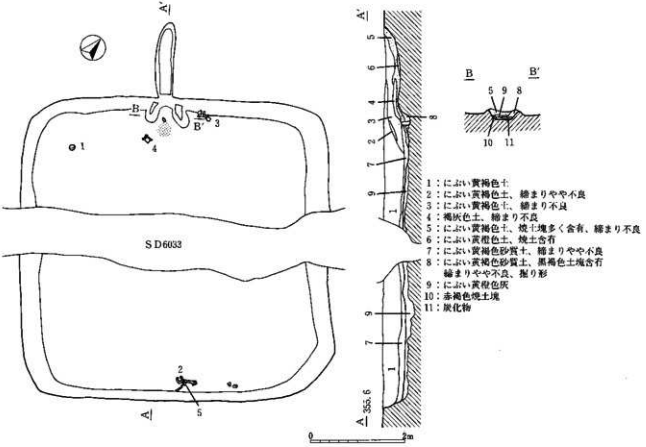
SB6040（第155図）

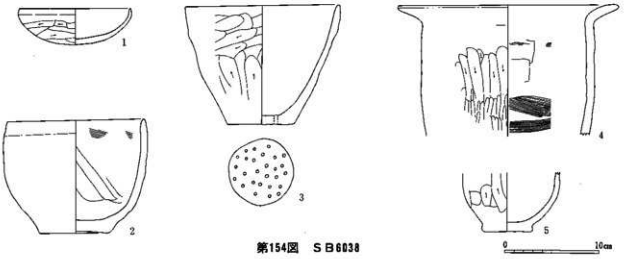
位　　置：6c区、IVF−07・08（第4検出面）

重複関係：SB6041、SD6033に切られる。

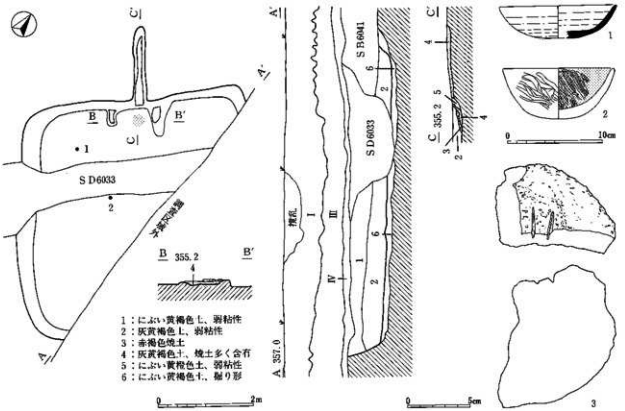
形　　状：東側が調査区域外に拡がるが、一辺5.0mの隅丸方形である。

覆　　土：Ⅳ層を基調とし、２層から成る。自然埋没であろう。
壁　　：Ⅴ層を掘り込み、壁高はⅣ層下で80cmにのぼる。やや緩やかに立ち上がる。
床　　面：堅固で明確。全面的に貼られている。掘り形は浅く凹凸がある。
カ マ ド：火床が小さく残り、袖は粘土性のものがわずかに残っている。煙道は1.7mと長い。
遺　　物：全般的に少ない。底部までをロクロ成形した須恵器坏（１）は床面、内外面とも斜方向によく磨かれ、内面黒色処理された土師器坏（２）と砥石兼凹石（３）が覆土中から出土した。３は安山岩の熔岩製で厚さ11.5cmである。
所　　見：７世紀末～８世紀の住居跡と思われる。

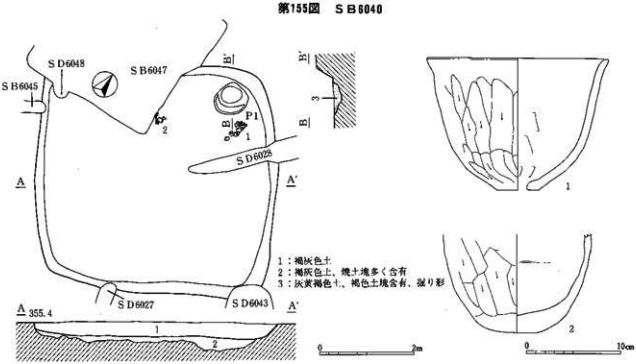




第154図　ＳＢ6038



第155図　ＳＢ6040



第156図　ＳＢ6046

ＳＢ6046（第156図）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－17・22（第４検出面）

重複関係：ＳＤ6042を切り、ＳＢ6045・6047、ＳＫ6040・6043・6045・6216に切られる。

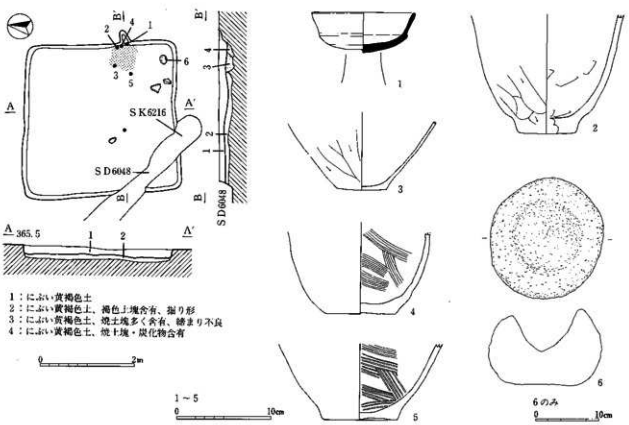
形　　状：4.9×5.2mの隅丸方形。

覆　　土：Ⅳ層を基調とする単層、自然埋没である。

壁　　：Ⅴ層を掘り込み、緩やかに立ち上がる。検出面からの壁高は32cmを測る。

床　　面：軟弱で不明確。掘り形は最深30cmで、凹凸がある。
ピ　ッ　ト：カマドの灰溜めとみられるものが北コーナーに１基ある。
カ　マ　ド：ＳＢ6047に切られたと思われる。
遺　　物：覆土から外面ケズリ、内面ナデ調整で単孔の土師器甑（１）、床面から１と同様な調整の同甕（２）が出土した。２の底部は肥厚し、厚さ２cmにも及ぶ。
所　　見：７世紀代の住居跡と思われる。

ＳＢ6047（第157図、ＰＬ24・42）
位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－16・17（第４検出面）
重複関係：ＳＢ6046を切り、ＳＤ6048、ＳＫ6216に切られる。
形　　状：一辺3.3mの方形。
覆　　土：Ⅳ層を基調とする自然埋没で単層。
壁　　：Ⅴ層を掘り込み、ほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの壁高は20cmである。
床　　面：中央付近が堅固で明確。掘り形は10cm前後の深さで平坦。
カ　マ　ド：東壁南東コーナー寄りに位置する。袖は壊され、20cmの短い煙道が残存する。
遺　　物：須恵器高坏（１）、ケズリ調整土師器甕（２・３）、外面ナデ、内面ハケ目調整で底部に木葉痕を有する同甕（４・５）はカマドから、安山岩製の凹石（６）は南東コーナー床面から出土した。６は径19.2cm、高さ12.2cm、5200ｇである。
所　　見：７世紀代の住居跡と思われるが、該期にしては規模が小さく、主軸方向も特異である。



第157図　ＳＢ6047

ＳＢ6059（第108図）

位　　置：６ｅ区、ⅡＰ－08・13（第４検出面）

重複関係：なし。

形　　状：西コーナーと煙道のみの調査となり、東側大部分が調査区域外のため不明だが方形であろう。

覆　　土：単層。基調土と異なる含有土塊があり人為埋没であろう。

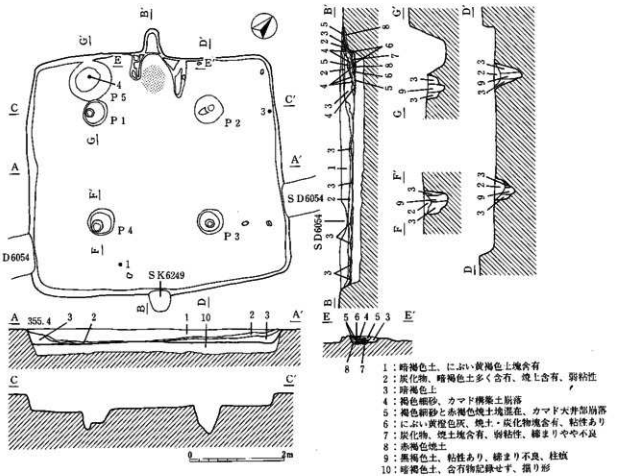
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、傾斜して立ち上がる。壁高は検出面から36cmである。

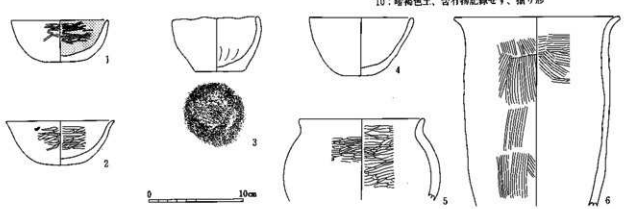
床　　面：軟弱なものの明確。掘り形は存在だけ確認した。

カ マ ド：煙道が北西壁から約2.0m伸びる。この延長にカマドが位置すると思われるが調査区域外となり、詳細は不明。

遺　　物：煙道内から土師器１片、覆土中より須恵器・土師器各１片、計３片が出土したのみ。

所　　見：主軸の方向、覆土のあり方、煙道の形態から７世紀の住居跡と思われる。





第158図　ＳＢ6060

ＳＢ6060（第158図、ＰＬ25・34）

位　　置：６ｅ区、ⅡＰ－07・08・12（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6061を切り、ＳＤ6054、ＳＫ6249に切られる。

形　　状：5.1×5.4mの方形。

覆　　土：３層から成る。２層めの焼土・炭化物層はほぼ全面に広がり、覆土中でレンズ状に立ち上がっている。自然埋没途上で窪みに焼土・炭化物を棄てたとみられる。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、急な傾斜で立ち上がる。壁高は検出面から30cmほどある。

床　　面：貼り床で堅固。床面中央部分に、覆土中の焼土・炭化物層と同一層が乗る。掘り形は床下20cmまで掘り、平坦である。

ピ　ッ　ト：主柱穴が４基見つかった。深さは床面から36～52cmでいずれも柱痕が認められ、柱径は14～17cmである。カマド左脇Ｐ５は床下検出土坑で、覆土は記録しなかったが、カマドの灰溜めとみられる。

カ　マ　ド：北西壁中央に位置し、袖は粘土で構築されている。袖の上過半を取り払い、周囲に投げてあり、故意に破壊されている。煙道は第４検出面へ重機で掘り下げたときにかなり削平してしまい、調査時には短くなってしまった。火床はよく焼けている。

遺　　物：土師器坏（１・２）、同鉢（３・４）、同ミガキ甕（５）、ハケ目調整の同長胴甕（６）があり、１・３は床面、４はＰ５覆土、２・５・６は覆土から出土した。３は内外面ナデ調整で、底部内面はヘラナデされる。底部は回転かどうか不明だが、糸を用いて切り離されたとみられる。１・２・５は内外面、主に横方向に丁寧に磨かれる。４も同様な調整と思われるが、内外とも器面の荒れにより観察できない。

所　　見：７世紀前半～中頃の住居跡と思われる。壁際が自然埋没し、中央部分がまだ埋没していない状態で焼土・炭化物の投棄が行われたとみられる。

ＳＢ6061（第159図、ＰＬ25・34・35）

位　　置：６ｅ区、ⅡＰ－12・13（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6060、ＳＤ6054、ＳＫ6249に切られる。

形　　状：一辺4.3mの方形。

覆　　土：単層。自然埋没。

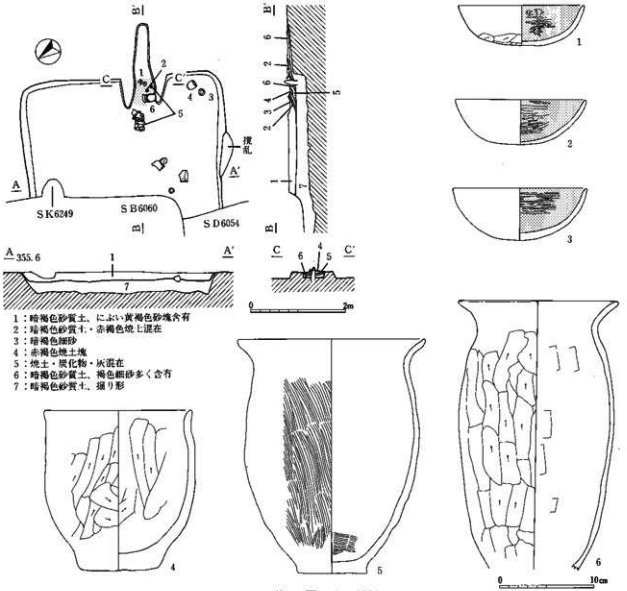
壁　　：Ⅳ層を掘り込み、南東側でほぼ垂直。他は傾斜する。壁高は検出面から16cmを測る。

床　　面：明確な貼り床。掘り形は25cm前後の深さがあり、比較的平坦。

カ　マ　ド：南東壁のやや南コーナー寄りに位置し、袖は粘土で構築され、火床奥部に支脚石が屹立したまま残存している。煙道は約1.1m伸びる。破壊はされていない。

遺　　物：土師器坏（１～３）、ケズリ調整の同小型甕（４）、ハケ目調整の同甕（５）、外面ケズリ調整の同長胴甕（６）は、調査上のミスで過半を失った６を除き完形で、２・４・６がカマド内、５がカマド前方床面、３・４が南コーナー床面より出土した。１～３は内面の横方向のミガキが共通するが、外面は１がヨコナデ、２・３がヘラ削りのちミガキによる調整で、１のみ底部はヘラ削りされる。

所　　見：７世紀前半～中頃の住居跡である。遺物は遺棄と思われる。



第159図　ＳＢ6061

ＳＢ6062（第160図、ＰＬ25）

位　　置：６ｅ区、ⅡＰ－12・13・17・18（第４検出面）

重複関係：ＮＲ6001を切り、ＳＥ6001に切られる。

形　　状：一辺5.0ｍの隅丸方形。

覆　　土：基調土は同じだが含有物の有無や相違で３分層され、レンズ状の堆積を成す自然埋没である。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み傾斜して立ち上がる。壁高は検出面から30㎝を測る。

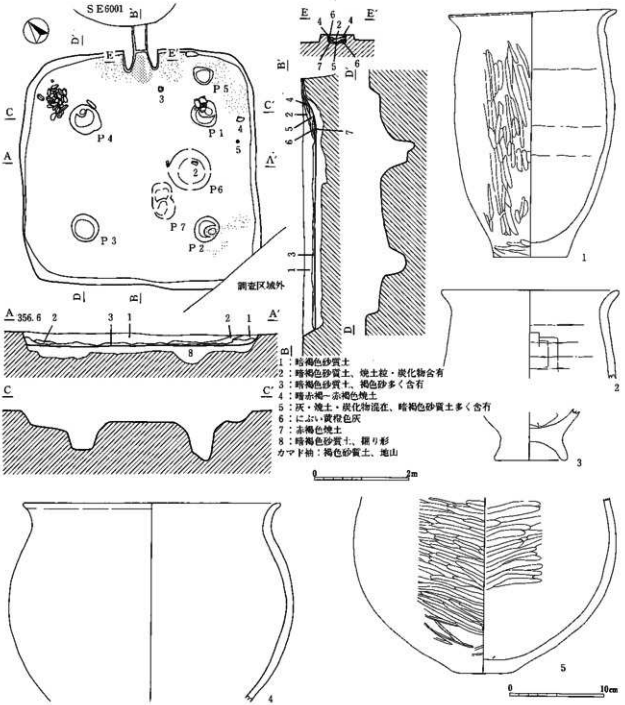
床　　面：16～28㎝の深さの掘り形を埋め尻して砂を貼った床とするが、あまり固くはない。

ピ　ッ　ト：主柱穴が４基、カマド右脇に灰溜めが１基、用途不明の床下土坑が２基ある。

カ　マ　ド：北西壁中央に位置し、袖は地山削り出しか。先端を失った煙道と赤化した火床が残存する。

遺　　物：外面縦方向のミガキ、内面ナデ調整の土師器甕（１）、内外面ヘラナデ調整の同甕（２）、内外面ナデ調整の同台付甕底部（３）、内外面ナデ調整で球形胴の同甕（４）、内外面横方向のミガキ調整で球形胴の同甕（５）がある。３は覆土、他は床面から出土した。北コーナー床面にはこもあみ石23個が固まって在った。

所　　見：７世紀～８世紀前半の住居跡と思われる。



第160図　ＳＢ6062

ＳＢ6068（第161・162図、ＰＬ25・35・36・43）

位　　置：６ｅ区、ⅡＵ－02・03・07・08（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6065・6067・6070・6071に切られる。

形　　状：一辺6.7cmの隅丸方形。

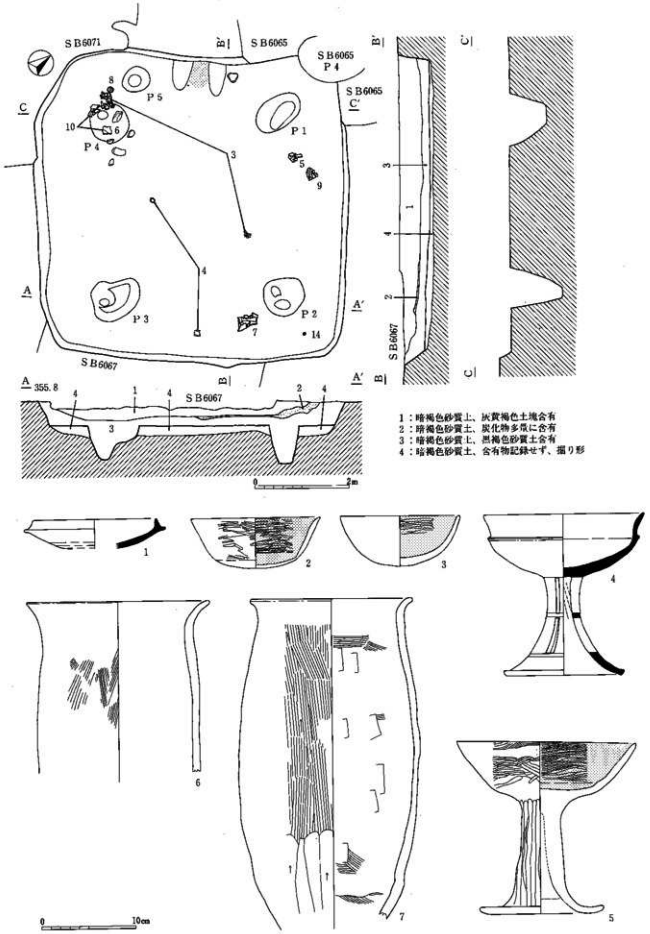
覆　　土：主に２分層されるが基調土は同じで、炭化物含有層を挟む。自然埋没である。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み傾斜する。壁高は54cmを測る。

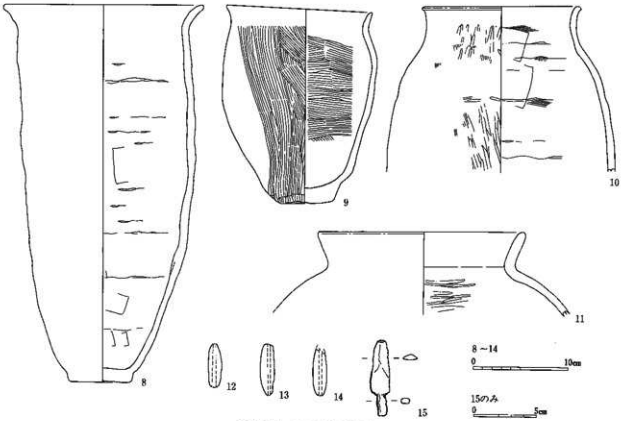
床　　面：掘り形を埋め戻しただけだが、やや硬化している。掘り形は床下20cm前後で平坦。

ピ ッ ト：床面では捉えられず床下調査で検出。主柱穴４基とカマド右脇に灰溜めが１基。

カ マ ド：北西壁中央に位置し、火床が残存。袖は取り払われており、基部痕跡を確認。地山削り出しカ



第161図　ＳＢ6065（１）



第162図　ＳＢ6068（２）

マドであったと思われる。竪穴が深いにもかかわらず、煙道はなかった。

遺　物：３層中に多い。床面では壁際に多い。土器は須恵器坏Ｈ（１）、土師器坏（２・３）、須恵器高坏（４）、土師器高坏（５）、外面ハケ目または下部ヘラ削り、内面ヘラナデ調整の同長胴甕（６・７）、ナデ調整の同長胴甕（８）、外面縦方向、内面横方向のハケ目調整の同甕（９）、内外面ハケ目のち外面ミガキ、内面ヘラナデ調整の同甕（10）、内外面ミガキ調整、球形胴の同甕（11）、土製品は土錘（12～14）と鉄鏃（15）を図化した。１は受け部からの立ち上がりが短く、内湾する。２・５は内面に痕跡的な稜をもつ。４は坏部外面の稜が凸帯状となり、脚部には２段３方の透かしをもつ。５の坏部は内外とも横方向に丁寧に磨かれ、脚部の縦方向のミガキは１単位が太い。黒色処理は不完全である。15は6.0×1.5×0.4cm、8.0g。１・２・11以降は覆土、他は床面出土である。

所　見：６世紀後半～７世紀初頭の指標的な住居跡である。

ＳＢ6074（第163図、ＰＬ26・36）

位　置：６ｅ区、ⅡＵ－07・08・13（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6073・6077、ＳＫ6267に切られる。

形　状：方形と思われるが、東過半が調査区域外に拡がり不明。

覆　土：単層。自然埋没。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、緩やかに立ち上がる。壁高は検出面より30cmを測る。

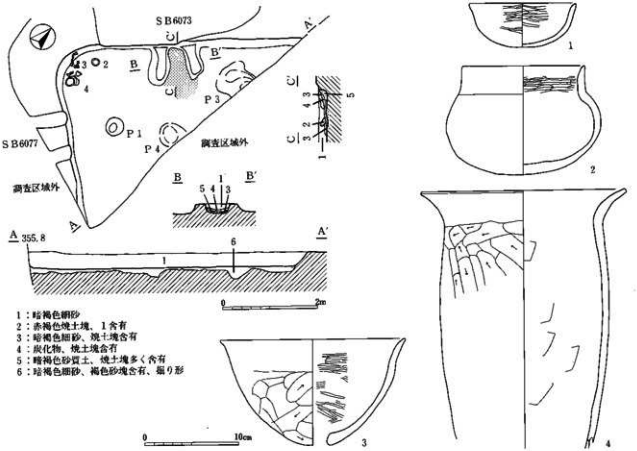
床　面：掘り形を埋め戻しただけの軟弱な床である。掘り形は10cm以内と浅く、凹凸がある。

ピット：４基見つかった。Ｐ１は深さ50cm弱あり、主柱穴とみられる。他３基は用途・帰属性不明の床下検出で、Ｐ４は繁雑になるため図示しなかったがカマド直下にある。

カ マ ド：北西壁に位置し、地山のⅥ層に酷似した袖には芯材として土師器甕の破片が用いられていた。火床はよく発達しているが、煙道はＳＢ6073に切られて無い。

遺　　物：横方向のミガキのみで調整された土師器坏（1）、同様な調整の同鉢（2）、外面ヘラ削り、内面ミガキ調整で単孔の同甑（3）、外面ヘラ削り、内面ヘラナデ調整の同長胴甕（4）があり、1は覆土、2～4は西コーナーに固まって置かれていた。

所　　見：7世紀前半～中頃の住居跡と思われる。



第163図　ＳＢ6074

ＳＢ6076（第164図、ＰＬ26・36）

位　　置：6ｅ区、ⅡＰ－02・07（第4検出面）

重複関係：ＳＫ6274を切る。

形　　状：広範囲に攪乱を受けるが、掘り形が深く、5.8×6.1mの隅丸方形であることが明確につかめた。

覆　　土：3層から成るが、基調土は同じ。床面近くに炭化物の層がある。自然堆没であろう。

壁　　：緩やかに立ち上がり、検出面からの壁高は14cmである。北半分は攪乱され、掘り形のみ残存。

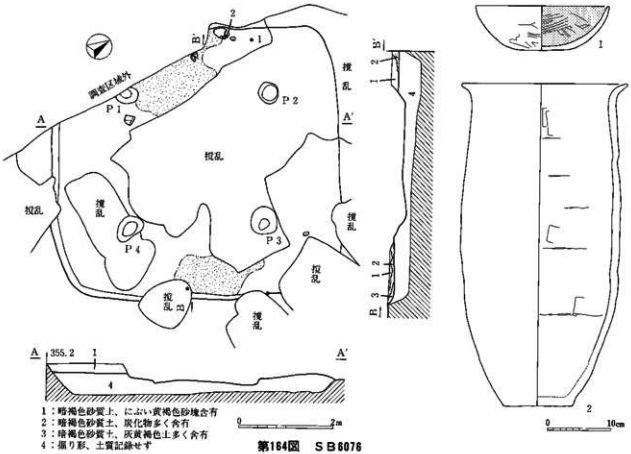
床　　面：攪乱に壊されているところ以外の床は、貼り床で堅緻。

ピ ッ ト：主柱穴が4基。

カ マ ド：北西壁の延長に当たる調査区西壁に、カマド特有の焼土・炭化物の堆積層が覗く。同時期の住居跡の主軸方向からも北西壁にカマドがあることは確実。

遺　　物：カマド脇床面に、ミガキ調整のみの土師器坏（1）とナデ調整の同長胴甕（2）があった。図示できなかったが、南東壁際から須恵器高坏が出土した。

所　　見：7世紀前半～中頃の住居跡と思われる。



第164図　ＳＢ6076

ＳＢ6077（第165図）

位　　置：６ｅ区、ⅡＵ－07・12（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6074を切る。

形　　状：調査区域外に拡がり不明。

覆　　土：単層。自然埋没。

壁　　：Ⅴ層を掘り込み、傾斜して立ち上がる。壁高は検出面より最深22cmを測る。

床　　面：貼り床ほどではないが固い。掘り形は存在のみ確認した。

カ マ ド：本体は調査区域外で、煙道は２基検出した。煙道１は主軸がずれていることから、調査区域外で別の住居跡が重複している可能性がある。

遺　　物：北壁際床面に土師器台付鉢（１）があった。口縁部と脚部は回転ナデ、外面はヘラ削り、内面はナデ調整されている。

所　　見：６世紀末～７世紀前半の住居跡と思われるが、調査したのがわずかな部分であり判然としない。

ＳＢ6078（第166図、ＰＬ26・36）

位　　置：６ｅ区、ⅡＰ－17・18・22・23

重複関係：ＳＤ6050に切られる。

形　　状：南西壁を切られて失うが、一辺3.2mの方形と思われる。

覆　　土：単層。自然埋没であろう。

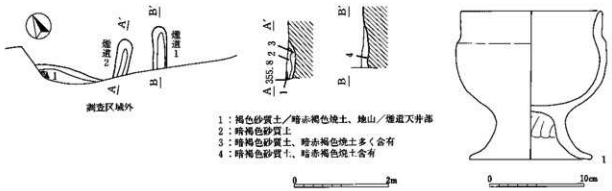
壁　　：Ⅵ層を掘り込み、急な傾斜で立ち上がる。壁高は検出面から30cmを測る。

床　　面：貼り床で堅緻。掘り形は存在のみ確認した。

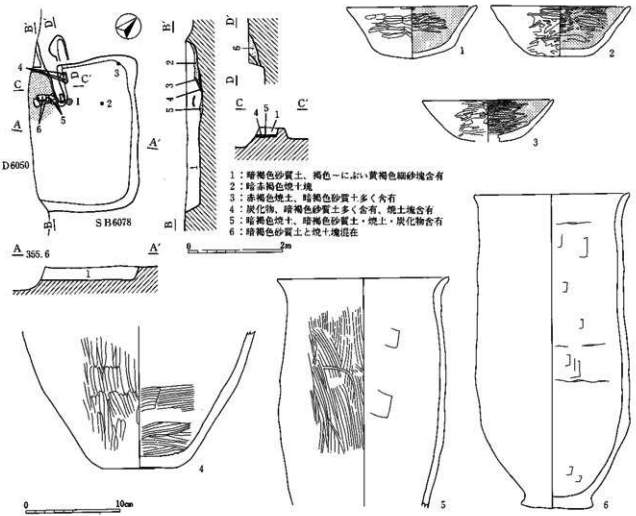
カ マ ド：北西壁に２基検出した。古いカマドは長さ65cmの煙道のみ残存。新しいカマドはＳＤ6050に切られているため、半分しか残存しないが粘土の袖の先端に石を配している。

遺　　物：全面ミガキが施される土師器坏（１～３）、外面縦ミガキ、内面横方向のハケ目調整による同甕胴下半部（４）、外面縦方向のハケ目、内面ヘラナデ調整の同長胴甕（５）、ナデ調整の同長胴甕（６）がある。１～３は内面に微かな稜をもつ。２・３は床面、他はカマド袖内外より出土。

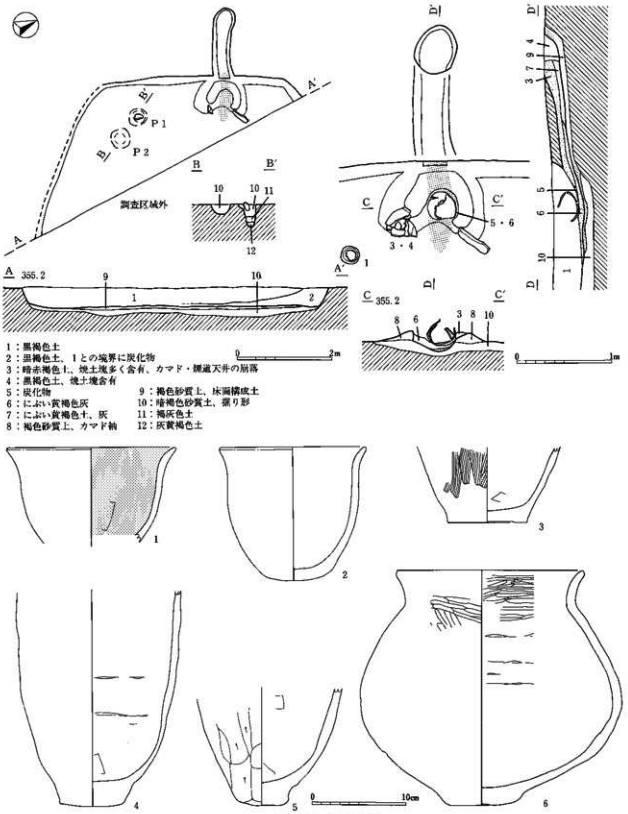
所　　見：６世紀前半～中頃の住居跡と思われる。該期にしては極めて小規模である。



第165図　ＳＢ6077



第166図　ＳＢ6078



第167図　ＳＢ7001

ＳＢ7001（第167図、ＰＬ26・37）

位　　置：７区、ＩＯ－17・18

重複関係：なし。

形　　状：一辺６ｍ弱の隅丸方形と思われるが、調査上のミスで南西壁を重機で壊してしまい、貼り床の

広がる範囲をとらえてプランとしているが、実際にはコーナーがもう少し外側へ張り出すと考えられる。

覆　　土：2層からなるが同質で、境界に炭化物があり分かれた。一丁田4層基調の自然埋没であろう。

壁　　：一丁田5層を掘り込み、傾斜する。壁高は検出面から24cmを測る。

床　　：貼り床。堅緻。掘り形は10cm前後で比較的平坦。

ピ　ッ　ト：床下より2基。貼り床に覆われており、柱穴ではない。

カ　マ　ド：北西壁に位置し、一丁田7層の粘土で構築され、袖の先端には石が対になって配されている。火床は細長く赤化し、煙道は約1.5m伸びて天井部まで残存していた。

遺　　物：内外面ナデ調整、内面黒色処理の土師器鉢（1）、内外面ナデ調整の同小型甕（2）、外面ハケ目、内面ハケ目のちヘラナデ調整、底部木葉痕のある同甕底部（3）、内外面ナデ調整の同長胴甕（4）、外面ヘラ削り、内面ナデ調整の同甕底部（5）、球形胴の同ミガキ甕（6）がある。4は床面、2は覆土、3・4は重なって左袖先端、5は6の中に入れ子になってカマド火床上から出土した。1は甑か。

所　　見：7世紀の住居跡と思われる。

ＳＢ7002（第168図、ＰＬ26）

位　　置：7区、ＩＯ－12・13

重複関係：ＳＢ7003を切る。

形　　状：西コーナーを調査しただけであり、西過半が調査区域外のため不明。

覆　　土：単層。埋没の人為性は不明。

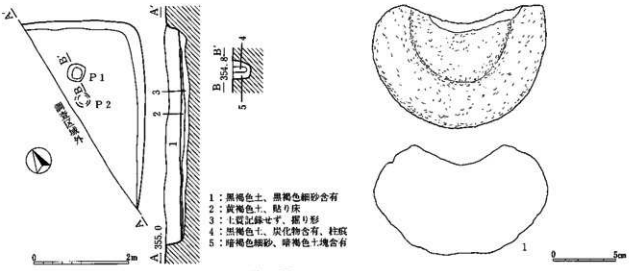
壁　　：一丁田6層を掘り込み、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は検出面から約30cmである。

床　　面：貼り床。堅緻。10cmの浅く平坦な掘り形をもつ。

ピ　ッ　ト：Ｐ1は柱痕らしき土の相が見え、柱穴か。Ｐ2は床下検出で、ごく浅い。

遺　　物：全般的に少なく、土器で図化できるものはなかった。安山岩製で径13.9cm、厚さ8.9cmの石鉢状の凹石（1）が覆土中より出土した。

所　　見：わずかに出土した土器片の種類、主軸方向の同異性、周辺の遺構分布状況、覆土のあり方の比較などから7世紀頃の住居跡と思われる。



第168図　ＳＢ7002

ＳＢ7003（第169図、ＰＬ26・37）

位　　置：７区、ＩＯ－07・08・12・13

重複関係：ＳＢ7002に切られる。

形　　状：切られ、調査区域外に多く広がるが、一辺3.5mの方形と思われる。

覆　　土：４分層したが、２～４層は一丁田５層を基調とし、焼土・炭化物の含有率の相違によって分けられた。

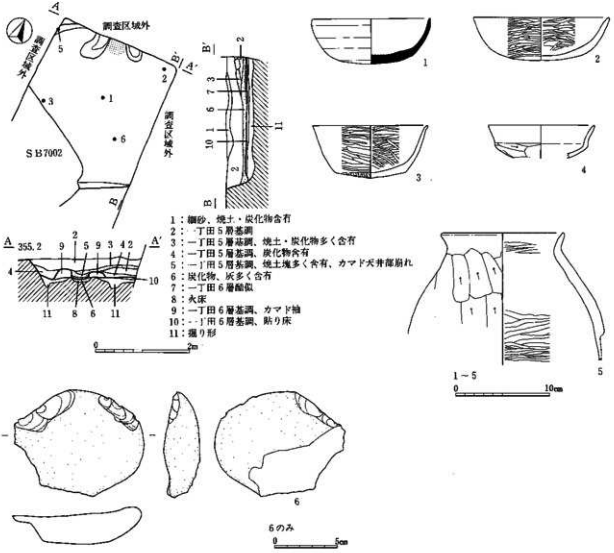
壁　　：一丁田６層を掘り込み、傾斜する。壁高は検出面から36cmを測る。

床　　面：貼り床で堅緻、明確。10cm前後で浅く平坦な掘り形をもつ。

カ マ ド：北西壁にあり、一丁田６層土で構築された袖の先端と火床の半分を調査したが、調査区域外にかかり全容は不明。

遺　　物：床面から須恵器坏（１）、ミガキのみの調整による土師器坏（２・３）、外面ヘラ削り、内面ミガキおよびナデ調整の同甕（５）、安山岩の礫器（６）が、覆土からロクロ成形後ヘラ削り調整の土師器坏（４）が出土した。５の欠損部には擬口縁がみられる。

所　　見：７世紀後半～末の住居跡と思われる。該期にしては規模が小さい。



第169図　ＳＢ7003

(2) 掘立柱建物跡

ＳＴ6006（第170図）

位　置：６ｅ区、ⅡＰ－12・13　　重複関係：ＳＢ6062に切られる。

形　態：梁行２間×桁行２間以上、調査区域外のため桁行不明。

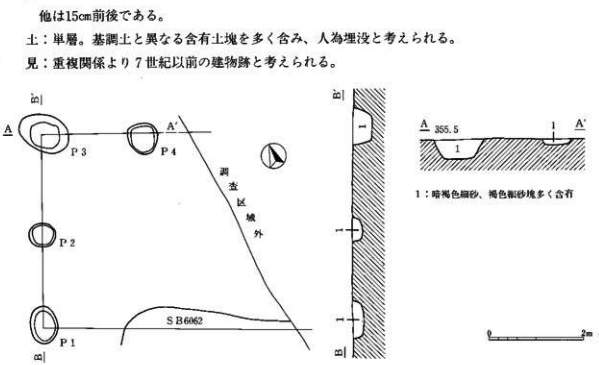
規　模：梁行4.1m×桁行2.2m以上　　面　積：9.0㎡以上

棟　軸：Ｗ－33°－Ｎ　　柱　間：東西列2.2m、南北列1.9～2.2m

柱　穴：Ｐ１・Ｐ３は長円形、Ｐ２・Ｐ４は円形。断面形はタライ状で、深さはＰ３のみ40cmと深いが、他は15cm前後である。

覆　土：単層。基調土と異なる含有土塊を多く含み、人為埋没と考えられる。

所　見：重複関係より７世紀以前の建物跡と考えられる。



第170図　ＳＴ6006

2　古代以降

(1) 竪穴住居跡と竪穴状遺構

ＳＢ6001（第171図）

位　置：６ｄ区、ⅡＵ－21・22、ⅣＡ－02（第１検出面）

重複関係：ＳＤ6004を切る。

形　状：長軸7.1m×短軸2.1mの溝状を呈す。

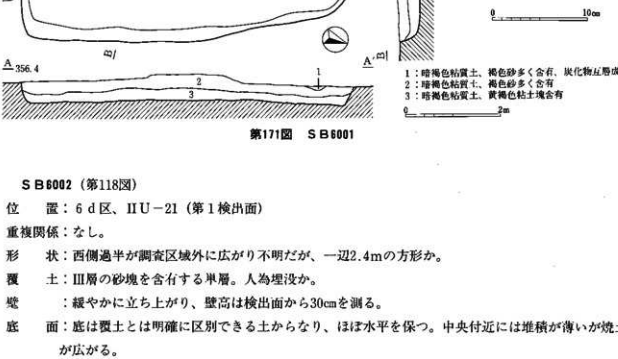
覆　土：主に２分層され、拳大以上の礫を多く含む。下層は人為埋没とみられる。

壁　：Ⅲ層を掘り込み、やや緩やかに立ち上がり、壁高は検出面から50～60cmを測る。

底　面：Ⅳ層を底面とする。

遺　物：覆土より比較的多く土器が出土しているが破片が多く、形になるものはほとんど無い。黒色土器Ａ椀（１）を掲載した。緑釉陶器片も出土した。

所　見：９世紀末～10世紀前半の遺構と思われる。機能が全く不明の竪穴状遺構である。洪水砂を掘り込む遺構は少ない。



第171図　ＳＢ6001

ＳＢ6002（第118図）

位　　置：６ｄ区、ⅡＵ－21（第１検出面）

重複関係：なし。

形　　状：西側過半が調査区域外に広がり不明だが、一辺2.4mの方形か。

覆　　土：Ⅲ層の砂塊を含有する単層。人為埋没か。

壁　　：緩やかに立ち上がり、壁高は検出面から30cmを測る。

底　　面：底は覆土とは明確に区別できる土からなり、ほぼ水平を保つ。中央付近には堆積が薄いが焼土が広がる。

遺　　物：覆土よりわずかに土師器・須恵器・黒色土器Ａ等の土器片が出土しているに過ぎない。

所　　見：用途不明の竪穴状遺構。

ＳＢ6003（第172図、ＰＬ32）

位　　置：６ｂ・６ｃ区、ⅣＦ－17（第３検出面）

重複関係：ＳＫ6207に切られる。

形　　状：4.0×4.8mの隅丸長方形。

覆　　土：主に２層からなるが漸移的であり自然埋没である。

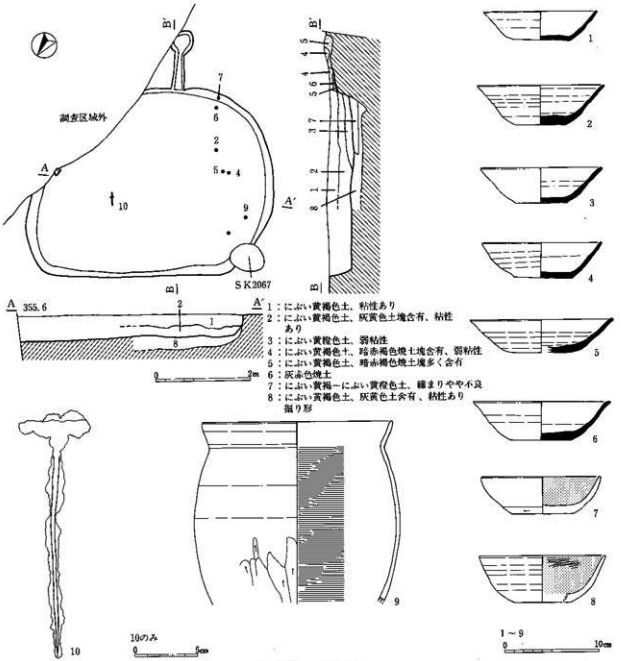
壁　　：急な傾斜で立ち上がり、壁高は60cm弱で深い。

床　　面：明確な違いが認められず検出は難航した。部分的な硬化が認められる２層最下部を床面とした。厚さ20cm前後の平坦な掘り形がある。

カ マ ド：長めの煙道が南東側に伸びるがカマドは完全に破壊されており、火床も確認できなかった。

遺　　物：覆土より土器が多く出土した。須恵器坏Ａ（１～６）、黒色土器Ａ坏Ａ（７・８）、ロクロ成形で内面ハケ目、外面下半ヘラ削り調整の土師器甕（９）、鉄製紡錘車（10）を掲載した。須恵器坏Ａはすべて回転糸切り底で内面底径が5.4～6.6cm、堅緻～良好な焼成で、全般に外傾が強く器厚が薄い。７・８は底部を回転ヘラ削りする。須恵器に軟質的なものはなく、黒色土器の比率はまだ高くない。２と７が覆土上層、３がカマド周辺、他は覆土下層から出土した。

所　　見：遺物は投棄された一括資料で、これらより９世紀前半頃の住居跡と思われる。南側に煙道をもつ住居は珍しい。プランは丸みを帯び過ぎており、立ち上がりが不明瞭だったことと、年度をまたぐ分割調査となったため検出が不十分か。



第172図　SB6003

SB6004（第173図、PL22）

位　　置：6b区、ⅣF－17・22（第4検出面）

重複関係：SK6040を切り、SC6004に切られる。

形　　状：3.6×3.7mの隅丸方形。

覆　　土：Ⅳ層基調の単層。上部のSC6004の土と本跡覆土は全く区別できない。自然埋没か不明。

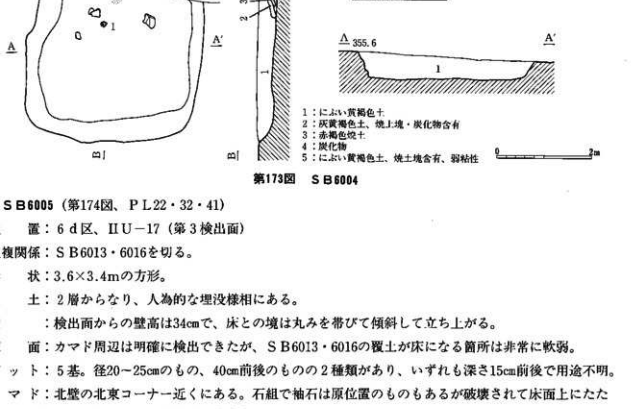
壁　　：Ⅳ層中から掘り込み、緩やかに立ち上がる。壁高は検出面より40cmである。

床　　面：床は不明確で、覆土の土質と色調の変わり目、カマド周辺の炭化物の広がる高さを参考にした。

カ マ ド：北壁中央に火床部分のみをわずかに検出した。周辺には炭、焼けた礫が分布している。礫は袖石とみられる。煙道は円形に張り出して短く残存している。

遺　　物：全般的に少なく、底部ナデ調整の須恵器坏A（1）や黒色土器A坏A破片が覆土より出土した。

所　　見：8世紀代の住居と思われるが、SC6004構築土と本跡覆土が全く区別できない点は気になる。



第173図　ＳＢ6004

ＳＢ6005（第174図、ＰＬ22・32・41）

位　　置：６ｄ区、ⅡＵ－17（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6013・6016を切る。

形　　状：3.6×3.4mの方形。

覆　　土：２層からなり、人為的な埋没様相にある。

壁　　：検出面からの壁高は34cmで、床との境は丸みを帯びて傾斜して立ち上がる。

床　　面：カマド周辺は明確に検出できたが、ＳＢ6013・6016の覆土が床になる箇所は非常に軟弱。

ピ　ッ　ト：５基。径20～25cmのもの、40cm前後のものの２種類があり、いずれも深さ15cm前後で用途不明。

カ　マ　ド：北壁の北東コーナー近くにある。石組で袖石は原位置のものもあるが破壊されて床面上にたたきつけられている。支脚石が残存する。

遺　　物：黒色土器Ａ坏Ａ（１～11他）、同椀（12）、黒色土器Ｂ皿Ｂ（13）、片口付きの同鉢Ａ（14）、ロクロ成形で体部をヘラ削りした土師器甕（15他）、同甕Ｂ（16）、墨書のある黒色土器Ａ片（17）、土師質の土錘（18）がある。１・11・12・15はカマド火床上、３・９・10・14は床面、16・17は南西コーナー、他は覆土下層より出土した。１～10の底部は回転糸切り、11は底部回転ヘラ削り調整である。17は木偏が確認できるが欠損部にかかって判読できない。坏Ａはほとんどが規格的なⅡの法量だが、大型のⅠ（11）と中間的な法量のもの（10）もある。黒色土器の底部は、回転糸切り未調整が５～10、回転ヘラ削りが11・12・14、回転糸切りのちヘラ削りが１・２・４である。12は黒笹14号窯式の灰釉陶器椀を模したものか。食膳具は黒色土器のみで占められ、ロクロ成形の土師器は出現していない。

所　　見：遺物のほとんどはカマドの破壊と同時に投棄されたものであり、第２層の状況からみて廃絶時焼却住居の疑いがある。９世紀半ばの住居跡である。

ＳＢ6007（第175図、ＰＬ22・32）

位　　置：６ｄ区、ⅡＵ－11・12・16・17（第３検出面）

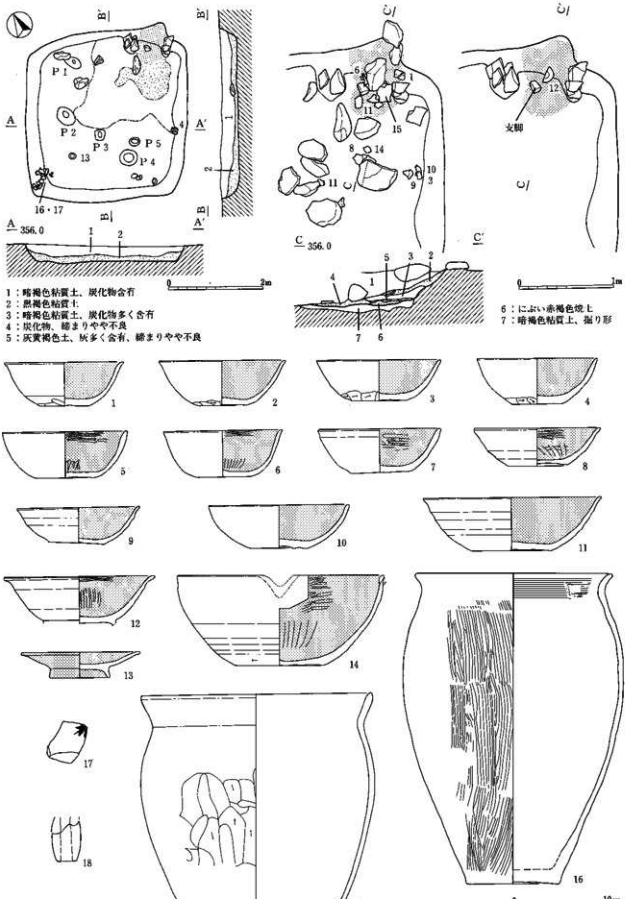
重複関係：ＳＢ6019を切る。

形　　状：北壁が調査区域外に広がるが、一辺3.6mの隅丸方形を呈すると思われる。

壁　　：検出は不明確で緩やかに立ち上がる。Ⅳ層を掘り込み、壁高は検出面より38cmである。

床　　面：カマド周辺は比較的固いが、他はやや軟弱である。

カ　マ　ド：東壁中央にあり、袖のごく一部を除き破壊されている。袖の構築材は粘土と礫である。煙道は

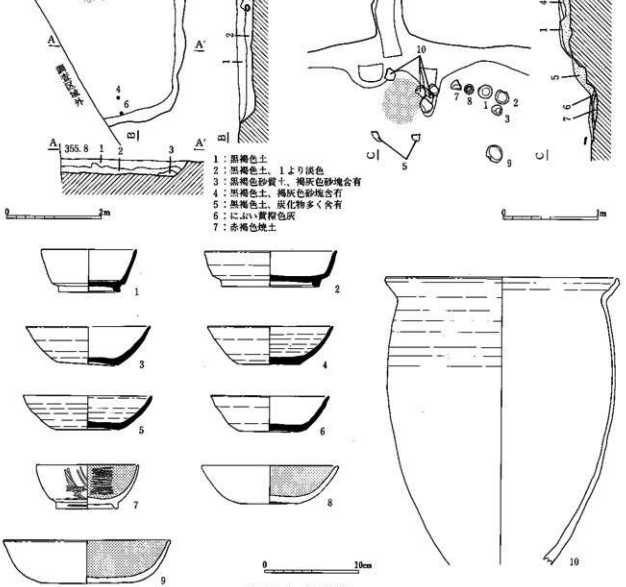


第174図　ＳＢ6005

長さ1.2m、幅30cmで先端まで残っている。

遺　物：須恵器坏Ｂ（１・２）、同坏Ａ（３他）、黒色土器Ａ椀（７）、同坏Ａ（８・９）がカマド右脇の床面、須恵器坏Ａ（５）、ロクロ成形で口縁部の短い土師器砲弾形甕（10）がカマド前方の床面および袖上、須恵器坏Ａ（４・６）が南壁際にあった。１・２は坏ＢＶと坏ＢⅣの法量で、底部に回転糸切り痕が残り、断面四角形の高台はほぼ垂直に降りて外面接地する。３～６は内面底径5.6～7.4cmの回転糸切り坏で、４はやや軟質である。黒色土器Ａ坏Ａはミガキが不明瞭、２法量がある。この他図示していないが、土師器甕Ｃは上半部３、底部１片の計４個体を確認した。

所　見：遺物は完全形に見えても、２や７などは口縁部の１箇所をわずかに故意に打ち欠いてある。カマドが破壊されており、遺物は遺棄ではなく投棄である。９世紀前半の住居跡と思われる。



第175図　ＳＢ6007

ＳＢ6008（第112図）

位　　置：６ｄ区、ⅡＵ－18（第３検出面）

重複関係：なし。

形　　状：煙道のみ検出。長さ68cm、幅44cm、煙出し部分が楕円形を呈している。住居部分の形状は不明。

煙道覆土：２層からなり、１層は焼土混じりの炭を多く含み煙道本体、２層はⅣ層を基調としており煙道掘り形と思われる。

所　　見：その方向から住居部分は東側の調査区域外に広がっていると思われる。第３検出面なので９世紀代の住居跡と思われる。

ＳＢ6011（第176図、ＰＬ43）

位　　置：６ｄ区、ⅡＵ－18・22・23（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6022を切る。

形　　状：東側過半が調査区域外へ拡がるが、一辺4.2mの方形を呈すると思われる。

覆　　土：３層から成る。人為埋没か。

壁　　：Ⅳ層中を掘り込む。やや緩やかに立ち上がり、検出面からの壁高は30～40cmを測る。

床　　面：やや固い。浅い掘り形をもつ。

施　　設：南西隅に高さ10～20cm、径100cm位、断面台形で粘土で固く締まった高まり（Ｍ１）がある。

遺　　物：黒色土器Ａ坏Ａ（１・２他）と、須恵器・緑釉陶器・土師器の破片が覆土から出土した。１は底部手持ちヘラ削り、２は底部回転糸切り後ヘラ削りされる。Ｍ１の周囲床面からは刀子（３他２点）が出土している。

所　　見：刀子の出土状況から、Ｍ１は何かの作業台という可能性もある。付属施設のある住居跡か、何らかの工房跡と考えられる。９世紀半ば頃の所産とみられる。

第176図　ＳＢ6011

ＳＢ6012（第107図）

位　　置：６ｄ区、ⅡＵ－16・21（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6013・6020に切られる。

形　　状：方形か長方形を呈すると思われるが、ＳＢ6013に切られ、西過半が調査区域外のため不明。

覆　　土：主に３層に分かれ、２層めには炭化物の間層をもつ。自然埋没だろう。

壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は検出面より34cmを測る。

床　　面：やや固い程度である。10cm強の凹凸のある掘り形をもつ。

ピ　ッ　ト：主柱穴とみられるものが１基ある。底部には主柱の痕跡と認められるものが２つ看取れた。

遺　　物：覆土からの出土が主体だが、量は少ない。図示できるほど形になったものはないが、破片として、須恵器坏Ａ、非ロクロ成形の土師器坏、両面にミガキのある土師器甕等が出土している。

所　　見：重複関係も加味して、８世紀前半～半ばの住居跡と思われる。

ＳＢ6013（第177図、ＰＬ23・32・42）

位　　置：６ｄ区、ⅡＵ－16・17・21・22（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6012・6016を切る。

形　　状：3.8×4.3mの不整な方形を呈する。

覆　　土：２層から成るが漸移的で、Ⅳ層を基調とする自然埋没と思われる。

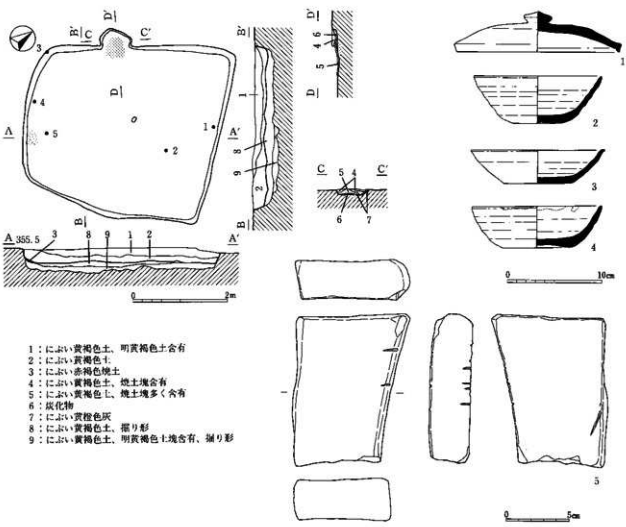
壁　　：急な傾斜で立ち上がる。壁高は検出面より30cmを測る。

床　　面：比較的固いが壁際は固くない。やや凹凸がある。深さ20cm弱の掘り形がある。

カ マ ド：北西壁南西コーナー寄りに張り出し状のカマドがある。火床はよく赤化している。

遺　　物：床面から須恵器坏蓋Ｂ（１）、同坏Ａ（２～４）、覆土から砂岩製の砥石（５）が出土した。１は口縁端部がやや「く」の字状に調整される。底部は２がヘラオコシのちナデ、３・４が回転糸切りである。３・４の内面底径は7.2cm、8.0cmと大きい。３は転用硯、４は灯明皿の疑いがある。

所　　見：８世紀後半の住居跡である。検出は非常に難しく、不整形のプランは検出ミスか。



第177図　ＳＢ6013

ＳＢ6014（第178・179図、ＰＬ23・32・33・42・43）

位　　置：６ｄ区、ⅡＵ－22・23、ⅣＡ－02（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6015を切り、ＳＢ6079、ＳＫ6122に切られる。

形　　状：一辺6.1ｍの隅丸方形。

覆　　土：Ⅳ層を基調とする自然埋没でほぼ単層。

壁　　：Ⅴ層を掘り込み、壁高は46㎝。北西・南東壁は急傾斜、北東・南西壁は非常に緩やかである。

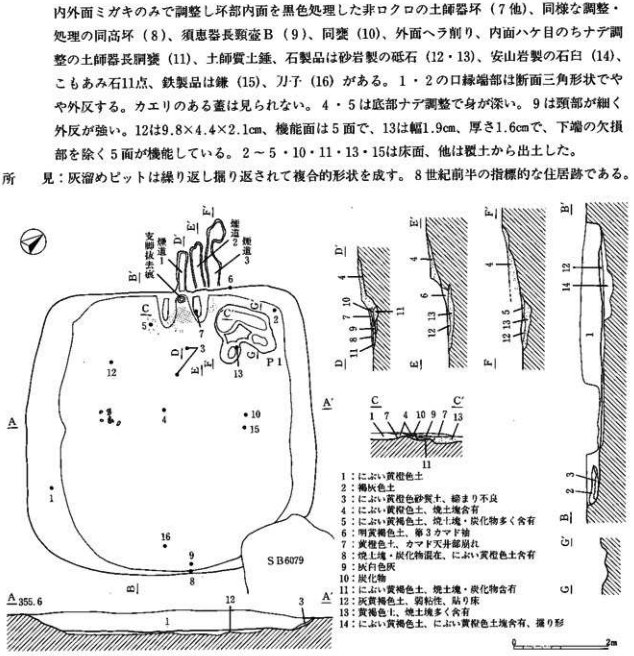
床　　面：掘り形をもたずに、全面的に固く叩き締められた貼り床をもつ。

ピ　ッ　ト：北コーナーに灰溜めピットが１基ある。

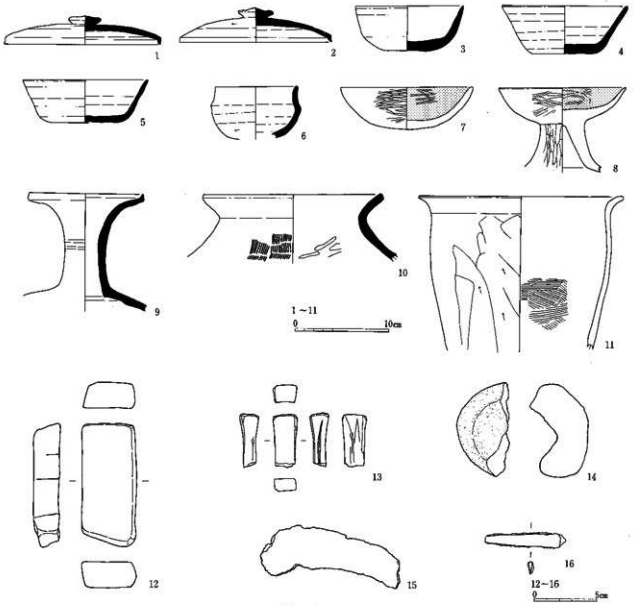
カ　マ　ド：北西壁にあり、袖は基部のみ残存する。赤化した火床の奥に支脚抜き取り痕と思われる浅い窪みがある。煙道は３基が近接し、２度の作り替えが成されている。煙道２・３の新旧は不明。

遺　　物：土器・土製品は、須恵器坏蓋Ｂ（１・２）、同坏Ｇ（３）、同坏Ａ（４・５）、同短頸壺Ｂ（６）、内外面ミガキのみで調整し坏部内面を黒色処理した非ロクロの土師器坏（７他）、同様な調整・処理の同高坏（８）、須恵器長頸壺Ｂ（９）、同甕（10）、外面ヘラ削り、内面ハケ目のちナデ調整の土師器長胴甕（11）、土師質土錘、石製品は砂岩製の砥石（12・13）、安山岩製の石臼（14）、こもあみ石11点、鉄製品は鎌（15）、刀子（16）がある。１・２の口縁端部は断面三角形状でやや外反する。カエリのある蓋は見られない。４・５は底部ナデ調整で身が深い。９は頸部が細く外反が強い。12は9.8×4.4×2.1㎝、機能面は５面で、13は幅1.9㎝、厚さ1.6㎝で、下端の欠損部を除く５面が機能している。２～５・10・11・13・15は床面、他は覆土から出土した。

所　　見：灰溜めピットは繰り返し掘り返されて複合的形状を成す。８世紀前半の指標的な住居跡である。



第178図　ＳＢ6014（１）



第179図　ＳＢ6014（２）

ＳＢ6016（第180図、ＰＬ23）

位　　置：６ｄ区、ⅡＵ－17・22（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6015、ＳＫ6144を切り、ＳＢ6013に切られる。

形　　状：3.7×4.2mの隅丸長方形。

覆　　土：単層。自然埋没であろう。

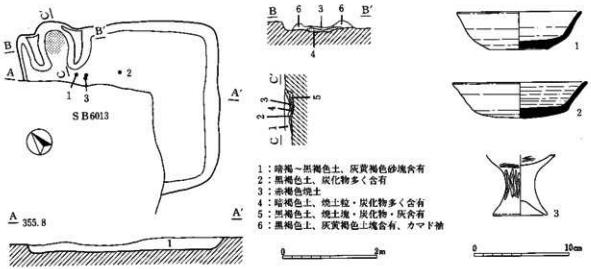
壁　　：Ⅴ層を掘り込み、緩やかに立ち上がる。深さは検出面より24cmである。

床　　面：比較的固い。掘り形は不明。

カ マ ド：北東壁の北コーナーに近接して１基ある。袖は粘土と黒褐色土を固く締めている。

遺　　物：カマド付近の床面から須恵器坏Ａ（１・２）、土師器高坏（３）、底部木葉痕のある同長嗣甕底部が出土した。１は内面底径8.8cmの回転糸切り底、２は底部ヘラオコシのちナデ調整である。

所　　見：８世紀後半頃の住居跡と思われるが、該期では長方形プラン・カマド位置等が特異である。



第180図　ＳＢ6016

ＳＢ6017（第106図）

位　　置：６ｄ区、ⅣＡ－01（第４検出面）

重複関係：なし。

形　　状：西側過半が調査区域外に拡がるため全容は不明だが、方形を呈すると思われる。

覆　　土：単層。自然埋没。

壁　　：床面との境は丸みを帯び、緩やかに立ち上がる。Ⅴ層を掘り込み、壁高は20cm前後である。

床　　面：固くないが明瞭。深さ10cm前後の浅い掘り形をもつ。

遺　　物：土師器、黒色土器Ａの破片が３片出土したのみ。

所　　見：住居跡と思われるが判然とせず、時期は不明。

ＳＢ6018（第181図）

位　　置：６ｄ区、ⅡＵ－11・16（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6019、ＳＫ6104を切り、ＳＢ6007に切られる。

形　　状：半分以上をＳＢ6007に切られ、北側は調査区域外に拡がるため、全体の形状は不明。

覆　　土：単層。自然埋没だろう。

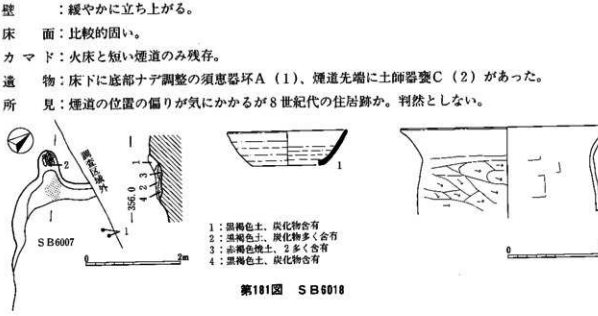
壁　　：緩やかに立ち上がる。

床　　面：比較的固い。

カ マ ド：火床と短い煙道のみ残存。

遺　　物：床下に底部ナデ調整の須恵器坏Ａ（１）、煙道先端に土師器甕Ｃ（２）があった。

所　　見：煙道の位置の偏りが気にかかるが８世紀代の住居跡か。判然としない。



第181図　ＳＢ6018

ＳＢ6019（第182図、ＰＬ23）

位　　置：６ｄ区、ⅡＵ－11・12・16・17（第４検出面）

重複関係：ＳＫ6103・6104を切り、ＳＢ6007・6018・6020に切られる。

形　　状：調査区域外へ広がり不明だが、一辺が６ｍ以上の隅丸方形を呈すると思われる。

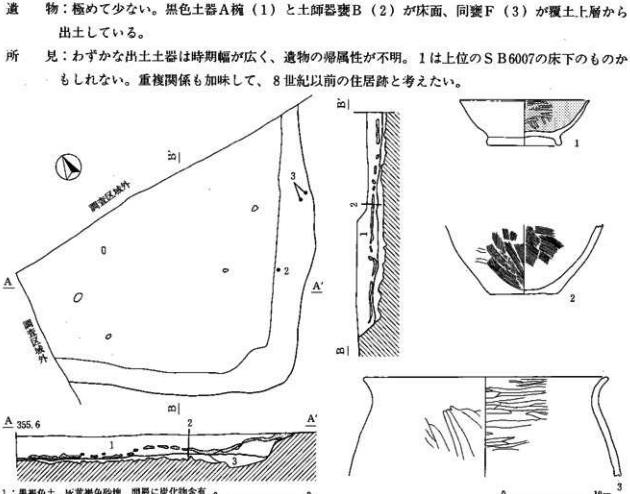
覆　　土：単層。自然埋没と思われる。間層に炭化物の層が挟まる。

壁　　：Ⅴ層を掘り込み、緩やかに立ち上がる。壁高は最深55cmを測る。凹凸の激しい掘り形をもつ。

床　　面：調査所見がなく不明。

遺　　物：極めて少ない。黒色土器Ａ椀（１）と土師器甕Ｂ（２）が床面、同甕Ｆ（３）が覆土上層から出土している。

所　　見：わずかな出土土器は時期幅が広く、遺物の帰属性が不明。１は上位のＳＢ6007の床下のものかもしれない。重複関係も加味して、８世紀以前の住居跡と考えたい。



第182図　ＳＢ6019

ＳＢ6020（第112図）

位　　置：６ｄ区、ⅡＵ－16（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6012・6019を切る。

形　　状：切られ、かつ大部分が調査区域外のため不明。

覆　　土：黒褐色土が単層で自然埋没する。

壁　　：Ⅳ層を掘り込み、ほぼ垂直で、検出面からの深さは約40cmある。

床　　面：軟弱で不明瞭。

遺　　物：床下より須恵器坏Ａ２個体の破片他土器６片が出土。須恵器坏Ａは底部回転糸切り、内面底径6.0cmである。

所　　見：９世紀前半以降の住居跡と考えられる。

ＳＢ6022（第107図）

位　　置：６ｄ区、ⅡＵ－22（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6011・6079に切られる。

形　　状：切られ、かつ大部分が調査区域外のため不明。

覆　　土：黒褐色土が単層で自然埋没する。

壁　　：Ｖ層を掘り込み、やや緩やかに立ち上がる。検出面からの壁高は45cmを測る。

床　　面：軟弱で不明瞭。

遺　　物：覆土中より須恵器・土師器破片が各１片出土した。

所　　見：住居跡と思われるが不明。重複関係から８世紀半ば以前の遺構と思われる。

ＳＢ6023（第183図）

位　　置：６ｄ区、ⅣＡ－02・03（第４検出面）

重複関係：ＳＫ6142を切る。

形　　状：方形を呈すると思われるが、東側が調査区域外に広がり不明。

覆　　土：壁際に三角堆土がある他は単層。Ⅳ層を基調とする自然埋没である。

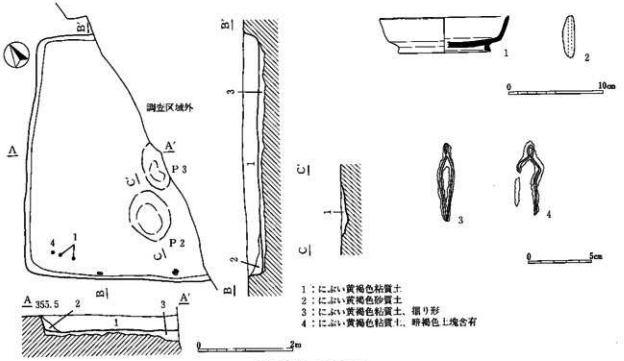
壁　　：Ｖ層を掘り込みほぼ垂直。検出面より36cm程の深さである。

床　　面：固く締まっている。深さ10cm前後の掘り形がある。

ピ　ッ　ト：床下から２基検出された。

遺　　物：美濃須衛窯様の須恵器坏Ｂ（１）、鉄製品では鑿子２点（３・４）が西コーナー床面から、土師質の土錘（２）が覆土から出土した。

所　　見：遺物が少なく不明だが、１のみで判断すると８世紀末～９世紀前半の住居跡か。



第183図　ＳＢ6023

ＳＢ6025（第184図）

位　　置：６ｃ・６ｄ区、ⅣＡ－06・07・11・12（第３検出面）

重複関係：ＳＫ6141を切り、ＳＫ6118・6120・6136・6140・6142・6164・6184・6190に切られる。

形　　状：4.4×5.0mの長方形。

覆　　土：単層。自然埋没であろう。

壁　　：丸みを帯び、緩やかに立ち上がる。壁高は検出面より約30cmである。

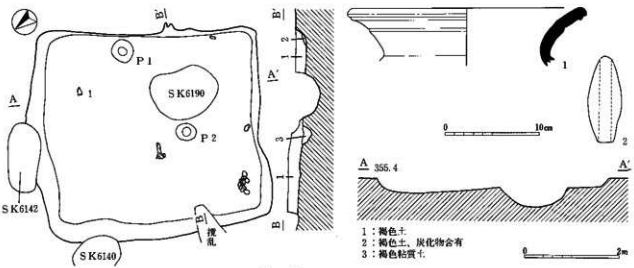
床　　面：軟弱で不明確。

ピ　ッ　ト：用途不明の小ピットが２基みつかったが、本跡への帰属性は不明である。

カ　マ　ド：南東壁の南コーナー寄りに短い煙道のみ残存。袖は全く破壊され、炭化物が床に貼り付く程度で火床も確認できなかった。

遺　　物：須恵器甕Ａ（１）、土師質の土錘（２）が床面より、他の須恵器・黒色土器Ａ・緑釉陶器・土師器の破片が覆土より出土した。床面中央には獣骨が、西コーナー床面には大きさ・形状がふぞろいの礫10個が固まって出土した。

所　　見：遺物やプランの主軸方向から９世紀代の住居跡と思われる。



第184図　ＳＢ6025

ＳＢ6026（第185図）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－22・23、ⅣＦ－02・03（第１検出面）

重複関係：なし。

形　　状：長軸5.4m、短軸4.9mの不整な隅丸長方形を呈す。

覆　　土：暗褐色の砂質土の単層からなる。

壁　　：底部との境は丸みを帯び、傾斜する。深さは検出面より46cmである。Ⅲ層を掘り込む。

底　　面：若干凹凸があるが平坦。固くはない。

遺　　物：覆土より鐇子２点が錆び付いて１個の鉄塊（１）として出土したのみ。

所　　見：９世紀末以降の性格不明の竪穴状遺構である。洪水砂を掘り込む遺構は絶対数が少なく、不定形のものが多い。

ＳＢ6027（第186図）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－16・21（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6045を切り、ＳＫ6170に切られる。

形　　状：西側が調査区域外に拡がるので不明だが、南北軸で2.6mを測る。

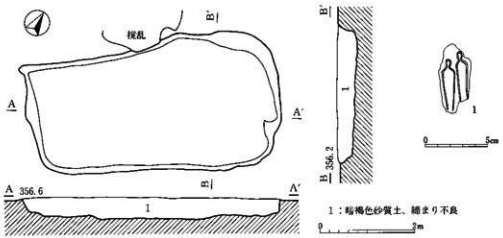
覆　　土：単層。自然埋没であろう。

壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。深さは検出面から12cmを測る。

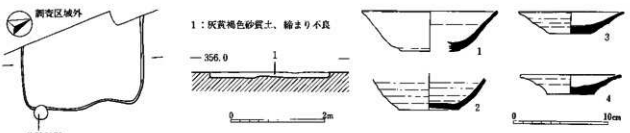
底　　面：不明確で軟弱。

遺　　物：覆土より須恵器坏A（1・2）、同皿A（3・4）が出土した。1～3は底部回転糸切り痕、4は底部回転ヘラ削り痕がみられる。3は内面に油煙が付着し、灯明皿か。焼成は、坏Aは良好、皿Aは堅緻である。1・2の内面底径はそれぞれ5.6、6.4cmである。

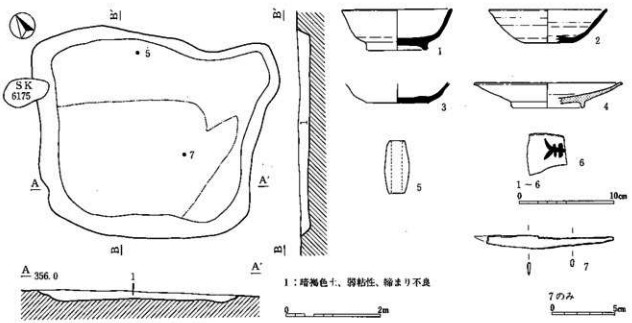
所　　見：食糧具に黒色土器をもたず、9世紀前半の遺構である。住居跡とする根拠はない。



第185図　ＳＢ6026



第186図　ＳＢ6027



第187図　ＳＢ6028

ＳＢ6028（第187図、ＰＬ23・33・40・43）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－21・22（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6045を切り、ＳＢ6029、ＳＫ6175に切られる。

形　　状：長軸5.2m、短軸4.4mの不整な隅丸長方形。

覆　　土：単層。自然埋没と思われる。

壁　　：不明瞭で非常に緩やかに立ち上がる。壁高は検出面から28cmを測る。

底　　面：貼られてはいないが北壁・東壁際を除いて堅緻。

遺　　物：楕形状の須恵器坏Ｂ（１）、同坏Ａ（２・３）、灰釉陶器皿（４）、土師質の土錘（５）、墨書「大」のある須恵器片（６）が覆土中より出土した。この他、覆土からは黒色土器Ａ・Ｂ、緑釉陶器の破片も出土した。刀子（７）は床面から出土した。２・３の内面底径はそれぞれ5.6、6.6cmである。食膳具に黒色土器は含まれない。７は幅1.1cm、厚さ0.2cm。

所　　見：固い床があり竪穴建物であるとは思われるが、カマドがなく、壁が極めて緩やかな不整のプランでは住居跡と断じられない。検出ミスの疑いもある。９世紀前半頃の遺構とみられる。

ＳＢ6029（第111図）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－22、ⅣＦ－02（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6028・6054を切る。

形　　状：長軸4.4m、短軸3.4mの不整形。

覆　　土：単層。自然埋没であろう。

壁　　：底面との境が不明瞭にだらだらと立ち上がる。深さは検出面から10cm前後である。

底　　面：不明確で若干の凹凸がある。堅緻な部分はごくわずかである。

遺　　物：須恵器・黒色土器Ａ・土師器の破片が覆土から出土しているが、量は少ない。

所　　見：９世紀代の竪穴状遺構である。

ＳＢ6030（第188図、ＰＬ23・33・40・42・43）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－11・12・16・17・21（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6031・6033・6045、ＳＤ6044・6048を切る。

形　　状：主柱に礎石、壁の立ち上がり部分に石列をもった竪穴住居跡で、竪穴部分は7.2×7.6mの方形、石列部分は10.1×7.8mの長方形を呈する。西コーナーが調査区域外に出る。

覆　　土：３層から成る。炭を多く含む３層が主体となり、焼土塊を含む砂質土の１層と締まりのわるい砂質土の２層が所々に堆積する。

壁　　：掘り込みは20cm弱で緩やかである。

床　　面：貼られてはいないが比較的固い。

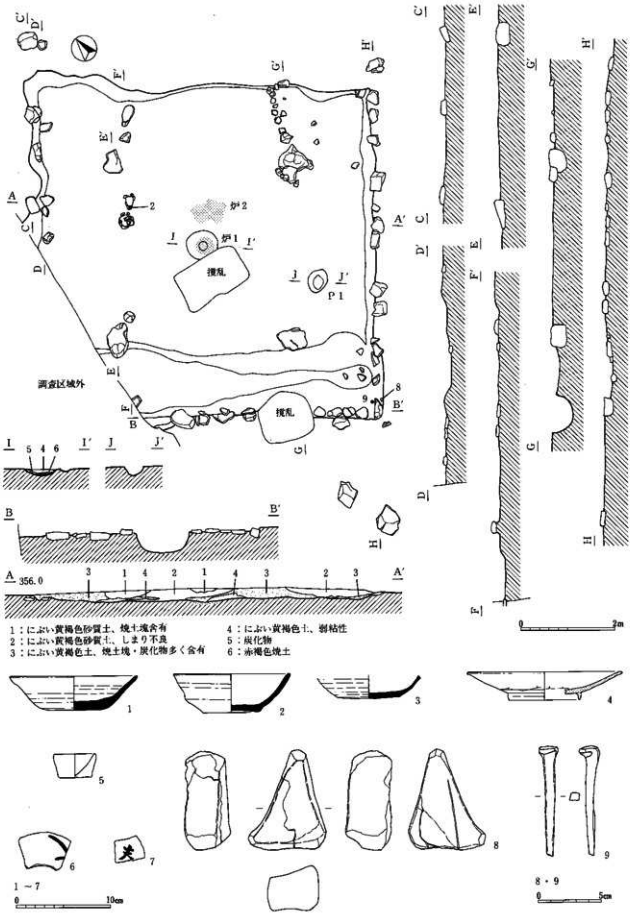
炉　　：カマドは無く、炉が中央部に２基ある。１基は浅い掘り込みを伴う。

ピ　ッ　ト：南東壁中央付近に深さ20cm弱の小ピットがある。

他　施　設：南西壁際は幅1.4m前後の溝状となっている。掘り形とも考えたが、床面の堅緻部がこの溝状部の底面に向かって連続して下がる部分が認められ、土間状の施設と考えた。

周囲の石列の他に、北東側の２つの礎石と北東壁の間に主軸方向に合致した石列が認められる。入り口に関連した施設か。

遺　　物：規模の割りに少ない。須恵器坏Ａ（１～３）、光ケ丘窯式の灰釉陶器皿（４）、ミニチュア土師



第168図　SB6030

器（5）、墨書「夫」のある黒色土器A片（6・7）、流紋岩製の砥石（8）、釘（9）を掲載したが、帰属性の疑わしいものが多い。底部を1はナデ、2は回転糸切り、3は手持ちヘラ削りで調整される。2は床面、8・9は溝状部、他は覆土から出土した。この他、緑釉陶器破片3片も覆土より出土した。8は8.0×6.2×4.0cm、164g、9は8.7×1.5×0.6cm、20.1gである。

石　　質：主柱の礎石（98～151kg）は4基とも凝灰岩を用いている。壁際石列は、閃緑岩、石英閃緑岩、花崗閃緑岩、安山岩、玢岩などの火山岩と凝灰岩が用いられ、中でも閃緑岩が半数を占める。

所　　見：主軸方向の壁際石列の両端に、竪穴部とは少し離れて大きめの平石が配されており、住居主体部に付属した庇などの張り出し施設があったものと考えられる。北東壁外側が硬化していること、さらに北東壁に沿う石列が無いこと、礎石から北東壁に連続する石列が入り口施設に関連するものとも考えられることから、入り口は北東壁側と考えられる。これと反対側の南西壁際には溝状部があり、土間状の遺構と考えたが、この溝状部は第4検出面のＳＤ6044・6048とほぼ同位置に重なるため、これらの埋没途上の凹みを利用したものと考えられる。

床面と覆土内には図示していないが炭化物が多く、炭化材は少ない。調査担当者は焼失住居としているが、焼却住居の可能性も高いと思われる。壁際石列の上面が内側に向かって傾いているものが多いことから調査担当者は内傾した柱を想定しているが、個々の石に1本1本の柱が設置されたと考えるより、この種の住居形態では石列の上に横木を渡したと考えたほうが自然である。遺物は8世紀代の1と3、9世紀前半の2を混入と考え、最も新しいと考えられる遺物である4や他の遺構との重複関係からみて9世紀後半の住居跡と思われる。更埴市内で似た形態の遺構として五輪堂遺跡1号住居跡がある。

ＳＢ6031（第189図、ＰＬ23・33・40・41・43）

位　　置：6ｃ区、ⅣＡ－11・12・17（第3検出面）

重複関係：ＳＢ6033・6050・6052・6055・6080を切り、ＳＢ6030に切られる。

形　　状：5.8m×6.4mの長方形。

覆　　土：4層から成る。1・2層は床面のように非常に固く、人為的につき固められている。3・4層は自然埋没と思われる。

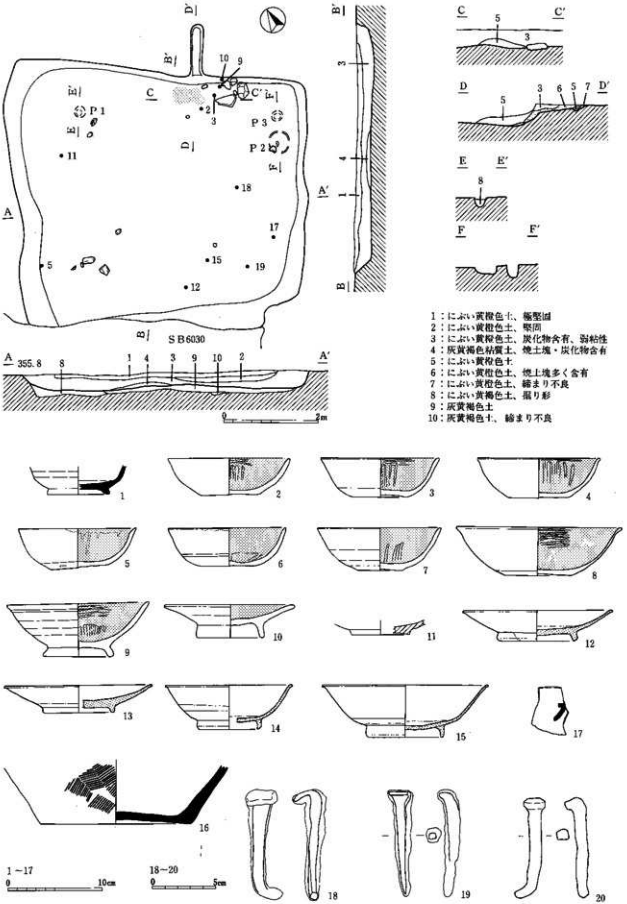
壁　　：Ⅳ層を掘り込んでおり、やや緩やかに立ち上がる。壁高は検出面から40cmを測る。

床　　面：軟弱で不明瞭。平坦な掘り形をもつ。

カ マ ド：北壁北東コーナー寄りに位置し、煙道が約1m伸びる。火床は残存するが、袖は完全に破壊されている。右脇に散乱する礫は袖の構築材と考えられる。

遺　　物：椀状の須恵器坏Ｂ（1）、黒色土器Ａ坏Ａ（2～8他）、同椀（9）、同皿Ｂ（10）、緑釉陶器皿（11）、灰釉陶器皿（12・13）、同椀（14・15）、須恵器甕Ｅ底部（16）、「夫」を墨書した軟質須恵器片（17）、鉄釘（18～20）を図化した。黒色土器Ａ坏Ａは5・6・8が底部回転ヘラ削り、他は底部回転糸切り未調整であり、内面のミガキは全般に雑で、6・7など形骸化しているものもある。大型のⅠ（8）と小型のⅡ（2～7）の2法量がある。5・6は灯明皿である。8は底部中央に「ℓ」の字状のヘラ記号がある。12・15は光ケ丘窯式、13・14は黒笹90号窯式である。食膳具は主に黒色土器と灰釉陶器で占められ、須恵器はほとんど見られない。20は7.9×2.4×0.9cm、25.2g。1・11・20は覆土1層、4・7・12・16～19は覆土2層、2・3・9・10はカマド、5・14・15は床面、8は床下、13はＰ1から出土した。

所　　見：9世紀中頃～後半の住居跡である。ＳＢ6033の建て替えか。



第189図　SB6031

ＳＢ6032（第190図、ＰＬ33・41）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－11（第３検出面）

重複関係：ＳＤ6030、ＳＫ6182を切る。

形　　状：西過半が調査区域外のため不明だが、一辺4.5mの方形と思われる。

覆　　土：単層。自然埋没。

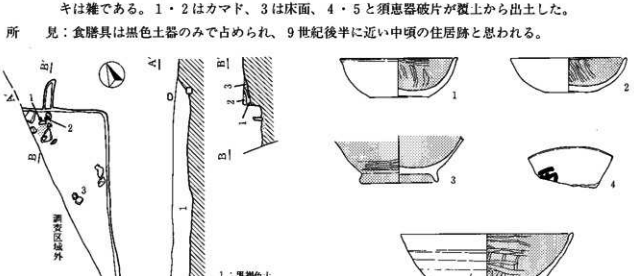
壁　　：Ⅳ層を掘り込み、傾斜して立ち上がる。壁高は検出面から50cm程度ある。

床　　面：軟弱なものの明確。掘り形はない。

カ マ ド：北壁北東コーナー寄りに位置し、煙道が約60cm伸びる。赤化した火床上に支脚石が屹立したまま残存する。袖は破壊されており、構築材と思われる礫が周りに散在する。

遺　　物：黒色土器Ａ坏Ａ（１・２・５）、黒色土器Ｂ椀（３）、墨書のある黒色土器Ａ破片（４）が出土した。１・２は底部糸切り未調整、５は底部手持ちヘラ削りが施されるが、いずれも内面のミガキは雑である。１・２はカマド、３は床面、４・５と須恵器破片が覆土から出土した。

所　　見：食膳具は黒色土器のみで占められ、９世紀後半に近い中頃の住居跡と思われる。



第190図　ＳＢ6032

ＳＢ6033（第191・192図、ＰＬ24・33・40・43）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－11・12・17（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6050・6052・6055・6080、ＳＫ6180を切り、ＳＢ6030・6031に切られる。

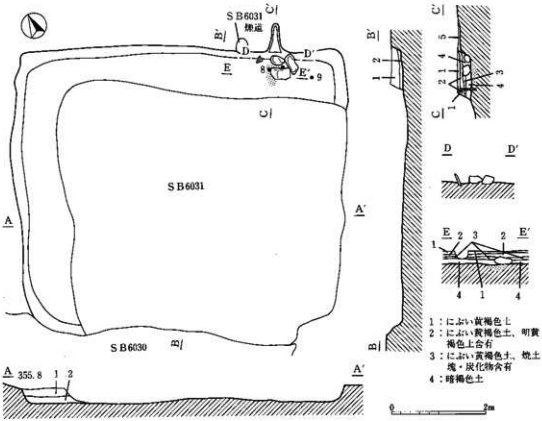
形　　状：6.1×7.1mの長方形。

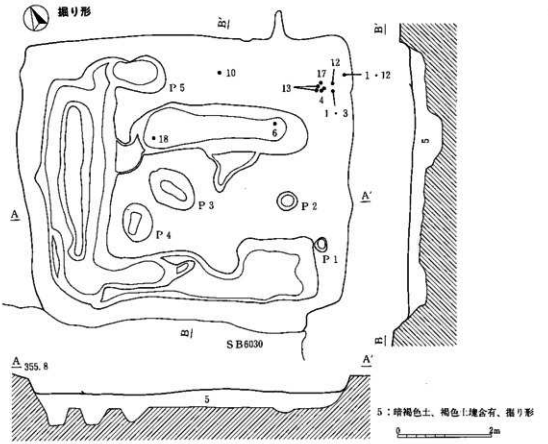
覆　　土：２分層されるが漸移的で自然埋没とみられる。

壁　　：Ⅳ層を掘り込み、やや緩やかに立ち上がる。壁高は検出面から34cmほどある。

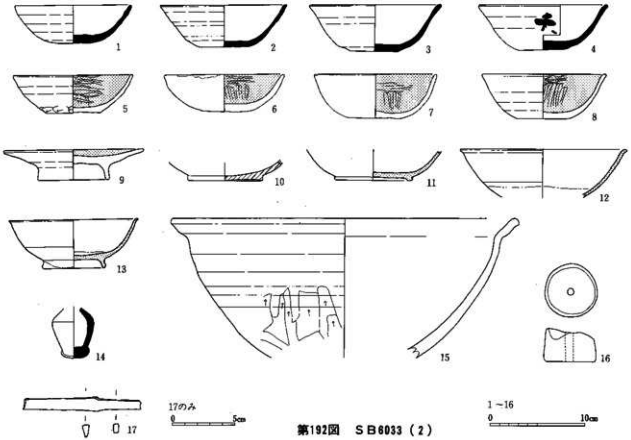
床　　面：軟弱で不明確。カマドの火床を基準にした。掘り形は厚く20cm以上の深さがある。とりわけ、南壁際では清状、西壁際では２重の清状、北側では北壁から1.2m隔たって清状となり、これらの床からの深さは床面から最深68cmにも達する。特殊な掘り形であり、掘り形中の遺物も多いことから平面図を掲載した。

カ マ ド：北東壁の東隅に位置し、煙道は約60cm伸びる。袖は破壊されており、構築材とみられる礫が赤化した火床上に散乱している。





第191図　SB6033（1）



第192図　ＳＢ6033（２）

遺　　物：床下遺物が多い。土器は底部ナデ調整の須恵器坏Ａ（１）、底部回転糸切りの軟質須恵器坏Ａ（２～４）、黒色土器Ａ坏Ａ（５～８）、盤状の同皿Ｂ（９）、緑釉陶器Ａ類椀（10）、灰釉陶器椀（11～13）、須恵質ミニチュア壺（14）、土師器鍋（15）、土師質紡錘車（16）、鉄製品は刀子（17）がある。２～４の内面底径は4.6～6.0cmである。４は墨書「夫」がある。５・６は内面にタール状の付着物があり灯明皿か。10は黄白色で底部中央に未貫通孔がある。11は黒笹14号窯式、12・13は光ケ丘窯式である。７・11・16は覆土、８はカマド火床上、９は床面、１～６・10・12～15・17は床下から出土した。

所　　見：カマド脇の東コーナーの床下掘り形内にみられる遺物集中は地鎮にかかわるものか。壁際に溝状の掘り形をもつものは該期の住居跡には散見されるが、本跡のものは際立って深く、単なる掘り形以外の別の用途も付与するものか。ただし、北西壁際の２重のもののうち内側のものと、北壁から1.2m隔たったものはＳＢ6031のものかもしれない。この場合、黒色土器Ａ坏Ａ（６）と刀子（17）は、ＳＢ6031に帰属する。両者の掘り形は埋土酷似で不可分であった。本跡の時期は９世紀半ばである。

ＳＢ6036（第193図）

位　　置：６ｃ区、Ⅳ Ｆ－11・16（第４検出面）

重複関係：ＳＤ6034を切り、ＳＤ6033、ＳＫ6277に切られる。

形　　状：隅丸方形を成すと思われるが、調査区域外に拡がり全体の形状は不明。

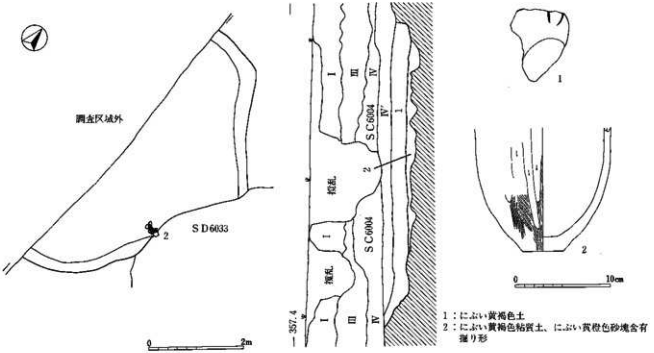
覆　　土：Ⅳ層を基調とする単層。自然埋没であろう。

壁　　：Ⅴ層を掘り込み緩やかに立ち上がる。壁高はⅣ層下25cmである。

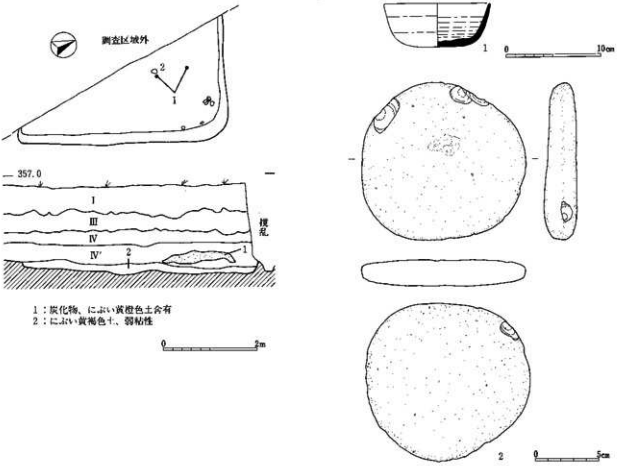
床　　面：軟弱で不明確。掘り形は凹凸がある。

遺　　物：墨書のある黒色土器A坏A破片（1）が覆土中から、外面ハケ目のちヘラ削り、内面ナデ調整で底部木葉痕のある土師器甕底部（2）が床面から出土した他は土師器が3片のみである。

所　　見：住居跡と思われる。時期は遺物が僅少のため不明だが、重複関係から9世紀半ば以前である。



第193図　SB6036



第194図　SB6039

ＳＢ6039（第194図）

位　　置：６ｃ区、ⅣＦ－01（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6044・6046、ＳＴ6001を切り、ＳＤ6025に切られる。

形　　状：西過半が調査区域外に拡がるが、一辺4.5mの方形を呈すると思われる。

覆　　土：単層。自然埋没であろう。

壁　　：床面との境は丸みを帯び、傾斜して立ち上がる。深さはⅣ層下10cmある。

床　　面：軟弱で不明確。色調の変化を基準にした。

遺　　物：底部までロクロ調整で成形した須恵器坏Ｇ（１）は床下、安山岩製で打痕のある凹石（２）は床面から出土した。この他の土器片は僅少。

所　　見：重複関係から本跡は９世紀代に属するものと思われる。１は８世紀以前の遺物で本跡が構築される以前のものであろう。

ＳＢ6041（第195図）

位　　置：６ｃ区、ⅣＦ－02・03・07・08（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6040・6043、ＳＤ6035を切り、ＳＤ6033に切られる。

形　　状：東過半が調査区域外に拡がり不明。

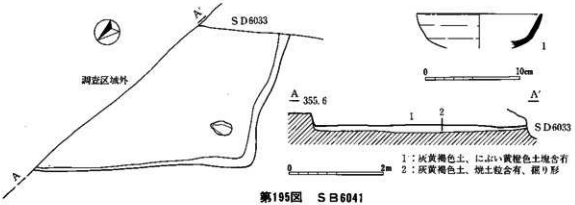
覆　　土：２層から成る。１層はⅣ層そのもので自然埋没。

壁　　：Ⅴ層を掘り込み、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は検出面より38cmである。

床　　面：軟弱で不明確。

遺　　物：全般的に少ない。須恵器坏Ａ（１）が覆土より出土した。

所　　見：西コーナー床面に大きな平石があり、作業用の台石か。８～９世紀の住居跡と思われるが、遺物僅少で、重複関係からも明らかにできない。



第195図　ＳＢ6041

ＳＢ6042（第196図、ＰＬ42）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－21～23、ⅣＦ－01・02（第４検出面）

重複関係：ＳＴ6001を切り、ＳＢ6054、ＳＫ6209に切られる。

形　　状：6.9×7.0mの方形。

覆　　土：Ⅳ層を基調とする単層で自然埋没。

壁　　：Ⅴ層を掘り込み、傾斜して立ち上がる。検出面からの壁高は40cmである。

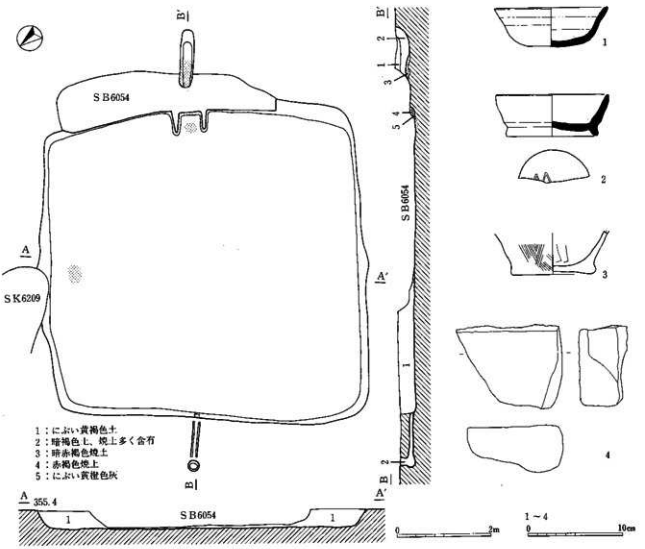
床　　面：軟弱で不明確。

カ マ ド：南西壁を除く各壁中央に１基ずつ計３基がある。南東壁中央のものは袖と長めの煙道がＳＢ6054に切られ残り、小さな火床が確認された。袖の内壁、カマドの奥壁はよく焼けて赤化している。

袖の構築材は粘土である。北西壁中央のものは煙道のみがトンネル状に残存する。北東壁中央のものは火床のみが残存している。

遺　物：須恵器坏A（1）、底部にヘラ記号のある同坏B（2）、土師器甕底部（3）、砂岩製の砥石（4）が覆上より出土した。2の高台は底部の最も外寄りにつき、外側へ開く。

所　見：カマドが2基以上併存したとは考えにくいが、作り替えとしても3壁にある例は珍しい。8世紀前半の住居跡と思われる。



第196図　SB6042

SB6043（第197図）

位　置：6c区、IVF－02・03（第4検出面）

重複関係：SB6041、SD6035・6036に切られる。

形　状：西コーナーを調査したに過ぎず、東過半が調査区域外に拡がるが、方形を呈すると思われる。

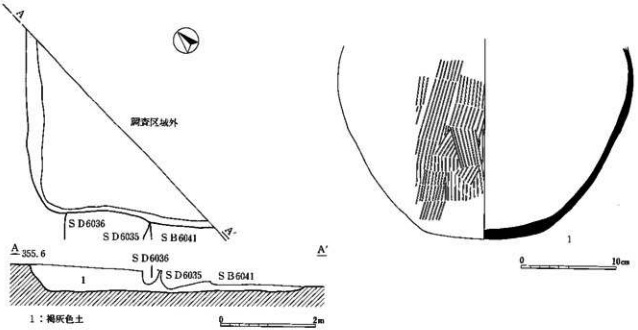
覆　土：IV層を基調とする単層、自然埋没である。

壁　　：V層を掘り込み、傾斜する。検出面からの壁高は56cmを測る。

床　面：軟弱で不明確。掘り形はない。

遺　物：土器片が僅少。覆土中から須恵器甕A（1）が出土した。

所　見：8世紀代の住居跡と思われるが、それ以上は判らない。



第197図　ＳＢ6043

ＳＢ6044（第198図、ＰＬ24・33・34）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－21、ⅣＦ－01（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6039、ＳＤ6025、ＳＫ6159・6160・6162・6223に切られる。

形　　状：切られ、調査区域外に拡がっているが、一辺4.0ｍの方形と思われる。

覆　　土：単層。Ⅳ層を基調とする自然埋没。

壁　　：Ⅳ層中から掘り込み、緩やかに立ち上がる。検出面からの壁高は20㎝である。

床　　面：軟弱で不明確。掘り形はない。

ピ　ッ　ト：礫と土器片が詰まったものが１基。

遺　　物：小規模ながら遺物は多い。須恵器皿Ａ（１）、同皿Ｂ（２～４）、同坏Ａ（５～11他）、黒色土器Ａ坏Ａ（12）、土師器甕Ｃ（14・15）、同小型甕Ｃ（13）、安山岩製の敲石（16）、刀子（17）が出土した。１・２は回転糸切り底で、２は高台状に底部をつくり出し、口縁部近くに「太」と墨書する。３は強く外反した断面平行四辺形状の高台内側に回転糸切り痕が残る転用硯である。須恵器坏Ａは５がやや軟質である他は堅緻～良好な焼成で、全般に器厚が薄く、内面底径は5.4～7.0㎝である。食膳具は須恵器で占められ、黒色土器の比率は１割に満たない。13～15は厚さ３㎜以内に削られる。１・３・４・８・９・17は覆土、14はＰ１、他は床面から出土した。

所　　見：良好な器種構成から９世紀前半の住居跡である。

ＳＢ6045（第199図、ＰＬ24・41・43）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－16・17・21・22（第３検出面）

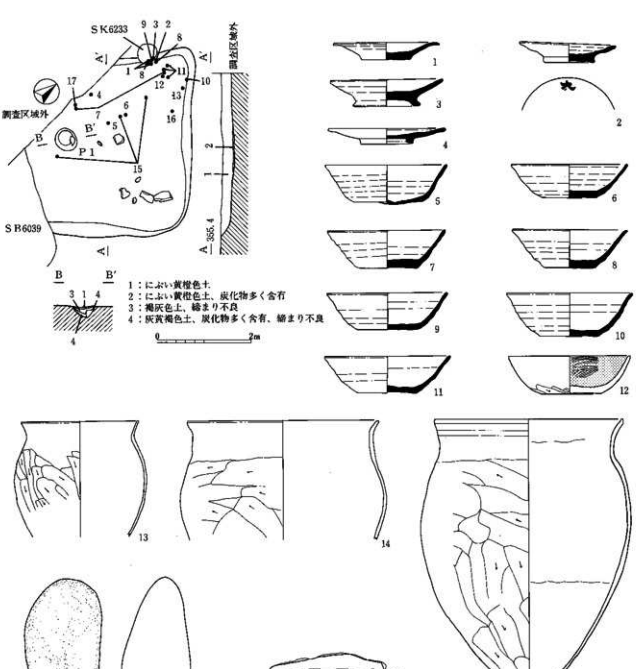
重複関係：ＳＢ6046、ＳＫ6216・6243・6259を切り、ＳＢ6027・6028・6082、ＳＫ6206・6208等に切られる。

形　　状：西コーナーが調査区域外だが、6.6×6.2ｍの隅丸方形である。

覆　　土：ほぼ単層で、Ⅳ層を基調とする自然埋没。

壁　　：Ⅳ層中から掘り込まれ、傾斜して立ち上がる。検出面からの壁高は約30㎝である。

床　　面：中央付近に堅固な箇所がわずかにあったものの、全体としては軟弱で不明確。掘り形は30㎝以内で凹凸がある。

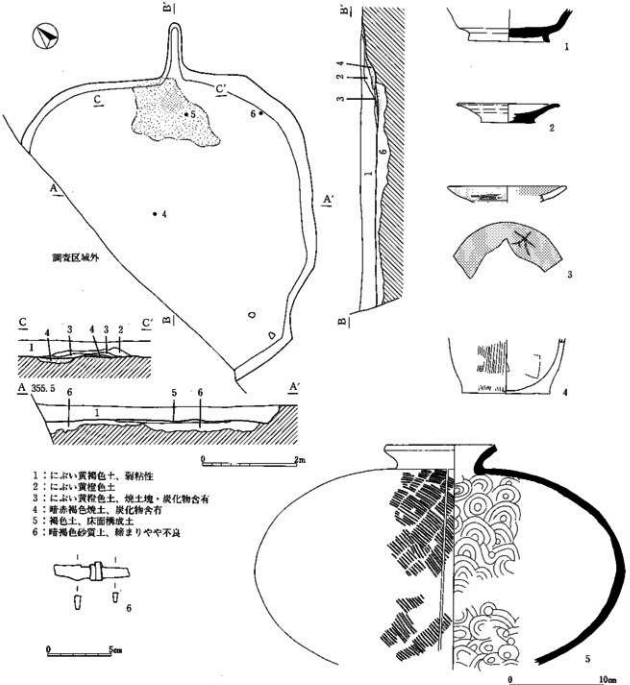


第198図　SB6044

カ マ ド：北東壁中央に位置する。袖は完全に破壊されており、火床と長さ1.1mの煙道が残っている。

遺　　物：須恵器坏B（1）、同皿A（2）、黒色土器B皿B（3）、土師器甕B底部（4）、須恵器横瓶（5）、刀子（6）がある。1は見込み部にカキ目をもつ。2は高台状に底部をつくり出す。3は「太」を刻書する。4・6は床面、5はカマドから出土した。

所　　見：9世紀前半の住居跡と思われる。竪穴のコーナーが不明確で検出ミスか。



第199図　ＳＢ6045

ＳＢ6050（第200図）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－11・12（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6031・6033・6051・6052・6057に切られる。

形　　状：切られて不明だが一辺5.6mの方形と思われる。

覆　　土：Ⅳ層を基調とするとみられる。ほとんど残っていない。

壁・床面：検出時に床面まで露出しており、壁の状況は不明。北コーナー付近は掘り形しか残っていなかったが、他の残存部は貼られていた。掘り形は浅く凹凸がある。

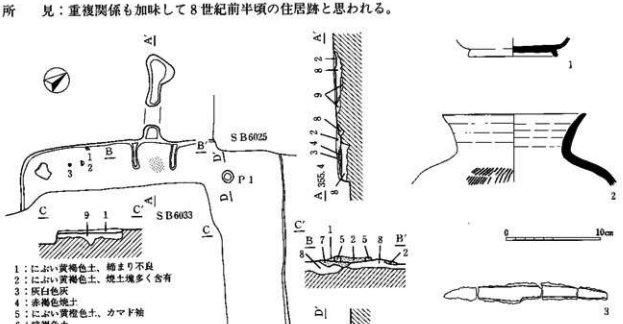
ピ ッ ト：用途不明の小ピット１基。

カ マ ド：北西壁中央に位置し、粘土で構築された袖が残存、煙道が約1.7m伸びる。火床は小さく赤化し

て残る。

遺　物：底部に窯印「×」のある須恵器坏B（1）、同甕（2）、刀子（3）が床面から出土した。

所　見：重複関係も加味して8世紀前半頃の住居跡と思われる。



第200図　SB6050

SB6052（第201図、PL24・34・43）

位　置：6c区、IVA－12・13・17・18（第4検出面）

重複関係：SB6050を切り、SB6031・6033・6053、SD6045、SK6233に切られる。

形　状：東コーナーが調査区域外だが、7.2×7.0mの隅丸方形である。

覆　土：IV層を基調として3分層される。自然埋没である。

壁　：V層を掘り込み、床面との境が不明瞭で、緩やかに立ち上がる。壁高は検出面より32cmを測る。

床　面：貼り床で明確。掘り形はない。

ピット：主柱穴が3基。もう1基は調査区域外である。

遺　物：土器は須恵器坏A（1～8）、同坏B（9～11）、奈良三彩小壺（12）、鉄製品は刀子（13・14）、銅製品は帯金具（15）がある。坏Aの底部調整は1がヘラナデ、2が手持ちヘラ削り、3がヘラオコシのちナデ、4は静止糸切りのち手持ちヘラ削りのちナデ、5～7は内面底径7.2～8.4cmの回転糸切りである。9～11は口径12.2～13.0cm、器高3.2～3.9cmで、中央に凹みをもつ高台の外側が接地する。12は軟質な焼成である。13は全長18.0cm、15は4.8×4.6×0.5cm、41.5gである。4・7～9・11・13～15は床面、12は1層、他は2層の出土である。

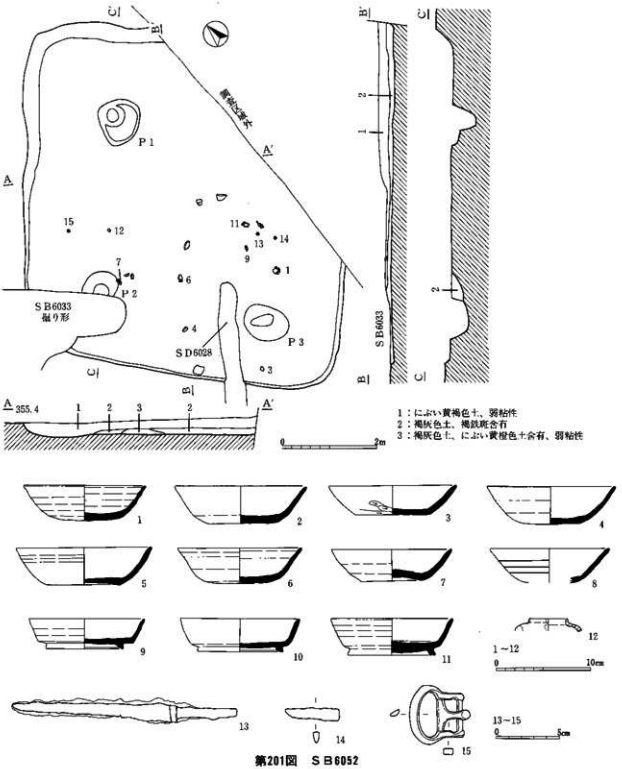
所　見：8世紀後半に近い中頃の住居跡と思われる。12・15の出土から有力者の存在が窺える。

SB6053（第202図、PL34）

位　置：6c区、IVA－13・18（第3検出面）

重複関係：SB6052・6181、SK6233を切り、SD6029に切られる。

形　状：西コーナーを調査したに過ぎず、方形と思われるが調査区域外に拡がり不明。



第201図　ＳＢ6052

覆　　土：炭化物を含有する層を間層または床面にもつ。Ⅳ層を基調とする自然埋没であろう。

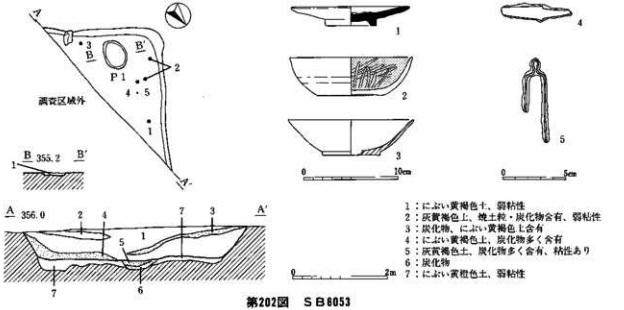
壁　　：Ⅳ層中から掘り込まれ、緩やかに立ち上がる。壁高はⅣ層途中から60cmを測る。

床　　面：堅固な部分は中央付近のみで、全体では軟弱で不明確。最深25cmの凹凸のある掘り形がある。

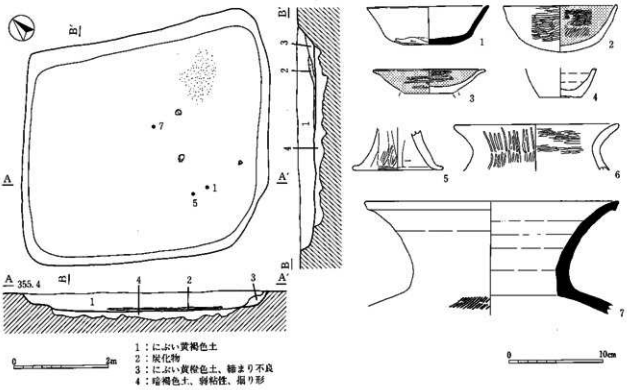
ピ　ッ　ト：コーナー付近にごく浅いものが１基あるが用途は不明である。

遺　　物：須恵器皿Ｂ（1）、黒色土器Ａ坏Ａ（2）が床面、緑釉陶器Ａ類椀（3）が覆土、刀子（4）と鑷子（5）が床面上の同位置から出土した。１はやや軟質、２は底部回転糸切り未調整である。

所　　見：９世紀前半～半ばの住居跡と思われる。



第202図　ＳＢ6053



第203図　ＳＢ6054

ＳＢ6054（第203図、ＰＬ24）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－22・23、ⅣＦ－02・03（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6042、ＳＫ6225を切り、ＳＢ6029に切られる。

形　　状：5.2×5.2mの不整な隅丸方形。

覆　　土：Ⅳ層を基調とし、壁際に三角堆土がある自然埋没である。床面近くに炭化物の薄い層がある。

壁　　：Ⅴ層を掘り込み、緩やかに立ち上がる。壁高は検出面より36cmを測る。

底　　面：貼り床というほどではないが中央付近がやや固い。掘り形は深さ15cm前後で凹凸が激しい。

遺　　物：須恵器坏Ａ（１）、両面ミガキのみで調整され、内面黒色処理された非ロクロ丸底坏（２）、内

外面ミガキ、底部回転ヘラ削り調整の黒色土器B皿B（3）、小型甕Dと思われる回転糸切り底の土師器（4）、外面ヘラ削りのちミガキ調整の同高坏脚部（5）、同甕F（6）、須恵器甕A（7）を図化した。1・5・7は床面、他は覆土から出土した。

所　見：調査時、新旧誤認と覆土酷似のため、不整なプランとして検出され、ＳＢ6042と遺物が混ざった可能性がある。カマドが検出されなかった点、本跡の下部がＳＢ6042の床面付近に一致する点も気になる。遺物は7世紀末～9世紀半ばのものを含む。1・2・5・6はＳＢ6042に帰属するものかもしれない。本跡は9世紀代の竪穴状遺構と考えておきたい。

ＳＢ6055（第204図、ＰＬ24）

位　置：6ｃ区、ⅣＡ－12・16・17（第4検出面）

重複関係：ＳＢ6033に切られる。

形　状：北東壁を切られて失うが、一辺3.3mの方形と考えられる。

覆　土：Ⅳ層を基調とする自然埋没と思われる。単層である。

壁　：Ⅴ層を掘り込みほぼ垂直。壁高は検出面より20cmである。

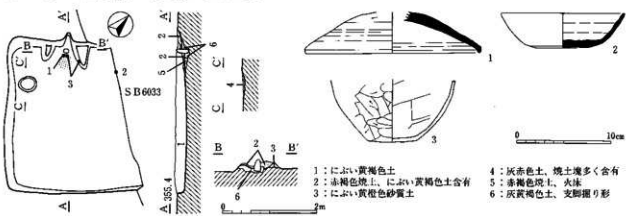
床　面：堅固な箇所が中央付近にみられ、明確である。

ピット：深さ4cmのピットが西コーナー付近に1基ある。カマドの灰溜めか。

カマド：北西壁中央付近に位置し、粘土で構築された袖がわずかに残存。支脚石が火床奥に原位置を保って屹立していた。煙道は15cmの短さで残る。

遺　物：須恵器坏蓋Ｂ（1）、同坏Ａ（2）、外面ヘラ削り、内面ヘラナデ調整の土師器甕底部（3）がある。1は断面三角形の短い口縁端部をもち、天井部が高い。2は底部を手持ちヘラ削りする。1・3はカマド、2は床面から出土した。

所　見：8世紀前半の住居跡と思われる。



第204図　ＳＢ6055

ＳＢ6057（第106図）

位　置：6ｃ区、ⅣＡ－06・11・12（第4検出面）

重複関係：ＳＢ6050を切り、ＳＢ6025、ＳＫ6236・6141に切られる。

形　状：もともとは方形と思われるが不明。西側は調査区域外に出る。東側はＳＢ6025に切られる。検出時点で貼り床が露出していたため壁や覆土は無く、北側の6ｄ区では検出できなかった。

床　面：南コーナー付近に貼り床が残存していたが、それ以外は不明確。

所　見：遺物は皆無で、ＳＢ6050の煙道の上に貼り床を行いＳＢ6025に切られるので、時期は両者の間であるが、両者とも時期が不明確である。8世紀半ば～9世紀半ばという幅でとらえておく。

ＳＢ6058（第205図、ＰＬ25）

位　　置：６ｅ区、ⅡＰ－07・08（第４検出面）

重複関係：ＳＤ6054に切られる。

形　　状：北側、東側とも調査区域外だが、一辺二隅より一辺4.9mの方形と思われる。

覆　　土：基本的には自然埋没の５層の単層である。部分的に焼土・灰・炭化物の互層が観られるが、他の遺構の可能性もある。

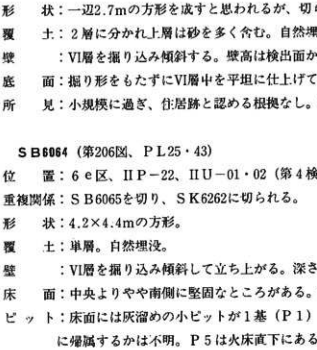
壁　　：Ⅵ層を掘り込んでおり、やや緩やかに立ち上がる。壁高はⅤ・Ⅵ層の層界から20cmを測る。

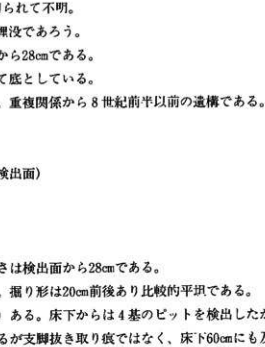
床　　面：固くはないが、ところどころ砂を入れた貼り床が認められ明確。床の貼り替えがあり、床面を２枚もつ。掘り形は32cm以内で深いところと浅いところがあり、細かな回凸はみられない。

ピ　ッ　ト：床下で２基検出し、いずれも柱穴として十分な深さだが、Ｐ１は位置がやや不適当か。

遺　　物：須恵器、黒色土器、土師器の破片が覆土から僅少出土した。円礫が投棄され床面に散在する。

所　　見：住居の形態や主軸方向、覆土のあり方から、７世紀後半～８世紀半ばの住居跡と思われる。





第205図　ＳＢ6058

ＳＢ6063（第108図）

位　　置：６ｅ区、ⅡＰ－17・22（第４検出面）

重複関係：ＳＤ6050に切られる。

形　　状：一辺2.7mの方形を成すと思われるが、切られて不明。

覆　　土：２層に分かれ上層は砂を多く含む。自然埋没であろう。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み傾斜する。壁高は検出面から28cmである。

底　　面：掘り形をもたずにⅥ層中を平坦に仕上げて底としている。

所　　見：小規模に過ぎ、住居跡と認める根拠なし。重複関係から８世紀前半以前の遺構である。

ＳＢ6064（第206図、ＰＬ25・43）

位　　置：６ｅ区、ⅡＰ－22、ⅡＵ－01・02（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6065を切り、ＳＫ6262に切られる。

形　　状：4.2×4.4mの方形。

覆　　土：単層。自然埋没。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み傾斜して立ち上がる。深さは検出面から28cmである。

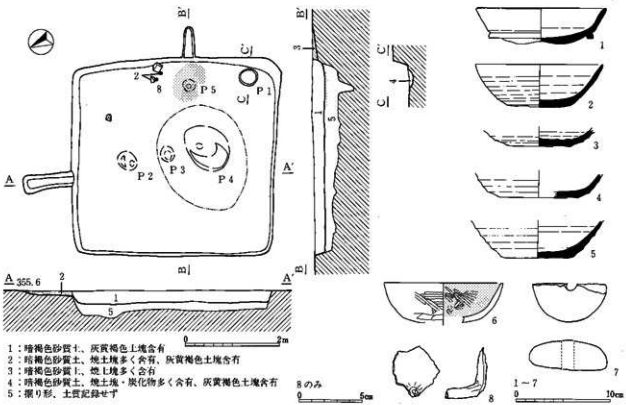
床　　面：中央よりやや南側に堅固なところがある。掘り形は20cm前後あり比較的平坦である。

ピ　ッ　ト：床面には灰溜めの小ピットが１基（Ｐ１）ある。床下からは４基のピットを検出したが、本跡に帰属するかは不明。Ｐ５は火床直下にあるが支脚抜き取り痕ではなく、床下60cmにも及ぶ。

カ マ ド：北壁に1基、東壁に1基あり、北カマドの方が古い。北カマドは約1.0mの煙道のみが残存する。東カマドは長さ0.7mの煙道と火床のみが残存している。東カマド左脇に袖構築材と思われる角礫が出土している。

遺　　物：回転糸切りのち手持ちヘラ削りの底部が下方へ張り出して高台が意味を成さない須恵器坏B（1）、同坏A（2～5）、土師器坏D（6）、土錘質の紡錘車（7）、鏃形鉄製品（8）があり、1・7は床下、2は床面、3～6は覆土から出土した。須恵器坏Aの底部調整は2がヘラオコシのち手持ちヘラ削り、3・5がヘラオコシ、4が回転糸切りである。4の内面底径は8.8cmである。7は径が7.9cm、厚さ3.2cmである。この他の土器片は僅少。

所　　見：8世紀半ばの住居跡と思われる。



第206図　ＳＢ6064

ＳＢ6065（第207図、ＰＬ25・35）

位　　置：6ｅ区、ⅡＰ－22・23、ⅡＵ－02・03（第4検出面）

重複関係：ＳＢ6068を切り、ＳＢ6064、ＳＴ6002に切られる。

形　　状：5.4×5.1mの方形。

覆　　土：単層。自然埋没。

壁　　：Ⅵ層を掘り込み、傾斜して立ち上がる。壁高は検出面より25cmである。

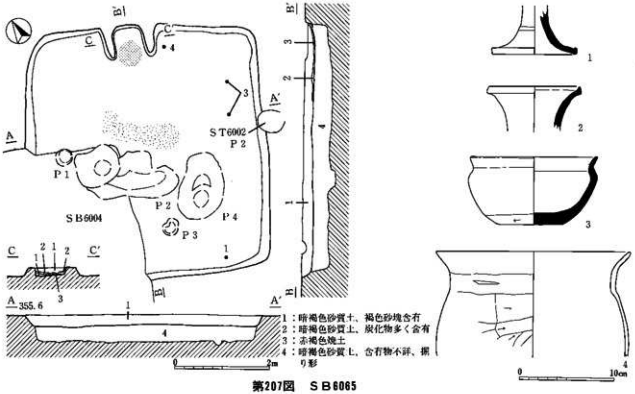
床　　面：貼り床というほどではないが堅固で明確。掘り形は壁際から中央部まで床面下30cm前後と深い。

カ マ ド：北東壁のほぼ中央に1基ある。地山削り出しの袖とよく赤化した火床が残存する。

ピ ッ ト：床下より大小4基を検出したが、掘り形と不可分である。

遺　　物：全般的に少ない。須恵器高坏脚部（1）、同長頸壺A口縁部（2）は覆土、同鉢A（3）、土師器甕C（4）は床面より出土した。

所　　見：坏類が出土しておらず不明だが、8世紀前半～半ばの住居跡と思われる。



第207図　ＳＢ6065

ＳＢ6066（第107図）

位　　置：６ｅ区、ⅡＰ－23、ⅡＵ－03（第４検出面）

形　　状：2.4×2.7mの方形だが、検出時点で貼り床が露出し、掘り形を拾ってプランを決定しており、実際にはもう少し大きかったかもしれない。

覆　　土：単層で自然埋没。検出面では床～床下のみのため調査区東壁で確認した。

壁　　：Ⅴ層を掘り込み、傾斜して立ち上がる。Ⅳ層下10cm前後の深さである。

床　　面：南西側に貼り床が残存するが北過半は掘り形のみとなり不明。掘り形は深さ10cm前後で凹凸がある。

カ マ ド：調査区の東壁に火床が断面でのみ確認された。

遺　　物：須恵器と土師器の破片各１片が床面上にあったのみ。

所　　見：カマド・貼り床があり間違いなく古代の住居跡であるが時期は不明。

ＳＢ6067（第208図）

位　　置：６ｅ区、ⅡＵ－02・03・07・08（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6068を切り、ＳＢ6073に切られる。

形　　状：4.5×4.9mのやや長方形を呈する。

覆　　土：単層、自然埋没である。

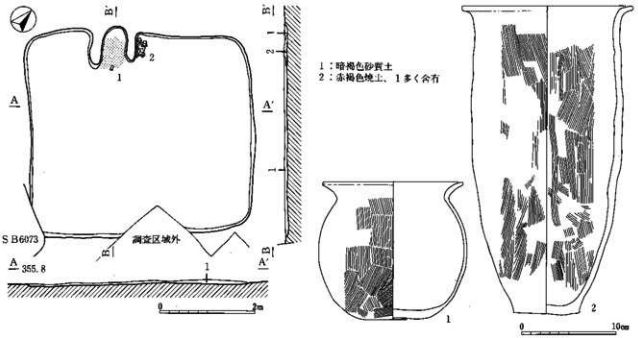
壁　　：Ⅴ層を掘り込み、緩やかに立ち上がる。検出面からの壁高は６～８cmを測る。

床　　面：北西壁側が堅固で明確。貼り床はカマド右脇で明確な以外はっきりしない。掘り形はない。

カ マ ド：北西壁のやや西コーナー寄りに１基ある。地山削り出しの袖とよく赤化した火床が残存する。

遺　　物：火床上から内面ナデ調整の土師器小型甕Ｂ（1）、カマド右袖脇床面から同甕Ｂ（2）が出土。

所　　見：７世紀末～８世紀前半の住居跡と思われる。



第208図　SB6067

SB6069（第106図）

位　　置：6c区、ⅣA－16（第4検出面）

重複関係：SD6044に切られる。

形　　状：煙道のみの検出のため不明。煙道は1.1m伸びる。

煙道覆土：単層。自然堆没。

所　　見：遺物は皆無。主軸の方向、カマド位置の偏りから9世紀代の住居跡と思われる。

SB6070・6071（第209図、PL25）

位　　置：6e区、ⅡU－01・02・06・07（第4検出面）

重複関係：SB6070はSB6068を切り、SB6071・6072に切られる。SB6071はSB6068・6070を切り、SB6072、SK6261に切られる。

形　　状：SB6070は4.8×5.3mの長方形、SB6071は5.5×5.4の方形である。

覆　　土：いずれも単層、自然埋没であろう。

壁　　：いずれもⅤ層中を掘り込み、傾斜して立ち上がる。検出面からの深さはそれぞれ10cm、28cmである。

床　　面：SB6070は掘り形をもたずにⅥ層中を平坦に仕上げて床としている。SB6071は貼り床で堅固、掘り形は床下10cm前後で凹凸があるが、SB6070の床までは到達していない。

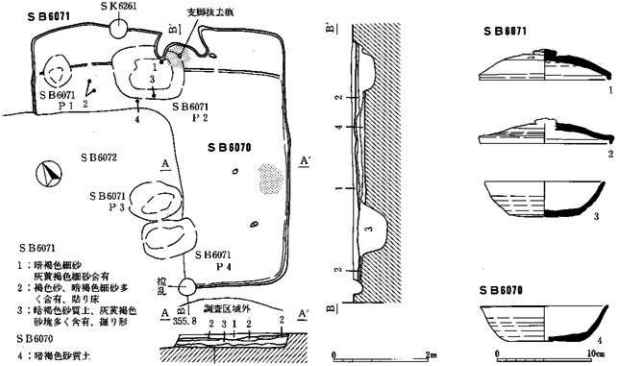
ピ　ッ　ト：SB6071は床下から土坑を4基検出したが、帰属性は不明。

カ　マ　ド：SB6070では切られて不明。SB6071では北壁と東壁のほぼ中央に位置する。東カマドは火床のみが残存。北カマドは東壁からの作り替えで、地山を削り出した袖と火床が残存しており、支脚の抜き取り痕も観察できた。

遺　　物：SB6070では須恵器坏A（4）が床面から出土した。底部回転糸切りである。この他の遺物は少ない。SB6071では須恵器坏蓋B（1・2）、同坏A（3）があり、1はカマド、2は床面、3は床下P2から出土した。1・2の口縁端部は「く」の字状に屈曲、1はつまみの脇に回転糸切

り痕がある。3はやや軟質で、底部はヘラオコシである。

所　見：ＳＢ6070は8世紀半ば、ＳＢ6071は8世紀半ば～後半の住居跡と思われる。両者の床面の比高は20cm強というかなりの差があり、ＳＢ6070の覆土に人為的な埋没様相が認められないことから、増築や建て替えではなく、埋没しきらないＳＢ6070の窪みを利用してＳＢ6071が構築されたと思われる。



第209図　ＳＢ6070・6071

ＳＢ6072（第210図、ＰＬ25）

位　置：6ｅ区、ⅡＵ－01・02・06・07（第4検出面）

重複関係：ＳＢ6070・6071を切り、ＳＫ6263に切られる。

形　状：調査区域外に広がり不明だが、カマドや柱穴の位置から推定して一辺5ｍ強の方形であろう。

覆　土：単層。基調土と異なる含有砂塊があり、人為埋没と思われる。

壁　：Ｖ層を掘り込み垂直に近い。壁高は検出面から25cm前後である。

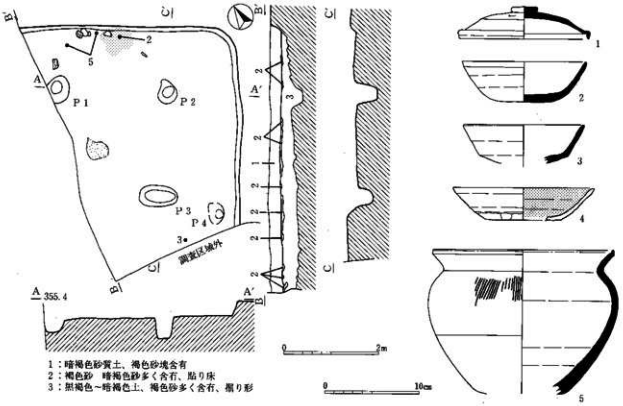
床　面：掘り形を埋め戻した後、ところどころ砂を貼って床としている。掘り形は凹凸があり、床下14～40cmで全般的に深い。

ピット：床下調査で3基検出され、位置や深さから主柱穴とみられる。1基は調査区域外であろう。

カマド：北壁中央に位置する。袖は完全に取り払われており、火床のみ残る。袖石とみられる礫の一部が火床左脇に散在している。

遺　物：須恵器坏蓋Ｂ（1）、同坏Ａ（2・3）、黒色土器Ａ坏Ａ（4）、須恵器鉢Ａ（5）を図化した。2の底部はヘラオコシのちナデ、3はロクロ調整のみである。4はミガキ無しで黒色処理され、底部は手持ちヘラ削りされる。5は胴下半を回転ヘラ削りする。3は床面、5は覆土から床面、他は覆土より出土した。

所　見：8世紀前半～中頃の住居跡と思われる。該期のこの規模の住居跡で主柱穴をもつ例は珍しい。



第210図　ＳＢ6072

ＳＢ6073（第211図、ＰＬ26）

位　　置：６ｅ区、ⅡＵ－07・08（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6074を切り、ＳＫ6264に切られる。

形　　状：3.3×3.5mの方形である。

覆　　土：単層。基調土と異なる含有土塊を含み人為埋没と思われる。

壁　　：Ⅳ層中から掘り込み、やや緩やかに立ち上がる。壁高は検出面より18cmを測る。

床　　面：軟弱。掘り形をもたずにⅥ層中を平坦に仕上げて床としている。

カ マ ド：南東壁ほぼ中央に位置し、地山削り出しの袖と火床が残存する。火床はよく焼けている。

遺　　物：須恵器坏Ａ（１）、黒色土器Ａ坏Ａ（２）はカマド左脇の床面、土師器甕Ｃ（３）は火床上から出土した。回転糸切り底の１の内面底径は6.4cmである。

所　　見：９世紀前半の住居跡と思われる。

ＳＢ6075（第107図）

位　　置：６ｅ区、ⅡＵ－07（第４検出面）

重複関係：調査区域内ではなし。

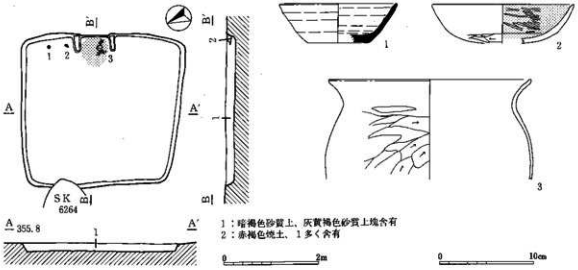
形　　状：大部分が調査区域外に拡がり不明。

覆　　土：２分層される。上層は基調土と異なる含有土塊があり、締まりが悪く人為埋没と思われる。

壁　　：Ⅴ層を掘り込み急な傾斜である。壁高は検出面から18cmを測る。

床　　面：掘り形を埋め戻しただけであるが堅固である。

所　　見：住居跡と思われるが、遺物は皆無で時期不明。



第211図　ＳＢ6073

ＳＢ6079（第212図、ＰＬ37）

位　　置：６ｃ区、ⅡＵ－22・23（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6014・6022を切る。

形　　状：2.5×2.1mのやや不整な方形。

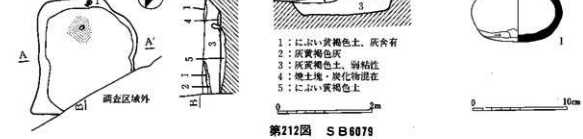
覆　　土：Ⅳ層を基調とする自然埋没と思われる。３分層されるが上２層は薄く、灰含有層および灰層であり、埋没の最終段階の所産であろう。

壁・床面：Ⅴ層を掘り込み緩やか。壁高は検出面より36cmである。床は軟弱。

カ マ ド：北西壁中央付近に位置し、支脚石が火床に原位置を保って屹立していた。

遺　　物：須恵器短頸壺Ｂ（１）が２層から出土した。底部は手持ちヘラ削りされている。

所　　見：８世紀代の矮小な住居跡。特殊機能、他遺構との関連、検出プランの信憑性等、不明点が多い。



第212図　ＳＢ6079

ＳＢ6080（第213図）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－12・13・17（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6031・6033に切られる。

形　　状：一辺5.9mの方形と考えられる。南隅がつかめなかった。

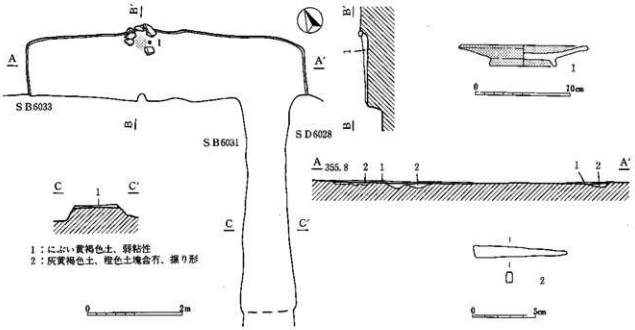
覆　　土：Ⅳ層を基調とすると思われるがほとんど残っていなかった。

壁・床面：検出時点で床面～床下のため不明。掘り形は壁際のみにみられ、浅い。

カ マ ド：北東壁中央よりやや北コーナー寄りに位置し、袖石とごく小さな火床が残存する。

遺　　物：カマド内より黒色土器Ｂ皿Ｂ（１）、覆土から刀子（２）が出土した。

所　　見：重複関係も加味して９世紀半ば頃の住居跡と思われる。



第213図　ＳＢ6080

ＳＢ6081（第214図、ＰＬ37）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－12・13・17・18（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6053、ＳＤ6028、ＳＫ6189に切られる。

形　　状：大部分を切られており不明。

覆　　土：Ⅳ層を基調とする自然埋没と思われる。

壁・床面：40cm強しか残っていないが、その部分では緩やかに立ち上がっている。床は軟弱。

遺　　物：須恵器皿Ｂ（１・２）が床面より出土した。いずれも堅緻な焼成である。覆土より緑釉の破片が２片出土している。

所　　見：住居跡と思われるが不明。９世紀前半の遺構である。

第214図　ＳＢ6081

ＳＢ6082（第215図、ＰＬ37）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－21（第３検出面）

形　　状：一辺3.9mの方形と思われるが、西過半が調査区域外に広がり不明。

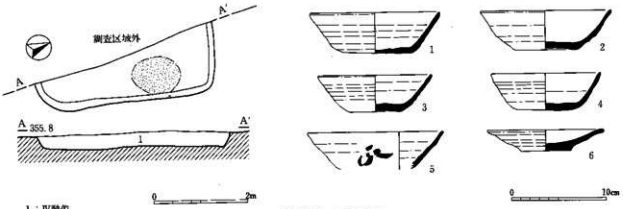
覆　　土：Ⅳ層そのものが自然埋没する。

壁　　：Ⅴ層を掘り込み、傾斜して立ち上がる。

床　　面：軟弱だが炭化物の広がっている部分を床とした。

遺　　物：須恵器坏Ａ（１～５）、同皿Ａ（６）が覆土中より出土した。２～４は回転糸切り底で内面底径は5.6～6.0cmである。５はやや軟質で「夫」が墨書される。

所　　見：坏Ａの内面底径、須恵器のみの構成から９世紀前半の住居跡と思われる。１は紛れ込みである。



1：Ⅳ層掘

第215図　ＳＢ6082

ＳＢ6083（第118図）

位　　置：６ｂ区、ⅣＦ－16・17（第１検出面）

重複関係：なし。

形　　状：表土剝ぎの際、重機で半分を壊してしまったが、推定で長径4.1m、短径２m前後の不整な長円形を成すと思われる。

覆　　土：洪水砂とは異相の砂のみが自然埋没する。

壁・底面：Ⅲ層中に構築されている。壁は底面との区別がつかない状態でだらだらと立ち上がる。底面から周縁部まで粘土が貼られ、それは中央で10cm程度、周縁部で４cm程度の厚さである。

所　　見：洪水砂中に粘土を貼っていることから、水が染み込まないようにしたもの、即ち水を蓄えるような施設であったと考えられる。遺物は皆無。

(2) 掘立柱建物跡と柱穴列

すべて第４検出面で検出され、Ⅴ層を掘り込んでいる。いずれも時期を明らかにすることができない。

ＳＴ6001（第216図、ＰＬ26）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－21・22、ⅣＦ－01・02　　重複関係：ＳＢ6039・6042・6045に切られる。

形　　態：２間以上×２間以上、梁桁不明　　規　　模：4.4m以上×4.5m以上

面　　積：17.6㎡以上　　棟　　軸：Ｎ－42°－Ｗ、またはＥ－42°－Ｎ

柱　　間：東西列2.1～2.2m、南北列2.0～2.5m　　柱　　穴：円形。断面タライ状。深さ26～37cm

覆　　土：Ⅳ層を基調とする。自然埋没か。　　遺　　物：土師器と須恵器の破片が１片ずつ出土。

所　　見：重複関係から８世紀前半以前の建物跡ということになる。

ＳＴ6002（第217図、ＰＬ26）

位　　置：６ｅ区、ⅡＰ－23、ⅡＵ－02・03　　重複関係：ＳＢ6065を切る。

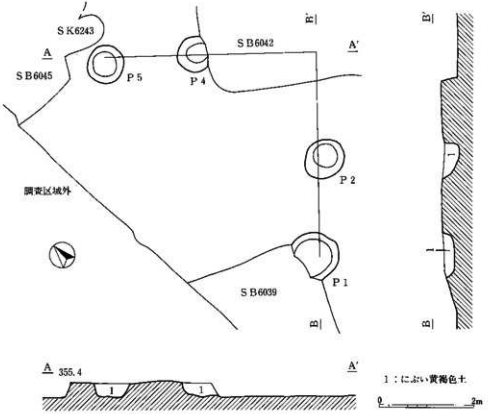
形　　態：２間以上×１間以上、調査区域外のため梁桁不明。

規　　模：5.7m以上×3.9m以上　　面　　積：22.2㎡以上

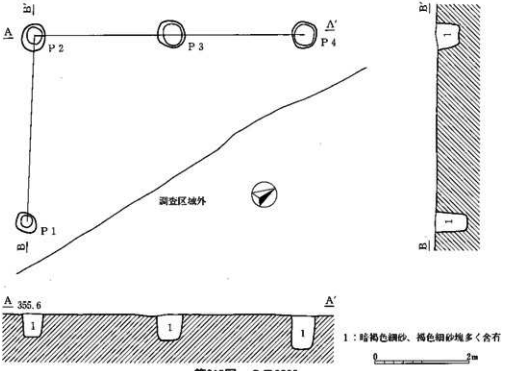
棟　　軸：Ｎ－33°－Ｅ、またはＷ－33°－Ｎ　　柱　　間：東西列3.9m、南北列2.8～2.9m

柱　　穴：円形。断面Ｕの字状。深さ49～69cm　　覆　　土：単層。人為埋没か。

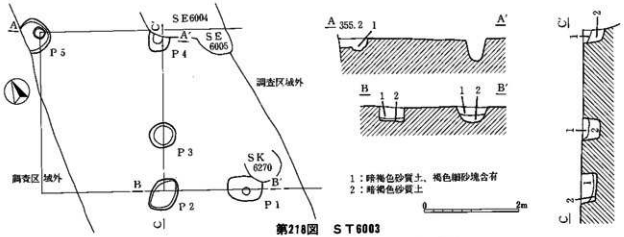
所　　見：遺物は皆無だが重複関係から８世紀前半以降の建物跡である。



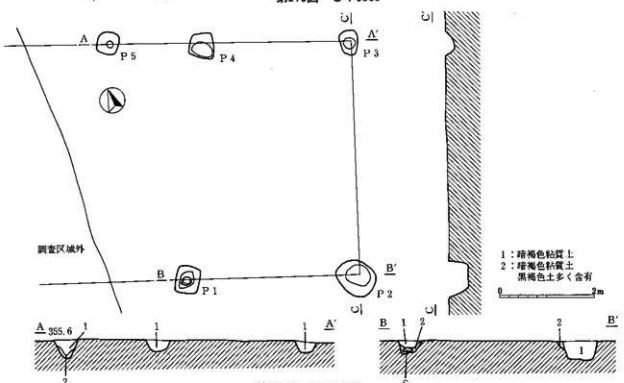
第216図　ＳＴ6001



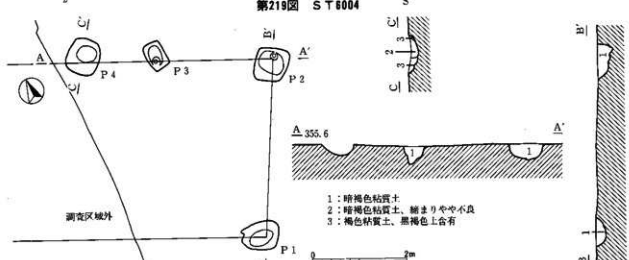
第217図　ＳＴ6002



第218図　ＳＴ6003



第219図　ＳＴ6004



第220図　ＳＴ6005

ＳＴ6003（第218図、ＰＬ27）

位　置：６ｅ区、ⅡＫ－12・17　　重複関係：ＳＥ6004、ＳＫ6270に切られる。

形　態：梁行２間×桁行２間以上、調査区域外のため桁行不明。

規　模：梁行3.4m×桁行4.3m以上　　面　積：14.6㎡以上

棟　軸：Ｗ－23°－Ｎ　　柱　間：東西列1.8～2.5m、南北列1.3～1.9m

柱　穴：Ｐ３・Ｐ５は円形、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４は長円形または隅丸方形を呈する。断面形はＵの字状を成し、深さは26～45㎝である。　　柱　痕：Ｐ５に底部痕跡のみあり。径20㎝

覆　土：Ｐ５は単層、他は２分層される。人為埋没か。

所　見：ⅡＫ区はⅤ層以上が攪乱され、遺構がどこから掘り込まれているのか判らなくなっている。遺物も皆無であり時期不明。

ＳＴ6004（第219図、ＰＬ27）

位　置：６ｄ区、ⅣＡ－01・02・07　　重複関係：不明。柱穴の直接の重複はない。

形　態：梁行１間×桁行２間以上、調査区域外のため桁行不明。

規　模：梁行5.0m×桁行5.1m以上　　面　積：25.5㎡以上

棟　軸：Ｗ－22°－Ｎ　　柱　間：東西列1.9～3.7m、南北列5.0m

柱　穴：Ｐ２は円形、他は方形～隅丸方形を呈する。断面形は開放気味のＵの字状で、深さは20～36㎝。Ｐ１は底部付近に厚板状の角礫が入れられている。

覆　土：Ｐ３・Ｐ４は単層。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ５は２分層されるが単層に近い。自然埋没か。

遺　物：須恵器・黒色土器・土師器の破片が、Ｐ１から３片、Ｐ２から４片、Ｐ５から２片出土している。図化できるものはなく、混入と思われる。

所　見：ＳＫ6088・6124を柱穴にもつ別の棟と併存した可能性がある。８世紀後半以降の建物跡と思われるが不明。ＳＴ6005と棟軸を全く同じくし、近い場所を選地している。建て替え関係がありか。

ＳＴ6005（第220図、ＰＬ27）

位　置：６ｄ区、ⅡＵ－21、ⅣＡ－01・02　　重複関係：不明。柱穴の直接の重複はない。

形　態：梁行１間×桁行２間以上、調査区域外のため桁行不明。

規　模：梁行3.8m×桁行4.0m以上　　面　積：15.2㎡以上

棟　軸：Ｗ－22°－Ｎ　　柱　間：東西列1.5～2.5m、南北列3.8m

柱　穴：Ｐ３は長方形、他は隅丸の方形～長方形を呈する。断面形はＰ１・Ｐ４が丸底状、Ｐ２・Ｐ３がＵの字状を成す。深さは22～38㎝である。

柱　痕：Ｐ４の２層が相当する。またＰ２・Ｐ３には底部痕跡が認められる。径はＰ２・Ｐ３が20㎝弱、Ｐ４が30㎝強であるが、Ｐ４は抜き取り後の埋没とも考えられ、径が大きめなっていると思われる。

遺　物：須恵器・黒色土器・土師器の破片がＰ１から３片、Ｐ３から２片出土した。図化できるものはなく、埋没時混入と思われる。

所　見：柱穴の形状や軸方向から考えて、ＳＡ6002と併存した可能性がある。８世紀後半以降の建物跡と思われるが不明。位置が一部重複し、棟軸方向が一致するＳＴ6004と建て替え関係が想定される。

ＳＡ6001（第221図、ＰＬ27）

位　置：6ｄ区、ⅡＵ－12・17・18　　重複関係：ＳＤ6015を切る。

形　態：柱穴の平面形は円形～不整形を呈し、Ｐ１は丸底状、Ｐ２はＵの字状、Ｐ３はＶの字状の断面形を成し、検出面からの深さはＰ１が24cm、Ｐ２・Ｐ３は36cmである。柱間距離は2.0m、全長は4.0mである。柱列軸はＷ－43°－Ｎ。

覆　土：いずれも単層で、Ｐ１は自然埋没と思われる。

遺　物：須恵器・黒色土器・土師器の破片がＰ１～Ｐ３で６片出土した。埋没時混入と思われる。

所　見：柱痕は認められないが、本跡を桁行にもつ掘立柱建物跡が調査区域外に展開している可能性が大いにある。８世紀後半以降の建物跡と思われる。

ＳＡ6002（第222図、ＰＬ27）

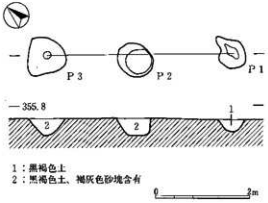
位　置：6ｄ区、ⅣＡ－02　　重複関係：ＳＫ6134・6188を切る。

形　態：柱穴の平面形は、Ｐ３が顕著な長方形を成し、他のものもやや不整だが隅丸の方形か長方形を基本とすると思われる。断面形はＰ１～Ｐ３がＵの字状を成し、Ｐ４が丸底状だが攪乱を受けて不明である。検出面からの深さは17～45cmを測る。柱間距離は1.4～1.6mで、全長は4.4mである。柱列軸はＮ－34°－Ｅ。

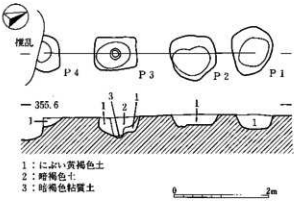
覆　土：Ⅳ層を基調とする。Ｐ３には基調土に挟まれて柱痕がある。

遺　物：須恵器・黒色土器・土師器の破片がＰ２～Ｐ４に２片ずつあったが、埋没時混入であろう。

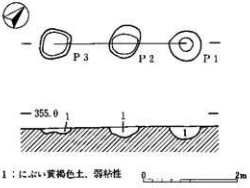
所　見：本跡に対応する柱列は検出できず、建物跡の体を成さなかったが、ＳＴ6005と併存した可能性が想定できる。８世紀後半以降の遺構と思われる。



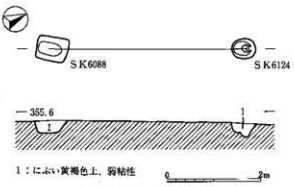
第221図　ＳＡ6001



第222図　ＳＡ6002



第223図　ＳＡ6003



第224図　ＳＫ6088・6124

ＳＡ6003（第223図）

位　置：６ｃ区、ⅣＡ－17・18　　重複関係：なし。

形　態：柱穴の平面形は円形～隅丸方形を基本とし、断面形は丸底状からタライ状を成す。検出面からの深さは14～29㎝である。柱間距離は1.3～1.4ｍである。柱列軸はＮ－39°－Ｅ。

覆　土：いずれも単層でⅣ層を基調とする。自然埋没か。

所　見：本跡を梁行にもつ掘立柱建物跡が東側の調査区域外に展開している可能性が大いにある。

ＳＫ6088・6124（第224図）

位　置：６ｄ区、ⅡＵ－21　　重複関係：ＳＢ6015を切る。

形　態：ＳＫ6088は長方形、ＳＫ6124は円形を呈する。断面形はいずれもＵの字状を成し、検出面からの深さは28～30㎝である。柱間距離は4.3ｍ、両者を結んだ軸はＮ－22°－Ｅである。ＳＫ6124に柱痕とみられる底部痕跡がある。

覆　土：いずれも単層でⅣ層を基調とする。自然埋没か。

遺　物：ＳＫ6124から土師器片１片が出土し、埋没時混入と思われる。

所　見：２基だけなのでＳＡとはしなかったが、ＳＫ6088の形状、ＳＫ6124の柱痕からみて相関する柱穴であることは間違いなく、２基を梁行にもつ掘立柱建物跡が西側の調査区域外に展開する可能性が大いにある。ＳＴ6004かＳＴ6005と併存したものか。８世紀後半以降の遺構と思われる。

(3) 溝跡と土堤

溝跡は全部で45条を検出している。このうち水田に関連するものが10条あり、これらは第４節で触れる。溝幅は１ｍ前後かそれ以下の範疇にあり、極端に幅広いものや深いものはない。また主に、北西一南東方向のものと、それに直交する北東一南西方向のものの２種類の方向のものがほとんどで、これらは竪穴住居跡や建物跡の主軸方向、または水田の区画方向と同一または直交する関係にあり、土地区画的な様相をもつものが多い。この２種類の方向以外の方向をもつものはごくわずかである。土堤は６ｂ区と６ｄ区に１条ずつあり、いずれもこの２種類の方向に則っている。６ｂ区のものは水田の畦畔と同時につくられたと考えられるので第４節で詳述する。

ここでは、６ｄ区の１条の土堤とその両脇の３条の溝、および出土遺物のある特異な溝５条だけを個別に記す。

ＳＣ6008、ＳＤ6016～6018（第225図、ＰＬ38・41）

位　置：ⅡＵ－22・23、ⅣＡ－01～03・06・07（第２・３検出面）

重複関係：ＳＢ6011、ＳＫ6067・6068・6109・6122を切り、ＳＫ6069・6120・6140に切られる。

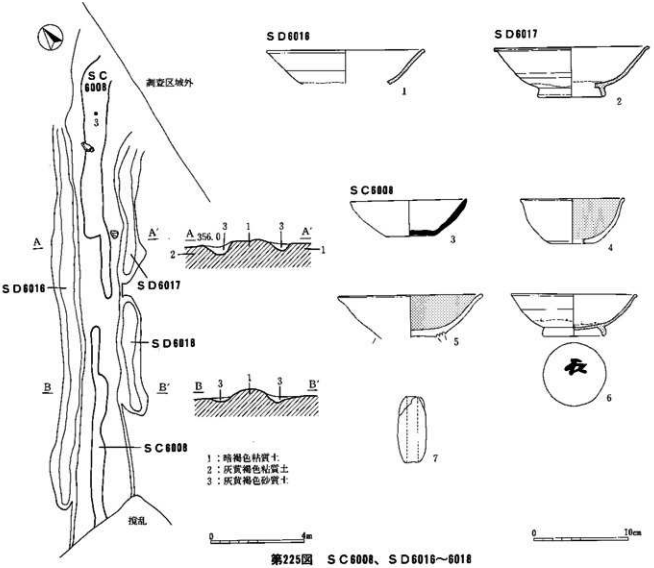
形　状：ＳＣ6008は基部の幅2.0ｍ前後、頂部の幅1.2ｍ以内、高さ0.2ｍ前後の帯状の高まりで、北東一南西方向に伸び、北東側は調査区域外に続く。南西側は調査上のミスで破壊してしまったが、調査区域内の残存長で23.0ｍを確認している。ＳＤ6016はＳＣ6008の北西側、ＳＤ6017・6018は南東側に並走する溝跡で、いずれも幅1.2ｍ以内、ＳＣ6008頂部との比高50㎝前後である。

埋没状況：ＳＣ6008は10㎝以内の洪水砂に覆われている。ＳＤ6016～6018はⅢ層よりも粘性をおびた砂質土が単層で自然埋没している。

遺　物：ＳＤ6016・6017の覆土中から、光ケ丘窯式の灰釉陶器椀（１・２）がそれぞれ出土した。ＳＣ6008の内部からは須恵器坏Ａ（３）、黒色土器Ａ坏Ａ（４）、同椀（５）、光ケ丘窯式の灰釉陶器

椀（6）、土師質の土鍾（7）が出土した。3は回転糸切り底、内面底径5.6cmで、黒斑のある軟質的須恵器である。4は内面放射状に磨かれ、底部は回転ヘラ削りされる。口径11.0cm、器高4.7cmと口径に比して器高が高い。5は高台の欠損部を研磨して坏A化している。6は底部に墨書される。「五」か。

所　見：ＳＤ6016～6018を掘った土で、ＳＣ6008を盛ったものと考えられる。洪水砂により埋没しているので第2検出面で検出されたが、基部は第3検出面まで降り、集落域の中に存していることが明らかとなった。畦畔とも考えたが両側とも住居跡群が展開しており、なおかつ洪水砂を被った元地表面が6ｂ区の水田面より90cm、6ｅ区の水田面より15cmほど高いことから水回しが不可能と思われる。これらのことから集落内部を区画する土堤と考えられる。本跡の南東側には、礎石と壁際列石をもつ住居跡をはじめとする規模の大きい住居跡、溝跡が展開し、緑釉陶器・灰釉陶器や「夫」が墨書された土器を多数出土し、北西側には緑釉・灰釉陶器、墨書土器をもたない小規模住居跡が散在している。階層差による境界的色彩が濃厚に窺われる。本跡は9世紀半ば頃に構築され、9世紀後半まで存続し、洪水により埋没したものと考えられる。



第225図　ＳＣ6008、ＳＤ6016～6018

ＳＤ6028（第226図、ＰＬ27・37・40）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－12・13・17（第３検出面）

重複関係：ＳＢ6046・6052・6080・6081、ＳＫ6233を切る。

形　　状：全長は11.9m、幅約1.0mで、北東端から２ｍの地点で段がついて更に深くなる。浅い部分は断面開放気味のＵの字状で深さ60cm、これを除く一段下がった大部分はＶの字状の断面形を成し、深さは80cm前後である。北東―南西方向にほぼ直線状である。

覆　　土：高い部分では単層、深い部分では３分層されるが、基調土は同一で自然埋没であろう。

遺　　物：覆土中に極めて多い。須恵器坏蓋Ｂ（１）、同坏Ａ（２～６）、同皿Ａ（７）、同皿Ｂ（８・９）、黒色土器Ａ坏Ａ（10～12）、黒色土器Ｂ皿Ｂ（13）、灰釉陶器壺蓋Ａ（14）、緑釉陶器Ａ類椀（15）、須恵質の土錘（16）、「夫」が墨書された須恵器片（17･18）、同黒色土器Ａ坏Ａ片（19）など多様なものがある。須恵器はいずれも焼成は堅緻である。須恵器坏Ａの底部は２が回転ヘラ削り、他は回転糸切りで、糸切り底の内面底径は5.6～6.8cmである。８は硯に転用されている。黒色土器Ａ坏Ａは、内面のミガキは方向がやや無秩序だがよく磨かれ、底部は10・11が回転ヘラ削り、12が手持ちヘラ削りされる。13は内外面とも精緻に磨かれ、底部には「矣」と刻書されている。14・15は覆土上層、他は下層で出土している。

所　　見：出土遺物から９世紀前半～中頃に所属する、集落内の土地区画的な溝と思われる。

ＳＤ6030（第227図、ＰＬ37）

位　　置：６ｃ区、ⅣＡ－11（第３検出面）

重複関係：ＳＫ6182を切り、ＳＢ6032、ＳＫ6181に切られる。

形　　状：調査区域内における全長6.5m、全幅が残る北東端のわずかな部分の幅1.6m、検出面からの深さは最深20cmで、底部からは極めて緩やかに立ち上がる。北東―南西方向に走る。

覆　　土：２層に分かれ、上層は自然埋没と思われる。下層は灰が堆積している。

遺　　物：須恵器坏Ａ（１・２）、同皿Ｂ（３）、土師器小型甕（４）、黒色土器Ｂと灰釉陶器の破片が２層より出土した。１・２とも回転糸切り底で、内面底径は6.6cmと5.2cmである。

所　　見：９世紀前半頃の溝と考えられる。不定形で底面に灰が捨てられており、性格は不明である。

ＳＤ6033（第228図、ＰＬ37）

位　　置：６ｃ区、ⅣＦ－07・08・11・12（第３検出面）

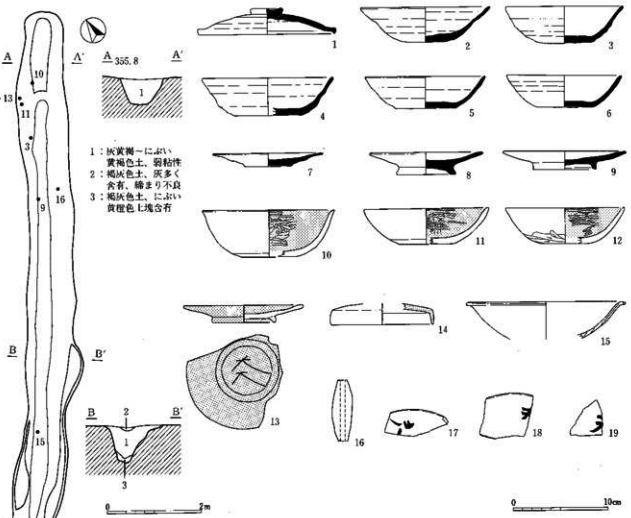
重複関係：ＳＢ6036・6038・6040・6041、ＳＫ6277を切り、ＳＫ6232に切られる。

形　　状：幅1.5m以内、調査区域内での全長17.7m、検出面からの深さ約40cmを測る。断面形は丸底状である。北東―南西方向に直線的である。

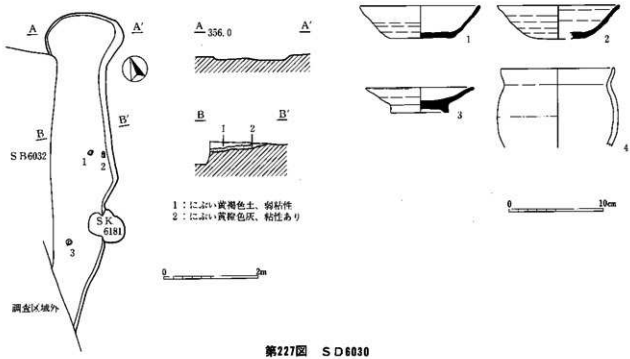
覆　　土：２分層される。自然埋没である。

遺　　物：覆土中に多い。須恵器坏Ａ（１）、黒色土器Ａ坏Ａ（２）、黒色土器Ｂ皿Ｂ（３）、灰釉陶器椀底部（４）、緑釉陶器Ａ類皿底部（５）、「夫」が墨書された黒色土器Ａ坏Ａ片（６）、土師質の土錘（７）、須恵器短頸壺Ａ（８）を掲載した。１は底部回転糸切りで内面底径6.0cm、やや軟質である。２は内面口唇部のみ横方向のミガキがみられ、底部は手持ちヘラ削りされる。３は内外面とも横ミガキされ、底部中央に回転糸切り痕が残る。４は光ケ丘窯式である。

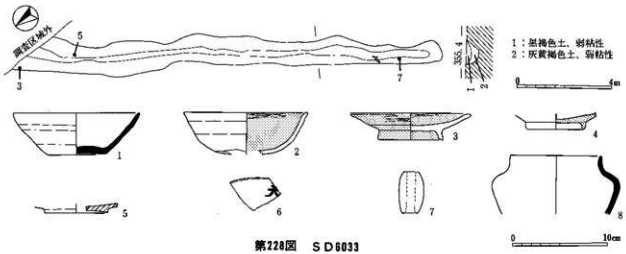
所　　見：９世紀後半の溝と考えられる。該期の住居跡の主軸方向やＳＤ6028・6036等と同一方向にあり、土地の区画的な溝と考えられる。



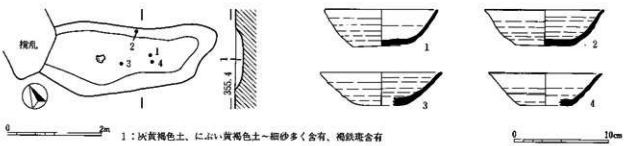
第226図　ＳＤ6028



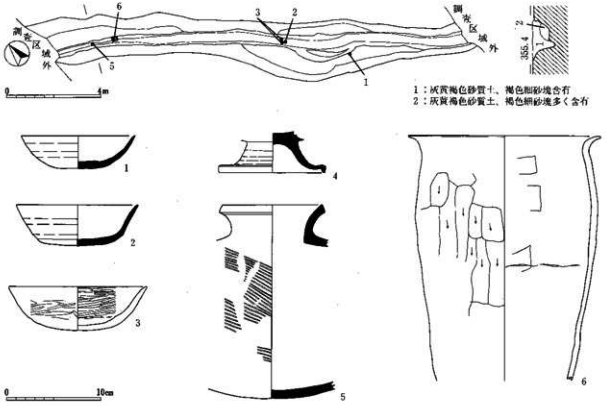
第227図　ＳＤ6030



第228図　ＳＤ6033



第229図　ＳＤ6049



第230図　ＳＤ6050

ＳＤ6049（第229図、ＰＬ37）

位　置：６ｅ区、ⅡＰ－12・17（第４検出面）　重複関係：ＮＲ6001を切る。

形　状：最大幅1.5m、撹乱で失った部分を除く全長3.7m、検出面からの深さは15cmを測る。断面形は弓状である。溝跡というよりも不整な細長い土坑である。

覆　土：単層で人為埋没である。

遺　物：須恵器坏Ａ（１～４）が覆土中から出土した。すべて回転糸切り底で、内面底径は5.0～6.0cmで、焼成は堅緻である。

所　見：覆土のあり方から、不要物を投棄して埋めた遺構と思われる。須恵器坏Ａの質と内面底径から、また、須恵器に軟質のものがなく黒色土器も含まないことから、９世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＤ6050（第230図、ＰＬ27・37）

位　置：６ｅ区、ⅡＰ－17・18・22・23（第４検出面）

重複関係：ＳＢ6063・6078、ＮＲ6002・6003、ＳＫ6225を切る。

形　状：平均幅1.6m、調査区域内における全長19.3m、検出面からの深さ最深117cmを測る。断面形は漏斗状を成す。北西－南方向にほぼ直線状である。

覆　土：２層に分かれる。１層は２度めの掘削後に自然埋没したもの、２層は１度めの掘削で自然埋没したものと考えられる。

遺　物：須恵器坏Ａ（１・２）と内外面ミガキ調整、丸底の土師器坏（３）、須恵器蓋（４）、同横瓶（５）、外面ヘラ削り、内面ヘラナデ調整の土師器長胴甕（６）が出土した。１～４は覆土の上部、５・６は溝の底部付近から出土した。１は底部回転糸切り、２は底部ヘラオコシのちナデ調整である。

所　見：８世紀前半に掘削された溝と考えられる。２度にわたって掘削されており、９世紀前半と思われる土器１が上層から出土し、調査区東壁で平安水田下部のⅣ層下面まで立ち上がっており、９世紀前半頃が埋没の終末段階か。さらに７区のＳＤ7001・7003と同一の溝と考えられ、この場合全長30mにおよび一直線で深く掘削されており、直交方向のＳＤ6035と共に集落全体を方形に取り囲む区画溝と考えられる。

(4)　土坑

６区全体で206基の土坑を検出した。

ここでは、規模・形状・出土遺物などから特異なもの８基だけを個別に記す。

ＳＫ6009（第231図、ＰＬ27）

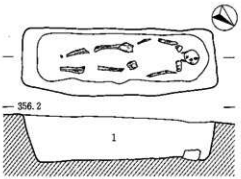
位　置：６ｄ区、ⅡＵ－22（第１検出面）　重複関係：なし。

形　状：長軸205cm、短軸70cmの長方形で、最深部は検出面より50cmで、断面形は箱形を成す。

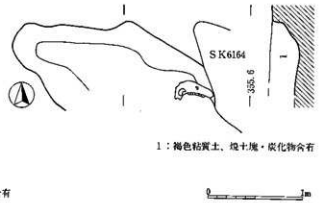
覆　土：Ⅲ層を掘り込む。単層で、人為的に埋め戻されている。

遺　物：人骨は頭部を北西にして伸展葬されている。供献された遺物はない。須恵器・黒色土器・土師器各１片が出土した。紛れ込みである。

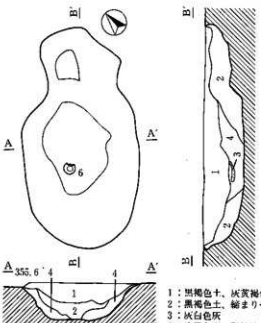
所　見：９世紀後半以降の洪水後の土坑墓である。人骨の鑑定結果は付章を参照されたい。

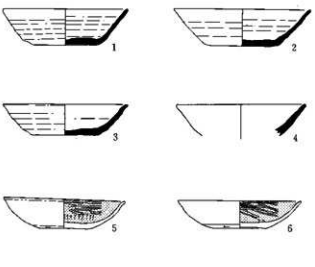


第231図　ＳＫ6009

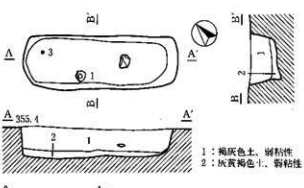


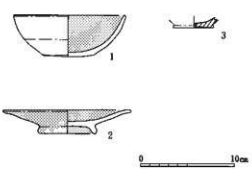
第232図　ＳＫ6137





第233図　ＳＫ6063





第234図　ＳＫ6122

ＳＫ6063（第233図、ＰＬ27・37）

位　置：６ｄ区、ⅡＵ－17（第３検出面）　　重複関係：なし。

形　状：長軸235cm、短軸120cmで、長円形の土坑の北東端に坑底より一段高い突出部が付属した形状を成す。検出面と坑底との比高は40cmである。坑底は比較的平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆　土：レンズ状の堆積状況で自然埋没と思われるが、１・４層には炭化物や灰が含まれており、埋没過程で不要物の投棄が行われていると思われる。Ⅴ層を掘り込む。

遺　物：回転糸切り底の須恵器坏Ａ（１～４）、黒色土器Ａ坏Ａ（５・６）が１～３層から出土した。１～３の内面底径は6.8～7.0cmである。５・６はいずれも口径14.0cm、器高3.0cmの皿Ａとも呼ぶべき法量で、底部は回転ヘラ削りされている。

所　見：９世紀初頭～前半頃の土坑と考えられる。ごみ捨て穴か。

ＳＫ6122（第234図、ＰＬ27）

位　置：６ｄ区、ⅡＵ－22、ⅣＡ－02（第３検出面）　　重複関係：ＳＢ6014を切る。

形　状：長軸165cm、短軸60cmの隅丸長方形。検出面と坑底の比高は35cmを測る。断面形は箱状を成す。

覆　土：２層に分けられ、下層は掘り形を平坦に調整したときのものと思われる。上層は人為埋没と思われるがはっきりしない。Ⅴ層を掘り込む。

遺　物：黒色土器Ａ坏Ａ（１）が坑底に、黒色土器Ｂ皿Ｂ（２）と緑釉陶器Ａ類椀底部（３）が覆土上層にあった。骨は検出されなかった。

所　見：形状や土器・礫の入れられ方から土坑墓と考えるのが自然であるが、骨は検出されず、土器も欠損品で断定はできない。９世紀後半に近い半ば頃の土坑と思われる。

ＳＫ6137（第232図）

位　置：６ｄ区、ⅣＡ－06・07（第３検出面）　　重複関係：ＳＢ6051を切り、ＳＫ6164に切られる。

形　状：長軸で1.3m以上だがＳＫ6164に切られ、また南側は検出できず全容は不明。検出面からの深さは27cmである。不整形の土坑と考えられる。

覆　土：Ⅴ層を掘り込み単層。人為埋没か。

遺　物：ウマの頭骨が坑底東寄りから出土。須恵器・黒色土器・土師器が計８片、緑釉陶器１片が覆土から出土した。骨の鑑定結果は付章を参照されたい。

所　見：性格不明だが、儀礼的な意味があるかもしれない。９世紀半ば～後半の遺構と思われる。

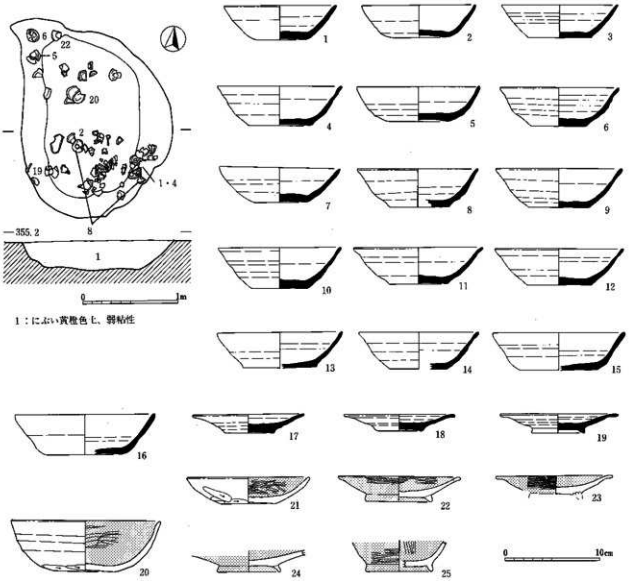
ＳＫ6186（第235図、ＰＬ27・38）

位　置：６ｃ区、ⅣＡ－07・08・12・13（第３検出面）　　重複関係：ＳＫ6116に切られる。

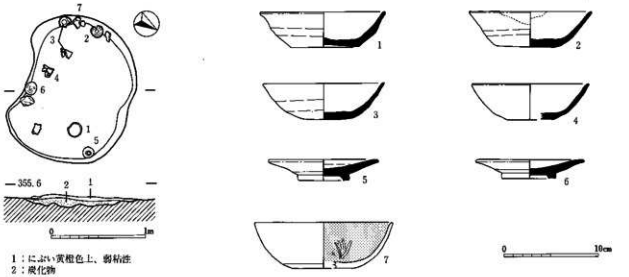
形　状：長軸225cm、短軸108cmの不整形。検出面からの深さ31cmである。比較的平坦な坑底から緩やかに立ち上がる。

覆　土：Ⅴ層を掘り込み単層。人為埋没と認める根拠なし。

遺　物：須恵器坏Ａ（１～16）、同皿Ａ（17・18）、同皿Ｂ（19）、黒色土器Ａ坏Ａ（20・21）、黒色土器Ｂ皿Ｂ（22～24）、同椀（25）が坑底・坑壁際から出土した。すべて残存率20～70％の欠損品である。須恵器底部は坏Ａ・皿Ａ・皿Ｂともすべて回転糸切り痕をもち、坏Ａの内面底径は5.4～8.0cm、平均で6.2cmである。５はやや軟質、13・15・16は軟質である。黒色土器Ａ坏Ａは口径15.8cm、器高5.4cmの坏ＡⅠ（20）と、口径13.0cm、器高2.8cmの皿Ａとも呼ぶべき（21）の２法量があり、



第235図　ＳＫ6188



第236図　ＳＫ6188

いずれも内面は横方向のミガキ、底部は手持ちヘラ削りで調整されている。黒色土器Bは内外面とも精緻に磨かれ、底部には22・23・25に回転ヘラ削り、24に回転糸切り痕が残る。投棄されたのはすべて食膳具で、須恵器と黒色土器との比率はほぼ2：1である。

所　見：9世紀前半の土器捨て場と思われる。

ＳＫ6188（第236図、ＰＬ27）

位　置：6ｃ区、ⅣＡ－12（第3検出面）　重複関係：なし。

形　状：長軸154cm、短軸112cmの不整形。検出面からの深さ12cmで坑底は凹凸があり、坑底と坑壁の境が不明瞭のまま極めて緩やかに立ち上がる。

覆　土：2分層され、上層は自然埋没、下層は炭化物の層である。Ⅴ層を掘り込む。

遺　物：主に坑壁際の1層に遺物が投棄されている。須恵器坏Ａ（1～4）、同皿Ｂ（5・6）、黒色土器Ａ坏Ａ（7）がある。1～4はすべて回転糸切り底で、内面底径は5.6～7.0cmである。1はやや軟質、4は軟質須恵器である。2はほぼ完形で口唇部に炭化物が付着し、灯明皿として使用された疑いがある。5・6はいずれも底部に回転糸切り痕が残り、焼成堅緻で無欠損である。7は底部回転ヘラ削りが施されている。

所　見：9世紀前半の遺構と考えられる。無欠損の土器があることから、炭化物を捨てた後に何らかの意味を持って土器が配されたものと思われる。

ＳＫ6201（第237図）

位　置：6ｃ区、ⅣＦ－06・11（第3検出面）　重複関係：ＳＤ6035を切る。

形　状：長軸223cm、短軸126cmの不整な長円形を成す。坑壁は垂直に近いところと緩やかなところがあり、最深部は検出面から72cmを測る。

覆　土：5分層され、レンズ状の堆積を成しており自然埋没と思われるが、各層とも基調土以外の含有物・含有土があり、数回に分けて埋められた可能性もある。Ⅴ層を掘り込む。

遺　物：回転糸切り底の須恵器坏Ａ（1）が3層中にあり、須恵器・黒色土器Ａ・同Ｂ・緑釉陶器・土師器などの破片が覆土中から出土した。1の内面底径は4.6cmで、体部のロクロ目や外傾が強い。

所　見：坑底のつくり出しや遺物・灰の出土状況から、不要物の廃棄にかかわる土坑と思われるが判然としない。9世紀前半～半ばの土坑と思われる。

ＳＫ6222（第238図、ＰＬ38）

位　置：6ｃ区、ⅣＡ－07・12（第3検出面）　重複関係：ＳＤ6031に切られる。

形　状：長径173cm、短径115cmの長円形。やや凹凸があるが、比較的平坦な坑底から長径方向は緩やかに、短径方向は急な傾斜で立ち上がる。検出面から坑底までの深さは32cmである。

覆　土：4分層され、下位2層は灰層で、上位2層も焼土・灰・炭化物を含有する。数回にわたる人為的な営為の繰り返しにより埋没したと考えられる。

遺　物：4層に多い。須恵器坏Ａ（1～3）、同皿Ｂ（4）、黒色土器Ａ坏ＡⅠ（5）が4層から出土している。1～3はすべて回転糸切り底で、内面底径は5.6～6.6cmであり、体部は外傾する。2は灯明皿である。4は見込み部平滑で転用硯として使用された疑いがあり、体部に墨書されるが、欠損していて判読できない。5は内面口唇部を精緻に磨き、底部は回転ヘラ削りされている。

所　見：廃棄にかかわる土坑と思われるが、祭祀的な色彩もありか。9世紀前半の所産と思われる。